アポカリプスいろいろ
Apocalypses

R. A. ラファティ[*1]　訳：山形浩生[*2*3]

2025 年 10 月 28 日

[*1] ©1977 R. A. Lafferty
[*2] https://cruel.org/
[*3] ©2002-2025 山形浩生　本翻訳は委員会内部利用のためのものであり、委員会関係者以外の不適切な利用はこれを禁止するものなのである。

目次

どこにいってた、
サンダリオティス？ 1

第 1 章 3

第 2 章 13

第 3 章 27

第 4 章 37

第 5 章 47

第 6 章 59

第 7 章 69

第 8 章 79

第 9 章 93

第 10 章 105

第 11 章 115

エニスコーシー・スウィーニーの
ハルマゲドン三つ 121

第 1 部　エニスコーシー・スウィーニーの生涯と時代（1894-1984） 123

第 2 部　ヘンリー・デヴォニアン博士の方程式についてのちょっとした論説 143

第 3 部　エニスコーシー・スウィーニーの手紙からの抜粋、第一の選集 151

第 4 部　「世界の構築について」 163

第 5 部　「サイレント・ラジオの時代」 171

第 6 部　エニスコーシー・スウィーニーの生涯と時代の年表（1894-1984） 179

第 7 部 185

第 8 部　手紙からの抜粋、第二の選集 195

第 9 部　警察ロマンス 205

第 10 部　世界より大きな腐った花！ 221

第 11 部　エニスコーシー・スウィーニーの人生と反時代についての後書き 229

訳者あとがき 237

どこにいってた、
サンダリオティス？

第 1 章

高速道路はしばしば風景の魅力を損なう。風景の傷だ。その切り傷、しかも時には血を流すような切り傷。田園風景に押し入る不自然さだ。

世界にこれが当てはまらない高速道路は百本もない。美しい田園風景に新たな印象的な美しさを加える高速道路は、せいぜい一ダースしかない。グラン・コルニッシュはその数少ない例外の一つで、本当に美しい地域を通りつつ、その美しさに新たな特別な魅力を加えている。

コンスタンティン・キッシュは新しいサッサリ 12 気筒を運転し、ニースのすぐ東を走っていた。任務に就いており、任務の遂行に役立つ可能性があれば友人宅に立ち寄るかもしれないし、その訪問が「危険！」と呼びかけるようならそれを避けるかもしれない。

彼は大まかな道順と、数ヶ月前にマルカブ夫妻が借りたヴィラへのいつでも訪ねられる招待状を持っていた。背後に華やかな夕焼けを背負いつつ、キッシュは暗くなる前にマルカブ夫妻邸を見つけられると信じていた。彼は必要なものは何でも見つけ出せる。世界最高の探偵なのだ。

非常に激しく鮮やかな出来事についてごく最近の記憶があり、まだそれを完全に消化できていなかった。その出来事には、水中で起こったかのような非現実的な要素があった。そしてその出来事のため、素晴らしい紫色のぼんやりとした状態だった。その非現実から、少なくとも半分は現実のグラン・コルニッシュへと車で出てきたところだった。今やあまりにも壮大で、まるで作り物のような風景の中を走っていた。鑑識眼のない連中がしばしば無視する風景の中心的な要素を見つけ始めた。これは震いつきたいほどだった。自分がマルカブ夫妻やその仲間たちまであと少しなのがわかった。これは絶妙だった。その地域全体の風景の中心的な要素、他ではほとんど再現できない唯一の特徴は、「人々という風景」だった。ここではその中心的な要素が際立っていた。

一般のフランス人には、体の誠実さと動きの独創性に伴う、角張ったぎこちなさがある。しかし、最も優れたフランス人にはこの角張ったぎこちなさがない。一般のイタリア人には、単なる不注意を「超えた」ずさんさがあり、それが彼らの美しさを妨げそうなほどだし、抒情性を「超えた」声のでかさがある。最も優れたイタリア人を除いて、皆がそうなのだ。コルシカ人には、すべての島民が持つ田舎の偏狭さと、岩だらけの海岸出身者の持つ岩のような顔がある。最も素晴らしいコルシカ人を除いて、皆がそうなのだ。しかし、グラン・コルニッシュとその夕暮れの小道沿いには、最も優れ、最も素晴らしい人々がいた。彼らは青い海岸、ビーチ、美しい丘陵地、ヴィラやカバナの周りにいた。これらの美しい人々は、壮大な風景に不可欠だった。

そこには他の種類の人々もいた。イギリス人、アメリカ人、ノルウェー人、ドイツ人、ポーランド人、トルコ人、そしてキレネ周辺のリビアの人々。これらの人々はみな、極め

て見栄えがよかった。

世界最高の探偵の目を持つコンスタンティン・キッシュは、最も見栄えのよい二人を選び出した。それは友人のサラディンとレジーナ・マルカブだった。彼らは夕暮れ時に自分たちのヴィラのそばに立っていた。確かに「危険！」と叫ぶ何かがあったが、その声は曖昧だった。コンスタンティンは彼らを避けなかった。車を停めた。ついた。

これは喜びだったが、会合の儀式は守られた。

「リネットの翼に満ちた夕べですな」とコンスタンティンは頭を下げた。

「おお、マルカブ家の迷える羊よ、降りておいで！」とサラディンが儀式を続けた。

「拙宅をあなた様の訪問で祝福してくださいませ」とレジーナ・マルカブが儀式を完成させた。彼らは皆、抱き合い、キスをし、幸せだった。(それでもコンスタンティンは少し気になることがあった。「この自然に口をから出てきた儀式を、おれはどこで覚えたんだろう？」と彼は自問した。「そして、おれの親友であるこのマルカブ夫妻とはどこで知りあったんだろう？　おれの記憶の一部を犬が食べてしまったようだ」)

「どこで手に入れたんだ、コンスタンティン？」とサラディンが尋ねたのは、もう一つのゲストたる素晴らしい自動車のことだった。「それとどこ製？」

「この車？　今日、マルセイユで手に入れたんだ。絶対に断れない代物だよ。サッサリ 12 気筒、ぼくも初めて見たよ。サラディン。古い警告の声が響きはしたよ。『これは餌だ、釣り針が付いている、取っちゃだめだ、さもないと釣られるぞ』って。でも取っちゃったんだ、だから釣られたんだろうね。そう、この車には釣られたよ、君たち二人に釣られたようにね。そう、サッサリ製なんだ」

「サルデーニャ島サッサリ？」とサラディン。

コンスタンティンは答えた。「それが不思議でね。書類には全部、サンダリオティスのサッサリ製と書いてあるんだよ。サンダリオティス？　調べないとな。伝説か地理上のとても古い名前だと思う。サルデーニャ島とサンダリオティスは同じ場所なのか？　あの島の古い名前を復活させたのかな、なぜだ？　そんな話は聞いてなかった」

マルカブ夫妻はコンスタンティンを招き入れて素晴らしい夕食を出した。彼か、または誰か追加の人のために、すでに席が用意されていた。他にもお客が三人いた。ジュリアン・モラヴィア、イギリスのアメリア・ライラック、イスタンブールのジョン・セフェリーノ。ああ、みんなまるで「危険」「愛」「死」と名付けられた夕暮れの雷鳴のようだ。そこで彼らに会うのは喜びであり、衝撃でもあった。特に一人の場合はことさら衝撃だった、というのもコンスタンティンはその三人のうち一人が死んでいると知っていたからだ。

その夜、その地域に住む、まるでゴージャスな幽霊のような、非常に見栄えのよい三人だった。コンスタンティンは彼ら全員が誰かを知っていたが、そのうち一人しか会ったりや知りあいだったりしたのを思い出せなかった。アメリア・ライラックに対して、コンスタンティンは愛と死の二重の情熱の記憶を持っていた。一つは古く、一つは新しい。

ジュリアン・モラヴィアは完全に教養がありそうな、都会的な雰囲気を持っていたが、その雰囲気や印象から、しばしば粗野で残酷な言葉を発した。アメリアは非常に美しいと評判だった。それはほぼ認めざるを得なかったが、実際には彼女をしっかり見る方法はまったくなかった。彼女はいつもラベンダーの雲か影に包まれているようだったのだ。しかし、ほぼ完全な美しさの印象を与えていたのは確かだ。

ジョン・セフェリーノはどこか他の人と違っていて、その違いが何かを判断するのには、いつも時間がかかった。彼は他の人よりはるかに大きかった。それが理由だった。で

も、なぜその説明を苦労して探さなければならなかったのか？

コンスタンティンは彼らと一緒にテーブルに着いた。最初の料理、きのこキッシュがすでに用意されていた。

レジーナ曰く「これはあなたのためよ、コンスタンティン・キッシュ。あなたの名前と風味にちなんで。いつか、きゅうりやチーズ、酸っぱい果物、ザクロのサイダーを使った、素晴らしいコンスタンティン・キッシュを作ってみせるわ。でも今は、あなたに敬意を表してきのこキッシュよ」

「でも、ぼくが来るなんて知らなかっただろう。きのこキッシュは一瞬で作れるものじゃない」とコンスタンティン。

「でももちろん、あなたが来ることは知っていたわ」とレジーナ・マルカブが言った。「こんな特別なお客様を送ってくれるのに、神様が知らせてくれないはずがないじゃないの」

「ああそうだね、確かに神が君たちに、ぼくが来ることを伝えたんだろう、奇妙な手段を通じてそれを告げたんだろう」とコンスタンティンはつぶやき、他の三人のお客に目をやった。「それでも、だれもそんなことがわかっていたはずはないんだ。このぼくですら、君たち二人が緑と金の空を背景に立っているのを見るまで、ここに来るとは決意してなかったんだから。招待は数ヶ月前にもらった、いつでも可のものだった。でも、ぼくの席は用意されていて、この料理はぼくの名前にちなんだものだ。どんな奇妙な手段だったんだろう？

ここにはジュリアン・モラヴィア、アメリア・ライラック、ジョン・セフェリーノ、三人の有名な『エージェント』がいるが、彼らが誰のエージェントなのかは誰も知らない。ぼくはこの人たちを、その名声とファイル資料の小さな写真で知っている。でも、この三人の中で一人しか会ったことがない。そして**その一人は今ここにいない**」

「あら、あたしたちの友人とお仲間と幽霊たるコンスタンティン、**実際に**ここにいる人の巧妙な偽物だったりするんじゃないかしら？」とアメリア・ライラックがラベンダーの影から話すように言った。この女は謎をまとっていた。

「代理人は、オリジナルを超えていると思う」とジュリアン・モラヴィアが誰かを賞賛するように言った。「じゃあ、代理人を称揚し、オリジナルを貶めようではないか」

「コンスタンティン・キッシュ、自分自身の下手クソな偽物のような格好で出かけた人の話を聞いたことがないのかね？」とジョン・セフェリーノが尋ねた。「そいつは好奇心旺盛な人々のすべてに、自分が偽物で別人だとあっさり納得させたんだ」

「聞いたことがあるし、自分でやってみたこともある」とコンスタンティンは言った。「でも、ここにいるこの人は下手クソな偽物じゃない。本当に、偽装があまりにも完璧すぎる、素晴らしすぎる。

ここに三人の『エージェント』がいる。緊張する状況では、絶対に会いたくないこの世の三人だ。でもみんなを尊敬しているし、たぶん一人は愛している。君たちは皆、ぼくのとても親しい友人の家にいる。君たち三人が、ぼくの親しい友人を少しでも知っている確率は？ 一人でも、かなり低いはずだ。三人全員となると、途方もなく低い。それでも、そのつながりについてまともな説明があると確信している。ね、そうだろ、輝く鳩のごときレジーナ？」

「ええ、アメリアとは何年も前にイングランドで知り合ったの」とレジーナ。

「君はまだそんなに年を取っていないよ、レジーナ」とコンスタンティンは言った。「ジュリアン・モラヴィアを知ってる人は？」

レジーナは答えた。「ええ、サラディンもわたしもずっと昔から知っているわよ。今夜はどうしてそんなに疑り深いのよ、コンスタンティン？ 首に縄をかけられ、足元に落とし戸がある男が、それでも『これは自分の親しい友人たちだ。冗談に**決まってる**』と自分を安心させた話、覚えてない？」

「その話は覚えているよ、レジーナ。君にその話をしたのは僕だ。君とサラディンがジュリアンを長い間知っていると言うのか？」

「彼らは私をとても、**とても**長い間知っている」とジュリアン・モラヴィアが声を高らかに響かせた。

「それで、ジョン・セフェリーノは？」コンスタンティンはまるで古いぼろ布を噛む犬のようにつっこんだ。

「ああコンスタンティン、セフェリーノとは一緒にビジネスをしているんだ。レバントの陸と海でね。二人とも今、非常に秘密で、非常に儲かる企業の一員なんだ」とサラディン。

ジョン・セフェリーノが言った。「キッシュ、君をそこに入れてやってもいい。驚くような利益が得られるよ。ただし、慎重さが求められる。世界最高の探偵、コンスタンティン・キッシュ、君には我々と一緒に企業に参加するだけの慎重さがあると思うか？」

コンスタンティンは答えた。「いいや。時々、ぼくには全く慎重さがない。ここには五人いる。そのうち二人、つまりぼくのホストはとても大切で、最高の友人だ。残りの三人は生きた伝説だ。あ、失礼、そこでは三人中二人が生きた伝説だ。三人目はごく最近死んだ伝説だ。でも、君たち五人のだれも、涙を流さないのはどういうことだ？　親しい誰かが死んだのに、悲しくないのか？　こんな繊細で優れた五人なら、少なくとも涙の跡があってしかるべきだろう」

「コンスタンティン、あなたという人が臨席してくれて大喜びなのに、なぜ涙を流さなきゃいけないの？」とレジーナが尋ねた。

「おお、今日死んだ君たちの誰かのためにだ。それってすごく悲しいと思うんだが」とコンスタンティン。

「友よ、**我々の**誰かが今日死んだというのか？」とサラディンが尋ねた。

「そうだ。ここにいる五人のうちの一人だ。二時間ほど前に死んだと思う。」

「悲しい、確かに。とても悲しい。どこで起こったんだ？」とジュリアン・モラヴィア。

「マルセイユで」

「どんなふうに死んだんのかしら、世界最高の探偵コンスタンティン？」とアメリア・ライラックが、彼女の閉じた影から気軽な陽気さで尋ねた。

「ぼくが殺した。本当に、そうせざるを得なかった」とコンスタンティン。

「それで、君はここに来てその人が生きている、または再び生きているのを見て驚かなかったのか？」とジョン・セフェリーノが尋ねた。

「半分だけ驚いた」とコンスタンティンが言った。「半分は予想していたから」

このテーブルに集う人々には、古くも鮮やかな芸術のような美しさがあった。その描かれた美しさがここにあり、その描かれた美しさが動き、話すときには非現実的なスリルがあった。古い伝説が本当だと感じさせた。かつて、故郷が破壊され、多くの国に小さな集団で散らばった、特異で特別な美しい人々の種族がいたという伝説だ。伝説によれば、これらの人々は散らばった亡命の中でも小さく緊密な国家を維持し、その国家の人々は常に互いがわかるのだという。

この夕食のテーブルの六人のうち五人は、その神秘的な美しい人々の国家に属している

可能性があった。コンスタンティン・キッシュだけはその可能性はなかった。彼は他の多くの国家に属するかもしれないが、美しい人々の国家には属していなかった。

「コンスタンティン、君が『エージェント』と呼ぶ我々のうち、一人だけでなく、三人全員が殺された可能性はないか？」とジュリアン・モラヴィアが尋ねた。男の美しさについて語るのは滑稽か薄汚く思えるが、ジュリアンについては他にどう語ればいいのか？「鋭い探偵よ、ここに君と一緒にいるのが、一人ではなく三人の侵入者である可能性はないか？ 死んだ三人と生きている三人でバランスが取れているのではないか？ 君は我々三人のエージェントのうち、一人だけ以前に会ったと言った。その一人はここにいないと。でも、私は我々が以前一緒にいたことを覚えている。もしここにいる全員が偽のエージェントだったらどうだ？」

「わからない」とコンスタンティンが言った。

「あと、もし我々の誰も偽物でなかったら？」とジョン・セフェリーノが尋ねた。「もし君がマルセイユで誰も殺していなかったら？ もし君が、どんな波紋が起きるか見るためだけにその石を池に投げ込んだとしたら？」（もし**優雅な**人々の別国家があったなら、ジョン・セフェリーノもそこに属していただろう。）

「その小さな部分については、ぼくは知っていることは知っているんだ。君たちは知らない」とコンスタンティン。

きのこキッシュに続いてベック・ルージュのオニオンスープがテーブルに並んだ。

「おお、でももしあなたがマルセイユで殺したんじゃなくて、逆に殺されていたら？」とアメリア・ライラックが提案した。「もし**あなたが**別の誰かにすり替えられていたら？ その場合、あたしたちのほうがあなたをすごく警戒すべきじゃないかしら？」

「その場合、ぼくはここで君たちとテーブルに着いていない。ここにいるのは別の誰かとなる。でも、そうじゃない。ぼく自身だ。ぼく自身がそれを確実に知っている」とコンスタンティン。

（しかし、彼は完全には確信していなかった。そこで少し嘘をついた。彼には自分について非現実的な感覚があり、それが数時間前から続いていた。）

やがて、アスピックに入ったサーモンが提供された。彼らはみな、自分たちにふさわしい勢いで食べた。うわべだけの人々は食事中に最悪の姿を見せる。しかし、これらの美しい人々は美しく食べた。そして、屋外ではイノシシが焼かれていた。イノシシこそが腕の良し悪しを分ける。

「世界最高の探偵は、今いったい、どんな事件に取り組んでいるのかしら？」とアメリア・ライラックが、彼女をいつも包む心地よい影から尋ねた（まるで他のみんなに明るい光が当たっているのに、アメリアには薄暗いラベンダーのスポットライトが当たっているかのようだった)。「ここには世界最高の探偵だけでなく、世界で最も謎めいた三人のエージェントもいるのよ。まるで探偵さんを妨害するためにいるようね。コンスタンティン、高位の国家の仕事をやっているのかしら？」

「そうかもねえ、そうかもしれない。あるいは、非常に怪物的な国家や企業による、すごく低級な仕事かもしれない」とコンスタンティン。

「国際的な陰謀、相手に不足はない感じ？」とジュリアン・モラヴィアが尋ねた。

「そうかもねえ、そうかもしれない。国際的か、または世界間かもしれない」とコンスタンティン・キッシュは語った。

「それはジェノサイドか、戦争か、殺人か？ それとも証券や不動産の操作か？」と優雅

なジョン・セフェリーノが尋ねた。「おお、なんとも壮大な事件なんだろうねえ！」

「壮大なのは名前だけですよ。ぼくの見たところ、これはむしろ大規模な窃盗の類なんですから」とコンスタンティン。

「世界最高の探偵が窃盗事件ですって？ ならば本当に壮大な窃盗なはずだわ。こんな豪華な登場人物、あなたとあたしたちが出演するなんて、よっぽど特別な窃盗事件なのはまちがいないわね」とアメリア。

「そして、君は泥棒を捕まえられるのかね、コンスタンティン？」とジュリアンが尋ねた。

「簡単に捕まえられるとも。そして、できれば阻止するつもりだ」

「泥棒が盗もうとしているものは何だ？」とセフェリーノが尋ねた。

だがコンスタンティン・キッシュはその質問を、いささか恥ずかしく思っているようだった。

「いささか厄介な代物でしてね。実際にそれが試みられるかどうかも全く確信がないんですよ。ぼくはここで、ちょっとしたタレコミに基づいて動いているんです。そのタレコミは暗号で、ぼくをこの地域に引き寄せるためだけのものかもしれない。そのタレコミで、何が盗まれそうだと言われてるのかについては、言わないでおきましょう」

「あらまあ、それは冷たいじゃありませんの、かわいい人」とレジーナ。「サラディンとあたしはあなたの親友でしょうに。わたしたちを信用しないのも信用するのも勝手だけれど、どちらにしてもわたしたちはあなたの最高の友人なのよ。そして、あなたがエージェントだと思ってらっしゃるこの三人、もし本当にこの人たちが、あなたを妨害するためにここにいるなら、盗まれるものはすでに知っているはずだわ。もし妨害するためにここにいるのでなければ、この人たちもわたしたちと同じく潔白ってことよね。コンスタンティン、誰かが盗もうとするのは、何だと思ってるの？」

「モナコ」

「何だって？ カジノが強盗に遭うってことかね？ でも、それはよくあることだよ、コンスタンティン。そして、同じくよくあることだが、その泥棒は捕まる。世界最高の探偵の力を借りずともね。」

「いや、モナコ公国そのものを盗む試みがあるかもしれないってことなんだ」

「何？ 全部を？」とサラディンが笑いながら尋ねた。

「全部だ、うん」とコンスタンティンは不機嫌に言った。こういう五月雨式の聞かれ方は気に入らなかった。

「なんだって、コンスタンティン、あの小さな国の全員を並べて身ぐるみ剥ぐってこと？」とジュリアンが尋ねた。

「ちがう。ぼくの得た情報では、公国全体を盗もうとするかもしれないんだ。2 平方キロメートル、5 万人の住民、5 万人の訪問者も。モナコとモンテカルロの両都市、すべての建物、すべての土地、そしておそらく水も。一方で、それにちょっとでも類することは一切試みられないかもしれない」

「そんなの、何に積んで運び出すってのよ？」とアメリア・ライラックが尋ねた。

コンスタンティンが言った。「わからない。かなり大きな装備を持った連中なんだ。一度に全部は無理でも、十二回に分ければ奪える。あるいは、モナコや何も持っていかないかもしれない。代わりに何かを持ってきて置いていくかもしれない」

その夜の残りの時間、コンスタンティン・キッシュはどこか場ちがいな気分だった。

この輝く仲間の中で彼は全く輝けなかった。世界最高の探偵は決して輝くタイプではなかった。

みんな屋外に出て、木製のテーブルとベンチでイノシシのローストを食べた。本当に美しい人々は、イノシシのローストを食べるのに食器や皿を使わず、室内でも食べない。イノシシは一人の従者が骨のこぎりで関節を外し、二人目の従者が鉈で切り刻み、三人目の従者が二股のフォークと長いナイフのセットで切り分ける。風化した木のテーブルはまずライムジュースで、次に酸っぱい黄色いワインで濡らされた。塩と胡椒が振られ、そしてイノシシの関節と切り身が直接その上に投げられた。

イノシシは素手でかじりついて喰われる。こんな食べ方をするには美しい人々に属していなければならなかった。他の誰にもこれは許されなかった。

「最後にこんなふうにイノシシが食べられたのは、いつだったんだろう？」とコンスタンティンは尋ね、今や自分が部外者だと感じていた。

「おや、サンダリオティスでは、この食べ方はずっと続いているよ」とジョン・セフェリーノが言った。セフェリーノは「サン・ダル・イー・オ・ティス」と発音した。セフェリーノは完全に優雅な人物だったので、彼の発音が正しいに違いなかった。

「今日、サンダリオティスという名前を耳にするのは二回目だ」とコンスタンティン。

そこにはキンカン酢の壺があった。イノシシを食べるとき、時々この酢に手を浸して脂を落とすのだ。パンダナスの葉も置かれていて、指を拭きたければそれを使ったが、それは何か別のものの不完全な代用品のように感じられた。

「子熊はいないの、素晴らしいホステスさん？」とアメリア・ライラックがレジーナに尋ねた。

「子熊はいないわ」とレジーナが言った。「世界に住むことの欠点ね。手に入ると思っていたものが、最後の最後になってみると、ないのよ」

「子熊って何？」とコンスタンティン。

セフェリーノが説明した。「ああ、サンダリオティスでは、イノシシを食べるとき、いつも子熊がそこにいて食事をしている人の手を舐めるんだよ。古い習慣なんだ。犬を代わりに使う下品さは、私は我慢ならない。うん、パンダナスの葉のほうが犬よりマシだ。何でも犬よりマシだ」

美しい人々はみなイノシシを美しく食べた。コンスタンティンだけがぎこちなく食べた。まるで食器や皿が登場する前にすら遡れない血統に属しているとでもいうようだった。

「モナコを盗むのは誰なの、コンスタンティン？」とアメリア・ライラックがライラックの影のオーラの中から尋ねた。

彼は弱々しく言った。「わからない。それを止めるために、調べなきゃいけないんだ」[訳注: ここで明らかに原文の編集ミスで「美しい人々はみな……」という文が挿入されている。訳者の推定で二文前の冒頭に戻している。]

「情報収集の技芸が全体的に崩壊しているそうだね」と優雅なセフェリーノが言った。「世界インターポールがまた派手に失敗をやらかそうとしているとも聞く。そして、世界インターポールでも最も愚鈍で、最も迷走している部署は、予言部門だそうだ。あの部門での無能な仕事ぶりは目も当てられない。準法はもはや昔のようではないし、有能なやつらをつれてこない限り、モナコ以上の大きなものだって盗まれかねませんよ。

今、誰のために働いているんだい、コンスタンティン・キッシュ、世界最高の探偵くん？」

（この男セフェリーノは大きなひじと耳までイノシシのローストに食らいついていなが

ら、どうしてこんなに優雅でいられるんだ？）

「世界インターポールの予言部門ですよ、あなたも十分にご承知の通り」とコンスタンティン。

「おお、世界インターポールのために？」とジュリアンが言った。「今じゃ世界インターポールには**本物の**人間が働いているのか？ そうじゃないと聞いていたよ」

もちろん、イノシシのテーブルでそれに笑う者は一人もいなかった。もちろんキーキー笑いもなかった。しかしそこには**確かに**キーキーという音があった。夜の昆虫、セミやコオロギのような音だった。誰がその虫つかい、コオロギつかいだったのか？ コンスタンティンは、テーブルの誰かが虫で彼を蝕んでいると感じていた。

「このワインは何なんですか？」とコンスタンティンが尋ねた。彼らはぬる甘いワインを何杯も飲んでいた。そしてあまり良いワインではなかった。

レジーナ・マルカブが言った。「ファレルヌムよ。とても強いけど、飲めば羽目をはずせるのよ。お友達と一緒なんだから。古代のワインで、そのまま火がつく唯一のものよ」

「でも、ファレルヌムは 1600 年も作られていない」とコンスタンティンが反論した。

「サンダリオティスでは、ずっと作り続けているんだよ」とジョン・セフェリーノが言った。まるでサンダリオティスという国が本当にあるかのように、まるでこれが本物の古いファレルヌムであるかのように。

「エージェント」たちは、エージェントがよくやるように、ふざけて酔ったふりをし始めた。しかし、コンスタンティンは当人の演技以上にずっと酔っていた。他の者はなぜそうではなかったのか？ この偽のファレルヌムには詐術があったからだ。それはコンスタンティン向けには仕込みがあり、「エージェント」たちにも、マルカブ夫妻にも、そんな仕込みはなかった。

コンスタンティンは慎重に努力して自分の混乱を解き始めたが、おかげで自分がどれほど混乱していたかを認識せざるを得なかった。混乱はマルセイユで誰かが殺された時から始まっていた。世界最高の探偵がこんな混乱状態でうろつくのは、きわめてプロらしからぬことだった。しかし、世界最高の探偵でなければ、混乱してうろつくこともなかっただろう。死んでいたはずだ。

コンスタンティンは今、親友マルカブ夫妻とどこで知りあったのか思い出せないことを認めざるを得なかった。世界最高の親友二人とどこで知り合ったのか、どうやって彼らが**確固たる**親友だと確信できるようになったのか、思い出せないのは奇妙だった。

紫の雲に包まれたアメリア・ライラックとどこで知りあったかも思い出せなかったが、かつて彼女と非常に活発で曖昧なやり取りがあったことは確信していた。他の二人のエージェント、ジュリアン・モラヴィアとジョン・セフェリーノとどこで会ったかも全く思い出せなかったが、彼らに会ったときに両方ともだれだかすぐわかったし、その片方は、以前に全員が一緒にいたことがあると言った。

そして、この地域でのこの最も重要な事件を誰が彼に割り当てたのか、世界インターポールの上司が誰だったのか思い出せなかった。世界インターポールにいる人間を他に誰も思い出せなかった。そして、モナコ公国を盗むというばかばかしい話がどうやって自分の心に浮かび、それが口から飛びだしたのか、全くわからなかった。

コンスタンティンはファレルヌムが最も明るく燃えているときに突然パーティーを去った。しかし、世界最高の親友の家にある自分の部屋には行かず、家の前にある自分の車にも行かなかった（「死の罠が仕掛けられている、死の罠だ」と彼は自分に囁くほどには分

別があった)。

代わりに、到着時に通った曲がりくねった風景を思い返し、そのすべての詳細を思い出した。ここに到達する道を選ぶときにたどった偽の小道の一瞬のフラッシュバックから、ガサガサする茂みの中の岩山を思い出した。それはほぼあらゆる角度の視点からも隠れている岩山だった。

コンスタンティンはきわめて素早くそこに移動し、しかも道は通らなかった。彼には動物的な移動方法があった。美しい動物の方法ではなく、コソコソ急ぐ動物の方法だった。美しい人々の声で背後から罵声が追いかけてきた。すばやい足音も追ってきたが、その足音を振り切った。コソコソ逃げ回る人々は、時には美しい人々自身よりも狡猾に、密かに動ける。そして、移動と逃走のある種の才能がなければ、世界最高の探偵にはなれない。

その夜、コンスタンティンはその隠れた岩山で寝た。パッと思いつきで選ばれた、ガサガサする茂みの中の岩山にはとても安全なものがあった。世界最高の探偵は岩の上で寝たことが何度もあったし、今もそうだった。

夜中、一度だけ邪魔が入った。目覚めたのではなく、夢の中へ導かれたのだった。岩山は海底の岩山、洞窟、洞穴、潮の轟音の洞窟になったようだった。メスのイルカがそこにやってきて、自分のプリプリした魚肉体とクールな態度で訪ねてきたのだ。彼女はメスのイルカ特有のずるずるした方法で彼にキスをし、そのキスには水中のエコーが伴っていた。それから、奇妙な生物種のキスによくある針の刺し傷を感じた。

彼は思った。「やつら、ぼくが古い混乱から抜け出す前に、さらに混乱を針で注射してきやがった。まあいい、ぼくはまだやつを捕まえる。やつら全員をな。ぼくに干渉してくるたびに痕跡を残す。そして、ぼくはどんな痕跡でも追えるんだ」

夜の残り、夜明けの一時間ほど前まで、彼は岩山の上で可能な限りの快適さで休息を取って寝た。それでも、その睡眠の中で、メスのイルカが針を刺す前に囁きかけた言葉のいくつかを思い出した：

「あたしたちは海の底の洞窟に住み、空に住む犬を持っているのよ。時々、上がってくる。あたしたちは犬に口笛を吹いて、一緒に戯れるの。

あたしたちについて、他に何かを耳にしても、信じちゃだめよ。これがあたしたちの全てなんだから。

いまあたしたちが取り組んでいる、このちょっとした儀式的行動が終わったら、いつかあたしの洞窟に会いに来てよね？」

だが世界最高の探偵は、常にさまざまな種類の通信を受け取っているのだ。

第 2 章

だが翌朝とても早く、コンスタンティン・キッシュはホステスのレジーナ・マルカブと一緒に海岸沿いを旅していた。

「ほら、あなたはやつらを出し抜いのね。モナコは盗まれていないわ。まだそこにあるじゃないの」

「でも、他に何かあるじゃないか。その南、どこまでも続いているあれは何だ？ 霧の塊？ でも、霧にしては濃すぎる。そして、明るい緑色に見える。朝日が当たれば変わるかもしれないけど、モナコ公国にすぐ隣接しているように見える。そして、公国の高台からのびるあの高い橋は何だ？ 渡るような水路があんなところにあるか？」とコンスタンティン。

レジーナは答えた。「まあ、あれは大きな蜃気楼よ。確か名前もあったはずよ。五年に一度も見られないものよ。でも雲の塊に近いわ。海面まで完全に降りてくるわけじゃないのよ。その下から夜明けの光が見えるでしょう。そうでなきゃ不気味すぎるわ。あの高い橋に見えるものがどうやってできているのかはわからない。時には橋に見えるし、時にはただのきらめきにしか見えないわ」

コンスタンティンは言った。「船の汽笛、船の汽笛、数が多すぎる。岸に近すぎるけど、もっと遠く、南の方にもいる。こんなにたくさんの船の汽笛が鳴るはずがない。まるで世界中の艦隊がここに集まっているみたいだ。」

「あんな種類の汽笛は一種類しかないわ。三週間、世界中のどの新聞でもその船の広告が出ていたと思うわ。まるで何千ものカモメが嵐の前に吠えているみたいよ」とレジーナ。

「観光船の汽笛！　その通りだ。他にそんな汽笛の船はない。でも、みんなどこに向かっているんだ？ あそこにあれだけの船を受け入れる港はないのに」とコンスタンティン。

「今は絶対あると思うわ」とレジーナ。

コンスタンティンは今朝、かなり早く起きていた。風光明媚な荒野の岩の上で寝るのは心地よく、刺激的だが、早起きにもつながる。彼は自分の新車、サッサリ 12 気筒をチェックした。おやおや、前夜の酩酊状態でも、死の罠にはならなかっただろう。配線や爆弾はまったくの素人仕事だった。そんな下手でセコい仕掛けで対応されるなんて、自分がつまらない存在になった気分だった。まったく、こんなのただのシャレでしかない、なんとも子供じみた爆発物設置じゃないか！ あいつらは自分をおもちゃにしていただけだ。殺すつもりがあったとしても、それは万に一つの賭けでしかない。いやいや、この爆発物は世界最高の探偵を殺そうとしたものじゃない、前夜にワインであんなに酔っ払っていたとしてもだ。こんな死の脅迫は、せいぜい善意の警告に過ぎなかった。

「昨夜のワインに何が入っていたんだい、レジーナ？」とコンスタンティンは、サッサリの豪華な猫のように鳴くエンジンの車で走りながら尋ねた。

「ガルベストン・ギムレット、アメリカの古くて基本的なノックアウト・ドロップの一

つよ。もちろん、わたしがやったんじゃないけど、仕掛ける一味に加わるのは楽しかったわ。あなたって、カモにされてると気づいたときの顔、めっちゃおかしかった！ 最近の仲間は荒っぽく遊ぶのよ。ここしばらくいろんな取引があるから。でも、荒っぽい遊びは、退屈して飽きちゃってるせいでもあるのよ。わたしたちは、あなたがいつどこで倒れるか賭けてたけど、あなたに出し抜いかれちゃったわね（あなたの言葉を借りれば、そもそも倒れるはずなかったわけね)。どこで倒れたの？」

「岩山、事前に選んでおいた岩山だよ。そしてそこで、酔わせるような生き物に会ったよ、それ以上酔う必要なんてなかったのにね。あれは君じゃなかったよね、レジーナ？ 君はイルカのような肉体を持ってる？」

「わたしじゃなかったわ、コンスタンティン。あなたの心を狙うライバルがいるのね。イルカみたいな人は誰かお知り合いにいるの？ それと今朝、車に問題はなかったでしょう？ ちょっと心配してたの。でも、みんな言ってたわ、もしあれであなたが死んだら、あなたが実は世界最高の探偵じゃないって証明されるだけだって」

「問題なかったよ、レジーナ。でも、ある意味、彼らが世界最高の『エージェント』じゃないって証明だ。エージェントは退屈したり飽きたりしてちゃダメだ。貪欲で飢えてなきゃ。

この車の走り方って、ほとんど欲情してるみたいじゃないか、レジーナ？ 車のあのちょっとした仕掛けは、単にぼくを笑わせるためだったんだな、きっと。でも、『一味』の連中のユーモアとは、ぼくは反りが合わないよ。モナコがまだ安全だとは確信してないんだ、確かにまだそこにあるけど。今朝、そこに妙な旗が翻ってるように見える。クーデターで『盗まれた』んだろうか？ それと物理的にも、モナコに線やつながりが多すぎる。そしてあの蜃気楼、あの雲、まるで信用できない。実は二つあるじゃないか。海面に低い緑の雲があって、空中ででっかく下がってくる高い雲がある、ラベンダー色で、緑の雲よりずっと薄いヤツだ。今、どんどん下がってきてる。水面の雲に触れるそうだ」

「あの下を走れないの、コンスタンティン？ やってみましょうよ。蜃気楼の下を走ったことないわ。もう少し右のほうに寄ればできるわ、コンスタンティン。どうせもうわたしたち、古い道にはいないじゃないの。あなた、道を飛び出したのね。岩だらけの海岸にいるはずだけど、今朝はずっと滑らかな岩を使ってるみたいね」

「レジーナ、この八百メートルほど、これまではずっと海だった土地を走ってるんだ」

「本当？」

「本当だ。でも、今走ってるのは、ずいぶんよく舗装された道だと思わないか？ 軽くて弾むような、まるで空でできたみたいだ。弾む？ でも、めっちゃ新しいって見た目じゃない。長い間水の下にあって、つい最近まで、うん、一時間ほど前まで水の下だったみたいな見た目だ。これって一体、どんな道なんだ？ 軽くて弾む？ 空でできてる？ 全然新しくない？ つい最近まで水の下？

上にある橋を見てよ。橋だな、敢えて無理にでも呼ぶとすれば。こんな軽やかで空気感のあるエンジニアリング、誰も見たことないぜ？ また空気感だ。これ全部何だ？ あんなに軽かったら何も支えられないはずなのに、何かを支えてる。今、車がその上を走ってる、それもかなり空気感ある車だ。今日は、全部が軽くて空気感あって、何でできてるかよくわからない世界に慣れるしかないね。きらめく橋、夜明けの光の橋、でも、きらめきよりちょっとしっかりしてるはずだ。車を見てよ。ほとんどがサッサリ、ぼくのと同じで、昨日まで名前も聞いたことない車だ。どの車も全然似てない。信じられない数のモデルを

作ってるんだな。

そして見てごらん、レジーナ、あの蜃気楼が日が明るくなるにつれてちょっと詳しく見えてきた。岩、崖、岬、湾、岬、木材、町、港、船（船に何が問題あるのか、とはいえそいつらが掲げている旗は初めて見た）、観光船（レジーナ、ここに総勢 100 万人運んできたるみたいだ！ うん、その**ここ**ってのは昨日までここになかったものだ）、運河船、タグボート。モナコの海岸に運河船やタグボートなんてあったっけ。あの蜃気楼の下は走れないよ、レジーナ」

「じゃあ、上を走りましょう。昨日まで海だった道にいるけど、わたしたちは運河のほうから岸に向かってる（モナコの岸のことね、今はもう一つ岸がある）」

「運河なんてここではラクダの隊商並に場違いだ」とコンスタンティン。

「この道は、波止場やスリップや港から少し内陸に沿って続いてるみたい」とレジーナが言った。「高い橋の下を通るか、このランプのどれかでこの高速を降りて……」

「うん、ぐるっと登って、またぐるっと回って、高い橋の一つで**上**を渡って、蜃気楼そのものの上に車を出せる。さっきよりずっとしっかり見えるし、ラベンダーの雲がどんどん低く降りてきて、合体するよ。高い橋や高い道が弾力性があって、全部が収まるときに縮んで余裕を取るんだと思う。レジーナ、分子の単一の鎖は、適切に形作られリンクされれば壊れないって知ってる？ 今週の『サイエンスやあれこれ』で読んだんだ。橋のケーブルのいくつかは、分子の単一鎖みたいに細い。でも、全部支えてる。

レジーナ、紫の蜃気楼の底の 100 メートルが本当は何かわかる？ 水中の岩や棚だ、なんでそれがこんな透明な形で空にあるんだ？　何か水中の層の幽霊みたいだ。空に浮かぶ陸の根っこで、今、その根っこが青い水と新しい緑の陸に触れた。ゆっくり、ゆっくりだ。優しく降りてくるよね？ まるで祝福みたいだ。少し混乱するだろうけど、今の降下速度なら、10 分後には紫の霧の水面が本当の水面にまで下がる。なるほどデミウルゴスやタイタンたちはああやって陸を作ったのか。うん、その上を走ろう」

「コンスタンティン、モナコが盗まれるかもっていう奇妙なアイデア、どこから得たの？ 他に奇妙なことが起こってないわけじゃないけど、モナコが盗まれるなんてどうやって思いついたの？」

「おお、ある種の『エージェント』が死の拷問を受けて言ったんだ。ぼくたちの仲間も荒っぽいやり方をするんだ。もちろんそいつは死ぬ前に壊れて、言葉はわけがわからなかった。でも、専門家の何人かは拷問死から引き出したイメージをつなぎ合わせて、モナコ周辺で大きな変化が起こるってまとめた。そして、何かが世界から盗まれるってアイデアがあった。それで、世界最高の探偵として、ぼくはそれらの裏にある意味を探るためにここに送られたんだ。モナコは**確かに**盗まれたと思う、でも持ち去られたんじゃない。何か到着したものに融合させられたんだ。モナコが実質な独立を保っていることには、ずっと特別な意味があった。モナコは一時的に去った何かの一部、その代理だった。その一時的に去ったものは、モナコをその名目上の頭として残したんだ」

「世界インターポールは、誰かがモナコを**本当に**盗んだらそんなに心配する？ 本当に心配してるのは何？ モナコは世界インターポールのサービスに加入すらしてないじゃないの、わたしはそう理解してるけど。世界インターポールが非顧客のことなんか気にかけたことないでしょう？」

「レジーナ、ぼくたちが本当に心配してるのは爆弾なんだ。450 キロメートル以上もある大きなやつが、地球に向かってきて、防御線の内側に侵入しようとしてるんだ。こんな

大きな時限爆弾は危険だ。世界を破壊するつもりの世界爆弾かもしれない。少なくとも、暗号化されたアドバイスの一部はそう言ってる。」

「世界インターポールは、その世界爆弾についての暗号化されたアドバイスも、別の『エージェント』の死の拷問で得たの？」

「うん、そうだと思う、レジーナ。でも、どうしてそんなことを知ってるんだい？」

彼らは一つの登りランプを逃したが、次のを使った。螺旋のトレッスルを登った。クモが紡ぐものよりそのトレッスルはしっかりして見えた。こんな軽やかですっきりしたエンジニアリング、だれも見たことないぜ？ まるで自由に飛ぶ『交換と橋』だ。

橋に続く高い道でまっすぐになるところに料金所があり、気さくな男がコインを鳴らし、小さな歌を歌っていた。

「アン・フラン、アン・フロルン、
アン・リラ、アン・クラウン、
アン・カルケヴィル、
ポル・ポン・デギル」

そこでコンスタンティンはその気さくな男に一フランを払い、イーグル・ブリッジを渡った。

「アルファベット順なんだろう」とレジーナが言った。「これは E、イーグル・ブリッジ、でもなんでアギルじゃなくてエギルなの？ それにこれは西から五番目の橋だ。」

コンスタンティンはその男の言葉をなぜ理解できたか考えるのをほとんど忘れていたが、男の小さなジングルを理解しないほうが不可能だったろう：

一フラン、一フローリン、
一リラ、一クラウン、
何でもいい、
イーグル・ブリッジのために。

「ロマンスの語根から作られた、国際言語候補にされる小さな言語みたいだ」とコンスタンティン。

「コンスタンティン、450 キロメートルの爆弾とかのホラ話は全部、あなたが調べてる『エージェント』にわたしから伝えてほしいと思って話してくれたんじゃないの？ あれは本当にあなたが取り組んでる話じゃないのかもしれないわね」

「かもね。上司が僕に取り組めと言ってるだけの話かもしれない。今、ぼくが本当に取り組んでるのはイルカの肉体なんだ。自分が**本当に**コンスタンティン・キッシュかどうかも確信がない。コンスタンティン・キッシュは単にぼくを指す暗号の一種で、実は全然違う人間なのかもしれない」

運河の上を走る高い道を走るのは美しかった。下方にはボートや船でいっぱいの運河があり、2 つの地峡を切り、巨大な新しい半島を大陸の下面につなげていた。イーグル・ブリッジの高みから、金色と青の無限の距離が見えた。世界最高の探偵はその驚異に圧倒されがままとなった。

「ここで停めて！」とレジーナが叫んだ。「全部見るまでは先に進めないわ」

彼らは小さな緑の展望公園に入った。北には彼らが知っていたモナコ公国が、ほぼ知っていた姿で存在していた。モナコは南に何キロも続く大きなものに、朝ならではの不安を

感じているようだった。二つの地峡、それぞれ約三キロ幅で十五〜二十キロ長、二十二キロほど離れていたものが、巨大な付属物を本土につないでいた。それぞれの地峡は運河で深く切られ、その間の水と外の浅瀬も同様だった。そして、地峡とその間の水全体の上に、高くきらめく橋がまたがっていた。

しかし、この新しい土地はモナコとは全く違った。見たことのないものだった。永遠に南に広がる大きな土地、色に浸された土地、岩だらけの海岸、内側に緑と青の谷、白とパステルカラーの都市。コンスタンティンとレジーナは、インターチェンジの整備された順序で、立派な都市の入り口にいた。

「この国は**いったい**何？」とレジーナがマホガニー色の髪の美しい女性に尋ねた。

「シコロ、レス・**サンダリオティス**」と女性が言った。「No conostu (知らないの)？」

「いままでどこに**いってたのよ**、サンダリオティス？」とレジーナが歓喜に叫んだ。「どうしてこんなことがあり得るの？ 地上の楽園だってのに、どうしてわたしたち、忘れちゃってたのかしら？」

「レジーナ、蛇に少し気をつけて」とコンスタンティンが言った。「踏まないように、踏まれないように。楽園ではいつも蛇が危険だ。そして、やりすぎないように気をつけて。君はお芝居してみせるが実際にはそれよりずっと物事を知ってるんだから」

「わたしの人生ってそういうものよ。それで今いるところにたどりつけたんだから。昨日までなかった土地に、世界最高ってタグのついた男と一緒にいるの」

そこから見える町、田舎、海岸、川、ビーチ、崖、商業の風景！ そして、通り過ぎる見栄えのする人々！ コンスタンティンは昨日と今朝、グラン・コルニッシュの鮮やかな美しい風景を通ってきたが、こんな風景は見たことがなかった。

小さな売店に公衆電話があった。コンスタンティンはそこにフランを押し込むと、ちゃんと使えた。おそらく料金所のように、どんなお金でも受け入れるのだろう。この昨日までなかった国の電話が世界の電話とつながっているなんて、あり得るのか？ コンスタンティンは番号を押し、間もなく誰かとつながった。

「キッシュです。モナコは物理的には無事です、でも朝のショック状態かもしれませんが。モナコは消えてないんですが、何か別のものが到着したか、起こってるんです。今、ここに完全な新しい国があるんですよ。半島で、モナコのところでヨーロッパにくっついてるんです。目に見える限り南に広がってます」

「空中で 1600 キロくらいってところか？」と電話の向こうの声が尋ねた。コンスタンティンはその声を聞いて少し安心した、馴染みのある声で、記憶の断片がどっと戻ってきた。でも、その愚かさに激しく苛立ちもした。

「いや、グリシュウェル。空中 1600 キロなんかじゃ絶対にありませんよ。地中海の真ん中にあって、ぼくは今その上にいるんです。信じにくいけど、昨日までなかった全く新しい国があるんですって」

「計器は、全長 450 キロの物体が高さ 1600 キロに浮かんでると示してる」と電話の男が言った。「君のデータか君自身に何か問題があるんだろう。それ、どれくらいの高さだと言った？」

「この地域のいちばん高いところにいます。約百メートル。ここには螺旋の高速道路や橋があります。その根は今、海の底深くにありますね。今は一体化してるけど、今朝早くは海面に緑の霧、空にラベンダーの霧でした。それが合わさったんです。大きくて、空中に浮かんでない。海の真ん中の半島なんです。ここにある」

電話から声が響いた。「おお、神よ！　手遅れか。あいつら、どうやってそんなことを？ まちがいなく着陸してるのか？」

「着陸して根付いています、うん。でも、ぼくたちは何か別のものについて話をしているような気がするんですが。これは人が住んでる半島なんですよ。そして何千人もの人が——信じられません、グリシュウェル——観光船で来てるんです。数十の港に観光船千隻も来てる。こんなに港がある半島、見たことないですよ」

「そこは——おお、神よ、キッシュ、どうすればいい？——武装してるか？」

「おそらくそうでしょう、グリシュウェル」とコンスタンティンが言った。「武装するつもりなら、武装してるでしょう。これは道路や都市のある完全な国なんですよ。実際に見かけた武装した人は一種の警察官だけです。機嫌はよさそうだけど、関わり合いにはなりたくありませんね。サービスリボルバーとスナップドラゴンで武装してるんです」

「スナップドラゴン？ 聞いたことない。」

「ぼくもです、グリシュウェル。急に頭に浮かんだ名前だけど、正しい名前だと確信してます。気の利いた小さな仕掛けなんです。なんでぼくが思いつかなかったんだろう？ スナップドラゴンを手に持てば、簡単に人の首を折って殺せる」

「どこから電話してるんだ、キッシュ？」

「彼らの公衆電話からです。ぼくがいる町の端の名前はシヴィタ・ド・ノルド、つまり北町。この国の名前はサンダリオティス。調べた限り、どちらも今朝生まれたばかりで、準備期間はたった三〜六週間だったようです。しかもそのほとんどの期間は口先だけだった」

「昨日までなかった国に電話があって、そこで私の秘密の番号にかけられた？」

「うん、試したら繋がったんですよ、グリシュウェル」

「そこに時計はあるか、キッシュ？」

「あるでしょうねえ。これは完全な都市で、なんでもありますから。うん、保険会社のビルの塔に時計が見えます」

「じゃあ、30 分ごとに電話してくれ、キッシュ」

「世界最高の探偵が電話の端に縛られるべきなんでしょうか？ 必要だと思ったら、時々電話しますよ」

「それはカチカチ言ってるか、キッシュ、カチカチと？」

「何がカチカチ言うんですか、グリシュウェル？」

「君が乗っているそれだよ、計器が言うには 1600 キロ上空にある爆弾、君が言うには地中海の表面にある、国に偽装された爆弾だ。カチカチ言ってるか？」

「わかったら教えますよ」

「説明は二つしかない。我々の高度計が 1600 キロずれてるか、さもなきゃ——キッシュ、君がその何だかしらない代物の上を動くとき——」

「うん？」

「パラシュートを着けなさい」

コンスタンティン・キッシュは電話を切った。様々な種類のデータに頭をあわせるのに、しばらく時間がかかった。まるで片方の目で一つの世界を見ていて、グリシュウェルがもう片方の目で全く別の世界を説明していて、両方に同時に焦点を合わせようとして頭が分裂しているようだった。最後の提案は意味をなさないように思えたが、害は何だ？

コンスタンティンは一番近い建物にたまたまあった現代的なパラシュート屋に入った。彼はパラシュートを買い、腰に装着して、少しぽっちゃりした男に変身した。パラシュー

ト！ なんてナンセンス！ それが命を救ってくれる可能性がなければ、絶対に買わなかっただろう。

しかし、こんな発見がこれまであっただろうか？ コロンブスは、こんな新しく作られたものには出会わなかったし、ジョン・チャンセルもそんなことはなかった [訳注: John Chancel。何者か検索しても不詳。知ってる人、教えて！]。ここにあるのは、最も古く、最も物語に満ちた海の真ん中に植えられた、輝く新しい世界なのだ。海がこれのせいでどれほど動揺しているかはまだ明らかではなかった。三日目の朝、創造者が「乾いた土地を現せ」と言ったばかりで、そうなった。アフリカの宇宙論でも三日目の朝、亀がすべての海を飲み込み、乾いた土地が現れて、亀はそれが多すぎると判断した。そこで亀は肩越しに水を吐き出し、土地の一部を覆い、再び海を作った。しかし、その朝の亀以来、こんな新しい土地を見た者はいたか？

ここには、さまざまな古い世界や土地の真ん中に植えられた、輝く新しい世界があった。異質な要素はあったが、ひどく異質ではなかった。人々の言葉はかなり理解できた。新聞も読めた－－何語で書かれているかはわからなかったが。スイスで学ぶ金持ちの多言語を話す子供たちが楽しみで作る言語に少し似ていた。言語学者が真剣に共通言語として作る言語にも少し似ていた。デタラメだったが、理解でき、読めた。

しかし、この新発見の世界は前例のない状況だった。世界インターポールの予言部門では、これが地球の防御を夜に突破して設置された全長 450 キロの世界爆弾で、「破壊瞬間」までカウントダウンしているかもしれないと信じていた。これがそんな世界爆弾でないとだれにわかるだろう？

高度に洗練され、高度に偽装された全長 450 キロの爆弾が、最も欺瞞的な外見を装おうとしたらどんな見た目になるか誰にわかるものか。しかし、それがそんな仕掛けかどうか——それが地上に浮かんでいたのが分かっているんだから、他の可能性なんか考えられるか？——それが本当にその恐ろしい、カウントダウンに入った爆弾かどうかをどうやって確かめる？

いやいや、彼らはそれに異常な努力を払っていない、地球を爆破するつもりならなおさらだ。450 キロの長さに沿って数百、数千の技術者が、新たに出現した国の無垢な住民の役割やその他の役割を十分に演じられる。しかし、どうして未だに遅れてるんだ？ 自己起動する必要があるのか？ すでに起動していたら、地球の防御やセンサーを突破できなかったということか？

「カチカチ言ってるか、レジーナ？」とコンスタンティンは、上司に電話した後で、前夜のホステスだったレジーナに再会して尋ねた。

「サンダリオティスのこと？ すごい威勢の良さでカチってるわ。この国はカチまくりよ！ 通りがかりの人々と話すと、ここでは本当に物事が動いてる。ここの慣習法は古くて穴だらけで、ほとんど何でもできるわ。一分あればサラディンと一方的に離婚ができる。それから『体裁』のための三分間の間をおけば、あなたと結婚できるのよ。向かいのホテルではハネムーン特別プランやってる。不動産屋相手に大繁盛もしてるわね。観光船で百万人以上が来て、みんな変化を求めてるの。ここは**まさに**隣の芝生、広告ではそう言ってる。そしてここの芝生は**まさに**もっと青いのよ。本当にバーゲンの日よ。

その後は、離婚も結婚も一時間、二時間、三時間のローテーションで設定できる、好きなようにね。そうすれば、元に戻って、ここの言い方で『元の木阿弥』ってヤツに戻ることになるのよ。サラディンがそれに反対するわけない、特に知らなければね。わたしが彼

と離婚したことを知る前に、自動的に再婚してるんだから。さあ、行きましょう」

「レジーナ、君とサラディンがぼくの最高の親友になったのは、どこで、いつだっけ？」

「わたしもそれが不思議なの。もちろん本当だと知ってるけど、覚えてないの、どうやってそうなったか全然。さあ、行きましょうって！」

「うう、レジーナ、行きたいのはやまやまだけど、世界最高の探偵には責任が伴うんだ。今、大きな事件の真っ最中でね、つまり——」

「わかった、わかった、わかりましたって、世界最高の探偵さん！ あなたって、本当に言われてるほど鋭いのか、ちょっと怪しいわねえ。泥棒が警官を 20 回中 19 回は負かす理由はそれかもしれないわね。じゃあ、向かいのあの若い男にイエスって言ってくるわ。あの人、答えを待ってるから」

**

しかし、コンスタンティンは地元の新聞を十分読んで言語を完璧に習得し、大きな図書館に入った。朝七時まであと五分。太陽が昇り、すべてを照らし、多少なりとも残っていた非現実をすべて払拭した。彼が図書館に入るとき、通りには愛国者たちが朝のワインで高揚し、涙を流しながら響くメロディーで歌っていた：

「おお、海から九度立ち上がった、
　　緑の牧草地とともに、
おお、サンダリオティス、わが祖国、
　　どこいってたの？

おお、毎日がユールである土地！
　　聖サーディンの地！
おお、優美な土地、おお、美しい！
　　どこいってたの？」

「世界のどこでもこれほどの愛国心を見たことない」と観光船の一つから来た不動産屋がコンスタンティンに言った。「地元の人？」

「いや、初めての訪問ですよ」とコンスタンティン。

「こんな熱い愛国心、人生で見たことない」と不動産屋。

「ぼくもです」とコンスタンティンは同意した。図書館に入ったら、何をすべきか知っていた。世界最高の探偵たるもの、データセンターでの操作くらいはわきまえている。索引システムは世界の他の図書館と少し違っていた。少し異なり、少し優れていた。そしてサービスが速かった。コンスタンティンはサンダリオティスの六つの異なる歴史をランダムに請求し、それに没頭しきっていると、若い女性が来て彼の首にナプキンを巻いた。

「これは何？」とコンスタンティンが尋ねた。

「ナプキンよ。あなたの国では使わないの？ 図書館で朝食を食べるときはこれがないとダメ。バターやマーマレードが本につくでしょ。わかるよね。特別な注文はある？ それとも朝定食でいい？」

「朝定食でいいよ、お嬢さん」

「オーケー、ダイヤル連絡するわね。簡単でしょ？ 朝食が来るまで首を揉んであげましょうか？ 朝、首を揉まれるのが好きな紳士が多いの。リラックスするんだって。あなた

もそうでしょ？ あなたはサンダリオティスの生まれじゃないのね？ すると外の蛮人？ 多くの外の蛮人は、サンダリオティスがあるってこと**自体に**今朝になって、えらく困惑してるらしいわね、それでもみんなここで土地を買いたがってるのよ。これまで目がくらませられていて、あたしたちの国が見えなかったのね」

「サンダリオティスの人々はイルカの肉体を持ってるの？」とコンスタンティン。

「あら、とんでもない言い方ね！ イルカの肉体だなんて！ サンダリオティスはイルカ氏族の人も多いけど、あたしは違うわ。私はサーディン族。知らないかもしれないけど、サルディーニャはサンダリオティスの古い州の名前なの。あたしたちの国にはいろんな氏族がいるのよ」

「それもすごい国だ！」とコンスタンティンが叫んだ。「もしこれが偽物なら、偽造屋はすさまじく手間をかけてるなあ」

「そうね、すさまじい手間は確かだけど、でも一見したほどはかけてないのよ。ここは北町。ここは見た目を良くしてるの。それから首都のイクヌサ。あそこはもう本当に入念に偽造したのよ。でも、残りのほとんどはまだ空白のままなの。でも緑に塗れば空白も目立たないわ。

でも、大きな規模では偽造なんかないわ。神様を偽造屋呼ばわりするのは外の蛮人だけよ。あなたたちって、ホントに粗野ね！ でも無知だから仕方ないし、あたしは寛大だから大目に見てあげる。あなたは何か大物、少なくともそのつもりなんでしょ、例えば不動産屋とか。だから普通の目で見えないの。でも、蛮人の中でも普通の人々、漁師、ロバ引き、タコ捕り、ブドウ踏み、蜂飼い、オリーブ摘み、頁岩鉱夫、イチジク農家、チーズ作り、カード詐欺師、海綿集めの潜水夫、そういう人たちはずっと前からサンダリオティスを知ってたわ。ここに自由に来て、季節労働者として働いてたのよ。普通のレベルの人々だと何も問題なかった。

そして、絶妙な人々（外の蛮人の多くは**確かに**絶妙ですもんね）も問題なかった。その人たちはいつもサンダリオティスを知ってたのよ。運動哲学者、ヤギ毛の預言者、繊細な芸術家、音楽家、高級コメディアン、魂の人、最高の探偵、企業の会長、そういう人たちはいつもあたしたちを理解してた。外の蛮人の大きな中産階級だけが、説明しにくい理由であたしたちのことが見えなかったのよ。今、その人たちがあたしたちとその土地が見えるようになったので、しばらく混乱するわ。あたしたちはできるだけ混乱を解いてあげなきゃ。あたしがあなたの混乱を解くわ、そしたらあなたは同胞たちの混乱を解いてあげられるわよ」

「サンダリオティスは海から九度立ち上がったのかい、お嬢さん？」

「うん、でも一回ずつが九回続いたってことじゃないのよ。『九度強い』とか『九度輝かしい』って言うようなもの。サンダリオティスはいつも九度立ち上がってるけど、上がってきてはまた沈みってわけじゃない。むしろ頭の鈍い人の目が開いて、閉じて、また開くみたいなもの。だからその人は常にここが見えるわけじゃないのね」

「お嬢さん、あなたが話してるそのナンセンスは全部本当なの？」

「まあ、全部じゃないわねえ。特別な意味で本当かもしれない部分もあるけど。たとえ話のマトリックスにいくつか明確に本当の項目が埋まってる、みたいな。本当はあなたの朝食が来るまでのちょっとしたエンターテイメントよ。ほら、来たわ」

世界最高の探偵は一度に一つのことしかできないような輩ではない。コンスタンティン・キッシュは素晴らしい図書館の朝食を食べ、図書館の優雅な女性職員と丁々発止と雑

談を交わし、サンダリオティスの六つの歴史からエッセンスを絞り出し、他の本をダイヤルで呼び、頭のいい狡猾な脳で仮説を紡いだ。

サンダリオティスの六種類の歴史書はどれも、東地中海の真ん中に今あるサンダリオティス半島がいつもそこにあったという一貫した（外の蛮人の大きな中産階級には不可能に思える）説明をしていた。それが見えなかった理由は、海の霧（ベラ、古代にはペプロス、つまりヴェールと呼ばれるもの）がしばしばその土地を囲み、見えなくしたからだ。サンダリオティスはイタリアとスペインの間の大きく美しい半島で、文化と傾向においてそれらと（数段優れてはいるが）似ていた。フェニキア、ティル、タルシス、クレタ、エジプト、ギリシャ、小アジアのギリシャ人といった、イタリアやフランスと同じ初期の訪問者がそこを訪れていた。いつも同じ地中海の血統の人々（みんな美しい人々だが、サンダリオティス人はことさら美しい）が住んでいた。ローマ共和国と帝国の内部の同盟者であり、関連していたが、ローマそのものの一部ではなかった。ローマ帝国を襲った蛮人たちを知っており、そいつらを誘惑し、文明化してきた。同じキリストに救われ、同じ教会で教会化された（サンダリオティスのイクヌーザの総主教はアンティオキアを除けば最も古く、ある歴史書によればアンティオキアより一年早く設立されたとのこと）。サンダリオティスは同じ異端に苦しみ、その支配的な異端は「エリート主義」だった。産業革命は少し脇によけた、というか少し優れた独自の産業革命を持っていた。サンダリオティスの産業化は、世界の他のどこでも採掘されない優れた燃料、白い石炭またはレウコファノコに基づいていた。

だったらなぜ世界の他の多くの地域がサンダリオティスの存在そのものを知らなかったのか？ 各種の歴史書は、それは世界の他の地域が患った目の病気のせいだろう、それもヴェールや海の霧の隠蔽効果ですら上回るものだったはずと述べていた。

これらの歴史書の古代文献の参照は、不可能な認識の軽やかな感覚を与えた。プリニウス、ストラボン、タキトゥスなどの失われた本に、巻数やページ数と原文に基づいて言及していた。これらの本は世界の他の地域では失われていたが、サンダリオティスの人々には失われていなかったのだ[*1]。

コンスタンティンが朝食を終えると、女性職員が彼の顔と手を洗い、キスをした。そして、他の利用者に対応しに行ったが、必要なら彼女や他の助手をダイヤルで呼ぶ方法を教えてくれた。

コンスタンティンはサンダリオティスがサルディーニャの古い名前だと思い出した。実際、彼の記憶データは、ギリシャ人がサルディーニャ島にサンダリオティスという名前を与えたのは、それがサンダルの形だったからだと教えてくれた。うん、いい説明なんだが、ただサルディーニャはサンダルの形**じゃない**。

彼が読んでいたサンダリオティスの歴史書は、ギリシャ人がこの半島にサンダリオティスという名前を与えたのは、それが半島の形だったからだと言っていた。うん、それはたいへん結構。歴史書の地図は、サンダリオティスが**確かに**サンダルの形だと示していた。それはイタリアがブーツの形に似ているのよりずっとサンダル形だ。しかし、それは完全なサンダリオティスだけで、サルディーニャではない。サンダリオティスの地図は魅力的だった。

[*1] 訳注：プリニウスの歴史書、ストラボンの歴史書、タキトゥスの主著『同時代史』『年代記』は全部または相当部分が散逸してしまっている。

サンダルの紐の端は、サンダリオティスをモナコでヨーロッパ大陸につなぐ二つの狭い地峡だった。コルシカとサルディーニャを飲み込んだ半島の完全な形は、まさにサンダルだった。つま先の間にストラップが通る低いサンダルではない。本物の「サンダリオン」、「ソレア」、「クレピダ」、高いサンダル、赤いストラップや紐のある「コトゥルヌス」だった。コンスタンティンは、二つのストラップや紐、半島を本土につなぐ二つの地峡が、空から見れば赤い紐に見えることは知っていた。すでにその信じられない赤い花や赤褐色の田園、町の赤瓦の屋根を見ていた。これは古典的なサンダルで、その見た目を知りたければ、それはサンダリオティスの人々がまだ履いているサンダルなのだった。

コンスタンティンはサンダリオティスの文学、演劇、芸術、音楽、技芸としての政治の記述に飛び込んだ。多くの名前が聞き覚えのある響きを持っていた。スペインに移住した画家テオトコプリがいた。彼は故郷を離れる前に問題を抱えており、スペインの人々には本当の出身地を明確に伝えなかった。そして、人々に間違った推測をされても訂正しなかった。エル・グレコはエル・サンダリオティスティコよりいいニックネームだ。

北サンダリオティス出身の小さな伍長がフランスで大人物になった。しかし、それは世界最高の探偵の心に再び疑問を投げかけた。サンダリオティスの概念にコルシカとサルディーニャはどう当てはまる？ この二つの土地はどちらも、地図に示された半島の輪郭に含まれていた。コルシカとサルディーニャの山の名前が、正しい緯度と経度でサンダリオティスの山として見つかった。誰かがずいぶん勝手気ままにこうした物事をいじっている。

コンスタンティンは助手の女の子をダイヤルで呼ぶと、一人やって来た。朝食をくれた子ではなかったが、別の子だ。大した違いはなかった。女の子たちはみんな美しく、魅力的だった。どの子だろうと大した違いがないなら、それもコンスタンティンがサンダリオティスについて作ろうとしている理論に合っていた。他のあらゆる場所や状況でなら、どの子なのかでちゃんと違いが**あるべき**なのだ。

コンスタンティンは女の子に自分の困難を説明した。ここには矛盾があるようだ、つまりこの具体的な例では、同じ地域に二種類の土地があるように思えると。

「サンダリオティスがありながら、同じ場所の一部にコルシカとサルディーニャがあるなんてどういうこと？」と彼は素朴な疑問として尋ねた。しかし、女の子はあきれ果てる寸前となった。とはいえサンダリオティスの心地よい住民にはそんなことは不可能だったのだが。

「あなたの国には黒い牛はいないの？」と彼女はえらく身構えるように尋ねた。「家の戸棚にこっそりヒツジを隠していたりしない？ 屋根裏に埋葬されていない人骨とか、地下室に縞の蛇はいないの？ [訳注: すべて英語の慣用句で、何か後ろ暗いところがある、すねに傷持つ身、というような意味です。] うん、別にあたしたちは、そういうのを恥かしいとは思わないけど、もっとマシであってほしいとは思うわけよ。あたしたちの一部を見てもらう方法はあるけど、同じ見るならもっと正確に見る方法だってあるわけ。時々あたしたちが、隠しごとのある取引をするって？ その汚名って絶対に払拭できないものなの？ あたしたちの中には獣もいるけど、もっと心地よく気高い生き物もいるのよ。コルシカとサルディーニャは外の蛮人に見られちゃったりするわね（あたしたちの最も暗い悪夢が、そんな連中に覗かれちゃうなんて恥ずかしい限りよ）、そしてそれらの『島』の周りや間にある水は、物理的にそこになくても見えちゃうわね、それはあたしたちの精神病的な無意識の凝固物で、本当は昼間に見てもらうはずのもんじゃないのよ。それはあたしたちの毛深い部分な

の、あたしたちの野蛮な不安、不穏な動揺。それらを高い荒地に追い払えるのはいいこと。でも、それがその場所の本質じゃないのよ。朝露は一時的に牧草地を覆うけれど、それが牧草地の本質じゃないのと同じよ。露があるとき、牧草地は厳密に言えば水の下。サンダリオティスの一部に特別な露がかかっていれば、そこだって厳密には水の下で、露の影響を受けない部分は島に見える。でも、人が自分たちの見方にこだわらず、あたしたちのやり方で物事を見てくれれば、サンダリオティスが昔からずっとここにあって、完全で変わらないのがわかるはずよ」

「ここの露ってのは、えらく深い露ようだねえ」

「うん、そうなのよ」と彼女は嬉しそうに同意した。「一部の地域では、世界で一番深い露があるのよ」

「このシヴィタ・ド・ノルド、北町の地図は正確？」とコンスタンティンは、歴史書の一つで勉強していた地図を見せて尋ねた。「この地図を勉強して、今、目ん玉に刻み込んでるんだが」

「うちの叔父さんはクルミに地図を刻むけどね、でも、どうやって目ん玉に刻むの？ ええ、地図はどんな細部も正しいけど、都市自体はいつも正しいとは限らないわよ。今朝の夜明けまで、通りや路地を作る労働者がいたけど、三分の一しか終わらなかった。それからやめなきゃならなくなったの。不動産屋や他の訪問者が来てからは、何も作っちゃいけないから」

「あなたが話してるこの長ったらしいナンセンス、ほとんど何も言ってないアホダラ経なんじゃないの？」とコンスタンティンが尋ねた。

「うん、そうよ。もっと短くして鋭くしないとね。でも、説明しにくいこともあるのよ。だから『その方面のことを質問されたら、その場で何かでっち上げなさい』って言われてんの。あるいは『その分野について質問されたら、まったく無内容なことを何か適当に言いなさい』って言われる。あんたらみたいな蛮人がどんな質問をするか理解して、その答えを用意しとくなんて、蛮人でもない限りむずかしいのよ。あらゆる場合にに何かでっち上げるのは結構ホネなのよね」

「これらの島の周りや間の水はどうなの」とコンスタンティンが尋ねた。「この地図では存在しないことになってる水。とても深い霧がそこそこ深い海になる場所はないの？
船やボートは何世紀にもわたり、この地図だと陸になってる水域を航海してきただろう。でもこの不自然な朝に探しに行けば、多分そこに陸が見つかるはずだ。この地図とあなたが言うには水がない、ただ深い露しかないはずの場所には、もう長年にわたり魚が泳いできただろう」

「それは嘘よ。サンダリオティスがある場所を船やボートが通り抜けられるはずがないじゃない？　魚がここを泳げるわけないでしょう？　一隻の船、一隻のボート、一匹の魚でいいから、それをやったヤツの名前を教えて。さあ。名前は何なのよ。一番小さな魚の名前でいい。大きなものの名前なんかきかないであげるから。あなたの指ほどの長さもない魚の名前よ。自分の言ったことを裏付けられないでしょう。もし本当なら、たった一匹の小さな魚の名前を思いつくのはそんなに難しくないはずよ」

「いやはやお嬢さん、船やボートや魚の名前は後で調べるよ」とコンスタンティン。「これから、サルディーニャの山にあった、ぼくの知ってるホテルを訪ねてみるよ。サンダリオティスの地図でも山の名前はサルディーニャと同じだ。その山の中にあったあのホテル、絶対忘れないよ。まだそこにあるか見に行くよ」

「ご成功、心から願ってるわ」と図書館のお嬢さんが言い、コンスタンティンに愛情を込めてキスした。昔から地中海の土地には非常に愛情深い人々の伝説があったが、サンダリオティス人がその伝説の人々なのか？

コンスタンティンは空港と、ある山に行く飛行機に向かう途中、電話に立ち寄り番号を押した。

「ここの図書館は他の多くの場所より優れてる」とコンスタンティンは思案した。「機会があれば、優秀図書館として挙げることにしよう」

そこで相手が電話に出た。

「キッシュです。グリシュウェル、爆弾も王国も知っていますが、その二つの本当の組み合わせを自分が知っているかどうかは確信が持てませんね。でも、ぼくが立ってるここ、この議論の対象の表面から見る限り、これは単純でなく明快さもない王国だと思うんです。世界爆弾だとは思わない」

グリシュウェルが言った。「キッシュ、何かおかしい。計器（もちろん、生存か絶滅かが懸かっている今の状況ならごまかすことはできる）によれば、世界爆弾がまだ地球の上1600キロでホバリングしてるはずなのだよ。目では捉えられない、それには高度すぎる。レーダーや磁気でも捉えられない、確かに高度すぎる。でも、そこにあるのはわかってるんだ。さもなくば、全長450キロの爆弾型の気象擾乱がまだそこにホバリングしてる。もちろん、攪乱の隠れ蓑だけを高く残して、本体が防御を突破して降りてきた可能性もある。わからない」

「世界爆弾が**絶対に**あると確信してるんですか？」

「もちろん確信はない、でもその可能性に基づいて行動しなければならん」

「もしなければ、ぼくは何の上にいるんでしょうね？」

「わからない、キッシュ、でもそこにいろ。そして、そればどこにも行かないようにしろ」

「450キロの半島が動こうと決めたら、どうやってどこにも行かないようにするんですか？」

第 3 章

朝八時ちょうどだった。普通の探偵ならやっと起き出す頃かもしれないが、世界最高の探偵はとっくに起きてすでに何時間も活動していた。図書館を出て、シヴィタ・ド・ノルド（北町、サンダリオティスの最北のその都市）の通りへ出ると、コンスタンティン・キッシュは知り合いに高確率で出会い始めた。これはサンダリオティスの特徴で、夢や高揚状態の特徴でもあり、すでに知っている人々に異常なほど多く遭遇するのだった。

最初に、前夜のホストであり、その朝早くの同行者だったレジーナ・マルカブに会った。彼女はコンスタンティンに新しい夫を紹介した。

「でも、これはさっき一緒だった若い男とはちがう人だね」とコンスタンティン。

「ああ、あの人。ちがうわ。ぜんぜんダメだったの」とレジーナが答えた。「でも、今は 1 時間ごとのローテーションなの。朝がもう少し進めば落ち着くかもしれない。ここではそういう風に設定してくれるし、料金もかなりリーズナブルよ。この人はコンラッド・スクエアハウザー。不動産屋で、8000 人以上のためにサンダリオティスの土地購入を任されてるの。みんな土地を求めてがっついてるんですって。サンダリオティスの土地はどれも青くて新鮮に見えるから！ 今朝だけで 150 万人の不動産屋がサンダリオティスに上陸したそうよ。まだまだ来るみたい。百以上の港に上陸してるの。

サラディンに電話してここに来るように言ったの。どれだけ楽しいか話したわ。ここで土地を買って定住すべきだと思う。わたしたち二人ともサンダリオティスの血を引いてるの。彼、わたしが離婚したことでめっちゃ怒ってるけど。でも、わたしのライフスタイルがどれだけ楽しいか見たら変わるわ。いつでも好きな時間にまた結婚できるし。ちなみに、十一時に空きがあるわよ、興味ある？ あなたのこと、いつも大好きだったの、知ってるわよね。わたしはあなたの最高の親友の一人なのよ」

明らかにサンダリオティス出身ではないが、同じくらい明らかにここが気に入っている観光客＝よそ者がたくさんいた。彼らはすてきだが奇妙な外見をしていた。スカンジナビア人か、地球外の者かのどちらかだ。これに加えて、何千人もの不動産屋がいた。みんな自分がこの場所と昔から繋がりがあるんだと話していた。「おばあちゃんはここ出身よ」とある女性が自分の小さな娘に言っていた。「ここ、素敵でしょう？」

「いや、レジーナ、十一時に自分がどこにいるかわからないんだ」とコンスタンティン。「これからかなり南の、前に訪れた場所に行くつもりだ。そこで状況の一側面について答えを探してみる。あなたは、サンダリオティス現象について何か答えはある？」

「何を答えるの？ ライフスタイルよ。好きか嫌いかだけでしょう。わたしは好き」

「レジーナ、君、昔はこんなじゃなかったよね？」とコンスタンティンが尋ねた。「それともそうだった？ 君とサラディンは世界最高の親友なのに、これまでの君たちのことを思い出せないんだ」

「ううん、時々変な気分のとき以外はこんなじゃなかったわ。サンダリオティスは、開放的な傾向がある人をこんなふうに変えてしまうそうよ。それがわたしにとって完全にいいことかはわからないけど。サラディンと電話で話して、『サンダリオティスに入りては、サンダリオティスに従え』っていう古いことわざがあるでしょうと言ったら、そんなことわざはないって。サンダリオティス人のほとんどは全然そんなんじゃないはずだって言うの。わたしがここで出会ったのは、国境町にありがちな道徳観なんですって。典型的な国境町の女の子みたいに振る舞ってるって。まあ、そうかもね」

レジーナは最新の夫、コンラッド・スクエアハウザーと去った。

通りは今、ピカピカの建物や都市のピカピカの建築用地（「はい、正午までには建物をご用意できますよ。うちらは世界で最も速く最高の建築者で、どの建物のどの線にも美と実用性があるのがわかるでしょう」」とサンダリオティスの売り子が言っている）、そして田舎の緑の敷地を買いたい不動産屋で完全に溢れていた。何百ものガイドや連邦不動産取引局（ラベンダーの腕章付き）の人々が、何千人もの不動産屋を誘導し、展望台やリビングマスター地図のエリアから話していた。その中の DFRET[訳注: 文脈的に department of federal real estate title、つまり連邦不動産登記局かなんかの略ですが、そんな局は実在しません。] の一人が、図書館でコンスタンティンを助けてくれた最初のお嬢さんだった。

「この演し物は成功するかもしれんぞ。みんなが二役こなす気満々だ」とコンスタンティンは独りごちた。しかし、この激しい活動は全く理解できなかった。まるでサンダリオティスのきらめく緑の土地すべてを、その日中に売りさばかなきゃいけないみたいだった。

すると前夜マルカブの家にいた「エージェント」の一人、ジュリアン・モラヴィアが目に入った、美しい男だ。ジュリアンは今、判事のローブをまとい、勇敢な従者たちに囲まれていた。

彼はコンスタンティンを見つけ、その顔が極度に曖昧な表情で明るくなった。彼に会えた純粋な喜びと、何かしら純粋に邪悪なことをする機会、富と権力の衝動的な気まぐれ、そしてあらゆる美しい男の表面近くにあるきらめく残酷さがその顔に浮かんでいる。

「その男を今すぐ逮捕しろ！」とジュリアンが命じ、コンスタンティンを指した。「こいつを拘束しなければ、場合によっては非常に長期間拘留する必要がある。もしくは、拷問されて速やかに壊れるかもしれん。最近はそうなる者が多い。こいつは我々の領域の敵であり、市民政策の障害である」

「ジュリアン、これは僕だよ」とコンスタンティン・キッシュが叫んだ。「君は僕を知ってる。一緒に歓待を受けたじゃないか。おお、壮大なジョークだ！」

「その男をすぐに逮捕しろ」とジュリアンが再び叫んだ。笑いでむせながらも本気なようで、勇敢な従者たちがコンスタンティンを逮捕しに動いた。「こいつは本土で殺人罪で指名手配だ」とジュリアンが言った。「我々の誠意の証として、本土の連中にいくつか骨を投げてやらなきゃ。向こうは今朝、我々の不誠実の証拠をやたらにたくさん持ってるから、何か対抗策が必要だ。こいつは殺人者であり、陰謀者であるぞ」

いやいや、世界最高の探偵がそんな簡単に逮捕されるものですか！　図書館で、コンスタンティンはシヴィタ・ド・ノルドの地図を記憶し、すべての通りと路地、管轄のマーカーと境界を頭にしっかり刻んでいた。図書館のお嬢さんは地図は正確だが、都市は正確じゃないかも、どういうわけか全ての細部がまだ完成していないから、と言っていた。

しかし、コンスタンティンは空港の場所を知っていて、それがシヴィタ・ド・ノルドと

は異なる管轄区、航空省の警察下にあることに気づいていた。そこで逮捕するには別の判事の権限が必要だ。コンスタンティンはどの通りや路地が空港から遠ざかるように見えつつ、実はそちらに向かっているかを知っていた。その通りや小道の複合体は、その形状そのものからして「趣深い」と言うしかないものだった。

コンスタンティンは走り出し、逃げる際に二人の乱暴者を突き倒した。パラシュートで腰が膨らみ、ぽっちゃりした小男になった彼は、期待したほど速く走れなかった。まあ、関係ないかもしれない。でも、彼はまだ世界最高の探偵で、身体の状態も世界最高だった。

というのも、おお、おお、おお、これはすぐにパターン化された追跡になったからだ。コンスタンティンは勝てる。行く手を塞ぐ係も送られていなかった。側面支援や誘導もなかった。追跡者はコンスタンティンに追跡の方向や条件を決めさせ、強く胸の張ったブロンズ色のサンダリオティス走者はただ後を追い、あまり本気で走らなかった。本当に彼に同情しているようで、一方の心のひねくれた片隅で、もっと良いお芝居にしないとダメだと不満を述べていた。ジュリアン・モラヴィアは遠く後ろに取り残された。トレーニングも積んだ足の速い男に見えたというのに。取り残された彼は、いまや声だけ聞こえてきた。彼の声は、田舎の追跡で猟犬を駆り立てるように壮大に響いた。

おお、これはパターンが多すぎる！ ごちゃごちゃ路地の走り、フェンスを越え、暗い通路を抜け、廃倉庫を通り、別のフェンスを越え、別の路地へ。全部路地で、大通りはなかった。家や建物の裏側ばかりで、表はなかった。三叉路か五叉路の路地ばかりで、まっすぐな交差はなかった。うん、町の趣深い部分だ。折り返しで、コンスタンティンは一度の突進で二人の追跡者を突き倒すだけで済み、追跡者はとんでもなく突き倒されやすかった。この胸の張った勇敢な従者たちは軟弱男ではなかった。じゃあ、そいつらは密かに彼の味方ってことだ。なぜなのか？ 本当にそうなのか？

これは悪夢のような雰囲気があった。特にジュリアン・モラヴィアの背景から響く声の中にその雰囲気があった。まるで自動人形や糸で操られる傀儡（くぐつ）に追われ、自分も糸の傀儡であるかのようだった。これはすべて指ぬき劇場みたいな代物で、そんな舞台の中に人を押し込めるなんて、自由な人をそれ以上に縮小するものはなかった。

コンスタンティンは空港に着いた。古い管轄を脱しおおせて、新しい管轄には彼を捕まえろという警告は出ていなかった。そんな時間はなかった。追跡者は今、本当か偽装された苛立ちのため、歯ぎしりして立っていた。いまのはいったい、どんな追跡だったんだ？ ジュリアン・モラヴィアは獲物が逃げたことについての劇的な苛立ちを、豊かな響く声で叫んだ。

そして、タイミングは完璧だった。すべて完璧だった。ちょうど出発する飛行機があり、コンスタンティンの目的地のすぐ近くに行くはずだった。

離陸してからようやく、コンスタンティンは自問した：

「『エージェント』や悪党どもにまんまとコケにされたのか？ 世界最高の探偵が、してやられたのか？ サンダリオティスが物理法則と同様に行動法則にも従わないことを誇示しようってのか？ そもそもサルディーニャの田舎の山の宿に行くなんて考えをおれの頭に植え付けたのはだれだ？ なぜ北の町のあんな簡単な罠から逃げられた？ 今にして思えば、罠のいくつかの顎が自分から開いておれを出してくれたぞ。なぜ順法精神に満ちたサンダリオティスで、判事が無実の男を逮捕する権限を持つ？ そもそもジュリアン・モラヴィアが道化服を着ているのを見て、なんで判事だ**なんて**思った？ このためらいと安易な受け入れはどうやっておれに植え付けられた？

おれがだまされて南の孤独な山に送られてる間に、シヴィタ・ド・ノルドでどんな暗いことが行われるんだろうか？ まあ、たぶん何もないだろう」

飛行機が上空を飛んでいるのは見事な緑の田園風景だった。虹色の緑、きらめく緑、光に満ちた緑、魅惑の緑。しかし、その緑は何でできている？ コンスタンティン・キッシュは世界最高の探偵になる過程で、農薬散布者にもなっていたから、空から作物がどう見えるか知っていた。

「お嬢さん、あそこで育ってるのは何？」と彼はスチュワーデスに尋ねた。「美しいけど、単調さをぎりぎりのところで避けてる。それでも全部同じものに見えるけど、何かわからない。木や低木には細かすぎる。ブドウやオリーブ、アーモンド、デーツ、栗じゃない。レモンやグレープフルーツ、リンゴ、キンカン、セイヨウカリンでもない。穀物、麦、そば、ライ麦、大麦、オート麦、米でもない。緑でも茶色でも、全部知ってる。葦や竹、葦、リケン、クローバー、草でもない。素晴らしい農地に見える、こんな美しい緑の起伏の土地は見たことないけど、何の作物？」

「あら、かわいそうな人ね」とスチュワーデスが言った。「あの土地は作物用じゃない。売り物よ」

しかし、公式な見た目のサンダリオティス人がこれを訂正した。

「彼女は冗談を言ってるんだ。もちろん作物用だとも。あれは新しい魔法の植物、キャンドルグラス。人間にも獣にも完璧な食料なんだよ」

彼らはラヌセイ、今はラノスと短縮された名前の場所に降りた。コンスタンティンが現実の検証点として目指す山が見えた。山は昔と同じに見えた。本物に見えた。

「モンティ・デル・ジェナルジェントゥ、またはその近くに行くための乗り物はどこで手に入る？」とコンスタンティンは、空港の端にいた背が高く髭の若い男に尋ねた。この若者の見た目には安心した。新しいサンダリオティスではなく、正真正銘の古いサルディーニャ人のようだった。男は背を向けて答えなかった。うん、古いサルディーニャの男だ、間違いない。それでもコンスタンティンは苛立った。彼はこの男をちょっと知っているような気がしたからだ。農民や山の牧人は、世界最高の探偵に背を向けて無視するのは許されない。コンスタンティンはその大男の腕をつかみ、振り向かせた。

「モンティ・デル・ジェナルジェントゥ、またはその近くに行く乗り物はどこで手に入るかと尋ねたんだ」と彼はきっぱり繰り返した。おやおや、そんな風に振り向かせたのは、えらく筋肉質な大男だ！

「なぜその**近く**に行きたいんだ？」と男は不機嫌に尋ねた。「今、すでに近くにいるじゃないか」。その男はエスペラントの雑種のような新しい簡単なサンダリオティス語ではなく、古いサルディーニャ方言で話した。「今じゃあのおかま連中は、そこをモント・ジェノルグと呼んでるぜ」

「ぼくはおかまなんかじゃない。そんな呼び方はしない」とコンスタンティンは今度は、サルディーニャ語で言った。「どうやって行けばいい？」

男は古い方言を聞いて少し態度を軟化させたようだったが、まだ十分なトゲがあった。山のハリネズミだ。

「歩けばいい。またはラバで。そこに斜面にラバが見える。捕まえて、乗って、行け」

「ラバを捕まえて、くつわをつけて、準備してほしい！」とコンスタンティンが悪態をついた。

「人が別の人間のためにラバを捕まえるなんて、人が別の人間のために食べ物を噛むの

と同じくらい卑怯だ」と背が高く粗野な男が言った。「そんなことをやろうもんなら、どっちももう男とは言えない」

独立したサルディーニャ人だ。サンダリオティスの重ね合わせは彼らをあまり変えていない。

「行きたい山の『近く』とやらって何？」と男が尋ねた。

「老グリマルディの経営する宿」とコンスタンティン。

「若グリマルディも覚えてないのに、なぜ老グリマルディの宿に行く？」

「あんたがビリっけつだぜ！」とコンスタンティンは突然叫んだ。やっとその男がだれかわかったので、競争を挑んだのだ。彼は野ラバに向かって斜面を駆け上がった。彼が先に着いた、背が高く粗野な若者より先に。しかし、選んだラバを捕まえて乗るのに少し苦労した。コンスタンティンはいい男で、以前にもラバを扱ったことはあったが、すぐにラバに噛まれ、蹴られ、転がされ、それで少し血が沸き立つ楽しみも得た。しかし、やっとその叫ぶ悪魔に跨った頃には、若グリマルディがとっくに乗り、笑っていた。

グリマルディの宿は山の中腹、約 20 キロだった。朝十時にそこに着いた。

少しして、コンスタンティンは井戸からバケツで水を汲み、宿のドアの外の石の洗面器で手と顔を洗わせてもらってから、宿の大きなワイン食堂で、黒いワインを飲み、硬いチーズと硬いパンを食べていた。そして、互いに硬い視線を交わしていた。親しい友人でも、この場所ではお互いに気安い視線を交わしたりしない。

「これが試験だ、これが試験だ」とコンスタンティンはつぶやいた。「そしてここは試験をクリアしてる。不変のものが一つでもあれば、世界は完全に狂っていない。そして山のサルディーニャは不変のままだ」

そして、彼ははっきり声に出して言った。「ここに謎があるんです」と彼はガラスのない窓を指した。「窓から昔の海岸の目印が全部見える。その向こうには打ち寄せる水がありました。今、同じ海岸の跡は見えるけど、向こうは緑の土地になってます」

「このままずっとこうであってほしくないんじゃがの」と老グリマルディが言った。「ずっとこうは嫌だ。水が戻って欲しいんじゃよ、時々ほんのしばらくでいいから」

「問題は引き起こすよな、うん」と若グリマルディが言った。「昔は野生のイノシシを下の海に追い詰めたんだ。狭い岩の岸に追い詰め、狩猟の槍で波に追い込んで殺した。イノシシは自分が思ってるほど泳げない。でも、走るのはすごいんだぜ！ イノシシ自身の最高のイメージを超えて走れる。今、昔の岸の向こうに何キロも新しい牧草地があって、殺すのも捕まえるのも無理だ。あいつらどこまでも走れる。

この新しい方法に大金と富の約束がなければ、全然気に入らなかったところだ」

「昔の水が新しい土地に変わるなんて聞いたことあります？」とコンスタンティンが苛立ち混じりに尋ねた。

「うん、そういうことがよくあったってことを、だんだん思い出し始めてるところじゃ」と老グリマルディが言った。「実は、そう思い出すように指示されとってな。大きな土地が海に侵入するような日は昔からあったんじゃよ。月一、二日はそんな日があったのう。じゃが、昔からそういうのは好きじゃなかったし、それが恒久的になった今も好きじゃない。新しい方法で得られるはずの金が、わしらの考えを変えてくれん限りは気に入らん。新しい土地を恒久的にするって話があるがの。それともっと危うい話では、その新しい土地は、消えるときにはとんでもない勢いで消えるとか、一気に全部」

「サルディーニャには、断続的に来ていて、のべ六、七ヶ月だな」とコンスタンティン。

「でもこんな大きな土地の配置は見たことない。月一、二日ずっと起こってきたなら、なぜぼくは今朝まで見たことなかったんでしょう？」

老グリマルディが言った。「昔はお客を騙したもんじゃ。大きな土地がやってくる日だな、と感じたら、雨乞いをするんじゃよ。そうして家にこもって、客もそうして、すると雨であり得ん土地は見えなかった。この国で宿を経営する者は、ほぼあらゆる不利を隠す詐術を知っとる。

遠い北の本土でも同じ問題があった。大きな土地が来ると感じたら、雨乞いじゃ。しかし、あいつらの祈りは我々ほどきっちり応えてもらえないんじゃ。大陸のやつらは我々島の民ほど聖くないから。そこでやつらはお話をでっちあげた。大きな雲の塊だとか、大きな蜃気楼だとか。そして霧を祈ってそれは手に入る。霧を祈るのは雨を祈るほど聖くなくていいからの。じゃが、本土の者は海を全然見ない。ゾウがイルカみたいに跳ねとっても気づきやしない」

若グリマルディが言った。「月一、二回の大きな土地は気にならなかったよ。ワゴンで新しい土地に行って、そこが儲かる土地だと見せるためにプロモーターが放した羊やヤギを盗むんだ。ワゴンをその手の肉で満たしたもんだ。オリーブ、ブドウ、コルクで満たすこともあったな。あいつらは小技を使うんだよ、あのプロモーターどもは、肥沃な土地を植物や動物がすでに繁栄してる状態で作り出すんだ。ていうか、そういう小技を持ってるプロモーターもいるんだけど、その腕が錆び付いてきてるんだよな。今じゃおれもプロモーターになったけど、その小技のやり方が全然わかんないよ。そしてここにずっと土地があるのは好きじゃない、すごく儲かっても。

反対票を投じたいところだが、そもそも投票にすらかけないんだ。ただ押し付けるだけ。ずっと大きな土地がここにあるなら、もっと良い取引をしないと血が流れる。土地が壊滅的に消えて、人を殺したり騙したりしても血が流れる。

「今日、北から来たのか？ 北では、これがどうやって起こるかについて、何か考えがあるのか？ おれたちはここに住んでるのに、これまでも全然わからなかった。特に今日のこの出現は、何かおかしい。誰かが略奪されてる気がするので、気に食わない。でも、おれ自身も知らぬ間に略奪者連盟に入っちゃった気がするんだ」

「サンダリオティスの半島と連邦は今や、恒久的なものだとある人から聞きましたよ」とコンスタンティンが言った。「それどころか、これまでずっと恒久的だったのであり、他の話はすべてナンセンスだとね。でも、納得できません。コルシカとサルディーニャの島が、周りの土地より高く出て、別個の島として現れるのは、一時的にしか見えない黒い露みたいなもので、本当の本質じゃないそうですよ。その人たちによると、あなた方の島が分離した姿は悪夢だそのこと。狂気や悪い夢が顔を出したものだそうです。精神病や人格の病気だと言うんです」

「おお、それはかなり正しい」と老グリマルディが言った。「その石を投げればほとんど誰にでも当たる。わしらには確かに劣化した見せかけがたくさんあるが、それを捨てるわけにもいかんのじゃ。それを突き抜ける強さが必要だ。誰かが世界の暗い強さと苦しみを提供するしかないんじゃよ。どこかに灰を捨てる場所、骨を埋める場所、ガダラの豚が走る場所、溺れなかった豚が走る場所が必要なんじゃ。というのも溺れたのは小さな群れだけじゃったからな。どこかで不快な瘴気が丘に居場所を持たにゃならん。これについて話すのは辛い。

長い間、その捨てられた灰と墓地の物質をわしらは肥料にしてきた。山の庭には古い幽

霊が鋤き込まれ、それが植物に素晴らしく悪臭を放つ花を咲かせる。サンダリオティス全体は、そんな素晴らしく悪臭を放つ花だ。話によれば、昔はラベンダーの月の時にだけ現れたそうじゃ。今、やつらはその時間を引き延ばそうとしておる。

そしてわしらは、自分の山岳地帯にいて、昔から地球上のどこにも許されないヤバいものの避難所だった。古いものはカルト方面ではるか昔に支配しておった。そして完全に信用を失った後、うちの島に来て終わりを迎えた。でも、死にはしない。というか、死んでも、まだ死後に現れる。うちの丘は暗い霊や怪物でいっぱいじゃ。まともな肉体を持ったことのないものもいる。おばけじゃ。1600 キロ離れた人なら、魂が病んでたり腐敗してたりするじゃろ！ そして、それを治すために何か吐き出すんじゃ。当人はそれを見ない、さもないとそのあまりの忌まわしさに死んでしまうからの。そして、そいつのいるあたりの連中だって、誰もそれを見ない。でも、吐き出されたそれはうちの丘に来て、狂犬、狂猿、悪魔として目につくことになるんじゃ。

イエスによる贖罪前の世紀からきた生き物に、わしらはひどく悩まされとる。そして今世紀のオーストリア人が言う、無意識からの生き物にも悩まされとる。「無意識」というのは、古くてみすぼらしい国の新しい名前じゃな。これらの受肉化した生き物は、ここらの人々の無意識から生じたものじゃない。いいやちがうのじゃ。うちらの内なる幽霊は時に暴力となって現れるが、こんな放浪したり肉体をまとったりする形では現れたりせんのじゃ。そもそもそれ以前に、わしらはたいてい心優しい人間たちで、他の場所の連中ほど内なる幽霊はいないことを考えてくれ。これらの受肉した生き物は、ドイツやロシア、凍てついた息苦しい国、バルカンの狭い国、中央の石炭煙突の町、太陽や海がない凍傷まみれの不健康な国から来るのじゃ。暗い場所からのそうした有害な霊は除霊され、遠吠えしながら去る。じゃがそいつらは小ずるくて、遠吠えしながら考えのじゃ。『これを好機に転じるにはどうしたらいいかな？』と。すると、機会が目につく。『主よ、緑の丘に我々を追放したまえ』と乞う。主は慈悲深いので、最も緑の丘、わしらの丘に追放するのじゃ。

もう一つ、わしらに悪評をもたらしがちなものがある。とはいえそれは、わしらの悪からは一切出ておらん。むしろわしらの慈悲と高潔な心から生じておる。わしらの中から出た強い男、あらゆる拷問や不快に耐えられる男が、煙の場所の連中に情けをかけるのじゃ。その男は崖の縁（わしらの国には、永遠に続く地獄への穴を覗ける場所がある）から覗きこみ、最も惨めで苦しむ者を見つける。そこでその心の大きな男は言うのじゃ。『今日は仕事がない日だ』と心の大きな男が言う（あるいは仕事がないのは半日かもしれない）。『あそこにいるやつの身代わりになろう。あいつはおっかない様子だし、情けをかけるに値しないし、誰も休ませてやらない。だが、ほんとに参ってる、休息が必要だろう』。『いいよ、身代わりはいつも歓迎だ』と当番が言う。そこで高潔な男が地獄に降りて、半日その者のために苦しみ、そいつはうちの緑の丘に寝転がって休息する。うちらの丘はそいつのせいで悪い評判がたつ。

我々がどれほど高潔か――（たとえ半日でも、呪われた魂の身代わりになるようなヤツが他のどこにいる？）――は忘れられ、うちの丘がおっかないものや恐ろしい霊でいっぱいだというのだけが記憶される。そいつらは山に寝そべり、青い空を見てリフレッシュする。このすべてはお情けと慈悲を示すものだ。だが、すてきな日に何百もの地獄の野郎どもが寝そべっていると、悪評がたつ。そしてそいつらのほとんどはここで育ってさえいない。外国人だ。

わしらの島が決して沈まないのは良いことだ、この大きな土地があるときでもないとき

でもな。海に覆われたら、丘の不快な灰や腐敗物が海を汚し、魚を殺しちまうだろうからな」

老グリマルディは、普段は絶対にこんなにしゃべらなかった。その後、彼は黙った。

若グリマルディが言った。「今日は、雨乞いさえしなかったんだ。大きな土地が来るって知ってたのに。今日は、新しい土地を見せて売れば大儲けできる。鶏は天気がどうなるかについて、人より賢いって知ってるか？ 短時間の土砂降りなら、避けて雨がやむまで出てこない。でも、長時間の土砂降りなら、鶏にはすぐわかるので、雨宿りしない。雨の中に出てきて、日常の食事を続ける。今はまさにそのケースで、おれたちは大きな土地が来る話についてはちょっとした鶏の知恵があるんだ。一日だけなら、その日だけ引き下がる。でも、ずっと長いなら、すぐわかるから、引き下がらない。できる限りそれと共存するけど、好きじゃない。それが今回は、もっと長い時間にわたりやって来たんだ」

「それでもサンダリオティス、あなたが言う大きな土地は、ずいぶん心地よい場所に見えるけど」とコンスタンティン・キッシュは敢えて言ってみた。

若グリマルディは答えた。「地獄だって両手いっぱいに誘惑を抱えてやってきたら、完全に心地よい場所に見えるんだ。まったく、このおれもサンダリオティスのビジネスに、思った以上に絡まっちまってるから、ちょっとすげえことになるかもしれないな」。ああ、サルディーニャの山のトゲトゲのハリネズミ男たちときたら！

彼らはしばらく黙り、ガラスのない窓から陽光に浴したつつ広がる緑の美しさを見ていた。

「全長 450 キロの世界爆弾の話を聞いたことある？」とコンスタンティンが少し間を置いて尋ねた。

「それは犬用の爆弾だよ」と若グリマルディが言った。「シューシューいって火花は散るが、爆発なし。ただの閃光、不発弾。遠吠えだけで牙のない犬と同じだ。おれなら犬殺しをけしかけるね。羊を殺す犬だけど、羊じゃない人には危害を加えない」

「その 450 キロの爆弾は、ハジエルという悪魔のサンダルの一つじゃ。赤い紐やストラップのついた有名なサンダル」と老グリマルディ。

「450 キロのサンダルなんて、えらく足の大きな悪魔ですねえ」とコンスタンティン。

「ああ、サイズは悪魔連中にとってはこれといって特徴じゃないんじゃよ。ある日は大きく、別の日は小さくなる。彼らが履くものもそう。だがハジエルがサンダルを失った日には、そのサンダルは 450 キロじゃったというわけ」と老グリマルディ。

若グリマルディが続けた。「ヤツはそれを取り戻したがってる。そのせいで今、この地域で多くの問題が生じてるんだ」

「若グリマルディ、あなたそんなおとぎ話を信じるには賢すぎるだろ」とコンスタンティン。

「おれが賢い？ いつの話だ？ そんなおとぎ話は野生のラバと同じだ。あんたより早く捕まえ、早く乗り、早く走れる。ラバに噛まれ、蹴られ、転がされた男は、足の速い他のやつに挑むとき、ちょっと慎重になるべきじゃないかね。この話、あんたが言うおとぎ話は、あんたの想像以上に足が速いぜ」

「サンダルが爆弾ってどういうことなんだい、若グリマルディ？ というか、その物体はそれが何であるにせよ、サンダルか爆弾のどちらかになるってどういうこと？」

「ああ、爆弾、サンダル、空の犬島、こういうのはすべて、椅子にすわった博士どもが反物質と呼び、椅子にすわってない人がいつも悪と呼んできたものなんだよ。地球とその付

属品はすべて本物の物質、つまり善でできてる。うん、それが何か別のものだというふりはできるし、口先では地球をけなしてみせるかもしれないけど、でも本質的に地球は善、つまり正の物質なんだ。サンダルや、悪の物質、反物質でできたものが地球に接触すれば、大きな爆発、相互破壊が起きる。ハジエルはそんなの気にしない。彼はすでにもう別のサンダルを手に入れた。地球の人々ですら、反物質に忠誠を誓う者も多くて、そいつらも気にしない。だがおれは気にする。できることはするし、警告できる人には警告する。あんたは興味あるみたいだから警告する：ハジエルからは良いものなんて出てきたためしがないぞ」

「ハジエルの爆弾サンダルと、あなたが大きな土地と呼ぶサンダル型の半島に何か繋がりはあると思いますか、若グリマルディ？」

「おお、両者を結ぶ妥協的な話がある。海の下でイルカが口笛を吹き、空から犬が答えるって言われてるんだ。どこまで本当かわからない。あんたは奇妙な事件に取り組んでるんだな、世界最高の探偵さん」

「そうなんだよ、若グリマルディ。イタリアのサレルノにはどうやって行くのが一番いい？ 今日のぼくは予感と直感に満ち満ちていて、サレルノにいる男に話すべきだと思うんだ。ラバで行けとは言わないでくれ。その全行程を行けるラバ道はない」

「今日、ここにこんな大きな土地があるのに、なぜそんなことが確信できるね、探偵さんよ？ でも、ここには飛行機を持ってるんだ。すぐ連れてってやるよ」

「若グリマルディ、あんたが、サルディーニャの山のトゲトゲのハリネズミが、飛行機持ってて、そんなあっさり連れてってくれるって？ そもそもどうやって飛行機なんか手に入れた？」

「ああ、おれは不動産稼業やってるから、今日この長い一日だけだけどな。でも、すっかりやる気はなくしちまったよ。だがその稼業で飛行機があるんだ、広大な区画を見せるためにな。うん、サレルノには簡単に行ってやるよ、世界最高の探偵さん。そんなの簡単でなくする必要もなかろう？ サレルノの偽造名人に会うんだろ？ いや、偽造名人がそもそも存在することさえ、おれに知りようがないなんて言わんでくれ。あんたはすでに『知りようがない』ってフレーズのバリエーションは使い切っちまったんだから。電話するだれやらお相手に電話してこい、飛行機は準備しとく」

コンスタンティン・キッシュはグリマルディの宿の唯一の電話から電話をかけ、すぐに相手とつながった。

「キッシュです。グリシュウェル、サンダ――いや、450キロの爆弾はハジエルっていう世界からきたんですか？」

「そう思う、うん」と答えが来た。「カタログにはそんな名前じゃ載ってないがね。君がそんな世界の存在を知ってるなんてありえないんだがな」

「あなたは、すでにそのフレーズのバリエーションは使い切ってますよ、グリシュウェル。爆弾は反物質装置？」

「そうじゃないかと疑ってる、うん。何をつきとめた？ どこにいる？」

「サルディーニャの山です。ここではみんな、昔はいろんな話をしてくれました。今は昔と同じくらいしゃべりはするんですが、話の中身はあんまりないんです」

「サンダリオティスの半島を逃がすな、キッシュ。そこに足止めしておけ。その半島がそこで何してるかわからんが、爆弾の停泊地にいて場所取りをしてるのかもしれない。それはこっちにとって有利となる。逃がすな」

「イタリアやイベリアの規模の半島が動き出すのを防げっていうんですか？ わかりました、グリシュウェル、どこへも行かせません」

第 4 章

若グリマルディが持っていたのは、サンダリオティス製の飛行機イクヌーザだった。コンスタンティンが見た多くのサンダリオティス製機器や車両と同様に、どんな欠点もその驚異的なスタイルで補っていた。誇りに思うべき飛行機だった。

そして若グリマルディはその飛行機を誇りにしており、コンスタンティンはこの背の高い男がそれを最近手に入れたばかりだと感じた。若グリマルディはその操縦にもスタイルを見せたが、それはサルディーニャの野生のラバに乗るのと大差ないひどさだった。

彼らは高く飛び上がり、サンダリオティスの美しい地理がどんな地図よりも鮮やかに展開された。この土地が示すような色彩はかつてなかった、緑、青、赤、黄、茶、紫、黒、そして常に緑に戻る。新たな土地の周りの水も、緑と青と白の絶妙な色の鋭さで、かつてないものだった。海上に盛り上がる霧はライラック色だった。すべてが地中海に置かれたペンダントの宝石のようで、その宝石たるサンダリオティスのすべての部分が新しい光で照らされていた。

アンジェロ・ディシアン師（偶然にも、コンスタンティンが今会いに行く人物）はかつて、地中海はイベリア、イタリア、ギリシャの土地が光のブランドのようにその水に入らなければ、他の海と同じく鈍い色だっただろうと書いたことがある（「そしてもう一つ、見えない半島がそこに入っている。それは目に見えないが、目に見える効果を持つ」）。彼は、この四つの反射板が海を満たす光を生み出したと信じていた。

若グリマルディはコンスタンティン・キッシュをアヴェリーナとサレルノの間の小さな空港に降ろし、何か他に説明したいようだった。だが説明する決意がつかないようだった。

「パラシュート持ってるな、世界最高の探偵、だから少しはわかってるんだろ。自分でも半分しか推測できていないことは話せない、それにおれは向こう側から金をもらって仕事してるんだ。でも、パラシュートはつけといてくれ、世界最高の探偵！」

コンスタンティンは空港ターミナルに「旅行者支援、サンダリオティス支部」と書かれたブースがあるのに気づいたが、それは新しいものでないように見えた。その日まで誰も気づかなかった出来事のつながりや補完が実にたくさんあった！ コンスタンティンはタクシーでサレルノへ向かい、偽造名人アンジェロ・ディシアンの家に着いた。朝 11 時 45 分だった。

「名人はあなたに**絶対**会わない、キッシュさん」と、大きなハンマーを持った職人が言った。「名人は正午前には決して起きないし、起きる者に対して完全な軽蔑を抱いてる。我々職人が早くから働いてるなんて当たり前のことは言わないでくれ、キッシュさん。私が準拠している時計は、ご覧の通り、12 時 45 分を指してる。それが私の生まれ故郷の今の時間。それで私にとっては誠実さが保たれる。向こうで偽のヒンドゥー像を作ってるヒンドゥー人の時計はもっと遅く設定されてる。いいや、名人にあなたが来たと伝えても無駄

に決まってる。正午前に起きる者への軽蔑に加えて、警察階級の人間へのさらに深い軽蔑を抱いているから」

「その気取った子犬の耳をすぐにひねりあげてやる」とコンスタンティン。「ぼくの階級の者があいつの階級のヤツをどんな目にあわせてやれるか、過去に何度か思い知らせてやったんだ。ぼくについては、軽蔑を押さえろとたたき込んでやった思ったのに」

そこでは三台のピアノが鳴っていた。一台は古いスコット・ジョプリンのラグ、一台はクラレンス・スウィートのロック・ボトム、一台はシュレードのプロファイル・ジャズのシーケンスを演奏していた。性別のわからない若者たちがピアノを弾き、他の若者たちが録音し、スコアリングしていた。すでに三台すべての再生が始まり、新しい演奏と混ざり、始まりがどこかわからない和音を形成していた。これは、名人が世界最高の偽造品に仕上げる努力の第一歩だった。

「とにかくぼくが来たって伝えてくれ」とコンスタンティンは固執した。「そして**このぼくは**、人を待たせるやつを軽蔑してるんだ。いくら待たせようとしたって、ぼくには効かないからな。どのみち、あと 12 分で正午だ。」

「絶対にダメ」とその職人。「名人にはきわめて高い基準があるのです。おそらく正午でも会わないでしょう。十二時に起きるか、ずっと後になることもある、でもその後のルーチンは変わる」

「世界最高の探偵が来ていて、待たされるのが嫌いだって伝えるんだ」とコンスタンティンは食い下がった。「世界最高の探偵にはこういうことに対処するやり方があるんだ」

「おやおや、名人はただ、自分は世界最高の偽造屋であり、トップの偽造屋はトップの探偵よりずっと少ない、と言うだけでしょうよ。そして世界最高の探偵を待たせるのが自分は楽しくてたまらないとね」

コンスタンティン・キッシュは職人の喉を乱暴につかみ、職人はコンスタンティンの頭をハンマーで乱暴に叩いた。両者とも、気持ちと体を痛めて一歩下がった。

「なぜぼくが来てるって伝えないんだ？」とコンスタンティンはまだ諦めず、頭の新しいコブを触った。

「彼がここにいないから」と職人が言った。「そして、彼がいないって絶対に言っちゃいけないことになってるから」

「偽造の家を運営する方法としてはまたとない！ あの子たちが偽造してるスコット・ジョプリンの曲、あれは『シカモア・リーフ・ラグ』？」とコンスタンティンが尋ねた。

「いや違いますよ、『ボックスエルダー・リーフ・ラグ』ですよ。すごく新しい」と職人。

「名人がまだ仕上げのタッチを加えてないほど新しい？」とコンスタンティンが尋ねた。「古い楽譜の紙を用意しなきゃならないが、でも彼はどの時代のも持ってるでしょ。さらにそれをジョプリンの熱い手で書き、採譜しなきゃ、でも彼はジョプリンを何度も偽造してるよね。おお、彼ほどの偽造屋はいない！ そして、素晴らしい職人たちがここで働いてる。君たちは彼の卓越を保証する存在だな」

「ありがとう」と職人た。十数人の若者が偽造の傑作を粗削りしていた。彼らは時代ごとの素材、キャンバス、絵具、大理石、ブロンズを知っていた。ガラス職人が昔のやり方で偽造ガラスの傑作を口で吹いていた。

エッセンスブレンダーがヴィンテージワインを作り、ボトル職人がヴィンテージボトルを作っていた。女性がエドセル・シュロックの正真正銘のフレットジェット・タイプライターでタイプしていた。それはディシアンが有名なオークションで誰よりも高く入札して

手に入れたものだ。シュロックのボロボロのトランクさえそこにあった。これはディシアンが安く買いたたいたもので、他の者は「トランクの底から出てきた」という宣誓付の証明の力を予見できなかったのだ。最近、そのトランクの底から本当に優れた作品がいくつか出てきた。完成後、儀式的に数秒だけトランクの底に置かれただけだがそんなことはどうでもいい（偽造屋たるもの、そういう儀式を怠るようになったらおしまいだ）。正直に言えば、これらの後日発見されたと称する作品は、シュロック本人が書いたどんな作品より優れていた。

「おお、この天才的な名人と手配屋たちがまっとうな道に進んでいたら何ができたことか！」とコンスタンティンは賞賛の言葉を輝かせた。

「やめてくださいよ」と職人の一人が呆れた顔をした。「世界最高の探偵は陳腐なコメントを控えた方がずっといい。『まっとうな道』は過大評価されてるし、死後の付加価値を除けば、ほとんど報われない。ここにいるほとんどの者は、名人自身も含めてその道は試したんですよ。こっちの方がずっと報われるし、創造性の機会がたくさんある。実際、名人はここでの仕事をいつも『伝統的文脈創造性』と呼んでるんです。偽造ほど美しく秩序だったものはない。まっとうな道より、ずっと美しい曲線の道（私たちは決して曲がった道とは呼ばない）で、本当に優れた風景が見られるんですから」

偽造名人アンジェロ・ディシアンが正面のドアから入ってきた。正午ちょうどだった。アンジェロは長い夜の後のワインと塩気で、ほとんど萎れたようだった。しかし、はさみでヒゲの両端を少し切り、過去 24 時間で伸びた分を落とした。赤い夜のバラを捨て、黄色い昼のバラをつけた。それで新しい日に向けて新鮮さを取り戻した。

「正午前には起きないと聞いていたが」とコンスタンティンが言った。

「起きない」と名人が言った。「今起きているのだ。君が見た他のヤツは、夜の時間に私の体を時々占拠する評判の悪い者なんだ。キッシュ、君の来訪は侵入と攻撃の性質を持つものだと思慮する。ここの自由で気楽な空気は、探偵その他の異端者、たとえ世界最高の探偵でも吸わせるにはもったいない。私にかまうな、コンスタンティン！ 君の些細な嫌がらせにつきあってる暇はない。君などのまったく手が届かないほど大きなものに取り組んでるのだから」

このアンジェロ・ディシアンという人物は世評も地位も高かった。あまりに高名だったので、驚異的な新発見の傑作を、自分の贋作だと称して売っているほどだった。彼の公然の偽造品に強い市場が育っていたからだ。偽造屋の中で、それぞまさに地位だ。しかし、コンスタンティン・キッシュも自分の地位を保つ必要があった。

「いや、違うって、そうじゃない」と彼はアンジェロに言った。「嫌がらせなんかしない。この方法じゃ合意に達しない。君の好意が欲しい。協力が欲しい。助けが欲しい。助言が欲しい。判断が欲しい。素晴らしい評価が欲しい。そしてぼくのグループはすべてのサービスについて良い報酬を払う。そうしたものをまっとうな形で得られないなら、君の偽造品でも受け入れる。そっちのほうがもっといいかもしれない」

偽造名人アンジェロは少し微笑んだ。コンスタンティンの賞賛を喜んだ。彼はコンスタンティンを工房から隔離された別の部屋に案内した。

「いいだろう」と名人が言った。「提供するのは私の好意の偽造であって、本物の好意じゃないと理解してくれるなら、相談できる。だが極秘だ。法の正しい側と仕事してるなんて知られたくない。もっと安全な内部屋に行こう。」

「すでに内部屋にいるじゃないか。いま入ったばかりだろう。大きなものって、どのく

らい大きいんだ、アンジェロ？ それがぼくからの最初の質問だ。偽造なんてそんなに大きいものができるの？」とコンスタンティン。

「ああ、客が持ち上げられる最大の値札に書ける最大の数字と同じくらい大きいものなんだ。それ以外に限界はない。私はこの我々がいる世界そのものを偽造できるし、それも最も鋭い惑星の買い手をも納得させるほど説得力のある偽造ができるんだ。必要なのはプロジェクトのための十分な資金と支点を置く場所だけだ。」

コンスタンティンは言った。「うん、わかった。そんなに大きくできるとは知らなかったし、別にそれを疑問視してたわけじゃないんだ。国や領域の大きさなら、うん、でも世界の大きさでできるとはね。それから、質問のもう一つの部分がある。偽造——どう言えばいいかな？——オリジナルがない偽造はどうだ？」

「おお、もちろん、もちろん、コンスタンティン、そういう例はある。時々それは簡単すぎるくらいだ。それを最高の形でやるには、『簡単すぎる』や『安っぽすぎる』解決を拒否することだ。そうすれば、物質的なオリジナルがない、本当に高品質の贋作ができる。これがむずかしいのは、偽造者が自身の名誉、あるいは名誉の役目を果たすよう委任する偽物に誓って行わねばならないからというだけなんだ。比較してチェックするものがないからチェックが難しいし、そんなものを依頼すると悪用されかねない。

そして、オリジナルがない偽造をする際、十分に名人になってない偽造者が見落としがちな、ちょっとした細部がある。**必ず**しなければならない小さなことがある。まず、世界そのものに**必ず**ちょっとした変化を加えないといけないだ。目立たない、わずかな溶け込むような変化を加えるんだ。それは、その欠けた傑作を収容できるような世界を生み出すためのことなんだ。だが我々は皆、常に世界を変えている。

『欠けたオリジナル』といった言葉に惑わされてもいけない。それは『オリジナルがない』ことと同じではないんだ。私自身のほぼ完璧な偽造の一つ、『プラクシテレスの泣くヘルメス』をいま念頭においている。これは入手できないオリジナルの偽造だ。プラクシテレスが作ったであろうように作った。彼が作れたであろうほど良く作った。オリジナルは紀元前 4 世紀のギリシャ彫刻の記念碑的な作品だったし、私もそうなるようにした。でも、私はすでにプラクシテレスの他の多くの彫刻を通じて彼の心を旅していたから、オリジナルがない偽造がこんなにも優れたものになった。でも、**決してオリジナルがなかった**わけではない。あったんだ。その欠けた傑作が後のすべての作品に与えた影響を研究できた。それについての書かれた記述を研究できた。本当に、まるでそれが横たわった泥からその鋳型を得ていたようなものだ。私はその泥の型に、溶けた大理石を注ぐだけだった。

ちなみに、私は失われていたプラクシテレスの『泣くヘルメス』の本物を**実際に**見つけたんだよ。そして、それをどうしていいか分からずに困惑してる。私のバージョン、今オリジナルとして受け入れられているものほど良くないんだよ。そいつを私の『本物の』偽造の一つとして発表しても、私の評判を少し下げることになってしまうだろう。でも、しばらく持っておいて、最善の活用法を見つけるよ。

とはいえ、君が言っているのは、決して存在しなかった、でも**ありえたかもしれない**ものの偽造の話だろう？」

「その通りだよ、アンジェロ」とコンスタンティン。「そして、そのありえたかもしれない文脈も、偽造する必要があったかもしれないし、あらかじめ偽造されてたかもしれない」

「まあそう言うなら、多くのものは自分の周りに独自の文脈を育てるものなんだ。時々、ものはしばらく正しく見えて、その後ちょっと間違って見える。君自身みたいに」

「**ぼく自身**みたいにだって、アンジェロ？」

「そうとも。しばらくの間、君は世界最高の探偵として絶対的に自信満々だっただろう？だがこの 18 時間くらいで、その立場の自分、いやどんな立場であれ自分について、ちょっと何かおかしいという気がしてきたんじゃないかね？」

「うん、その通りだ、アンジェロ。それがどうした？」

「ひょっとするとここにいる君は、コンスタンティン・キッシュの偽物かもしれない。**私が**君を偽造したのかもしれないぞ」

「面白い考えだ。ならば少なくとも、ぼくは名人級の偽物ってことだな」

「コンスタンティン、君は最初に非常に大きな偽造について話してたな。そして今度は、対応するオリジナルがない偽造の話をしてる。察するにこれは、同じ事件の話をしているね？」

「そうだ」

「こいつは話をするだけでも金がかかるぞ、コンスタンティン。誰が話す金をだれが払ってくれるんだね？」

「世界インターポール」

「まあ、彼らのために働いたからって、必ずしも私が法と秩序の側に立ったことにはならない。法と無秩序の側に立つだけだと言って自分を慰めてみてもいいが、私はだれとつるむにしても無秩序は嫌いだし、特にそれが法とのあわせ技となればなおさらだ。私は本当に徹底して秩序を支持する、法なんてどうでもいい。本物の芸術家は皆、秩序の線の中に生きるものだし、偽造者は他の誰よりも厳しくその中に生きなきゃいけない。偽造者たる者、そこをしくじるのは**許されない**。偽造されるはずのものって何なんだ、コンスタンティン？」

「国だ。それが偽造されるはずのものだ、または偽造されつつある、またはずっと前に偽造されたか。あるいはそれは全く別の事件で、ぼくが間違ってるかもしれない。偽造なんてないのかもしれない。それを確かめなきゃならないんだ」

「**国**だって、コンスタンティン？」

「うん、国、領域、連邦、この場合は任命された専制君主が率いる合意君主制だ。ここの地中海の半島と共存する連邦、君のイタリアより少し大きい半島だ」

「**国**と言ったね、コンスタンティン。**国家**だと？」

「うん、アンジェロ。偽造名人ならば、ずいぶんと手の混んだ仕組みのことは聞いたことがあるはずだ。この国が本物のオリジナルか（ぼくには不可能に思える）、完全な偽造か（ぼくはそう信じてる）、それともぼくには想像すらできない何か別のものか知りたいんだ。どれほど優れた偽造か、どれだけ持ちこたえるか知りたい。どこにいたのか、これからどこに行くか、それが偽造でもオリジナルでも知りたい。誰がやったか、なぜか知りたいんだ」

「おお、これは不公平だ、コンスタンティン！」アンジェロ名人は叫び、両手で頭を抱えた。「どんな偽造名人にとっても絶対的な楽園となるような驚くべき概念を提示しておきながら、同時にそれがすでに実行されたかもしれないと言うなんて。すでに実行されてほしくなんかない！ 自分でやりたい！ 国全体を偽造するなんて、そのためならどんな代償を払ってもいい！ コンスタンティン、これは何の話なんだ？」

アンジェロが、何かわざとらしい抗議のお芝居をしてるだけという可能性は？ 偽造者相手に、それをどうやって見分ければいい？

「正午まで『寝て』なかったら、知ってたよ、アンジェロ」とコンスタンティンが言った。「今朝ずっと世界の驚異だった、確信してる。」

マスター・アンジェロは作業場に通じるドアに行った。

「新聞を持ってこい」と彼はそこにいる男の一人に叫んだ。「すぐに、すぐに持ってくるんだ」。そして、ちょうど出たばかりの正午の新聞がほぼ即座に持ってこられた。

アンジェロは読み、素早く理解して叫んだ。「あ、あ、あ。これはただごとじゃない、コンスタンティン。私の内部屋に行って、この状況をさらに詳しく調べよう」

「**ここが**君の内部屋だよ」とコンスタンティン。

「おお、そうだね、でも私は頭の中でいつも、自分が実際よりずっと金持ちで、部屋の続きがもっともっと内側にあると想像してるんだ」

アンジェロは新聞を猛烈な勢いで読み終えた。

三分ほど詰め込むように読んでから、彼はいった。「ああ、こいつらはこの事件を、一種のヒステリックなユーモア扱いしてるな。まだ他の扱い方をするのが怖いんだろう。世界は六、七時間、信じられない状態で止まってる。本当の事実は何も書かれていない。詳細もない。でも、全体の形と色はここに描かれている。おお、勇敢な手で大胆にやってくれてるじゃないか！ 羨ましくてたまらない。すべての設備が整っているこの私ですら、こんな勇敢にできたか？ それとも、夢にも思わなかった名人や上位者がどこかにいるのか？」

「アンジェロ」とコンスタンティンが言った。「君は地中海の文明と文化のすべての側面に十分精通していて、ここでバランスの取れた判断を下せる。ぼくが思いつく限り、君が最高の人だ。これが君ですらバランスの取れた判断を下すのに大きすぎるようなら——」

「コンスタンティン、いま地中海の文明と文化と言ったのは冗長だったな。少なくとも私にとっては、他には文明も文化もないんだ。私は地中海の達成の体の一部で、その味を知ってる。いや、判断を下すのに大きすぎたりしない。ローマ帝国の中規模の州にすぎない（あるいはそうだった）。サイズに威圧されたりしないぞ。無制限の資金をくれ。そして（単にけじめをつけるための期間として）約 4 年くれ。それで予備調査ができる。その後、もっと深入りできるかもしれない」

「もう抜けられないほど深く入ってるかもしれない」とコンスタンティンが言った。「今日中に、できるだけ早く調査と評価をしてほしい。今日ですら、フルに続くかさえわからないんだ」

「『新しい土地と新しい土地の噂があるが、終わりはまだだ』」とアンジェロが引用した[訳注: 何の引用だか不明。Google 先生は聖書のマタイ書 24 のパラフレーズではないかとの考え。]。「出来事の**速さ**に威圧されないように。新しい土地の平和な、下手をするとあまりに平和的すぎる出現は、攻撃には見えない。サンダリオティスはモナコを自国の不可分な一部と主張したが、そこでまだ血は流れてない、いくつかの旗が上げ下げされただけだ。実際、こんな平和な不意打ち出現は不意打ち**攻撃**の威力を完全に殺いでしまう。不意打ちの要素はもうない。危険なら、もはや急な危険じゃない。これをやったのがどんなヤツにせよ、地中海の真ん中に 450 キロの半島を置けるなら、どんな損害だってお望みのままに与えられる。私は偽造屋で、すべてにおいて偽造を考える。でも、まずこれが本物で、偽造じゃない可能性を考えよう。

その場所が、ずっとそこにあった可能性は本当にある。エリートはずっと昔からいた。隠された知識の人々、イルミナティ、識者、インテリがいた。そういう人々は、カモフラージュのために操り人形タイプを取り巻きに使ったが、それでも一部の人には本物の中

身があった。そして高い秘教者にはいつも一種の民族の類似性があった。

彼らが独自の故国を持っててもおかしくない。隠された知識自体については、どんな文脈でも最初に出会う隠された知識というのは、その選択的な不可視性と、選択的な相手に対するその操作についての知識なんだ。うん、その土地はいつもそこにあったのかもしれん、啓蒙された者や知的な者にしか見えなかったかもしれない。でもその場合には、なぜ私に見えなかったんだろう？ だって私はいつもその両方だったのに？」

「船やボートや魚の謎もある」とコンスタンティン。

「ああ、そんなの大した謎じゃないのでは？ 船は自分の航路を守り、ボートは自分の縄張りを行き来する。地中海の漁師は口が堅い。昔から彼らが行かない広いエリアがあったんだ。『そこに魚はいない』とその漁師たちは昔から言うんだが、そのエリアの周辺にいる我々の中には、そこで魚が跳ねるのが見える者もいた。一方で、地中海にはそういう**魚がいない**場所があるんだが、それが不思議と急ごしらえの地図のサンダリオティスに対応しているんだ。コンスタンティン、私はそこに水もないんじゃないかと強く疑ってる、見た目にはあるけれどね。不可視性の裏面はいつも、**そこにないものを見る**ことだ。何かを見ないなら、その場所に代わりに何か、たとえ無色の背景でも見なきゃいけない。魚自体について言うと、地中海には盲目で混乱した魚が大量にいて、そいつらは巨大な地下のプールで泳いで光に慣れていない魚みたいなんだ。

（ちなみに、コンスタンティン、魚を偽造したことがあるんだ。私のイタリアの田舎の領主のために九つの池に魚を偽造した。生きてて、泳ぐ。有機的で、魚に見える。そして偽造だ。その話はいつかしよう。）

選択的な不可視性については、私も少し学んだ。法の外で活動することも多い者として、これはかなり必要な技術だった。かく言う君が、私の施設を捜索したときにも、偽造に関わる多くの証拠物件を不可視にしたんだ。今、この部屋にも、私が君に見せないから見えないものがある。まあ、最も強く熟練した心でも、まるごと国を不可視にしたり、機能的に不可視な国を可視にしたりはできないけれど、数百万の心が密接に協力すればできるかもしれない」

「文脈はどうだ、アンジェロ？ 多くのものが独自の文脈を育てるって言ったよね。サンダリオティスがそれをしてるように見えるか？」

「うん、それは大いにその通りだ。自分の文脈を育てたり、投影したり、または『ずっとあった』文脈を明らかにしてる。私の心には、洪水のダムが壊れたように、つながりや偶然が押し寄せる。もうサンダリオティスを**思い出せるぞ**、地中海世界の他の部分との関係、古代から現代までを。ストラボンからチェスタートンまで、何百もの暗号的な参照を突然理解し、解釈できるようになってしまった。例えば、サンダリオティスの名前にちなんだ 90 の有名な蜃気楼や気象幻覚の名前が頭に浮かぶし、さらに遠い名前や広く散らばった現象の共通の源が見える。

（ちなみに、蜃気楼を偽造したことがある。難しくなかった。指向性の温度逆転と光学的な逆流だけでいい。）

サンダリオティスは童謡や古いなぞなぞ集に繰り返し出てくるアイデアだというのがいまはわかるようになった。ラブレーのナンセンスな一行が突然サンダリオティスに関する駄洒落として意味を成してきた。それが音楽の繰り返しフーガや絵画の風景症候群として登場するのも思い出せる。サンダリオティスのすべての偉大な公共建築は、我々の芸術に描かれ、これまではだれもそれを同定できなかった。ここにある正午の新聞にサンダリオ

ティスの偉大な建築の六つの写真があるが、そのすべてがイタリアの芸術に現れてることも認識できてしまう。こいつらは、ほとんど爆発的につながりを引き起こしてる。長い間、何らかの形でそこにあったんだ」

「じゃあ、見に行こうか、アンジェロ？ それが本物かどうかについての君の意見は本当に尊重する。そしてもし巨大な偽造なら、君ほど早くその偽造部分を認識できる者はいない」

「今行っても後で行っても関係ない、コンスタンティン。もうしばらくは、そこに実際行って見るのと同じくらいよく、ここで内的に見ることができる。だが行けば報酬分の仕事をしてる感じにはなるな。行きたいなら、行こう」

「うん、大いに行きたいよ。パターンをつかむには、そこにいなきゃ」とコンスタンティン。

彼らは空港に行った。サンダリオティスの首都イクヌーザへの次の便のチケットを買った。この怪しげな現実の一面をすぐに確認する簡単な方法があった。アンジェロ・ディシアンが質問をしたが、これが定期便でまったく新路線などではないことがわかった。チケットデスクには、誰もその都市のことなんか聞いたことのない日にも飛行が行われた記録がまだあった。でも、記録にあるにもかかわらず、そこにいる誰もその飛行が行われた**明確な**記憶はなかった。

「芸術についての連中のさまざまな文献を調べてやろう」とアンジェロが飛行中に言った（コンスタンティンは北の町の驚くべき図書館のことを話し、二人とも首都イクヌーザの図書館はもっと良いはずだと推測した。）「君もいくらかやったのは承知しているが、君ではどこを見ればいいかわからない部分がある。芸術の**偽造**の記述を読むことにしよう。偽造屋の記述で、特にこのある名前を探すんだ。この私の名前だ。フランス、スペイン、イタリア、イギリス、オランダ、アメリカで、私の名前は偉大な芸術偽造屋として出てくる。サンダリオティスが本当に国家の共同体の一部なら、そこでも私の名前を知ってるはず」

そしてアンジェロは『おお、サンダリオティスで私の名前を言って』のコーラス二番を口笛で吹いた。その日の新しいヒット歌のようで、飛行機の人々や不動産業者、訪問者たちが口ずさんでいた。

「芸術にばかり集中しすぎないでくれ。手がかりや鍵は芸術の分野の外にある可能性が高い」とコンスタンティン。

「親愛なる人、**何一つとして**芸術の分野の外なんかじゃない」とアンジェロ・ディシアンが反論した。「『芸術』は物事を見る方法、正しい方法だ。どんな物質についても『これは芸術の分野』とか『これは芸術の分野じゃない』とは言えない。サンダリオティスの連邦が偽造でも、偶発でも、事実でも、そのすべての機能とプロセスは純粋な芸術に他ならない。地中海世界のものだから、偽造の芸術でも悪い芸術にはならない。

雲、雲、あそこまで異様な動きをするのは見たことがない。何を隠してる？」とアンジェロがそこで言った。

「何？ どれ？」とコンスタンティン。

「北の空から南の空までの雲の列すべてだよ、その全長すべてにわたって、そして特にあれと、そしていくつかの部分に見える雷雲。何か隠すためにグループで集まる子供みたいだ。時々そういう空想をするんだよ、コンスタンティン。雲は本当に何かを隠してるみたいだ」

（時々この男アンジェロは、どんな砲火を集める見るために空中にクレー射撃の皿を投

げるような男に見えた。今もそうだった。コンスタンティンは雲が何を隠そうとして共謀してるのだろうかと疑問に思った。アンジェロもそうなのだろうか？）

彼らは空から、地中海が他の多くの海と比べて特に明るくきらめく海である理由を見た。活性化された土地が太陽と結びつき、海の光源となっているのだ。そしてサンダリオティスはそれに理想的だった。こんなに光に満ち、光を反射する土地は他になかった。緑の透明な牧草地の中に光があるようだった。

彼らはサンダリオティスの首都イクヌーザに降り、都市の喧噪の中に降り立った。古代の地中海都市は白やアイボリー、灰色の石で、壮大だと思いがちで、生命力と色に溢れているとは思わない。建てられた時代には、そうした第建築が極彩色に塗られていたし、偉大な彫像もそうだったことを忘れてしまう。でも、サンダリオティスの都市はまだ建てられた当時にあり、イクヌーザの石は本当に明るい色で叫び、血を流していた。

コンスタンティンとアンジェロは、アンジェロが調査を始めるのに最適と考える芸術宮殿へ急ぐため、高速馬車に乗った。「なんて天才！ なんて天才！」とアンジェロは街を通りながら輝いた。「羨ましくてメラメラしてしまうぞ。なぜこの偉大なものを指揮してるのが私じゃないんだ？ でも、どうやって改善できるだろうか？ おお、ところどころならできる。でも、あれとか、あれとか、思いつきもしなかった」

若さや子供っぽさの兆しさえあった。例えば、大人が歩きながら巨大で派手なシャボン玉を吹いていた。

「あれが偽造なら、君はあんな偽造ができる？」とコンスタンティンが尋ねた。

「できる」とアンジェロが言った。「私自身、秘密のシャボン玉吹きなんだ。いつもパイプとシャボン液の瓶をポケットに持ってる、でも人が見ていないときにしか吹かなかった。これからは公然と吹くことにしよう」

アンジェロは錠剤を飲み、コンスタンティンに一つ勧めた。

「飲みなさい。いろんな侵入にさらされる緊張した状況にはこれが一番。心を麻痺させる装置や、肢体や意志を外す注入を打ち消す。舌の下に置いて忘れてしまうこと。何時間も保つ。普通の侵入に対してなら 12 時間の保護が得られる」

「いつも自分の機転を信じるほうが好きなんだよ」とコンスタンティン。

「私ならそんなことはしないな、特に君程度の機転しかないなら。ときには自分のすら時々信じられないくらいだから」とアンジェロ。

「その錠剤は何？ 誰が作った？」とコンスタンティンは尋ねた。

「私が作った。コルコロン博士の物議を醸す衛兵錠剤の、私のオリジナル偽造だ。私のは効く。彼のは効かない」

コンスタンティンは錠剤を一つ取り、舌の下に置き、忘れた。午後一時ちょうどだった。コンスタンティンは芸術宮殿に入らなかった。外が美しすぎた。

芸術宮殿の東斜面を下るイタリア階段の大きな流れ、幅百メートル、三百段の眩しい百色の塗装と自然石の階段があった。階段にはあらゆる種類のポップショップがあった。ベンチや階段でくつろぐ人々も一万人いて、すべて美しい人々に属していた。風景としての人々という概念があるが、ここのくつろぐ人々はその概念の限界を超えた。

北には大きなバシリカ。階段の底にはネクロスの九十九の泉とその反射池。泉の東には十三の通りが大きな円に流れ込むローマ円形競技場。大きな円の緑の歩行者島には、十三面の時計のタルシシュタワー。地元の信じるところでは、タルシシュタワーの足元に立てば、遅かれ早かれ世界中の人々が通り過ぎるのを見られるそうだ。タワーの足元で目を閉

じて十三まで数えれば、十三で（サンダリオティス人は一部の事柄についてはなんて子供っぽく純朴！）、異性の美しい人にキスしてもらえる。

第 5 章

世界最高の探偵は目を閉じ、十三まで数えた。結局、世界最高の偽造屋がシャボン玉を吹くなら、世界最高の探偵だって子供のようにキスゲームを楽しんだっていいだろう？

彼はキスされた。おお、でも、相手はどんな生き物だったことか。針の刺し傷を感じたが、最近のキスではむしろよくあることだ。目を開けた。アメリア・ライラック、イギリスからの何やらエージェントだった。いつものように、彼女自身の影や霧に包まれていた。彼女にはそれがよく似合った。

「あたしの心、あたしの空気、あたしの太陽さん！」とアメリア。

「針は非友好的だぞ、アメリア。あんな素早い針刺しは信頼を壊す」とコンスタンティン。

「あら、ただの惚れ薬よ。あなたをあたしに縛るための。サンダリオティスはイタリアよりも中世的でイタリア的なんだから、一日に何度も惚れ薬があっていいわよね？」

「アンジェロをもう少しそばに置いておけばよかった。君が偽物かどうか教えてくれたかもしれない。アメリア、君は本物？ それとも偽物？」

「あら、アンジェロ！　あの人こそが偽物よ。でもあたしが何であれ、芸術作品にはちがいないわ。自分の影でこんなことができる人が他にいる？ コンスタンティン、そろそろ手足と意志が少し麻痺して、動きがちょっとだけ遅くぼやけてきたのがわかるでしょう。脳もそう。従順になるのよ。でも、その代わりに多幸感に浸れるわ。気持ちいいわよね、コンスタンティン？　おお、惚れ薬も針にあったけど、もっと下世話な仕事も忘れちゃいけないのよ。そして今、あなたはあたしといっしょに来るのよ。早く、早く、コンスタンティン。あなたは誰かの身代わりになるの、その誰かはあなた自身、有名な世界最高の探偵。あなたはあの人そっくり。もしあの人の亡魂に会ったら『甥』と呼ばれるはずよ。でも今、あなたはあの人自身なの。この中で他人や自分のために何かするわけ。あたしたちは今、あなたをお芝居上演に挿入するのよ。うまくやってね、愛しい人。とても素敵な劇的役割よ。それから、あなたの中で変化した要素を、その上演からまた別の用途のために取り出すの。あたしたちって狡猾でしょ？ さあ、行きましょう」

コンスタンティン・キッシュはアメリア・ライラックのラベンダーの雲に強制的に従わされたのか、それとも彼女が手近な手がかりとして好都合と思ったから自ら進んで従ったのか？　うん、ある種の強制はあった。コンスタンティンはしばしば、美しい女性とのくねった道のりの最初の部分は心ならずもつきあわざるを得ないと感じていたのだ。手足と自由意志の軽い麻痺については、コンスタンティンはいつもそうだった可能性もある。彼はいつだって自分が望むほど自由ではなかった。いつも抑制されていた。でも、わずかな手足と体の麻痺にもかかわらず、そこらのどんな百人と競争しても飛び抜けて走れ、追い越せた。そして意志のわずかな麻痺があっても、自分の半分の年齢や倍の年齢の多くの人を出し抜き、強い意志を示せた。彼はほとんどの人ほど麻痺していなかった。そして、

いつも従順に見えたが、完全にそうだというわけではなかったし、今もちがった。

アンジェロによるコルコロン博士の物議を醸す衛兵錠剤の偽造は役に立ったか？ うん。すさまじく役立った。針の攻撃をかなりうまく抑え、コンスタンティンが無事に切り抜けるための決定的要因になるかもしれない。

「今朝、シヴィタ・ド・ノルドに置いてきた新しくて素晴らしい車が心配だ」とコンスタンティンはアメリアに言った。「あの素晴らしい車に恋してるんだ」

「そしてこっちは、あなたがあたしよりその車を愛してるのが妬ましかったわ。でも今じゃ、心配するほど残ってないわよ。あなたが恋こがれられるのは、その小さくノスタルジックな残骸だけ」とアメリアがライラック色の声で言った。「あなたがどこに行ったか確信できなかったのよ（今回の注射で『ベル』を付けられたけど、前の注射は失敗したらしいわね)、いつ戻るか、そもそも戻るどうかもわからなかった。でも、もし車に戻ったら、歓迎を用意しておきたかったのよ。だからグーニートラップを仕掛けたの。一時間ごとに何度も仕掛け直さなきゃ鳴らなかったのよ。子供たちがやってきては、車を撫でたり乗り込んだりして、爆発で死ぬんですもん。あたしたちは『誘う息』を使ったから、罠を仕掛けた後でも自分たちも近づきたくなるほどだったのよ。あなたも一嗅ぎしたら近づかずにはいられなかったはずなんだけど。北町に戻ったら、子供たちと同じく車で死んでたはず。あたしたちはまた罠を仕掛け、若者がまたもや見に来て、遊ぶ。そして前のグループと同じく死ぬの。あたしの勘違いでなければ、さっきまた爆発して（のべ六回目よ)、今回死んだのは一人だけ。でもあなたが車に戻ったら、コンスタンティン、あなたを仕留めてたはずなのに。とはいえ、今あなたを仕留めてないわけじゃないけどね」

「好きなときに、そんなにいろんな方法でぼくを殺せるなら、なぜぼくはまだ生きてるんだ？」

「あなたをどう使うかで意見が分かれたのと、気が変わったせいよ。あたしたちはあなたを無価値な人間と決めつける、でもそれから変えなきゃならない。無価値な人間になりなさいな、コンスタンティン、生きていたければね。さあ、ここの建物に入るのよ。テルトゥリアンの地下牢と呼ばれるところ。テルトゥリアンがサンダリオティス人だったの知ってる？」

「ならば、あいつはサンダリオティス人の名折れだな。**ぼくは**こんなところに入らないぞ。別の気分に従って別の場所へ向かう」

「力の試練のつもり、コンスタンティン？」とアメリアが尋ねた。「なら、あなた失敗したわね」と彼女はテルトゥリアンの地下牢という建物に入り、振り返りもしなかった。コンスタンティンは後について入っていった。絶対に従う必要はなかったが、そうしたい気分だった。彼は実際より従順な印象を与えたかった。それに特別な目標もなかった。それに、そこの看板のいくつかに興味をそそられた。「我々は現実を創る」「今ここで、君が生きる世界を作ってる」「あらゆるニーズのための幻想的な幻影」「どのくらい真摯に罰を受けたい？ テルトゥリアンの地下牢に来なさい」「言葉は肉にできる、君の肉に」。こういうのには抵抗できなかった。それに、アメリアは死体が埋まっている場所 [訳注: 英語で、決定的な証拠、くらいの意味です。] に導いてくれるかもしれない。

彼女を包む紫の雲にはいつも少し墓場めいたものがあった。アメリアは非常に美しい女性の雰囲気だったが、その雰囲気はきわめて濃い空気でほとんど見通せなかった。コンスタンティンは手がかりや答えが最も濃く集まる場所に行きたかった。それがテルトゥリアンの地下牢という建物の中にある可能性は十分にあった。だがそこに入ると待ち時間が

あった。

コンスタンティンは今や、頭の中で楽々と自然に物事をまとめていた。その日、記憶と目に刻んだサンダリオティスの地図をいくつか思い出した。地図の細かい詳細が今、大きな重要性を持っていた。いくつかの地図には主要な東西の運河が六本あった。そして負の標高の表記があった。

運河、運河、大きな横断運河。半島の全長 450 キロに主要な運河が六本。まさに、船はこれらの運河と一致する航路を設定すれば、ほとんど不便は生じない。だいたい航路はどうやって決める？ 一番簡単な方法だ。岩や岬、浅瀬、群流、嵐の巣を避ける。岩や浅瀬というわずかな仕掛けで、船は狭い道に追いやられる。これらは船体に噛みつく犬のように振るまい、船を狭い航路に保つ。小さな浅瀬は、水没した半島の大きな部分と同じくらい効果的だ。そして、もしそれらが一致したら？

運河、または同じコースにあるかもしれない合意された航路で、船はスペインやフランスのどの部分からでもイタリア、ギリシャ、アフリカのどの部分に自由に行けるし、遠回りする必要はなかった。そして、船長、航海士、パイロット、見張り、乗組員全員が同時に盲目になりさえすれば、そこに大きな土地があることをだれも知る必要さえない。あるいはその大きな土地が不機嫌か目に見えないようになっていさえすればいいのだ。

地図の小さな赤い文字と数字で示された負の標高は手が込んでいた。実はそれは、「負の標高」と単純に呼ばれているのではなかった。むしろ「通常の見かけ上の負の標高」何メートルまたは何尋と呼ばれているようだった。しかし、そこの実際の標高はどうなる？

うん、ある人々の観察では、海面下何メートル、深く沈んだ邪魔にならない安全な土地だ。しかし、本当の標高（誰にとって本当？）を与える小さな黒い文字と数字があり、それは正の数値（海抜何メートルまたは何尋）だった。この二重性には何か違法なものがあるべきだった。

突然、テルトゥリアンの地下牢という建物の中で、コンスタンティン・キッシュは強力な男二人に力強くつかまれ、腕がほぼ外れそうなほどの攻撃を受けた（待ち時間は終わったのだ)。彼は引きずられ、運ばれ、暗い部屋に連れて行かれ、偽造審問官の前に置かれた（説明のつかないブーンという音があった)。

偽造審問官の前だって？　その通り。本物の審問官はそそり立つ塔のような正義の表情で知られ、その表情は何によっても和らぐことはない。慈悲によってさえもだ。しかし、偽造審問官は崩れる塔の表情で、構造全体に和らげられた石が現れる。正義ではなく、あらゆる一貫性欠如で和らげられており、そんな人間は予測できない。逃げられるなら逃げなさい。

しかし、コンスタンティンは逃げられなかった。そこに彼を足止めしたのは従順さや手足、意志の麻痺ではない。強い男たちの拘束だった。そして、この偽造審問官はサンダリオティスで見た他の人々やそこにいた強い男たちよりずっと低レベルだった。

偽造審問官は目隠しされていた。おおそうだね、それで「正義」のイメージに少し似た感じがした。審問官の耳たぶには小さなペンダントがぶら下がっていた。それぞれに小さなハンマー、金床、鐙がついていて、すべて壊れていた。そして半円形の運河のレプリカもあり、その運河は小さな岩崩れで詰まっていた。これらのペンダントは審問官がつんぼで、平衡感覚も壊れていることを示していた。なぜならそれはすべて内耳の中にあるものの模型だったからだ。

偽造審問官は厳しく無意味に話し、コンスタンティンは完全には理解できなかった。彼

は単純な言葉をぬるぬる偽って使った。平衡感覚を失ってつまずく者は、舌もつまずき、どもる。目が見えなくなった者は時々めくらめっぽうに話す。この審問官は機械的な話し方をして、それどころか目の前の小さなパネルに浮き彫りで投影された言葉を、指で一度に一パラグラフずつ読んでいた。そこにはやたらに間接的で冷たく邪悪な何かがあった。

「君の母親は偽物を生んだとして非難されるべきだ！」とコンスタンティンは怒って言った。少なくともこれなら偽造審問官の神経に障るはずだ。そして、その偽の男はつんぼだったのに確かに顔を赤らめたが、それでも話を続けた。その侮辱はここでのコンスタンティンを傷つけるが、彼は偽の人や状況には我慢ならなかったのだ。

「善も悪もないからといって、罪や罰がないわけではない」と審問官が言った。「後者の二つは永遠に必要だ。『初めに罪ありき』が我々の従う聖書だ。『世界はその罪の罰のための地下牢として創られた』。それを信じなければ、何も信じない。おまえは罪を犯している、それが前提だ。そして罰せられる、それが結論だ」

コンスタンティンが聞いていたブーンという音はカメラだったが、なぜこんな無意味なことが記録され、撮影されている？

「ぼくの罪は何だ？」とコンスタンティンは目が見えず、聾で、平衡を失った男に尋ねた。

「おまえをテルトゥリアンの地下牢の恐ろしい時計部屋に入れてやる」と審問官は言っているところで、コンスタンティンの言うことが聞こえなかったので答えもしなかった。「そしてそこで湿った壁に縛りつけるのだ、ネズミのほとんど、だが完全にではなく届かないところに。首に輪縄をかける、おまえの罪を思い知らせるためにな。時々拷問してやる。二、三日で拷問で死ぬはずだ、それより先に絞首刑の判決が下りなければ名。おまえには他に選択肢は一つしかない：全面自白だ」

「おや、そいつは結構。じゃあ全面自白するよ」とコンスタンティン。

つんぼの審問官はプロンプターのパネルで鳴った小さな鐘は感じられなかったが、指でその振動を感じた。彼は手の下に浮き彫りの言葉が現れるのを待った。

「本当か？」と審問官が指で読みながら尋ねた。「こいつはほぼ前代未聞であるぞ。他の囚人は、勇敢で英雄的で、自分がまちがっているときですら頑として自白を拒み、死ぬまで拒んだんだぞ」

「赤コルベル忌まわ鷹として一時間生きる方が、劣った斑点モンクハッチとして千年死ぬよりマシだ！」とコンスタンティンはこれまで審問官の前に立った誰よりも勇敢に話し、テーブルを激しく叩き、強い男たちが彼を思いっきりつかみ、すさまじい痛みが感じられた。しかし、めくらでつんぼの審問官もプロンプターのパネルもその打撃を感じ、理解した。

「よく言った」と審問官が指で読みながら認めたが、その男には何か不安を感じているようだった。「うん、うん、おまえの言うことはもっともであるな」と彼は指で読み続けた、「我々としては今、そのことわざを適切な文脈に置くことはできていないがな。じゃあ、全面自白を進めなさい、それが受け入れられるかは怪しいが。ことわざにあるように、おまえ自身が自分について知ってる以上のことを我々は知っておるのだ」

「ここで何が起こってるか全くわからないと全面自白する」とコンスタンティン。「人生でこれほど混乱し、手がかりがなかったことはないと自白する。この事件の主要な事実に関する無知を自白し、それを説明する理論を全く構築できないと自白する。これであんたたちから見て十分な自白になってる？」

審問官は指でドラムを叩き、言葉を待ち、言葉が来た。

尋問者が指で読んだ。「いいや。事実を知らなくても、おまえは事実の真ん中にいる。おまえは自らこの状況に飛び込んだのだ、それを避けようと思えばやり方はいくらでもあった。おまえが自分で自分の首を縄にかけたのだ。あとほんの数秒でであることになるその縄にな。こんなとんでもなく得体の知れない状況に入りこむ者は、それに責任がある、だって簡単には入り込める状況ではないのだから。おまえはなぜサンダリオティスにいる？ なぜ干渉する？」

「ここにいるのは任務の一部だからだ。サンダリオティスがなぜここにあるかを見つけに来た、はず」とコンスタンティン。

すると、めくらでつんぼの尋問者の指の下に浮き彫りの言葉が少し速く現れた。

「ならなぜ昨夜、サンダリオティスが、俗な認識ではまだここになかったとき、近くにいた？ まだなかったのに、サンダリオティスがここにある理由を見つけようとしたのはなぜだ？ 不正行為の罪がなければ、それが**あることになる**とは知り得なかった。おまえは自分の口で墓穴を掘っているのだぞ。玩具の自白でそれを埋め戻せるとでも思ってるのか？ なぜ昨夜、北の運河の近くにいた？」

「わからない、偽造くん、本当にわからないんだ。モナコ公国が盗まれるのを防げというのが指示で、そのためにそこにいたんだ。でも、あんたの土地が現れるのを防げなんていう指示は受けていなかった。むしろ最新の指示は、あんたたちをここに留めることだ。ところで、どうやってそれをやったのか教えて－－」

「おまえに何も教えたりはしない」偽造尋問者は言葉を読んだが、それが指の下にあまり即座に現れたので彼は驚いていた。「全面自白を申し出たのは私じゃない。おまえを時計部屋で拷問にかけないほうが良い理由を言えるか？」

「うん、とても良い理由がある。ぼくが気に入らないから」とコンスタンティン。

「**おまえが**気に入らない？」と偽造尋問者がほぼ即座に読み上げた。浮き彫りのパネルから、そいつは実にうまく劇的に読んでみせた。「だが**我々**は気に入る。**私が**気に入る。こうしたものは我々の血であり骨なのだ。私は好きだし、この点で私はおまえに勝った。野郎ども、こいつを時計部屋へ！ 拷問にかけろ！」

おお、彼らは彼を湿った通路や壊れた階段を、硝石や湿った死が滴る中、引きずり、運び、場合によっては同じ通路を何度も通ったようだった。カメラがガリガリと音を立て、記録とフィルムが作られていた。なぜそんなことを？ 誰がこの狂った不正と茶番を記録してる？

彼らはテルトゥリアンの地下牢の時計部屋または拷問部屋に、天井から、または巨大な目である天井の脇から垂れる縄梯子で入ったようだった。かなり暗かったが、薄い幽霊のような光と他の感覚で輪郭がわかった。床からは恐ろしい引き裂く音と砕く音、部屋の他の男たちの恐怖の臭いがあった。彼らの位置、壁に釘付けまたは縛られた場所は、臭いと意味で明確だった。

時計部屋は完全な十三面体、十三の面を持つ形状だった。各面には大きな時計が高いところにあり、数字が照らされていた。部屋の光はほぼすべてその大きな時計の数字と針からだった。この部屋はタルシシュ塔をコケにしているようで、その塔の十三の時計の顔が内側を向いていた。

各犠牲者は、壁に刺され固定されており（コンスタンティンは、壁から下ろされてガチャンと床に落とされた別の者と交代で、十三番目の犠牲者となった）のは、にじむ硝石

の表面に、革ベルトと鎖で縛られ、自分の頭上の時計、蛇、光が見えないようになっていた。でも、他の十二の時計、蛇、光は見えた。

コンスタンティンは足首、股、胸、手首の革ベルトで吊るされ、首に縄がかけられた。縄の向こう端は、頭上の時計の分針に結ばれていた（少なくとも他の縄と時計を見るとそう思えた、コンスタンティンは自分のを見ることはできなかった)。この分針が毎時ちょうどのところにくると、縄の引きで犠牲者は絞め殺される。場合によっては、時計のレバー、減速装置、ギアで、1 時間、1 日、または数日で首が絞まることもあった。しかし、コンスタンティンが観察したケースでは、ほとんどの仲間はその次の時間ちょうどの打刻で、彼と一緒に死ぬようだった。

おお、部屋の天井の全景の目、部屋の天井である目、こんなにブーンとガタガタ音を立てる必要があるのか？ 巨大な全景の目はいつもこんなに騒々しいのだろうか？

まさにその瞬間、午後一時を数分過ぎたところでは、音は犠牲者に大した負担をかけなかった。コンスタンティンは十二人の仲間、ほとんどが評判の悪い連中で構成される雑多な集団を眺め、その顔に浮かぶ緊張と悲哀に衝撃を受けた。痛みと死の恐怖は顔から気高さを拭い去り、壊れたものを残す。視聴者がおらず、ただブーンと鳴る目があるだけでは、気高い様子を保つのは簡単ではない。多くの同情的な視聴者がいれば、気高く死ぬのはずっと簡単だ。

しかし、最も苦悶の顔の犠牲者は、穏やかで簡単だが、ガラガラ声で話していた。コンスタンティンは素人心理学者として、これが精神病の確かな兆候、恐ろしく緊張した表情と簡単で無頓着な声の乖離だと知っていた。

「死の時間、幽霊の時間、魔女の時間、それは真夜中ではない」と苦悶の顔が不気味な穏やかさで語っていた。そして下のほうにある床では、ネズミがガリガリ音を立てていた。何をかじっているかは言わぬが花。コンスタンティンが十三番目のくぼみの革紐で交代した、ほぼ死にかけの男の体だった。男は首が折れていたが、まだうめき、不平を言った。ネズミがそいつの唇と顎の筋肉を処理し、すぐに舌と喉に到達する。そうなったらもううめいたり、不平を言ったりしなくなる。

苦悶顔の男は言った。「その時間は穏やかな真夜中には来ない。平和で眠い真夜中に、何か不気味なものなんかありゃしないだろ？ すべてのクライマックスは真夜中の反対、昼の高みに来るんだ。でも、それも死の時間じゃない。正午、うん、そこで悪魔が解き放たれる（『正午の悪魔、正午の熱で』と女詩人が書いてる)。でもその悪魔はその後 2 時間以上、世界を咆哮しながらうろつくんだ。それが昼の危険で邪悪な部分に突入する」

この苦悶の顔をした、落ち着いた声の男はコンスタンティンの左にいて、コンスタンティンは時計のアナロジーに忠実に、そいつを一時の男と名付けた。

「午後二時に最も多くの殺人が起きる」と苦悶顔が簡単なガラガラ声で続けた（昨日どこかの試合で応援しすぎたような声だった)。「午後二時に最も多くの自殺が起きる。その時間に地獄に入る人が最も多い、だから普段は閉まってる補助の側門が開くんだ。午後二時に罪が最大になる。裏切り、詐欺、横領、欺瞞、不誠実の時間だ。悪の情熱に取り憑かれた人々が、自由な選択で破滅を選ぶ時間。今日、ここに吊るされた十二人が死ぬ時間。なぜ十三人全員じゃない？ 正直いって、わからん。

しっかり運営された国では、犯罪者が絞首刑になる時間だ。この運営のまずい国では、無実の者が絞首刑になる時間だ。私は無実だ、今からその時間まで運命に逆らって天に叫び続ける。審問官は、この十三面の部屋の天井には叫びが天に届かないようにする特殊な

絶縁材があると言った。それが本当なら、まったくの絶望だ。それでも私は死の時間のことなら知ってる。それを知ってるから殺されるのか？」

コンスタンティン自身も暗闇の天井を見上げ、音を聞き、大きな全景の目を感じた。まあねえ、その大きな目を超えて上がれるものはほとんどない。上がろうとするものをすべて遮る目だ。不吉な目で、天の目ではない。

苦悶顔、一時の男は狂ってるんだろうか、とコンスタンティンは思った。顔の歪みと声の穏やかさ、単調さがそれを示していた。でも、コンスタンティンは誰も気づかなかったことに気づいた。苦悶の顔の男はその穏やかな声で、自分の台詞を読んでいるのだ。プロンプターのボックスの静かな輝きが見られ、それが十三個あった。

その暗い十三面の部屋で、大きな時計の数字と針が照らされていた。部屋の他の光は、犠牲者の頭上の小さな信号灯と、土の床のネズミのラジウム輝きの目だけだった。だがこの不気味な光だけでも、仲間の犠牲者の大まかな姿を示すには十分だった。その姿は、非常に粗く、頑丈で、細かい部分は見えなかった。

床のネズミは、だんだんと食い尽くされる、前の犠牲者の体を、もがく毛布のようにまだ完全に覆いつつ、壁に縛られた十三人の犠牲者に (何匹かは) 飛びついた。しばしば足を切りつけ、犠牲者は怒りと痛みで咆哮した。他の十二人の靴はすでにズタズタだった。コンスタンティン、そこに縛り付けられた最後にして十三番目の男の靴は半分壊れ、すぐに完全な破壊になる。

しかし、世界最高の探偵コンスタンティンは、他の人が見逃すものに気づいていた。ネズミに何かちょっと変かもしれないところがあるなとずっと思っていたのだ。興奮したネズミの行動では全然なく、興奮した機械の行動に見えるのだ。だが、これに気づいた彼は、その新たな側面についてショックを受けた。そいつらは野蛮で切りつける本物のネズミよりひどかった。もっと不自然だった。少なくとも飛び跳ねるネズミの一部は機械仕掛けだった。

二時の男、コンスタンティンの左二番目の男が、今やネズミについて、ガラガラ声で話していた。

「この呪われた世界では、すべての指導者には魂の切りつける延長であるネズミがいる。だから指導者は気高く見える：自分を最も気高く見せたいとき、そいつの卑しい部分がネズミに入るんだ。そいつらは、公然とは食べられない不浄な食べ物を欲するだろうか？ なら、ネズミの人格でここで騒ぎ、死にゆく犠牲者の体を食べるんだ、というのも苦しみと死で我々の肉は不浄になるからな。指導者が公に見せられない倒錯や不誠実を欲したら？ なら、ネズミの形でここで見せる、ネズミほど倒錯的で不誠実なものはないのだから」

二時の男は突然の痛みと怒りで咆哮し、吠えた。

「ちくしょう、いまのは耳が痛かったか、ネズミどもめ？ 私の真実に対する答えとして得られるのは、下劣な切りつけか？」と彼は叫び、蹴り、つま先のズタズタの部分を外した。「おやおや、サンダリオティスの暴君自身の邪悪なネズミじゃないか！ 愛され任命された暴君のネズミだ。ここには公安部長、標高名人、弁護判事、文化仲裁者、王国の第一大臣夫人、横断運河の監督者、イデオロギーのイルデフォンセ、計画のポリクラテスのネズミがいる。おお、うごめけ、ネズミ。おれはネズミのことなら知ってるぞ。それで殺されるのか？」

こうしてすべてを見て、コンスタンティンの心の中で「偽造！ 偽造！」と叫んだのは何だったんだ？ これが現実のまちがった側だと主張するものは何なんだ？ おお、アンジェ

ロ・ディシアン、偽造名人が今ここにいて、この全てが優れた偽造か劣等かにお墨付きを与え、称賛か非難すべきだ。十三面の部屋の天井の不吉な全景の目が、すべてに狂った現実の臭いを与えた。

「答えは二つ、選択肢は二つ」と七時の男が、角でリンゴを売る行商人のように叫んだ。「天空爆弾を崇拝して爆弾の従者に貢物を払うか、殲滅かのどちらかだ。地球の人々にはそれ以外ない。どちらでも、幸いにも、我々の知る地球の終わりだ。天空爆弾の影が地球に落ちれば、地球は奴隷になる。生きた奴隷か死んだ奴隷か、それが選択だ。生きる奴隷を選ぼうじゃないか。

おお、天空爆弾、おまえが己自身となったとき、おまえを支持する証言をした私を忘れたのか！　できればすぐ、一時間以内に思い出してくれ！」

苦しむ犠牲者たちは、目の前にある何やらプロンプターのパネルから言葉を読んでいた。これが状況とそのメッセージをなおさら不気味にしていた。機械仕掛けのネズミが本物のネズミより不気味に見えたのと同じだった。これらは最後の苦悶の叫びだというのに、犠牲者の魂は閉ざされ、黙っているから、プロンプターのカードから出てこざるを得なかったのだ。

「私は殲滅と闇だ！」と九時の男が壁の位置から突然吠えた。彼が証言する時間でもなかった。全景の目は九時の男に集中するために少し唸り、喘いだ。十三人の男が、まるで磔にされたように壁に広げられ縛られている。十三本の吊るされた木のあるこの部屋で十三人が死ぬ。十三人がそこで絞首刑になる：しかし自分で自分を絞首して、自分で落下し、自分で中心で破裂するのはだれになるのか？

「私は殲滅と闇だ！」と九時の男が再び叫んだ。「そのせいで私は殺されるんだ」。これが彼の唯一のメッセージで、しかも彼のために意図されたメッセージではなかった。彼のプロンプターのパネルは正しいメッセージを示して男の目の前でガタガタしたが、彼は盲目で内面に閉じこもっていた。

コンスタンティンの目が部屋の貪る闇に慣れると、かすかに光る蛇が、腐った石の壁に犠牲者の頭上にうごめき釘付けされ、はがれる皮膚にちらつく文字で各犠牲者の銘が示されているのが見分けられた。各人は他のすべての銘を読めるはずだ（もう少し、もう少し、目がネジキリムシのように闇に潜ればそれができる）：しかし、自分の銘や吊られる名前は決してわからない。

「偽造！ 偽造！」とコンスタンティンの内なる警告が再び叫んだが、どこが偽造？ 手抜きやごまかしはない。三万匹の猛烈なネズミ、機械仕掛けのものも本物も、大きな部屋を一メートルの深さにわたり恐ろしく殺人的な塊で満たしていた。しかし、お手軽に効果を挙げるにはたった三十匹のネズミでも十分なはずだ。

首に締まる縄は、一時半を過ぎ、分針が二時と死に向かって登るにつれ、わざとらしいほどもっともらしく締まった。それは安っぽい効果を狙った偽造ではなかった。非常に強い効果を狙った偽造だ、もしそれがそもそも偽造ならばだが。そして、うん、蛇と時計の間、犠牲者の頭上の湿気で腐った壁に、イリックスドラゴンの単一の赤い目のような小さな赤い光があった。犠牲者が生きている間、その光は非常に小さく強烈な血の輝きで燃える。その血の光が消えれば、犠牲者が死んだ証だ。

偽造、かもしれない。しかし、実に強く刺激的な劇的偽造だ。

三時の男が、虚ろなガラガラ声で話していた。彼はプロンプターのボックスから言葉を読み、うまく読んだ。

「私は愛国者だ」と彼は誇り高いガラガラ声で言った。「私の土地を永遠に愛し守り、その真実さに証言することを誓った。私の誓いと支持は絶対に揺るがない。私の土地が世界の前で不安定なのが心配だ。かつて与えられた古い正当化と約束がもう与えられず、信じる者も減った。そんなのは神話にすぎないと言われる。聖書の最初の約束を攻撃する者たちと同じ武器、穏やかな不信、優越な態度、世俗の権威と見えるが実は空っぽな合意、高等批評として知られるすべての卑しいもので攻撃される。私の土地の偽の守護者たちは、私が破壊的だと言い、この牢獄に入れた、私が偉大な約束が本当で神話じゃないと言ったからだ。

我らが主たる神ご自身が去るにあたり、すべての国民に対峙して行うべきことすべてを指示したとき、私の国は『輝く待機』の場を与えられた。『主よ、あの国は』と最も鼻の長い国、つまり東の湾を隔てた隣のイタリアが言った。『あの国は何を任命された？』とイタリアは鼻と指で聖サンダリオティスを指した。『私が彼女を私が来るまで留めたいとしても、それが君に何の関係があるね？』と主が尋ねた。

サンダリオティスに何も任命してはならないなどと言われなかった。非常に多くのことが任命されたんだ。でもサンダリオティスは何よりも、予備の土地、飢饉への守護者、未来への守護者、他のすべての松明が消えたとき松明を再点火する保存の火であるべしとされた。『しかし、火自体が火花を失ったら、どうやって再点火する？』」

「でも、完全にそうは機能しない」と三時の男が続けた。（プロンプターのパネルが時々ガタガタし、彼が台本の台詞から逸脱していることを示した。）「私の土地に今、留められているのは鋭い善のみならず非常に鋭い悪だ。すべての古い疫病、伝染病、異端の細菌やウイルスがまだ生きながらえ、ここに留められている。まだ種子でしかない壊滅的なアイデアがあり、もしそれが土と水に触れれば世界はそのために失われるかもしれない。これらの壊滅的な思考は決して考えさせてはいけないものなのだ。私は今言うべき、非常に重大で重要なことを知っているのだが、それを妨げる障害も私の中にある。とある裏切り者が言った。『そろそろ手足と舌と意志が少し麻痺してたのがわかるでしょう。従順になるのよ。でも、その代わりに多幸感に浸れるわ。気持ちいいでしょう？』いや、**気持ちよくなんかない**、私がそうさせないからだ。手足と舌と意志の麻痺は、針のキスで引き起こされた。それは我々の主が最後の夜に受けたのと同じキスで、彼も死まで手足と舌と意志が少し麻痺した。彼も従順になった。他では悪に従順でなかった彼が、なぜ死に従順になったか不思議に思わなかったか？ それは呪われたキス、針や蛇の歯が仕込まれたキスのせいだ。でも、キスを与えた者は吊られるのにさえ失敗し、離れた場所に落ち、中心で粉々に破裂するんだ」

コンスタンティンの頭に、アメリア・ライラックが自分を絞首するのに失敗し、鋭く傾いた場所で落ち、破裂するという高級でコミカルなビジョンが浮かんだ。おお、なんて楽しく啓発的な小さなビジョン！ アメリアは困惑するような美しさの生き物だが、彼女がそんなめにあうほど適切で美しく公正なことがあるだろうか？

「だが、彼は幸福感を拒否した！」と愛国者、三時の男が言った。「彼はそんな快楽と調和に大人しくしたがったりはしなかった。私もだ。私の死の苦悶は私の国の復活に必要なのだ。世界に十分鋭い苦悶が不足しているなら、私の苦悶がそれを臨界点にまで鋭くするだろう。私は永遠の愛国者、そのためにヤツらは私を殺すんだ」

機械のガタガタ、縄のキーキー。コンスタンティン・キッシュは突然、息苦しい恐怖に満たされた。他の犠牲者もそうだろうと彼は思った。実際、三時の男は、普通以上の痛み

と不安に襲われたかのように、血が凍る叫び声で説教を終えた。

縄はすべて、分針が上に動くにつれ、実にもっともらしく締まった。今は動悸と短い息、絞殺に伴う幻影の時間だ。今は汚い汗、恐怖の震えが自身の臭いを放つ時間だ。

「私の痛みのような痛みがあるか！」と六時の男が本当に震える鋭い声で叫んだが、縄がその効果を遮ってしまい妥協した効果しかあがらなかった。「まるで『兄弟』が主に『我々の痛みが他の誰よりも英雄的になるよう任命してくれ。我々の痛みがあなたの右と左の痛みの王座に座るよう任命して』と頼んだようだ。でも、そんな具合にはならない。本当に過剰な痛みには英雄的なものはない。大きな痛みから出てくるのは病んだ道化であり、そいつが身につけるのは奇形だ。他は気高く賞賛され、称賛と喝采の光輪に包まれて去った。

そして、ショーが終わり、明かりが暗くなると、本当の痛みが、脚光や注目を浴びなかった者たちにとって始まるんだ。畸形をもたらし、砕き、劣化する痛みだ。それは見世物としても悪いし悪い死で、極端に悪い意図と効果をもたらすんだ。

私の痛みのような痛みがあるか？ 誰もこんな低俗な表現と受容に転落しないことを願う。それは以前の気高かった者の痛みの気高さをすべて辱めるものだ。彼らは恐怖の痛みが始まる前にショーから外されなきゃいけない」

皆、六時の男が正しいと知り、彼らの絞殺の痛みは変形し、砕き、劣化し、優雅さや理性を壊していた。

「おれたち十三人の一人を『事故』で殺すって知ってるか？」と十一時の男が新たな危機感をこめて叫んだ。まるで新しい情報を受けたようだった。実際受けていた。だが彼のプロンプターのボックスは昆虫のようにカチカチ言っていたので、それが与えた言葉ではないのがわかった。「その『事故』のおかげで、これは傑出した場面になる、グランプリを勝ちとれるほどかもしれない。

でも、これは間違ってるし、そうあるべきじゃない。比率がまるっきり間違ってる、もの自体も間違ってる。この『事故』は地元の司法の一部から許可を得てる。そして、各種の人がその『事故』、死に勝手な説明をつけてなかったことにしてしまう。あれは単なる演劇的な仕掛けでしかなかったんです、ただそれだけだ、と言うんだ。そして、この種のスペクタクルでの死亡率はとても低いんですよ、と言う。まるで、統計ですでに複数の死が記録されてるから、このたった一つの死も許されるんだと言わんばかり。でも、それで死ぬ者は本当に死ぬ。場面に効果を与えるために本物の人が死ぬのは間違ってる。最も名もなき者が『事故』で殺される。だがこのおれも、あまり有名じゃない。そのためにおれは殺されるのかもしれない」

一人を仕組まれた事故で殺す？ それとも全員を故意に？ 合法的判決で何人殺す？ 合法より少し劣る判決で何人殺される？

今や、彼らはみな、フェンスに釘付けされた狼の群れ、他の狼への見せしめだった。彼らはそこで死に、死にながら遠吠えした。

「おれは愛国者じゃない！」と四時の男が泡立つ狼のように吠えた。「このすべてを乗り越える秘密を知ってる。死にゆくおれの口に木の棒を入れてみろ、おれが噛むと黒くなり、煙が出る。それは憎しみだ。おれの秘密は、愛より憎しみに情熱があり、それが持続するということだ。そしてそれに加え、憎しみはよく流行るし、今まさに流行ってる。だから憎む。これはすべての憎む者が使わねばならない力と機械だ：反対が会うとき相互破壊をもたらす反愛だということだ；憎しみは、自分が破壊されて死んでも、反対のものが破壊されるなら気にしない。だから憎しみはいつも勝利する。おれのは反理性、反行動、

反思考、反愛だ。おれたちの戦術はすべての良い名を奪い、使い、おれたちが使い終われば誰も使えない。おれたちは尊敬され、尊敬を発明する。そして、線と秩序を悪評に落とす、線外で働く破壊者だ。『古臭い法律』、『制度』、『体制』に強い抑揚で攻撃し、おれたちが最も絶対的な体制だ。おれたちは狂い、狂ってることを自慢し、正統、反動、古臭い責任ではないと言う。

そうであっても、おれたちは説明責任 (アカウンタビリティ) だ、数を数える (カウント) からだ。原初と『反』、おれたちの相互殲滅が我々の目指すものだ。でも、破壊後におれたちの何か、少なくとも相手の何も残らないように。相手の何も残らないという確信を得た瞬間、相互殲滅を起こす、反物質対物質、反人対人、反理性対理性、裏切り対信仰、破壊対保存。おれたちは殲滅に忠誠を誓った、だからどうやって負ける？ 完全な喪失の側なら、どんな競争でも負けない。おれは永遠の反愛国者、反世界者、反宇宙者。そしてそれを信じるからおれは**殺されない**と思う。やつらは自分を殺すか？ 誰かを『事故』で殺すかもしれない。誰かの死を偽り、実行せず、それがおれかもしれない。でも、おさらばってことになっても、あいつらの一人以上を道連れにできると思う。その合意は交わしてあるんだ」

おお、神よ、絞殺の死から我々全員を救いたまえ！ 縄はさらに量子分だけ締まり、命はそれに応じて縮んだ。時々、コンスタンティンの目の前に小さなピンライトのプロンプターボックスが下がってきた。それは彼だけのためのもの。十三面の部屋の天井にセットされた大きな全景の目にも見えなかった。

コンスタンティンはプロンプターのボックスの言葉を読み、苦悶の雄弁で話すべきだと知っていた。そして、彼はそんなことはしなかった。彼が光る言葉を言うのを拒むと、気まずさと困惑が生じ、それについては申し訳ないと思った。でも、彼は無言のままだった。

五時の男が代わりに話した。

「私は『エージェント』だ」と五時の男が磔の目立つ位置から言った。「ズッコーニの名画『見捨てられたエージェント』を見たかもしれない。あいつは言い表せない放棄をよく捉えた。『エージェント』の本質は神秘的であることだ。タバコを買いに行くにも大げさな演出をする。普通にないトルコのタバコを要求し、罵倒する。もちろん、ようやく手に入れたパックのほぼすべてのタバコの紙に、秘密のメッセージがある。『エージェント』は最も暑い日にトレンチコートと帽子を被り、正午に懐中電灯を持つ。彼は自分や自分の目的を理解しないほど神秘的だ。でも、どこかの減点を中心に回転しなければ、そもそもの存在理由がない。遠い光源への無条件の奉仕がなければ、エージェントの人生はすべて無駄だ。

おお、でも、減点が消えたり壊れたりしたとの知らせが来ると、『エージェント』は荒廃する。他に牙を立てて『今、あなたは手足と舌と意志が少し麻痺し、従順になる』と言える。でも、原点失うか（おお、これはありえない、だが今まさにそれが起きている）、原点を忘れ、人と目的の健忘症に苦しむとどうなる？ 私が殺されるのは、私が『見捨てられたエージェント』になったからなんだ」

輝く光（蛇と時計の間）が数人の犠牲者の頭上で消え、彼らが死んだことを示した。死ぬのに大騒ぎする者も、従順に死ぬ者もいた。七時の男の光が消えると同時に、裂ける音、壊れる音、弾ける音がした。彼のストラップが壊れたか、すでに切られていたか、彼は支えから落ち、縄が首を折った。これは『事故』による死だった。でも、他は故意に消されていた。人は自分の指示灯を見れないが（コンスタンティンが最後の瞬間に発見したよう

に）何かにその輝きが反射するのが見えた。蛇の目に反射したのかもしれない。最後の瞬間に、彼はこれを発見した。そして、その反射が消えた。彼は自分の光が消え、自分が死んだと知った。

第 6 章

そして死後には、裁き。

裁きはかなり涼しい回復室で行われた。

「君の堂々とした沈黙はなかなか良かったよ、フランス人」と監督が言っているところだった。「審問官への『全面自白』も新しいひねりだった。君は俳優組合に入ってない役者、通りすがりの役者にはしては上手すぎる。君に黄色いカードを作ってやろう。黄色いカードは俳優組合では何もないよりマシだ。そして君が自分について細かいことを話さなくても、あまり無理強いはしない。知りたいことは調べるけど、君から聞き出したりはしない」。監督の声は真鍮の響きとシャンシャン鳴るシンバルの音色だった。

「あなたは『犠牲者』の一人を『事故』で殺した」とコンスタンティンが非難した。

「俳優の一人が不幸な事故で死んだ、うん、でも私が殺したんじゃない。君も知ってる通り、非常に激しい役だった。彼はあの場面に激しく没入しすぎて、自ら死んだんだと思う。でもそのおかげで、場面に熟練したひねりが加わった。今年の場面グランプリを獲れるかもしれない。去年も獲れたはずだったのに、ブロック投票で阻止されたんだ。

「でも、君は拷問下での沈黙で自ら特別な役を作ったな、フランス人。十三時の謎の男の役をね。実際、君のための台詞は最高とはいえなかった。まあ、ムダにはしない。何かに使う、続編か何かで。でも、『十三面の部屋』のような強烈な映画に本当の続編があり得ると思う？ この映画制作はとてもうまくやってきたし、死のシーンが中でも最高だったと思う。まあどうなるやら、どうなるやら。君の表情は素晴らしかった。上からの影、下からの影、闇の中で君の顔を捉えたぞ。

君の顔、うん、君の浅い顔は何とかしなきゃと言ったよね。地下牢の拷問シーンの薄暗い光を拾うだけの凹凸が顔に足りなかった。でも、君は顔に何かしたな。何をしたか教えてくれない限りわからない。君は顔に奥行きを与えた。劇的な奥行きをね」

コンスタンティン・キッシュは映画監督の言うことを完全には理解できなかった。この監督とはこれまで話したことはなかった。顔の浅さをどうにかしろと言われた覚えもない。そして、監督の声は、脳内で響く『エージェント』、アメリア・ライラックの声と少し混ざっていた。「このお馬鹿さん、あの事故はあなたに起こるはずだったのに、あなたはそれを台無しにしちゃったじゃない。あのシーンで死ぬのはあなただったはずなのよ。あなたの無能さで、この監督の気が逸らされたんだわ。プロンプターのパネルの台詞も読むだけの頭もまわらなかったのに、この監督はそれがあなたを神秘的に見せたと思ったんだわ。まあ、実害はないけどね。あたしたちは彼を助け、彼はあたしたちを助け、彼にはもう一人何でもこなせる俳優が必要だった。再び気が変わらなければ、別の方法であなたを殺すわ。数分以内にあなたを突っ込む別の場所を見つけるわ。それまでは、従順でいなさいよ。四肢と舌と知恵がまだ少し麻痺してることは忘れないでね」

そして映画監督は、コンスタンティンが以前彼の下で働いたかのように話していたが、そんなことはなかった。そして、今、進行中の傑作「十三面の部屋」の監督は、どこか合わないことを言い始めた。

「少し前にちょっとした騒ぎがあったんだよ」と**両目が**ガラスのように見える監督が言った。「警察からの連絡で、君が宿舎の部屋で殺されてるのが見つかったと言われたんだ。ちょっと驚いたねえ、特にそれは、私が（率直に言おう）『事故』で死ぬ役に君を選んだ直後だったんだから。君の死の噂が広まってるなら、生きてる君をプロデュースできるようにした方がいいと直感したし、十三時の男としての興味深い沈黙の演技もあって、君を『事故』で死なせないことにしたんだ。実際、事が面倒になったら、今も少し面倒だけど、君が生きて健康なだけでなく、私に友好的な態度を取っていることを示せるのは良いアイデアだと思ったわけだ。葉巻はどうだい、フランス人？ 飲み物は？ とても良いストックなんだぜ。あ、首のロープ焼けを何とかしなきゃ。君の部屋に行って、君そっくりの顔で死んでるのが誰か見よう。各種の警察を相手にするときには、少し辛抱強く相手してやるほうがいいんだ。あいつらは興奮しやすい種族だからね」

コンスタンティンは窮地にあり、脱出方法が思いつかなかった。葉巻を吸い、ワインとタールの飲み物を飲み、首のロープ焼けや十三面の部屋の壁に縛られた擦り傷に軟膏を塗られたりした。この宿舎の、自分のものとされる部屋も、どこにあるか知らなかった。自分そっくりの顔の人物について言えば、彼の外見は特に珍しくもなかった。多くの男が少し彼に似ている。でも、自分が誰と間違われたかは全くわからなかった：監督が以前話していた誰かなんだろう、そいつが死んだという連絡を監督が受けたんだから。アメリアなら知ってるかもしれない。全部、事故か偶然かもしれない。宿舎の部屋で死んでいたのはだれだか知らないが、おそらくそこに住んでいた人物だろう。それが世界最高の探偵の意見だった。

さらなる死人と絡むのは危険な感じがした（前夜マルセイユで殺した人物、さっき撮影されたシーンで「事故」で死んだ人物、そしてコンスタンティンはまだそれを問題視するかもしれない）。逃げ出したいという誘惑があった：でも、警察の召喚状を持った映画監督に高く評価されているようだった。彼はどんな町や国でも警察と働くのに慣れていた。監督はこれが日常的な問題と感じているようだったし、サンダリオティスでは死がもっと日常的なのかもしれない。

彼らは速い馬車で行った。サンダリオティスの基準でも貧しい通りにある貧しい建物にすぐ着いた。入ると、警察がすべてを仕切っていた。二階の部屋で、格好良い男がテーブルに一人で座っていた（しかし、向かいにディナーのセッティングがあり、誰かと食事をしていた）。その男は銃で撃たれたか、何らかの打撲と出血の器具で殺されていた。コンスタンティンは、それがアンジェルか溶ける弾丸のようなものだと推測した。男の体内からは弾丸が見つからない可能性が高いし、最近の殺人ではそれが一般的になりつつあった。

男は本当にコンスタンティン・キッシュに似ていた。ありえないほど似ていた。コンスタンティンは、みんな自分が何か言うのを待っていると感じたが、何を言える？

名前に値しないほど微かな臭いがあった。行方不明のディナーの場所にそれがまとわりついていた。このまとわりつくものがどの感覚に訴えるか確信できなかった。視覚かもしれない。臭いというより、軽い霧やミストだった。

コンスタンティンは、サンダリオティスが何やら地球の並行世界で、この死んだ男が自分と並行な人物、つまり自分自身だと感じた。死と自分の一部が失われた感覚で身がすく

む思いだった。でも、ここで残った自分を守らなければならなかった。

「指紋でこいつをコンスタンティン・キッシュと同定した」と警察の一人がコンスタンティンに言った。「彼の評判は知ってる。世界最高の探偵だ」

「**指紋**でコンスタンティン・キッシュと特定した、だって？」とコンスタンティンは驚きを隠さず尋ねた。

「はい、シャテーニェレイさん」と警官がコンスタンティンに言った。「指紋で。世界インターポールがすぐ情報をくれた。君たちは全く同じ外見なのに、姓が違う？ 完全な兄弟や双子じゃないってこと？」

「いや、兄弟じゃない。彼は私の甥なんだ、年齢は同じだけど。彼がどんな名前を使ってたかははっきりしない。彼が－－つまり、彼がトラブルに巻き込まれてるとは知らなかった、ましてや殺されるようなトラブルとは」とコンスタンティン。

いや、死んだ男がコンスタンティンと全く同じに見えたのは本当じゃない。彼の顔はコンスタンティンよりわずかに、非常にわずかに彫りが浅かった。コンスタンティンは今、これを確信したが、他の誰も気づかなかった。皆、外見が同一だとコメントした。

なのに、監督は**一度**それに気づいていた。実際、顔の彫りが浅すぎて、光と影をうまく拾わないから何かしろとこの男に言っていたのだ。

でも、監督は今、その関係に気づき、両方と話したとわかっているだろうか？ 監督が何を理解してるかなんて誰にわかる？

「なぜそんなに緊張してるんです？」と警官の一人がコンスタンティンに尋ねた。「今日、こんな緊張した男は見たことない。フランス人は皆、君みたいに緊張するのかい？」

「信じてくれよ、ぼくらはめちゃくちゃ早く、めちゃくちゃ緊張する民族なんだ」とコンスタンティン。「でも、ほんと、話すことはあまりない」そして、コンスタンティンはその警官に付いてくるよう合図し、少し離れて話し、戻ってきた。

「彼はここに君と滞在していたのか？」と警官がコンスタンティンと戻ってきて尋ねた。

「いや、何週間も連絡取ってませんでした。でも、いつも親しい友人だった。実際、彼はいつも私の部屋のドアの鍵を持ってたんです」とコンスタンティン。

コンスタンティンは、男がそこにいて、客とディナーをするほどくつろいでいた理由を説明するために、その一言を投げ込む必要があると感じた。でも今になって、別の方法を試せばよかった、これが自分の部屋じゃない、彼について何も知らないと言えばよかったと思った。でも、警官が尋ねたとき、すべて吹き飛んだ：

「部屋のドアの鍵って**何**？」

その時、コンスタンティンはサンダリオティスで見たすべての建物のドアのどこが少し違っていたのか、やっと気づいた。鍵穴や錠がなく、普通に施錠できないのだ。さて、鍵のない国だと気づかず、足を突っ込んでしまったことをどう説明する？ でも、警官はドアの鍵とは何かという質問を追及しなかった。

「しばらく出て行ってください、シャテーニェレイさん」と警官が言った。

「彼らがぼくをそう呼ぶなら、受け入れるか」とコンスタンティンは思った。「特に悪い名前でもないし、きっとあの可哀想な死者の名前だ。そもそもこいつら、どんな警官だ？ ここがぼくの部屋じゃないことを示すものが一ダースはあるじゃないか、ぼくだってここが自分の部屋だなんて言ってないが。ここがあの死者の部屋で、彼がとてもくつろいでいたことを示すしるしなら一ダースある。あ、そしてもぅ一つある。指紋だ。それだと彼がぼくだと示してる。今、ぼくは誰の指紋をまとってるんだろうか」

「しばらく出て行ってください」と警官が、うわの空で話を聞いていないらしきコンスタンティンに向かって繰り返した。「あなたの部屋を細かく調べたい、ここにいられると邪魔です。出てって。ワインでも飲んで。一時間以内には戻らないで、二時間空けてくれた方がいい」

はい、行方不明の食事相手が座った場所にはとても微かな臭い、非常に非常に微かなラベンダーやライラックの霧やミストが、視覚の閾値にあった。ライラックの霧にいつも包まれてるのは誰だ？

「うん、二時間の方がいい」とコンスタンティンが言った。彼は面倒な状況から猶予を得たと感じた。すべてトリッキーだったが、コンスタンティンは先見性と創造性、尊厳で対処する必要があった。「もちろん、いつでも連絡は取れるようにしますよ。今は、悲しみと共に一人にさせてほしい」

「悲しみって何のこと？」と警官が尋ねた。「おお、甥っ子さんのことか。でも、二親等の親族だろうに。悲しみは一親等だけに感じるものだ。それともフランス風？」

コンスタンティンは、自分の顔よりわずかに彫りが浅いが、それ以外はかなり似ている死者の部屋を出た。彼は出て、ジョー・プリマヴェーラのワイン＝ファインに来た。尾行されてる気がして、そこに入ったのだ。そこで飲み、考えを整理しようと思った。でも、映画監督も入ってきた（尾行していたのは彼だった）ので、考えを少し隠すことになった。監督からもっと話があるだろう。監督は真鍮の響きの声で話すのが好きだった。

午後 2 時 18 分過ぎだった。

「『十三面の部屋』があまりにも本物すぎて問題になる可能性がある」と監督がワインを注文後に言った。「この街に本当に十三面の部屋が、『テルトゥリアンの地下牢』ときわめてよく似た名前の地下牢にあると思う。サンダリオティスではそこらじゅうで起こるんだが、私が頭の中だけで作ったと思ったものが、まさに地面に潜んで待ってるんだ、この国の根にある部分に。テルトゥリアンの地下牢は、短期リースで借りものだが、かつてアミューズメント・セントラル、街中の小さな遊園地の一部だった。子供を喜ばせるおもちゃの地下牢が本物の起源を持つかどうか、ふりかえって考えたみたんだ。映画の作業の終わり近くにきたいま、私はその本物の起源に悩まされ、それがここにあると知ってる。

実際、サンダリオティス人は世界で最も残酷でない人々だ。それだからこそ、彼らの隠された地下牢や拷問室の話にはぞっとするタッチが加わってる。地下牢が洞窟のような自然なもので、作られたものではなく、拷問も地球の雑草以上に**人々と**関係のない自然な反応のようだ。サンダリオティスでは、どんなに創造的な概念を思いついても、この国の黒い土から何かが飛び出してきて、私のコンセプトがずっとここに埋もれて待ってたことがわかる。

どの民族も、最良の民族でも、魂は裂けていて、意識は上、無意識は下にある。明るい生き物の庭と、その下の悪魔の庭がある。上の明るい大邸宅と、下の暗い洞窟。これは普通のことだ。しかし、クレタのような古い海洋王国と同様、サンダリオティスは地下より海底に国家の無意識がある。無意識は地底洞窟より海底洞窟に住む。だから、元の地下牢は海底のものだったと思う。テルトゥリアンの地下牢、遊園地のものでは、めったに点かない照明がつくと、壁が海の植物や魚、深さを表すように塗られてるのが見える。

それから、サンダリオティスの溺死の婉曲表現（サンダリオティス人にとってそれは婉曲表現が必要なものらしい）がある。『水の縄で吊るされる』というんだ。元の地下牢では、時計で水の栓が開き、壁に串刺された男たちが溺れたんだと思うんだ」

「あなたはサンダリオティスの市民じゃないの？」とコンスタンティンが尋ねた。

「もちろん違う。サンダリオティスの映画監督なんて聞いたことあるかね？　私はイタリアから来た。サンダリオティスのことは全然理解できないことがいろいろある」

「ぼくも、わからないことがやたらにたくさんあるんだ」とコンスタンティン。

「おお、でも君はフランス人だろ。私は違う。理解できるはずだ。だから、『十三面の部屋』みたいな映画を作る時、地方政治に首を突っ込んだり、そういうものへの謎めかした参照をするつもりはないんだ。彼らの政治がどこにあるか、そもそも私が政治と呼ぶものがあるのかどうかも知らない。

私がするのは、歴史や民間伝承を重く下敷きにした心理スリラーを作り、演出すること。私はこれがとても得意なんだ。できるだけ安く作る。どれだけ安あがりにできるかが、私のビジネス手腕の尺度だ。だからサンダリオティスに来た。場面はすでにここにあり、俳優も準備万端。サンダリオティスの風景、町も田舎も、比類ない。人々はみな自然な俳優だ。不自然やぎこちない動きや態度はできない。そして鮮やか、それが主なこと。彼らが何もせず、歩いたり、話したり、くつろいだりするのを永遠に見ていられる。他の世界もそうだと気づいた。彼らを見ると目が飛び出る。すべてにドラマを投影する。なぜかはわからない、分析すると彼らの行動はかなり平凡なのに。でも、彼らは劇的なジェスチャーの人々、美しい人々だ。気づいた？ おお、素晴らしい。

そして賢い。台詞をすぐ覚え、アドリブもできる。彼らの言語は、どこでも心理スリラーの言語になったが、だれもそれが支配するようになったのを気がついていない。サンダリオティスなんて国はないと否定する人々が、この国の言語を理解し、話して、自分の言語だと思う。まさにペンテコステ的だ。イタリア人、ポルトガル人、スペイン人、ラディーノ人、みんなこれに陥るし、フランス人でさえもそうだ。北の非ロマンス系の野蛮人でさえ、簡単に理解する、映画に群がり、難しさを感じない。サンダリオティスのために吹き替えが必要と思うか？ 日本人さえ吹き替え不要と言う。彼らも、他のみんなも、私が書く最も単純な台詞にこめられた、多重な抑揚と意味を理解する。

でも、もちろん舌だけでなく、媒体も重要だ。本当に良い心理スリラー、私のようなものは、動きとインパクトで理解される（言葉も含めて）。これは催眠的、テレパシー的なものだ。心理スリラーは言語を教える手段としてよく推奨する。

「サンダリオティスではすべてが風光明媚、特に人々。町や田舎は信じられないほど良い。『額縁を外したのはだれだ？』とつい思ってしまうんだよ、ここのすべての場面は実に適切な巨大な劇場のシーンか、少なくとも絵画の傑作のようだ。プロットや展開はここの黒い土や色の建物に根ざしてる。最もペンキで彩色したように見える建物も、実は天然の色の岩だと知ってるか？ この半島は狂った色箱でできてる。素晴らしい。すべてに仕掛け、装置、構造がある。でも、場所自体、国や都市、人々そのもの、どう捉える？ すべての原型の庭、創造性の庭だ」

「監督、あなただってそうですよ。地上では真鍮の陽光と真鍮のおしゃべり、すべてに芸術的な鑑賞。そして地下や海底では、グロテスクで魚のような残酷さ。なぜ『十三面の部屋』の場面で故意に人を殺したんですか？」とコンスタンティンは熱く言った。

「そんなことしてない」と監督が言った。「私がそんな獣だと思うのか？　あるいはそんな悪魔魚だと思うのか？ ただ確率を作用させただけ。スリラーではとても危険な場面をやるし、統計的にはもっとあってしかるべきほどの死が起きてないんだ」

「誰がその統計を決め、評価するんですか？」とコンスタンティンが尋ねた。

「私だ」と監督が言った。「だから、確率に勝ってるから、ある程度は自由に動ける。我々は『事故』を借りるんだ。事故は起こる、逃れられない。事故は嫌いだが、事故の劇的価値は嫌いじゃない。だが欲しいときにそこにあるべきだ。事故が起こるのが遅すぎると、周りに緊張を生む。だから、我々にとって便利なときに、現在進行中のスリラーで事故を起こす。不便なときに事故に飛びかかられるのを待ったりしないんだ」

「あなたは事故から偶然の事故性を奪う。人を殺し、統計的操作でそれを正当化する。そして、今年の最も効果的な場面のグランプリを獲るかもしれない。ぼくを殺すつもりだっただろう、効果的な場面のために。気が変わって別の者に決めたんだ」とコンスタンティン。

「いやいや、私は別の者に決めたりしていない」と監督が言った。「私が制御できない別の生き物が、君でなく別の者に決めたんだよ。不格好な鳥に非難を押し付けられるというのに、私がそれについての責めを負うべきなのか？ 君に事故が起こるはずだった、うん。そこへあの『事故』という名の不格好な鳥（サンダリオティスで不格好なんてある？）がきて、その鳥が君の上を飛んだが、首に止まらなかった。代わりに別の者に止まり、その別の者が事故で死んだ。でも、誰かを『殺す』なんて話は出たことがなかった。わからないのか、フランス人？ サンダリオティス人なら理解するぞ」

コンスタンティンははっきり見えない人に手で合図し、その人は彼の指示を実行しに行ったらしい。コンスタンティンはサンダリオティスでほとんど知り合いがいなかったから、これはとても奇妙だった。

「サンダリオティスの人がそんな理由づけや正当化を理解するとは思いませんがねえ。かれらは美しいほど直接的だから」とコンスタンティン。

「いつもじゃないよ」と監督が言った。「彼らの狡猾な側を見ると、美しいまでに狡猾じゃないか。純粋な側を見ると、完全に純朴だ。そういう人は表面的には明るいが、たまたま『すべてを留保』する大きな地下室を持っているんだ。こちらが欲しいものを好きに選んでも、彼らはそれを持ってる。私が選ぶのは狡猾さなんだ。おお、ここに来てから傾いた者になっちまった！　欲しいものはこの土から簡単に引き出せる。土はいつも湿り、地下で灌漑されてる。この人々は本当はどういう人？ わからない。みんなかれらの中に、自分の探していたものを見つけるんだ。彼らは鏡だ。彼らを見ようとすれば、どうしても自分が邪魔になってしまう。彼らが完全に無垢なのか、世界で最も狡猾か、私には決められないよ」

「どちらかでなきゃいけないんですか？」とコンスタンティンが尋ねた。「あなたのような狡猾な人は絶対を求めたりしないと思う。彼らが絶対に無垢か、絶対に狡猾でなきゃいけませんか？」

「うん、どっちかでなきゃいけない」と監督が言った。「私の目的、創造的心理スリラーでは、絶対がなきゃいけないんだ。たぶん両方の絶対が同時に、でも混ざらずに必要なんだ。私は絶対で働く狡猾な男。私の心とスリラーはどちらもそれでできてる。そういう場合、偽物か本物かを教えてくれる専門家が必要だ。どっちを選ぶとは限らないけど、どっちか知りたい」

「その専門家なら知ってる。でも、君が偽物だって言うのに専門家はいらない」とコンスタンティン。

「待て、待て、待て！」と監督が手を上げて叫んだ。「君がいま、どんなフランスの魚になったか知らないけど、突然君は私に危害を加える力を得たな。それを感じる。待ってく

れ、なぜそれをしてはいけないか説明させてくれ。私の創造を妨げたら、世界から何が失われるか説明させてくれ」

「じゃ、早く説明しなさい。君の看守の足音がもうドアに聞こえるぞ」とコンスタンティン。

「私が提供するのは素晴らしいメロドラマだ。世界の誰よりも、より充実し、ジューシーで、人気のあるメロドラマを提供する。誰よりも強い感情を与え、人々は強い感情を愛する。間接的に、直接的に経験する。

人々は自分が勤勉で虐げられ、自分が必要とするものやニーズはきわめて少ないのだという神話を抱いているんだ。実際は、人々はそれほど勤勉じゃないし、虐げられてもいない。だいたいはかなり楽な時間を過ごしてる。でも、彼らとしての必要性やニーズが少ないというのは正しい。だがその少ないものは減らせない。壊せない不動の最低ラインがある。それに応えるのが私だ。誰かがいつもそれに応えなきゃ、物事は進まない。

人々は自分が重要だと感じるニーズがあり、それは彼らの**実際の**重要性の逆二乗の力を持つんだ。虐げる相手、優越感を感じる相手、憎む相手が必要だ。そしてこの中で最も重要なのは憎むものだ」

「あなたはイタリア人じゃない」とコンスタンティンが話題を変えるように言った。

「もう何年かにわたりイタリアに住んでるよ、うん」と監督が主張した。「仕事や遊びで他の場所にいないなら、イタリアにいることが覆い。さて旦那、私はメロドラマ、心理スリラー、スマッシャーで、人々が持たねばならないこの最小限のものを提供する。それがないと、人々は不機嫌になり、爆発するんだ。

例えば、十三面の部屋の壁で十三人が死の苦悶にあるのを見せることで、人々は自分を重要だと感じさせるものを与えるんだ。神の目、部屋の天井のパノラマカメラを通して彼らは神を演じるんだ。虐げるもの、優越感を感じるもの、憎むものが必要なんだ。湿った壁に磔になり、死にながら脳の中身を支離滅裂に語るうごめく生き物によってこれらが満たされる。私のドラマはとても癒やすんだ。この美しいスリラーの流れが中断されたら、世界の人々に何が起こるか保証できないぞ。人々はすでに緊張し、ピクピクしてる。何人かが爆発すれば、世界も一緒だ。私が提供するのは冒険的な安全弁だ」

「確かに小さな世界の救世主だ。でも、あなたは本物じゃない。偽物だ。そして今、あなたを偽造者、殺人者、すべての法を破る者として扱う人々がここにいる」

「おお、フランス人、君は人々が望むものを見せるための数回の『事故』で私を潰すのか！」と監督が嘆いた。「労働者は報酬に値し、創造者は創造の道具に値する。一人が場面で死ぬのは適切だ。彼は百人を代表する存在であり、我々はそれで命を救うんだ。君は私の創造と世界からすべての喜びを奪う。世界からすべての活力と自発性を奪ってしまう」

そこへ警察が入ってきて監督を連行したが、彼は全く気落ちしなかった。彼はいつも陽気な男だった。

コンスタンティンはどうやってその小さな仕事を仕掛けた？ おお、世界最高の探偵であることで。それだけで十分だ。そして世界インターポールの一部であること。それも重要で、世界インターポールの一部の人に合図を与えればいい。最近では、どこでもすべての警察に世界インターポールの人がいる。

「十三面の部屋が本当は何かわかるよね？」と監督が警察に連れ去られた後、ワイン＝ファインの主人ジョー・プリマヴェーラがコンスタンティンに尋ねた。「監督がその名前の映画について話すのを耳にしたもんでね」

「いや、そういうレベルでの意味は知らない」とコンスタンティンが告白した。「今日まで十三面の部屋なんて聞いたことなかった」

「それはサンダリオティスの国家叙事詩なんだ」とワインの男が言った。「我々のすべてのドラマ、詩、音楽、物語、系譜、歴史を含む。そして監督の映画のバージョンが正確か聞こうとしてるよな？

それは地球の硬い泥の欠片が地球の一バージョンだと言える程度には正確だ。監督のバージョンは叙事詩の 6,227,020,800 種類の順列の 1 つの描写の一部だ。叙事詩にはそれだけの場面がある。十三の人物が十三の位置や役割での同時の組み合わせだ」

「十三の人物はキリストと使徒なのか？」とコンスタンティンが尋ねた。

「そうであることはきわめて多いな。だが聖なる人物は、時には父の役もするし、時には聖霊の役もするし、もっと希薄な異端で準拠される『人物』の役割も取り、十三の位置や役割を順に演じる。他の十二人がそれぞれの組み合わせで互いに演じる。実際、各人が各役割を約五億回演じ、他の全員がすべての可能な変化を鳴らす。すべての人物に、単なる神の人物だけでなく、複数の深さがある。

「知っての通り、本当の黄道帯、サンダリオティスの黄道帯は十三の単位や星座、十三の位置がある。それが真の聖なる黄道帯なんだ。他の、偽の黄道帯は聖なる人物を除いているので、不信心者や悪魔の黄道帯と呼ばれ、キリスト教徒はそれを使ったりそれに基づいて計算したりできない。偽の黄道帯はルシファーが天から追放されたのと同じ時に、同じ理由で追放された：不完全だったからだ。知っての通り、ルシファーは最初サンダリオティスに落ち、その形は彼のサンダルと言われる。それから底を通ってそのまま落ちた。彼が落ちたクレーターはまだ我々の土地にあり、そこから奈落を覗けるんだ」

「国家叙事詩の完全な配置では、死のスピーチや磔がたくさんありそうだな」とコンスタンティン。

「いやいや、それはほんの一部だよ」とジョー・プリマヴェーラが言った。「すべての場面が死や悲しい場面じゃない。ほとんどの場面は華やかだ。死の場面や磔はわずかだ。木は磔以外にも多くの用途がある。叙事詩の最も古い名前、知らないかもしれないが、『十三の木の部屋』だ。」

「木は他に何に使うんだ？」とコンスタンティンが尋ねた。

「木は登ったり、鳥を捕ったり、ナッツや果物、蜂蜜、狩猟動物を取ったりするのに使う。王座からのように木から統治し、監視塔からのように見張り、舞台やフォーラムのように木から演説する。木材を切り、松脂やシロップを採取、船のマストに整え、屋根の梁に裂く。木の精霊と交流する。宇宙飛行で木から上昇する。こうした用途はすべて叙事詩に書かれている。木に上る理由は磔以外にもたくさんあるんだ」

「偽の黄道帯の主たちは、地球、サンダリオティスに投げ落とされたとき、どうなったんだ？」

「まだみんなここにいる。それも叙事詩に書いてある。巨大なカニ、雄牛、雄羊、水を注ぐ者、巨大な双子は、我々の土地の生きる驚異で、丘でまだ見かける」

「あの監督、あの人はイタリア人じゃないな」

「おや、彼はここサンダリオティスで生まれたんだよ、当人がなんて言おうとも。だが今は浮浪の世界の市民で、今はイタリア人、次はギリシャ人、または日本人、こんどはエジプト人、さらにスペイン人、そしてフランス人になる。彼は日和見主義者で、刑務所ですら儲ける。一時間以上は入ってないだろう」

「あの監督がぼくの『甥』を殺したと思う？」

「いや、でも彼は自分がそれを実行したと信じてるかもしれない。本当はイルカがやったんだ。君の『甥』は君と同じく物事に好奇心旺盛だった。詳細はまだ誰も知らない。君の『甥』は最初、世界最高の探偵だった。今、彼は死に、君が世界最高の探偵になった、君は前から自分が世界最高の探偵だと思ってたけどな。世界最高の探偵なんだから、これを解明できるだろう」

その時、三人の男がワイン＝ファインに入ってきた。

第 7 章

ジョー・プリマヴェーラのワイン＝ファインに入ってきた他の三人の男は、イタリアのサレルノ出身の偽造名人アンジェロ・ディシアン、サンダリオティスのシヴィタ・ド・ノルド出身の船主で輸出入業者のトロイ・アイランダー、そしてサンダリオティスのイクヌーザ市に本部を置く鉱山経営者のヒュー・ナジティンガロだった。この三人の到着者は、店の主人ジョー・プリマヴェーラと世界最高の探偵コンスタンティン・キッシュとすぐに気さくな仲間となった。

午後 3 時 5 分、五人がテーブルに着き、猪肉とカタツムリ、大麦パン、美味しい赤ワインを囲んだ。ジョー・プリマヴェーラのワイン＝ファインはサンダリオティス、いや世界一の場所で、彼と四人の客はその素晴らしい場所でも優れたテーブルを構成した。

「おお、空気は才気でパチパチしてる！」とジョーが言ったが、彼はよくそう言って人を励ました。

「情報が欲しい」とコンスタンティンが率直に皆に言った。「賢い人だけがくれる情報が欲しい、今、賢い仲間の中にいる。皆に聞きたい質問は『自分の顔の鼻はどうなってる？』だ。これに明確な答えが得られないと、今日一日が台無しだ」

「平凡でない顔の平凡な鼻」とヒュー・ナジティンガロが言った。「いつも問題だ。自分の顔の鼻は簡単に見えない。鼻は**見えないように**そこに置かれたと思う。手で触っても明確なイメージは得られない。『顔の鼻ほど明らか』という古い言葉は『全然明らかじゃない』って意味だ。どの鼻の話、コンスタンティン・キッシュ？」

「サンダリオティスの話だ、紳士諸君」とコンスタンティンが言った。「ぼくの任務は、サンダリオティスで何が起こってるかを調べることだ。プリマヴェーラ、アイランダー、ナジティンガロ、君たちはサンダリオティスの市民で、人生を過ごしたこの場所、鼻より近いこの場所について何か知ってるはずだ。どこにあった？ なぜ今ここにある？ 他の土地とどう違う？ 本物か、作り物か？」

「サンダリオティスが今日、全世界にはっきり目に見えるようになったのは、確かに何かを示してると思う」とトロイ・アイランダーが言った。「でも、それが何を示すかはちょっとわからんねえ。まるで無数の人が『紫が見える！ 紫が見える！』と叫び始めたようなもんだ。いつも紫が見える人にとって、そんな発表で世界が大して震撼するわけじゃない。いつも、ほぼいつもサンダリオティスが見える我々には、一部の外国人が奇妙な目の病気から回復した以外、何も起こってない。この過剰な注目に腹を立てるかもしれない。我々の顔の我々の鼻だ、ひねられるのは嫌だ」

「でも、多くの外国人が普通、あなたの国を見られないことに困惑しなかった？」とコンスタンティン。

「私としては」とアイランダーが言った。「多くの外国人は、明らかなものを見られない

という小さな失敗より、もっと急な方法で私を困惑させる。多くの外国人は明らかに頭がおかしい」

「でも、あなたたちサンダリオティス人はいつもサンダリオティスが見えるの？」とコンスタンティンが食い下がった。「それが重要だ。はっきり思い出して。皆、本当にいつもサンダリオティスが見える？」

「いや、見えない」とナジティンガロが認めた。「ほとんどの時は見えるけど、いつもじゃない。子供の頃は、それが気になったかもしれないが、どうだったかな。子供の頃は、みんな自分の国を見るときにそうしたギャップがあったかもしれないな、それを補うやり方を学ぶ前はね。サンダリオティスがいつも、あるいはほぼいつも見えるのは、後から学習した習慣かもしれない。私はそうだと思う。田舎の私の鉱山でのほうが、都市より土地が見えないことが多い。うちの実に多くの労働者が私よりさらに国がよく見えないことがわかったよ。鉱山で毎日働いてても見つけられない日がある。『今日、ないよ。見つけられない。土地があれば働くのに』と彼らは言う。そしてそういう困難を報告するときには、彼らはサボろうとしてるんじゃない。

最も影響されやすい者が『今朝は、土地が**ある**』と言うのを聞いても、私にはそれは『今日は、霧だ』や『雪だ』と同じ程度のことでしかない。私は自分の場所の外で起こることにあまり注意しない。『土地がない』時に鉱山のいくつかが採掘できないなら、それは許容される。例えば、年に 180 日しか採掘できない鉱山があるんだ。うちの労働者の大半にとって、それが**そこに**あるのがその日数だけだからなんだ」

「私も自分の場所の外で起こることにあまり注意しない」とジョー・プリマヴェーラが言った。「外の怠け者ベンチと歩道に置く 2 つのテーブル以外ね。でも、あまりに『霧』が濃くて通りの向こうも見られない日もある。でも霧には見えないんだ。単に通りの向こう側がないように思えるんだ。

そして、ドアから一歩出たらヒューン！ すぐそこ、ドアから 1 メートルで道が終わってる日もある。ガードレールもない！ 明日、絶対に設置するよ、次に安全のために。目の前と眼下に、雲が下に漂い、800 メートルほど下に開けた海がある。店の真下、10 メートル以下で、うちの店が建ってる土地が終わってるんだ。私は建物と一緒に空に浮かぶ小さな岩の塊の上にいる、三つか四つの他の建物と一緒に。でも、その奇妙な状態は三十分以上は続かない。不安ではあるがね」

「『ワイン商が買うものは/彼らが売るものの半分も貴重ではないかも』[*1]これは引用だけどね。ジョー、売るより自分で飲む量のほうが多い日はありますか？」とコンスタンティン。

「うん、たまにはね。でも、そんなのにはあまり注意しないんだよ、コンスタンティン。君も自分の顔の鼻にはあまり注意しないだろう、霧っぽく思える日でも」

「君と世界インターポールのためにやってる仕事の予備報告をしたほうがいいな、キッシュ」と偽造名人アンジェロ・ディシアンが言った。「私の簡単な調査によれば、サンダリオティスは偽物じゃない。本物だ、徹底してね。しかもその範囲はかなり広いこともあるが、急に中断するんだ。でも、頻繁に突然終わってばかりいるような偽の製作物じゃない。驚くほど本物の製作物だ。この謎を解くには四年契約が必要だと思う。一日だけでこんな大規模な事業を終えるのは難しい」

[*1] 訳注：オマル・ハイヤームの引用だそうです。

「サンダリオティスの記録で、君が芸術作品の偽造名人としてリストされてるのは見つけかったの？」とコンスタンティン。

「ああもちろん、彼らは私をそこに載せていたよ。良い評価もつけてくれた。私についての事実のいくつかは間違ってるけど、それは予想通り。でもコンスタンティン、君も外国人として気づくべきサンダリオティスの驚異に気がついたんだ。ここにいるサンダリオティスの原住民たちには、それが驚異として目立つものだとは思わないだろうが、まちがいなく驚異なんだ。サンダリオティスには繰り返しが全くない。本当にそう！ 陳腐で意識にのぼらないほどレベルが低いからサンダリオティスが見えないというのの正反対なんだ。サンダリオティスがここにある時、すべての細部に新鮮さがある。

サンダリオティス全体で典型的な小石は一つしかない。サンダルのてっぺんの北に流れる小川から取られ、今はバスティアのテンソル地質学博物館にある。サンダリオティスの何十億もの小石の中で、他の国の平凡な小石に似てるのはそれだけで、博物館に入るほど珍しいとされた。サンダリオティス全体で標準的な葉は一枚だけ。グリーンベイの木からのもので、サンヴィートの樹木学研究所にある。おお、いろんな小さな石がある、どれもそれぞれ違う種類。でも、典型的な小石は一つだけ。植物の本の『ページ』や『葉』に似た他の植物の呼吸器官もある。でも、典型的な葉は一つだけ、あまりに平板でつまらなすぎるので、研究所に展示されるほどだ。他の葉は、本のページのようで、形、色、質感、その生きる様子によって全く異なるメッセージが書かれてる。

同じになるはずのものが完全に同じじゃない。他にもある。今日、君が北町に置き去りにした、ご自慢の自動車だがね、あの厳密なモデルはあの一台しかない。ラインから同じものが二つ出ると、ラインが反乱する。故障し、手作業が必要になる。ラインの修理がされると、変更が組み込まれる。ここでは複製がない。ビールの瓶二つは同じじゃない。ほぼ同じ名前、瓶にほぼ同じ綴り、ほぼ同じ味かもしれない。でも、全く同じものは二つとない。市民に聞いても気づいてない。彼らは私が何を言っているのかわからない。同じケースからビール瓶を二本示して、なぜ違うか聞くと、『おお、片方は綴りが間違ってるんだね？』とやっと気づく。『もう片方も間違ってるけど、ちょっと違う間違いだ。誰かが不注意だったんだろう』

こんなことを軽く、不可思議に見過ごすなんて、だれかが不注意になってる。だが私のイタリアでも、私が気づかない異常があり、仮想的な外人にはそれが叫び出したいほどのものなのかもしれない。そしてそいつがそれを指摘してくれても、なぜそんな藁の山からコウノトリの巣を作りたがるのかと私が困惑するかもしれない。

でも、サンダリオティスは、すべての細部で何か新しいものを出せないなら、何も出さないようにできてる。そしてそれこそがギャップなんだ。うんわかってる、あまり良い理論じゃないな。もっとマシな理論をだれか出せないか？」

店主ジョー・プリマヴェーラが言った。「今日、サンダリオティスが全世界にはっきり目に見えるようになって、サンダリオティス自身の人々だけに見える状態ではなくなったというのは（それだって今日ほど強く起こるのは一世紀に二、三回だけだ）、サンダリオティスか世界が終わることを示している可能性が十分にあるすかもしれない。それも一世紀に二、三回しか起こらない。だが終わるのはサンダリオティスじゃないと思うし、それについて考える必要がある。これはホロコーストの日かもしれない。なぜ我々の一人だけが準備し、巡礼の杖を手に、腰に帯を締めてる？」

「おお、世界が終わったら、サンダリオティスは生き残れる？」とコンスタンティンが

尋ねた。

プリマヴェーラは言った。「ああ、そう思うよ。すべての不一致の答えは、サンダリオティスが世界にそれほど強く結びついてないということかもしれない。サンダリオティスの目的の一つは、世界が深淵の縁から滑り落ちても生き残ることなんだと思う。世界がぶら下がっているロープを支え、滑りおちるのを止め、終わりを止めることだ。それができなければ、自分自身が新しい世界になることだ。だってそこにはすでに、世界のすべてのインスタンスが何らかの形で存在しているからね。いまの最初のケース、世界が滑り落ちるのを止めるというのはかなり頻繁に起きているんだが、世界はそれにまるで感謝してくれないんだ」

「でも、準備し、帯を締めてるのは誰？」とコンスタンティンが尋ねた。

「君だ。腰にパラシュートを詰めてる。それが巡礼者となるということ、準備し、帯を締めるってことだ」とジョー・プリマヴェーラ。

「誰かにそれについて聞こうと思ってたんだ。なぜぼくはこんなものを着けてる？ 誰か知ってますか？」とコンスタンティン。

「世界最高の探偵なのに、今日一日パラシュートを着けてる理由がわからない？」とトロイ・アイランダーが尋ねた。

「うん、全然わからない。外そうと思うたびに、フェティッシュが叫んで**触るな**と警告する。ケリのつかない多くの不始末の一つ、行き場不明のロープの端の一つだ。誰かが『いや、そのロープに端は十一個もない。二つだけだ。結び目がそう見せるだけだ』と言ってるようだ。ケリのついてない不始末を一覧にして、どこか不始末か調べなきゃ。」

トロイ・アイランダーが言った。「そういう不始末を一つ挙げてくれよ、コンスタンティン。それがあれば結び目を特定し、他の不始末の手がかりになるかもしれない。他人の不始末の処理方法はいつも簡単にわかるもんだ」

「空の 450 キロの物体」とコンスタンティンが言った。「あれは物理的な物体か、せん妄のどっちかだ。せん妄だとすれば、敏感で洗練された機器に記録されるようなせん妄ってことになる。頭上の 450 キロの物体、高度約 1600 キロ。そこになければなぜ計器に検出される？ **本当に** そこにあるなら、なぜ犬の天国にかけて、そいつは目に見えない？ くそくらえの犬爆弾島だ！ おお、そこだ。見えるぞってな具合！」

トロイ・アイランダーが言った。「うん、確かに私たちは見えるよ。ここ下のサンダリオティスの形を大まかに反映し、それに大まかに対応してる。約 15 度の角度をなして伸びている。全長 450 キロって言ったっけ、コンスタンティン？ おお、すると約 1600 キロの高さになるか。今日は本当に、かなりはっきり明瞭じゃないか？ でも、何を疑問に思ってる？」

「くそくらえ、アイランダー！ なぜ他の誰も気づかないか疑問だった」

「でも、**私は**気づいてる。君がそれに注目しろと言ってからずっと見ていたぞ。はっきり明瞭に見える、と言った。空の島について他に何か言うべきことがあるか？ おお、雲が動いてきてまたそれを隠そうとしてる。誰が雲を動かしてるんだろう？ 君が怒りと苛立ちで突破しなかったら、誰も見れなかったかもしれない」

「あれが爆弾だったらどうする？」とコンスタンティンが尋ねた。

「なら、大きい爆弾だな、コンスタンティン。爆発したら地球に本当のダメージを与える」とアイランダー。

「地球を破壊するだろう。それよりつまらない仕事なら、あんな大きな爆弾はいらない。

でも、爆発しないと思う。滅多にしない。

これに類するような話はある、知ってるだろうに。この島自体も、何世紀も空の不規則で不合理な空の物体として気づかれてきた。」

「やっとマシになってきたね、トロイ・アイランダー。類するようなもののことを教えてくれ、そしてこのもの自体についても」とコンスタンティンが頼んだ。

「なぜこれがもっと気づかれなかったかという話だがね、コンスタンティン、450 キロの物体は、高度 1600 キロの高さにある場合でも、あまり目立たないんだ。明るい空に一瞬見失うと、焦点を合わせるためにまた探さなきゃならない。雲で輪郭が途切れると、長い雲に見える。でも、こうした物体（全長 450 キロというのはよくある推定だ）は、**実際に**よく目撃されてるんだ。イカレポンチがよく発見する。イカレポンチどもは他の人より風変わりなものを見るからな。そういうのはイカレポンチ現象として分類される、非イカレポンチの分類がないせいだ。でも、本当に上空のそこにあるのはほぼ疑いがない。かなりたくさんあるんだ。原初的なぶっ飛んだホラ話、約 1600 キロまでぶっ飛んでる。いくつかは地元に住み、名前がある。他は永遠の漂流者だ。

アメリカのテキサス州カレッジステーションで、飲酒紳士グループが定期的に観測し、記録する『ホーガンのボブスレー』というものがある。彼らの気象観測は正確で検証されてる。この『空の島』についての彼らの理屈は、ええと、ぶっ飛んでて、1600 キロよりずっと遠いらしいな。うん、そこに何か、すぐ『そこ』に、ボブスレー（北アメリカで使われた大きな連結そり）に似たものがあり、ホーガンという人がそれを発見したんだ。

これらの現象はすべてフォーティアン現象だろう[*2]。

ドイツの古いハイデルベルクの上空に『シュニッツガーの蒸気船』、**ダンプフブート・シュニッツガーズ**があり、何世代もの学生に愛されてきた。非常に高い倍率の望遠鏡で見ると、その蒸気船に乗っている人まで見えると言われる。古いハイデルベルクの学生のスタイルには非常に高い倍率が流行ってる。蒸気船の事実と気まぐれがどこで終わるか分からないが、かなりの事実がある。

ポーランドの上空にはパデレフスキーのイルカがある。かのコペルニクスも何度か目撃したが、説明できなかった。本当は、説明しようとしなかった。彼の手持ちのどんな理論にも合わなかったからだ。観測の邪魔になることが多かったので、消えてくれと祈った。でも、祈っても消えず、説明もできなかった。ポーランドの学生は今もイルカ信仰を守ってる。これらの現象がすべて『学生』につきまとうのは興味深いね、ポルターガイストが少し若い人に付くようなものだ。

そしてそういった現象百個、少なくとも五十個のうち、我々が今見ているものの話にやってきた。これはチボーの魚雷として知られる現象なんだ。ああ、午後の空でなんとも美しいじゃないか！ 雲がいまだにそれを隠そうとしてるのがわかるな」

「君たちにもあれが見えるというのは安心だ」とコンスタンティン。

「見えるに決まってるだろう、いったん指摘されたら」とトロイ・アイランダーが尋ねた。「我々はめくらか？ 魚雷は、他の現象と同じく、イクヌーザ大学の学生の信仰対象だ。なぜそれが特に気になるんだ、コンスタンティン？」

「頭上の魚雷が、サンダリオティスの出現と消失に何か関係してると思うからだ」とコ

[*2] 訳注：アメリカの暇な金持ち、チャールズ・フォートが科学におさまらない珍現象を並べたてたのにちなんで、超常現象のことをフォート主義的、フォーティアンと言う。

ンスタンティンが自信なさそうに言った。

トロイ・アイランダーが尋ねた。「なぜ？ ホーガンのボブスレーがテキサスのブラゾス郡の出現と消失に関係してるか？ シュニッツガーの蒸気船（シュニッツガーのソーセージとも呼ばれる）がドイツの出現と消失に関係してるかね？ パデレフスキのイルカがポーランドの出現と消失に関係してるとでも？（いや、この場合に限っては関係してるかもしれないな。ポーランドはこの何世紀にもわたり、何度となく消えたり現れたりしてるもんな)。世界最高の探偵よ、なんでもごたまぜにしすぎじゃないか？」

「地元の『空の島』、『チボーの魚雷』が反物質かもしれないと聞かされたぞ」とコンスタンティン。

「おお、確かに、確かに」とアイランダーが同意した。「そういうものすべてで、よくある仮説だよ、すべて反物質や反思考の飛び地だと言われるんだ」

「後者は消滅させなきゃ」とコンスタンティンが断言した。

「反思考は同量の正の思考で打ち消すしか消滅できない」と鉱山経営者のヒュー・ナジティンガロが言った。「世界にその空のビームを消滅させるほどの正の思考があるかどうか。あったとしても、もっと良い使い道がある」

「世界最高の探偵くん、気になってる『不始末』をいくつか教えてはもらえないか？」とジョー・プリマヴェーラが言った。「魚雷は始末におえない島ではあるが、不始末とは言えない。皆、君を助けたいんだよ。君は我々のような鋭い人の助けなしには、世界最高の探偵にはなれなかったと思う。不始末を挙げてごらん、こっちで始末できるかもしれない」

「世界で最も親しい友人としてあてにしていた友人二人。サラディンとレジーナ・マルカブ、浮浪の世界からきた美しいカップル。昨夜、ニースとモナコの間にある、彼らの場所で過ごした。繰り返すがぼくの親友二人なのに、実は昨夜以前に会った記憶がない、でも顔を見たら強烈な認識があった。今日、彼らはばらばらになりかけているようで、無責任に振る舞ってるけど、これについては一切気にしない。まるで二人は囮としてぼくの心に押しこまれて、以前の記憶や彼らへの好印象も押しこまれたようだ。ぼくが彼らに、耐えられないほどの愛情を持ってることは理解してくれ、でもそれはどこからきたんだろう？ その機嫌はどうあれ、とても楽しく輝く記憶なんだ。その記憶は昨夜や今日の事実より確実に良いものなんだ」

「あんたがイクヌーザでその輝くカップルと過ごした時は、かなり派手に活躍してくれたものな」とジョー・プリマヴェーラが言った。「ポカンという顔をしてるな。二ヶ月前の安手のグラビア誌にあの二人と登場したのを調べ直すと、記憶が蘇るかもしれないな。君たち三人はフランスとスペインの青い海岸でも派手に活躍した。さて、それが不始末その一とその二だ。お次は？」

「三人の『エージェント』が不始末三、四、五だ。今朝、シヴィタ・ド・ノルドでぼくを逮捕しようとしたエージェント、ジュリアン・モラヴィア、でもあれは道化じみた試みだったけどね。今日の午後、この町でぼくの四肢と意志を麻痺させようとしたエージェント、アメリア・ライラック、彼女は自分の影をまとってる女だ。今夜、ぼくを死に至らしめるまで妨害しようとするはずのエージェント、ジョン・セフェリーノ。こいつは世界にも同じことを試みるかもしれない」

「不始末三、四、五」とジョー・プリマヴェーラが言った。「どれくらいの余裕がある、コンスタンティン、知ってる？」

「余裕？ 何の余裕だい、プリマヴェーラ？」

「不始末を始末するためだ、コンスタンティン。水兵指揮に短く切りつなぐくらいの余裕はある？ 長い切りつなぎの余裕は？ 手の込んだ結び目を作れるくらい？」

「どうだろうね、プリマヴェーラ。余裕は時間で見た場合の余裕だよ、もちろん：私が彼らを始末するか、彼らが私を始末するまでの時間。六番目の不始末は、言及したエージェントの一人の『身代わり』、昨日夕方、マルセイユでぼくが殺した相手だ。本物のエージェントだったのか、その代理や囮だったのかは確かじゃない。ぼくが最もよく知り、確実に認識すべきエージェントの身代わりだった。この殺人か遭遇によって、ぼくは非現実のドアを通りぬけたんだ。それ以来、すべてが非現実的だ、現在の仲間も含めて」

「六番目の不始末、適切に記録」とトロイ・アイランダーが言った。「世界最高の探偵になるのは、そんなに難しくないだろう？ 世界で最も知的な仲間を見つけて、すべて吐き出すだけだ」

「うまくいくといいね。七番目の不始末は、世界最高の探偵としてのぼく自身だ。どうやってそんなものになったか、えらく漠然としている。中規模のフランスの都市で勤勉で、正直な聞き込み警官だった記憶がある。その後、空の間隔がある。そして昨日のどこかの時間だ。ぼくはコンスタンティン・キッシュ、世界最高の探偵で、とても神秘的な事件の担当になった。二つの状態の間に長い季節のギャップがあり、その間の記憶は象徴的な断片だけだ。世界インターポールが事件を明晰に捜査するために担当者の心を一掃し、事件後に古い雑然とした記憶を返すのは珍しくない。それでも、かなり首尾一貫しないところがある」

「一ヶ月ほど前にコンスタンティン・キッシュ、世界最高の探偵と話をしたが、君は確かにそいつと少し違う」と鉱山経営者のヒュー・ナジティンガロが言った。「何度か、本当に同じ男だろうかと思った。そして、君の声、ジェスチャー、全体と詳細の外見、尾の重い凧のようにアイデアをふりまわすやり方について、頭の中でチェックしてみて、うん、同じ男だと思ったんだ。でも、同じ男が少し変わっているんだ。あるいは、詐術で同じ人間に思いっきり近づけた人物かもしれない。その場合君自身がその詐術や変装に気づいてないようだ」

「ぼくと一ヶ月ほど前に話しただって、ナジティンガロ？」とコンスタンティンが尋ねた。「どこで？」

「この部屋で。この同じワイン＝ファインの同じ仲間と。覚えてないのか？」

「この件について割り込んでもいいかい、コンスタンティン？」と偽造名人アンジェロが尋ねた。「今日、君が正午にサレルノの私の工房に来てから、一つずっと疑ってることがあるんだ。過去、世界インターポールの国際美術偽造事件への介入で、何度か私の工房と部屋を捜索したの覚えてる？ それに触れた時、君はポカンとしてたな」

「いや、君の場所を捜索した覚えはない」とコンスタンティン。

「今日以前に私のこと覚えてる？」

「いや、覚えてないようだ」

「なら、なぜサレルノの私の場所に来た？ 道をどうやって覚えてた？ 私が偽造名人アンジェロだとどうやって知った？ 私が助けられるとなぜ思った？ 私がそこに着いた時、どうやって私を認識した？」

「わからない。全然わからない。不始末七番目、ぼく自身、ひどいね。

不始末の八番目は、ぼくの車と、おそらくぼくの命への攻撃。でも、十分強い攻撃じゃなかった。本当に殺そうとしたというより警告のようだったけど、何に近寄るなと警告さ

れてるかは言われなかった。不始末九番目は、蜃気楼としてのサンダリオティスだ。空から降りてきて定位置について固まった。これは、サンダリオティスがいつもそこにあるが、外の野蛮人に見えないだけだという市民の説明と一致しない。ぼくが自分の目で見たものはこれと矛盾する」

「蜃気楼はトリッキーだ」とナジティンガロが言った。「君が見たと思ったものを、君が見たはずはない。我々の土地が他から降りてくるのを見るなんてのは合法じゃない」

「不始末十番目は、世界インターポールの上司、グリシュウェル。彼についての健忘症がある。世界インターポールの仕事では、故意に誘発された健忘症はよくあるものだけれど。それでも、彼を電話でしか知らず、以前知ってた記憶がない、彼の外見もわからない。そして現時点では、今朝初めて電話で話した時より、彼をのことをずっと覚えてないんだ。

「不始末十一番目（ぼくの頭の中ではこの最初にふった番号順になっているので、変更できないんだ）は、この空の爆弾、君たちがチボーの魚雷、フォーティアン構築物と言う、今、雲の偽装にもかかわらず見えるものだ。でもこれはグリシュウェルが今朝言ったことと一致しない。彼ははっきりと、それが目視できないと言ったんだ。ぼくは今この瞬間に、視覚的な囮に晒されてるんだろうか？ 誰に？」

「たぶんここにいる我々の中のだれかだろうねえ」と偽造名人アンジェロが言った。「そんなことができるくらい、君の心を十分に掴めるほど近くにいた人間は他にいない」

「不始末十二番目はぼくのパラシュート。なぜグリシュウェルはそんなものを着けろと言った？ なぜぼくはすぐ買ったんだ？ なぜそんな流行りのパラシュート店が都合良くあったんだ？ あの店は今もあるだろうか？ あるいはこのいたずらはどれだけ手の込んだものなんだ？」

「その流行りのパラシュート店の話は聞いたぞ」とトロイ・アイランダーが言った。「パラシュート以外のブツを扱う婉曲表現だと思ってた。いや実は、本当にそうなのを知ってるんだ。あの店に本当にパラシュートがあった？ なんて奇妙！ この不始末は君が思うより始末が悪いかもしれない」

「不始末十三番目は、ハジエルという悪魔、サンダリオティスがそのサンダルと言われる。でも、君たちの土地はルシファー自身の土地とも言われる。だがハジエルという名の世界や惑星は実在するし、最も近いものの一つだ。ルシファーという名の世界は寡聞にして知らない」

「実は、ルシファーという名の世界はいくつかある」とトロイ・アイランダーが訂正した。「どれも関与しそうなほど近くない、ハジエルは近いのかもしれない」

「不始末十四番目は反物質。ぼくが排除したと思うと、この事件にまた登ってくるんだ。ハジエルは反物質の世界なのか？ グリシュウェル、もしそんな人がいればの話だが、彼はそうかもしれないと思ってる。

不始末十五番目は映画監督。この男は真鍮の声をしていて、嫌いじゃないけど、非常にわざとらしく聞こえる。あいつと一緒にいると、ぼくもあいつと同じく空想まみれになるが、その空想ではあれは人間の声じゃなく、何か人間に仮装したものの声だと思う。あいつの目は**ガラスの**目に見える、動いて陽気ではあるが。あいつは『エージェント』なのか？ 映画監督以上の何かではある。姿をあらわしたサンダリオティスの監督だと思う。

不始末十六番目は、『十三面の部屋』のイマイチだった最初の場面の審問官。彼は囚人で、頭がフラフラして薬漬けなんだと思う。本当に目をつぶされ、耳をつぶされ、平衡感

覚もつぶされたんだろう。そして、あいつは本当に、どこかで少なくとも世界の支配者に等しい地位の審問官だと思う。彼につきまとう権威のために必要とされたんだが、かたわの道化でへまな者にされちまったんだ。

不始末十七番目は、五時の男。あれはエージェントだと自称していた。だから、本当にエージェントだったはずだ、劇の脚本の中かその外で。でも、どんなエージェント？ こちらに見せた以上のものをあいつは持ってる。

不始末十八番目は、十三面の部屋で『事故』で殺された男。彼は誰？ なぜ殺された？ なぜぼくがその時**殺されなかった**？

不始末十九番目はぼくの『甥』、ぼくのの、ええ、なんというか、いくつかの特徴を持つ死者だ。地元警察がなぜかコンスタンティン・キッシュ、世界最高の探偵と特定した人物だ、ぼくの代わりにね。

不始末二十番目は引き続きサンダリオティスの謎。これは漂流船で、乗組員はその状況、出港地、目的地について矛盾し不可能な説明をする。船主アイランダー、船の乗組員としてはずいぶん奇妙な行動じゃないですか？ でも、サンダリオティスは今ここにあり、それが占めている場所に本来あるはずの他のものはどうなる？

不始末二十一番目は、今夜ぼくを裏切るこの一同の中にいる男。それがぼくの見つけた不始末のほとんどだ」

「おお、その不始末はなんとかつじつまをあわせて偶数にできると思う」とトロイ・アイランダーが言った。「二十一の不始末のうち、二十個は確実につじつまがあう。実際、世界最高の探偵という君の評判を保つためには、我々は是非ともそうしなきゃ。我々のうち誰が君を裏切る？」

「カタツムリ料理の皿にぼくと一緒に手を浸す者、そいつがぼくを裏切る」とコンスタンティンが言った。それは何か古い引用の残響のような響きがあった。

そこで、彼らは不始末を切りつないでつじつまを合わせる作業に取り掛かった。短い切りつなぎもつらいほどしか余裕がなかった。それでも、非常に鋭い心の持ち主として、彼らはそれを実行し始めた。いくつかのつじつまあわせを実行した。そして、そのすべてで筋を通した。二十一の不始末のうち二十が、合理的説明とたぶん告発にしっかり切りつながれた。コンスタンティンが完全に満足できるほどではなかったが、他の四人の満足がいく程度のものにはなった。しっかりと行われたつじつまあわせで、たぶん話は通るだろう。

切りつなぎのうちコンスタンティンが理解できない部分については、その著名で非常に知的な仲間に質問するのは少し恥ずかしかった。彼らがそんな著名で知的な仲間だとどうやって知ったかも確信がなかった。

そして、ワインと食事をしながら、コンスタンティンはカタツムリをもっと取るために手を伸ばし、別の人物が同時に手を浸した。コンスタンティンは予言したにもかかわらず、全くそれに気づかなかった。でも、その人物はコンスタンティンを長くじっと見て、カタツムリにしばらく手を入れていた。

「これが我々五人の二回目のとても楽しい会合だ」と店の主人ジョー・プリマヴェーラが言った。

「一ヶ月前の最初の会合。今日の二回目。ちょうど一ヶ月後にまたここで会おうではないか。イクヌーザが海底の壊れた瓦礫にしかならなくても、ここで会おう」

第 8 章

「我々が魚に食べられた骨だけになっても、ここで会おう」とトロイ・アイランダーが言った。「英雄的な意志があれば、それ以上の奇妙な会合だって実現してるんだ」

しかし、コンスタンティン・キッシュは、一ヶ月前に同じ場所で同じ男たちと会ったことを全く覚えていなかった。

午後 4 時 5 分前、ジョー・プリマヴェーラのワイン＝ファインで小さな集まりが解散した。

「アンジェロ、ドクター・コルコロンの物議を醸す衛兵ピルの我々の偽造品をもう一つもらえる？」とコンスタンティンが解散時に尋ねた。

「もちろんだ」と偽造名人が言い、一つ渡した。コンスタンティンはそれを舌の下に入れ、忘れた。でも、彼は不安で落ち着かなかった。

「ピリピリしてるな、コンスタンティン」とアンジェロが言った。「それが世界最高の探偵の代償なんだろうね。法の反対側に立てば、こんな心配はなくなり、夜も眠れる。世界の重荷を肩に背負わなくていい。心の平和のために、一度悪い道を試したほうがいいんじゃないか」

「いやいや、アンジェロ」とコンスタンティンがきっぱり言った。「その平和と幸福感なしでやっていくよ。ぼくは腹を決めてるんだ」

再び通りで、コンスタンティンは自分の名前が広告にあるのを見て動揺した。

「キャストには、世界最高の探偵コンスタンティン・キッシュ、世界インターポールについての衝撃的な暴露、今日撮影されたスリリングな場面！」

何だこれは？ その夜上演されるドラマの広告で、タイトルは『世界をまたぐ二枚舌、心理スリラー！』だった。広告によると、これは二本立てで、もう片方は『一兆ドルの世界乗っ取り、メッセージ付きの強盗！ 最後の心理スリラー！』だった。この後者は、看板そのものにまで不吉な感じがあった。

コンスタンティンはつぶやいた。「きっと同じ監督が全部やってるな。そしてどの作品でも大場面を強調するために誰かが『偶然』殺される。気をつけなきゃ。『偶然』殺されるのはまだぼくかもしれない。あの監督の流動的なやり方では、これらの撮影が終わったとは限らない。」

そこにある売店の電話で、コンスタンティンは世界インターポールの上司グリシュウェルに電話した。

「コンスタンティン、ニュースならニュースを見ればわかる」とグリシュウェルが素早く言った。「たくさんあって、いろんな解釈がある。でも、そこで本当は何が起こってる？ 大きな爆弾と大きな陰謀の最新の進展は？ 大きなならず者の半島はどう？」

「何も起こってません」とコンスタンティンが言った。「とはいえ、活発なペースは保っ

ています。あなたが目視できないとおっしゃった空の島は、ここではかなりクリアに見えます。反物質爆弾かもしれません。海の半島は今日ずっと目視できて、ぼくもイタリアへの短い旅行以外、ずっとここにいました。でも、空の物体も半島もキラキラしてますよ。サンダリオティスは主に緑の泡でできてるみたいですね。跳ねる緑の牧草地はかなり作り物めいて見えます。一瞬、サンダリオティスの存在を信じそうになっちゃいます。でも目を瞬かせると、また緑の海の泡になる。ここでは二つのちがったバージョンが進行してるんですよ、グリシュウェル。まるで二つの物語が同時に進んでるみたいなんです。二つのちがった傾向や推進力があり、どちらにも 1 兆ドルの値札がついてるんです」

「事態の打開のために何してる？」

「あまり何も、グリシュウェル。今夜は、ショーに行くつもりです。あらゆるところでかかる二本立てでしてね。片方のドラマは『世界をまたぐ二枚舌、心理スリラー』。世界インターポールについてのもので、ぼくも出てるんですが、でもどう出てるか、そこで何してるかは知りません。もう片方は『一兆ドルの世界乗っ取り、メッセージ付きの強盗』」

「その二本立ては、そこで動いてる二つのちがったバージョンの何かに対応してるのか、コンスタンティン？」

「いや、完全には。二番目のドラマは確かにあるバージョンに対応はしてますね。でも、一番目は道に引かれたでっかい囮みたいですねえ。その代わり、またはそれに加えて、『世界をまたぐ二枚舌、大不動産強盗』というメロドラマがあるべきだと思います」

「世界インターポールの偉大なイメージが損なわれないようにすることは重要だ、コンスタンティン」とグリシュウェル。

「そんなに重要じゃありませんよ、閣下。訓練で、イメージは他のすべてが片付き、すべての義務が果たされた後に磨くものと教わりました。ぼくとしては、そのイメージを切り刻んで餌に使ってきましたよ。そして、かなり食いつきもいいんです」。コンスタンティンはグリシュウェルとの電話を切り、売店を去った。

そしてすぐに、ライラックの霧にぶつかった。特別エージェントにして午後の女性アメリア・ライラックの香り高い腕に捕まったのだ。彼は、最近のキスでは決して珍しくない軽い針の刺し傷をまた感じた。アンジェロの偽造ピルで奇妙な侵入に抗力を持っていたことに感謝した。これ以上機能が麻痺するのは嫌だし、もっと従順になる気もなかった。針と偽造ピルで戦わせればいい。

「まったくもう、コンスタンティンったら、あたしのかわいい情熱の人、あなたってば、チョロすぎるわよ」とラベンダーの影のアメリアが言った。「あたしの全才能を引き出せるだけの好敵手は、ついに見つからないのかしら？ あなたごときが世界最高の探偵だっていうなら、最悪の探偵がどんなものか教えてほしいものね」

「ああ、あいつは決して悪くないヤツだよ、アメリア」とコンスタンティン。「時々一緒に事件に取り組むんだ。人々の反応は『結構いいじゃん。これが世界最悪の探偵なら、最高の探偵はどんなだろう？』って感じ。実はぼくの称賛みたいなものだね」

「あなたがそれに値しないのは残念至極よ、コンスタンティン、あたしのお宝にしてカモちゃん」とアメリア。「本当に、君が世界最高の探偵として**知られる**ようになるのには、あたしたちがかなり手を貸したのよ。あなたはもちろん、最高なんかじゃないわよ。でも、先を見越して、少し選んだり、整えたりしなきゃ」

彼らは近くのインペリアルホテルに行き、コンスタンティンが知る限り、アメリアが永遠に借りていた『歓びの園スイート』へ上がった。『歓びの園』では、ゆっくりしたパー

ティがずっと続いているようだった。他のエージェントがいた。エージェントはすぐ分かるが、良いエージェントだと何のエージェントかは決して分からない。ばくち打ちや代表者もいた。

「彼らはどの側？」とコンスタンティンは自問した。「どの物語の一部？『一兆ドルの世界乗っ取り』？ それとも『世界をまたぐ二枚舌、偉大な不動産強盗』？ このグループがどっちの演し物に乗ってるかわかれば、少し助かるんだがなあ」

不動産エージェントがたくさんいたが、その中でもかなり位の高い、エージェント組織の中でも最上層エージェントのようだった。明らかにサンダリオティスの 原住民ではなく、明らかにこの場所が好きな観光客＝よそ者がいた。彼らは北欧人か外部世界の人々のような、愉快だが奇妙な外見をしていた。この二つのグループを区別するのはとても難しい。

「こちらは世界最高の探偵、コンスタンティン・キッシュよ」とアメリアが混雑した群衆に紹介した。「この人には欠点が二つしかないの。頭が弱く、人を殺すのよ。昨夜は、マルセイユで私の妹を殺したわ、でも理由があったかもしれない。そんなことを聞くほど下品なあたしじゃないわ。あなたたちにこんなことを言うのは、この人があまりに地味すぎるので、あまりあっさり見過ごしてほしくないからよ。本当、女の子たち、注目する価値がある人かもしれないわよ、楽しませてあげて。女の子を殺す男に何か魅力感じない？」

アメリアは複数の種類の針を巧みに使った。

そこには六人の女の子がいて、アメリア・ライラックよりずっと可愛い、でも彼女ほど美しくない。彼女はまちがいなく、自分を際立たせるためにこの女の子たちを選んだのだった。彼女たちも針で刺す女の子？

「こっちにいらっしゃいよ、殺し屋さん」と可愛い女の子の一人がコンスタンティンに言った。でも、この女の子たちは、一人を除いてサンダリオティス出身じゃない。ならば、みんなどこ出身？

突然、光、影、雰囲気が変わった。何だ？

「電気が消えた？」とコンスタンティンが女の子の一人に尋ねた。

「いいえ、暗闇が消えた感じ」とその子が言った。「彼女がリラックスすると時々消すの」。アメリア・ライラックを常に取り巻く神秘的なラベンダー色の影とオーラだった。それが消えた。もうそこにはなかったが、アメリアはまだどこかにいた。彼女の変装した存在は、まだ彼女がそこにいるという不確かな兆候を示したが、コンスタンティンは彼女の雲なしではアメリアを認識できないと気づいた。

「世界最高の探偵は今、どんな事件を追ってる？」と魅力的なぽっちゃりした若い女性が弾むように尋ねた。

「サンダリオティスとそのすべての謎。君もその謎の１つだ。昨日、君は、絶対にサンダリオティスにいなかっただろう。なぜ今日ここに？」

（世界最高の探偵は常に自分の観察力と認識力に誇りを持っていた：この部屋には、彼が特別な注意を払っていた女の子がいた。だが彼女の偶然の側面が『消された』ので今は彼女を見分けられなくなった。ラベンダー色のオーラに囲まれたら、どの女の子もアメリア・ライラックになるのだろうか？ ここには素晴らしい変装が漂っていて、女性が着けてスイッチを入れるのを待ってるのだろうか？）

「あら、今日ここにいる理由なんかいろいろあるわよ」と弾む女の子が言った。「あなたがここにいるって知ってたから、かな。あなたがここにいるのは、**本当に**知ってたのよ、

コンスタンティン・キッシュ、本当に知ってた。それが**本当に**ここにいる理由の一つよ。楽しんでほしいの。」

この弾む女の子もアメリア・ライラックかもしれない。

「あたしたち、あなたが大好き」と弾む女の子が言った。「一緒にいなきゃダメなのよ」

「わたしたちは全然好きじゃないね」と無礼だがきれいな若い男が言った。「あなたをいまここに連れてきたのは、世界インターポールだからだよ。君に首輪をつけたんだ」（この若い男ですら、アメリア・ライラックのオーラより可愛いが、美しくはなかった）。

「この取引は君に台無しにされるには大きすぎるんだ」と可愛い男が続けた。（『台無しにされるには大きすぎる取引』は『一兆ドルの世界乗っ取り』と『世界をまたぐ二枚舌、偉大な不動産強盗』のどっちに聞こえる？）「世界インターポールは、ぶきっちょにたくさんの取引を台無しにする。でも、こんな大きな取引から世界インターポールをどうやって遠ざける？ おお、できない。」

「でも、**実質的に**世界インターポールをどうやって遠ざけるのかしら？」と弾む女の子が割り込んだ。「おお、それならできる！ できる！ やってる！」

「世界インターポールを入れることで遠ざけるんだよ」と可愛い男が言った。「だから、カモの代表者、『世界最高の探偵』、つまり君を担当にさせるんだ。君を担当にして、君を釘付けにする、でも何も達成させることもできない。でも、取引が続く間、君をあっさり抹消もできない。君をあまりにさっさと排除したら、世界インターポールが別のエージェントを送るか、複数送りこむだけだ。だから、君は動き回り、動き回るのを見られ、多くの場所で見られ、電話をかけ、報告を伝えなきゃいけない。そして、何も解明してはならず、少なくとも何も話してはいけない。

そして従順でいてくれないと。もちろん君は囚人で、もちろんいつでも抹消できる。そして、適切な時に**抹消する**。君は考えの中ですら我々に一切反対できない。反対を表現したり計画したりする世界や仕組みを見つけられない、我々が君にごちゃまぜ機を導入したから、君の考えは定められた溝から出ようとするとごちゃまぜになるんだ。

でも、今は、楽しむことを心がけて、見られることを心がけて、事件に取り組んでるように見えるよう心がけて、事件について何も知らなくてもいい。君の能力が少し麻痺して、発見をしたり伝えたりしようなんて思わないければ十分だ。

従順になれ、そうすればもう少し生きられる。うん、二時間ほど長く」

（ラベンダーの影とオーラなしのアメリア・ライラックはここにいる誰かかもしれない。可愛い男もそう**かもしれない**かな？ おお、いや、それは行き過ぎだ。）

「でも、あなたには幸せでいてほしいのよ」と弾む女の子が言った。コンスタンティンは、この時、弾む女の子につけこんでいた。探偵として、彼女の中身と感触について知りたかった。

「あたしたちを信じて、あたしたちはいつも、あたしたちの最善の利益を念頭においてるんだから」と弾む女の子が言った。「マルセイユでアメリアの姉妹をどうやって殺したの？」

「首を折った」

「あたしの首もやってみてよ、ダーリン」と弾む女の子が言った。「あたし、素晴らしい首なのよ、男に暴力を振るわれるのが大好き。彼女の首を折るのにスナップドラゴンなんか使わなかったわよね？ あれはズルいから」

（マルセイユの女の子も素晴らしい首とラベンダーの影の雰囲気を持っていた。この影

の雰囲気の変装は複数あるのか？）

（全長 450 キロのその変装で何ができる？ そんな長く強力な影の雰囲気は、ほとんど何でも認識できないほど変えるんじゃない？）

コンスタンティンはマルセイユの女の子を素手で殺したが、僅差だった。彼女はほとんど彼を殺しそうになった。ほとんどの男相手なら成功してた。

じゃ、なぜ彼女は彼を殺そうとしたのか？ もし今、彼を殺すという脚本になっていなければ、昨夜、彼女が彼を殺すのは脚本になかった。なぜ彼女は殺そうとしたのか？ コンスタンティンは今の女の子の目を見た。おお、そこには狂気のひらめきがあった。他のものと間違えようがない。でもそれは、彼女が時々支配下にあるだけのもののようで、しばしばその支配下から抜け出してるようだった。ひょっとすると狂気は影の雰囲気の変装に付着し、人間そのものには付かないのかもしれない。じゃ、考えてることを吐き出せ！ 時々、質問を突然吐き出すのは良い手口で、相手の不意をつけることが多い。

「全長 450 キロの影の雰囲気の変装で何ができる？　ほとんどあらゆるものを、元型をとどめないくらい変えちゃわない？」

そして女の子は一瞬、間を置いて、何を言われているかわからないふりをした。

「アメリアが、あなたは頭が弱いと言ったのも無理はないわね！」と彼女が叫んだ。でも、彼が何の話をしているか、実はわかっていたので、別の角度から答えた。

「ああダーリン、あなたって魅力的、魅力的ね！ **でも、決して邪魔はしないこと！** あなたって薔薇色の口でやって来る魅力的な子どもみたいね、突然毒の牙で噛みつくのよ」

「その牙は、いろんな能力を少し麻痺させ、従順にする刺す針に似てたりする？」とコンスタンティン。

「全然ちがうわよ。おお、あたしのお宝さん、あなたが今、何を捨てようとしてるかわかってるの？ あと八時間ほどの短く幸せな人生、あなたはそれを捨てようとしてるのよ。あたしは決して自分の人生を、一分でも進んで捨てたりしないわ。そして、あなたはそれよりずっと長く幸せな人生のチャンスも捨ててるのよ」

「この変装の本質は？」とコンスタンティンが尋ねた。「この小さな変装や大きな変装の本質は？ その名前は？ ヴェール？ ヴェロ？ ペプロス？」

「おお、そういうものだったりするんでしょうね。それは幻想で、一時的に粗雑な下仕事を隠せるのよ、手っ取り早く設けられる一瞬に。他の幻想、もっと粗雑で物質的な幻想を隠すわけ。それなしではどうしてもできないことが、これさえあればできるの。それに隠すだけでなく、活気を与え、目覚めさせるのよ。そこんとこ、絶対に過小評価しないで！」

「君はアメリア・ライラック**本人だな**、瞬間的にラベンダーの影の変装から抜け出したんだね？」

「もちろんあたしはアメリアに決まってるわ。影のマントなしでは声が同じじゃない、外見も何一つとして同じじゃない。でも、あたしはアメリア。あなたを気にかけるのは誰？ あなたがバカみたいに核心に近づきすぎる時、命を救ってあげてるのは誰？ あたしよ。本気ですからね。数ヶ月前、あなたを上昇する男に選び、世界最高の探偵にまで持ち上げたのは誰？ あなたを弾むおっぱいの上で弾ませてあげる人が他にいる？ 質感と中身を、あなた検査してるのね、コンスタンティン？ 好きなだけ検査して。夢だと思ったものの中であたしがやったみたいに、いまのあたしもイルカを思わせるかしら？ 人間を思わせる？ 好きなだけ試験して、でも答えは見つからないわよ、あたしがその答をあげるまで。

でも、ラベンダーの影の変装を甘く見ないで、コンスタンティン。あなた自身もそれを

着てたんだから。あなたは永遠にその一片を着るのよ」

「ぼくが？ どうやって着てたんだ、アメリア？」

「それはかなりいろんな粗雑な下仕事を隠せる幻想なのよ。あなたを世界最高の探偵という名声に導いたのも、その幻想だわ。でもあなた、実は優秀というほどですらないのよ。あたしたちはこのヴェール、この網を、操りたいものに投げかけるのよ、コンスタンティン。そして今朝は、いくつかの島と海に投げかけたわけ。でも、最初にとんでもなくたくさんの粗雑な下仕事をやったのよ。そして、今、手っ取り早く儲かる収穫が得られるんだわ。**でも、決して邪魔はしないこと！** あなたが信じてくれれば、完全に救ってあげられるかもしれない。そして、信じなければ、このの手であなたを殺すかもしれないわよ。コンスタンティン、昨夜、ほぼあなたを殺しかけたみたいにね」

「昨夜、ぼくが殺したのは誰なんだ、アメリア？ そこに誰がいた？」

「あたしがいたわ。そして、あなたは誰も殺してない。あたしがずっと幻想の中にいたのを忘れたの？ あたしは影のマントの中にいて、そこにはたくさんスペースがあるんだから。あたしはしばらく自分から出て、自分をそこに残しておいたの。そして、あなたが去った後、また自分に入った。そして、あなたがまだ混乱してる間に、グラン・コルニッシュを先まわりして進み、あなたより先に着いたのよ。

コンスタンティン、あなたが信じてくれれば、完全に救ってあげられるかもしれないといま言ったでしょう」

「そして、ぼくはきみに回答してないね？」

「ええ、回答してないわね、コンスタンティン、答ないとあなたは道に迷うわ」

「君ってちょっと狂ってるのか、アメリア？」

「ああ、昔ながらの狂気と昔ながらの野心ってやつね。**でも、それを決して邪魔はしないこと。**古い狂気は単純に古い存在。今日、老人があなたに言ったわね（ああもちろん、あなたに言われること聞こえるのよ、音声受信装置を仕掛けといたから）『古いものはカルト方面ではるか昔に支配しておった。そして完全に信用を失った後、うちの島に来て終わりを迎えた。でも、死にはしない』。その老人は、あたしたちについてはおおむね正しかったわ、コンスタンティン。あたしたちは長い間、カルト方面で支配した。そして、完全に信用を失った。そして、サルデーニャ島とサンダリオティス半島の丘に来たのよ。でも、信用を失い、排除されるのは嫌だから、受け入れなかった。あたしたちは何度も反撃する。この地球の人々があたしたちのカルトを捨てたため、巨大で恐ろしいことが起こった。あたしたちは緑の丘と、時々それに置き換わる海に住むの。そして、あたしたちは複数の肉体の人々、なぜなら一つの肉体だけで殺されるのを拒むから。

ああそうなのよ、あたしはイルカの肉体、かなり多くの他の肉体。あんなに調査しておいて、まだそれをつきとめてなかったの？ でも、あたしたちが海から出てきて、空の犬を呼ぶ口笛を吹く時には気をつけてね。そうなったら、あなたなんかロウソクみたいに吹き消せちゃうんだから」

「君はこの海から引き上げられた中で、最も露骨な偽物だよ、アメリア」とコンスタンティンは、『歓びの園スイート』とインペリアルホテルを足早に後にした。まだアメリアに回答していなかった。彼が知っていたのはただ、あの手の古い粘土でできた者に対しては、誓いを立てない方がいいということだけ。その古い工作粘土は様式化されて硬直しており、すぐにその型の中で硬化させられて逃げられなくなるのだ。

だがコンスタンティンは、数ヶ月前、最初にアメリアに会った時に受け取ったものをま

だ手元においていた。それは催眠の霧、ヴェール、ラベンダーの影の変装のかけらだった。それを使って、彼は人にいくらでも影響を与えて、望むことをほぼなんでもやらせることができた。それを持つようになってからずっとそれができたのだ。自分がそんなものを持ってると気づかない時でもそれができた。

彼は今、自分の人格の隅に宿るそのかけらを活用することで、誰かに影響を与えて望むことをさせようとしていた。アメリアの『歓びの園スイート』の可愛い男に、自分を追いかけてくるように仕向けていたのだ。

彼はほとんどどこからも見えない路地で待った。霧のかけらを持つと、目につきにくい路地が必要に応じてすぐそばにある。

可愛い男は、自分が何のためにどこに行くか、まるでわからないかのようにその路地に入ってきた。コンスタンティンは彼を殴り倒した。そして引き起こすと、再び殴り倒した。

「最初は、ぼくの注意を引くためなのはわかる、古いロバのジョークみたいにね」と可愛い男が言った。「でも、二回目はなんのため？」

（この可愛い男には見た目以上のものがあった。）

「この道を進めば、話せる場所が見つかるという直感がするんだ」とコンスタンティンは可愛い男の首の後ろにナイフの刃を当て、人気のない路地を進んだ。

その可愛い男は言った。「いや呆れるねコンスタンティン、こんな手口は世界最高の探偵にふさわしくないだろう。話ができるような、とっても優雅なクラブがあるよ。どこか喫茶店やバーのテーブルでも話せる。プライバシーオフィスだってあるし、一日、一時間、一分単位でも借りられるし、設備もいい。あなたはどうか知らないけど、ぼくがそのための資金を出してもいい。この路地はただのスラムメロドラマだ。何を演じるにしても、もっと良い舞台でやったほうがふさわしいだろう」

「おやおや、ぼくはスラムメロドラマが好きなんだよ」とコンスタンティン。「そしてこのドアがまさにその核心に続くはずだ」。彼らはみすぼらしいドアを通り、かつて古い倉庫だった場所に入った。そこで天井が高く粗末な部屋に出た。

「優雅なんかいらん、設備も整ってなくていい。こういうのがいいんだ」とコンスタンティン。そこに縄があった。

可愛い男は言った。「こんなことだろうと思った。なんて陳腐！」

コンスタンティンはそれで首吊り縄を作り、可愛い男の首にかけた。縄の端を天井の梁に縛られた滑車に通し、きつく引いた。

男は言った。「信じられないほど幼稚だ。『十三面の部屋』でのあんたの演技は、あんたに大根役者としての汚名を着せたぞ、コンスタンティン。もうかなり不快になってきたよ。いつになったらまた座らせてもらえるんだ？」

コンスタンティンが言った。「二度とすわれない。この世でも来世でも。今は、質問に答えるんだ。おまえのグループはどのバージョンに取り組んでる？『一兆ドルの世界乗っ取り』か『大不動産強盗』？」

「後者。世界乗っ取りは知った時には遅すぎた」と男。

「不動産取引か、そうだな？ よし、おまえらどうやってサンダリオティスを作った？」

「サンダリオティスをどうやって**作った**？ 質問がわからないよ、キッシュ。何を聞こうとしてる — うぐぐぐえええげ — 質問を理解するか、吊るされるかってことか？ わかった。質問を理解して答えるよ。ありえない技術が大量に使われ、催眠の霧がかけられた。それが答えだ。待て、キッシュ、縄をまた引かないで！ それが本当の答えだ。率直に話し

てる。ありえない技術を使った。不可能な技術だ。機能するわけがない。まとまらない。水に線を引いて、その上に土地を建てるようなもの。誰も見たことのない最も一時的な、一日限りのもの。今夜の深夜までにすべての土地の権利を譲渡し、すべてのお金を集める。それが大不動産強盗なんだ。もっと早ければいいのに。サンダリオティスが今夜の深夜まで保つとは思えないから。

真ん中から始めよう。外部世界のグループのブローカーから問い合わせがあり、アイデアがひらめいたんだ。外部世界のグループは投資と再定住のコングロマリットで、地球への出資を求めた。五十ほどの他の世界に出資してる。今や分散投資が大はやりだ、とブローカーが言ってて、地球に投資して資産を持てば、多様性の藁の山に藁が一本加わる。

『一億エーカー相当、切りのいい数字にしてくれ』とブローカーが言った。『一つか二つの飛び地で、三分の一には地球人を軽く定住させ、残り三分の二は空けといてほしい。それをやりとげる方法を考案してくれれば買うぞ』とね。その仮提案には記念碑的な要素もあった。ブローカーが取引した人々は、自分たちが元々地球出身だという神話にしがみついてたんだ。前史時代に自分たちが地球から追放されたと信じてるんだ。今や、そいつらの象徴的な人数（五千万人ほど）がここに戻って定住したいと思ってるんだ。

ぼく自身と仲間は多くの理論的問題に取り組む。その偶発的な副産物で、努力の代金がほぼ賄われる。この問題を理論的に試すことにしたんだ。あ、キッシュ、縄をもう少し緩めてくれる？」

「一センチたりとも緩める理由が見あたらないね」とコンスタンティン。「話せ、話せ」

「潜在的顧客のために土地を得る方法は三つ」と男が言った。彼はもう可愛い男でも若者でもなかった。顔は『13 面の部屋』の心理スリラーの拷問された顔のようだった。

「一つ目として、すべての条件を満たす場所を見つける方法がある（でも、地球のどこにそんな場所がある？）二つ目、主要な条件以外を満たす場所を見つけ、主要な条件を満たすために六千万から七千万エーカーの地域からそこに生えた人間を排除することだ（でも、どこかの土地から、そこが自分たちのものだと頑固に信じる人たちを排除するのはおっかなかった。戦争か、少なくとも軍隊が必要になる）。三つ目、条件を満たす新しい土地を建設する（でも、一億エーカーの土地をどうやって？）『ありえない価格をつけよう』と一人が言った。『粗い農地や丘陵地で一エーカー一万ドルとか』『すると総額一兆ドルになる。本当の十三面 (桁) の数字だ』と別のだれか。一兆ドルの値段を申し出ようということになった。それが受け入れられた。だから、場所を建設する可能性を検討したんだ。

最終的に、三番目の解決策、条件を満たす新しい土地の建設に落ち着いた。ただし一つの例外があった。条件を満たす**古い**土地を建設することにしたんだ。我々が検討した千もの項目の一つが民間伝承だったので、すぐにサンダリオティスの民間伝承にたどり着いた。ヴァインガルテンによる伝説と記述に基づく空想の地図を研究した。同じ地域の実際の地図にそれを重ねた。北町を除くすべての都市が、コルシカかサルデーニャに収まった。風景の著名な要素、高い山、古い火山の残骸、背の高い海の崖もそうだ。そこに我々の国、三分の一がコルシカとサルデーニャの二つの飛び地で、すでに地球人が軽く定住していて、三分の二が空いてる。空いてる三分の二を建設するだけだった。そして、それをやった。

これは君には信じにくいことだろうね、キッシュ。信じにくい理由は、それが起こらず、起こり得なかったからだ。起こらなかった証拠は、今朝の夜明けに新しい国を出現させ、今日ずっとその存在を維持はしたが、今夜の深夜を過ぎてまでそれを維持できないという

ことだ、真夜中までさえ保たないかもしれない。作った瞬間から穴だらけで、穴は大きくなってる。これは超物質の幻想で、すぐにこの初の巨大な超物質幻想の結果がわかる。

我々は建設に使える精神、少なくとも思考の塊を持っていた。サンダリオティスは多くの心に強くあった。人々は何世代もその存在を信じてた。今も信じてる。そこに行った、戻る方法を知ってると言う人々がいた。世界の著名だが風変わりな人々がサンダリオティスを出生地と主張。サンダリオティスは活発なカルトだった。幻想の場所で、幻想の文学があった。

調査で、隣のイタリアの 72 %が、サンダリオティスというイタリアより大きな半島があると信じてた。この信念には一つ変わったところがあった。多くの人が、年に一夜、諸聖人の前夜にのみそれが姿としても事実としても出現すると信じていた。それでも、信念の繊維と材料があり、それを足がかりに建設することは可能だった。超物質幻想の『超』は信念と精神だ。

世界中に無数のサンダリオティスクラブがあった。詩や文学のサークル、歌やドラマのグループ、倫理的、霊的、宗教的なグループ。古物研究、集めた資料は素晴らしかったよ。サンダリオティスは言語さえ持ち始めた。エスペラントの私生児娘のようだが、それがラテン語の非常に古い姉妹だと主張され、新旧の文学を持っていた。そのクラブの文学を新しい建設の『ショー』図書館の設置に使った。サンダリオティスクラブの一部は、霊の顕現、代替世界、古い地中海の神と英雄のカルト、浮揚といったものに入れ込んでいた。

そいつらの一部と協力し、思いこみによる持続的浮揚の研究をした。それは可能なことだし、実際、日常的に行われていたのがわかった。これはもう完全に精神だけの世界だが、その精神の国は短時間ならかなり重さを支えられる。適切に思い込まれ、自己または他者催眠された人は、通常なら彼らの体重を支えられない、いやその十分の一、二十分の一も支えられないような媒体の上を、短時間なら (最大一日だと我々は思っている) 動き回れる。まあご覧の通り、できるだけコストは削減したよ。少なくともイタリアより大きい国を、ほとんど空気泡だけで作るのは、安あがりではないんだ。

非物質の分子格子パターンを使った。この代物は形がすべてで、中身の物質はなかった。分子格子パターンが確立されると、周囲に物質がなくても、散在する分子がなくても、自身を押し付ける。非崩壊の形は物質の支出なしに自身を維持する。

増殖ウイルスを使った（こいつが致命的になるのは、生きた物質に広がったときだけだ)。増殖ウイルスは猛威の野火みたいに猛烈に自己複製し、使う材料をあまり気にしない。変異が指示する決まった点まで猛烈に成長し、止まる。ウイルスが指定エリアまでぴったり成長するような適切な変異を引き起こすのに成功したんだ。ウイルス結晶を形成する材料は、その地元の大気と海の空気、水、塩だ。

各種のガスプラズマを使った。一次電源が停止した後も続く持続的な電場を使った。狐火や沼火を短命の構造のパターンとして使った。そうそう、気泡でもいろんなことをやった。量的に見ると、ほとんどの仕事が空気泡なんだ。指定の海洋エリアを振動する油膜で覆い、そこに気泡や霧泡を下ろせばいいと考えた。油膜と気泡に電荷を維持する必要がある。気泡ってのは実は、静電気で海の毛が逆立ってるようなものなんだ。今朝やったのはそれだけで、私が予想したよりずっとうまくいった。いまのところ漂う海岸線の最大の変動幅は約 20 キロほどだ。

そこまできたら、エリアを覆う『牧草地』のキラキラした緑の粘液を敷けるようになった。遠くからはもっともらしい牧草地に見える。そしてトランス状態、催眠された人、さ

らには空気の上とか、色のついた少し固い泡の上とかを歩けるんだという伝染性と流行の妄想に囚われた大量の人々なら、その上を歩けるはずだ。

物質と超物質で、薄っぺらながらできる限り進んだんだ、そしてすべてとてつもなく薄っぺら。残りは、催眠による形、マント、心を投じるヴェールでやりくりするしかなかった。簡単に言えば、残りの部分では魔法を使わなきゃ。

我々にはマント、ヴェール、影、変装現象の特別な専門家がいた。そのコードネームはアメリア・ライラック。ラベンダーの雰囲気を持つ女性で、外見と現実を砕き、個人はおろか群衆にも、望むものをほぼ何でも見せ、信じさせることができる。彼女は非常に古い人々の一人、カルト連中の一人なんだ。影の霧の効果は絶大で、そのかけらでも驚異を起こす。アメリア自身は二重存在と二重肉体主義（バイボディズム）を示す。彼女はいくつかのちがった有効な肉体を使うんだ」

「いや、違うね」とコンスタンティンが反論した。「今日の午後使った彼女の弾む肉体、半分イルカの肉体は、有効でもないし本物でもない。ただのおもちゃだ」

「君が間違ってるかもしれないぞ」と男は言った。「でもそうだね、我々は今朝すでに、君が午後になって尋ねたことをいくつかやっていた。全長 450 キロの影の雰囲気の変装を**投影した**。サンダリオティスを『出現』させたのは、実はそれだったんだ。それが新しい国にぴったりで、それを一変させたんだ。誰もが最初に目にしたら、ラベンダーの霧を信じる。みんな約一日信じるし、信じる者にはそれが現実を作る。

今日、多くの観光船を走らせ、熱心で信じる人々の群衆、地元住民に見える人たちを集めた。彼らはサンダリオティスクラブから採用され、野外劇の感覚に満ちあふれていた。その連中はお芝居っけたっぷりで、演劇を現実にしようという燃える欲望を持っていた。明るく輝くサンダリオティスの人々は彼らだったんだ、そして彼らがそこら中にいた。でも、古いコルシカやサルデーニャの人々も役割を演じたぜ。

ここにあるものはすべてコルシカ、サルデーニャ、北町、モナコなんだ。そうでなければキラキラした緑の粘液、変形した空気と着色物質。おお、サンダリオティスの緑の牧草地！ それが今日ここにあり、明日には溶けて消える。新しい土地を外部世界のグループに売った。今夜の深夜までに集金する。そして、逃げる。いやあ、もう一目散に逃げるぜ！ それが話のすべてだ」

「それだけなんかじゃ全然ない」とコンスタンティン・キッシュが言った。「北町の何がそんなに特別なんだ？」

「他の追加物より物質的ってだけだよ」と男が言った。「あそこは我々の最も早くて物質的な試みの残骸なんだ。あれを全体のエリアでやるには費用がかかりすぎる。非常に巧妙な軽量の足場があり、またラベンダーの霧、現実の雲をとても巧妙に使ってしっかり覆われてる」

「今いる都市は？」

「サンダリオティスの首都イクヌーザ？ おお、これはサルデーニャのカリアリに少し追加しただけ。ここで大会を開くサンダリオティスクラブの観光メンバーがいくつかの看板を変え、ラベンダーの霧をかけて小さな都市を大きな都市にした。でも、いつも通りのカリアリだよ」

「イタリア階段、その壮大な曲線は？」とコンスタンティンが尋ねた。「カリアリにそんな記念碑的な構造はなかった。あれが偽物だなんて言うなよ。ぼくがこの足で歩いたんだからな」

「イタリア階段だって？ 本当に歩いたのかい、キッシュ？ すごいぞ、そしたら君は空を歩いてたんだ。本気だぜ。でも、ただの空気か確信が持てないものもある。単なる思考かもしれない、でもそれなら誰が考えた思考だろう？ 私は少年や若者としてサンダリオティスが現実だと信じた一人なんだ。今回の派手なやり方の中では、その古い現実とは一切接触してない、でもだからといってそれがすべて否定されるものじゃない。サンダリオティスはどこかにある。だれもそれを我々から奪えないんだ、なぜならそれを見つけられないから。

でも、もう一つあるぞ、キッシュ。イタリア階段とかあれこれとか、そういう派手なものを追加する時には、我々は偽造の最初のルールを守るんだ」

「それは？」

「新しいものに、古さの痕跡をたっぷり付けて仕上げるんだ。かなりの新しさの痕跡を付けるのと同じくらい簡単なことだ。新世界を化石や炭素 14 年代測定でかなりの古さに見せて仕上げる。

神も世界を作った時、そのトリックを使った、しかもそれほど昔じゃない。世界にあらゆる古さの痕跡、層、記憶、化石を付けることで仕上げたんだ」

「おまえやここで作ったものは、チボーの魚雷として知られる空の島と何か関係あるのか？」

「いくつか関係はあるな、うん、でも大したものじゃない。あの魚雷をいじる人はほとんど何もない人々。世界乗っ取りを狙う人は、その目的のためには空の魚雷なんか必要としないんだ。他のほとんど何でもいいんだから。そもそもチボーの魚雷はフォーティアン構築物だろう。我々はあの手のものは敬遠するんだ。なんか居心地が悪くてね」

「そして、本当にこういったものすべてで逃げ切れると思うのか？」

「我々は逃げられるよ、でも君は無理だな」と苦しむ慌てた男はコンスタンティンに言った。「君自身が閉じ込められてるんだからな、コンスタンティン・キッシュ。君には発信ロケーターがある。隠れられない、そいつがいつも君の位置を叫んでるからな。どこにいても殺されるよ。君のロケーターの発信をたどって、ほとんどどんなものでも使って君を爆破すればいいだけなんだ。君のロケーターはかなり小さい。ある針の先から、他のものと一緒に挿入されたんだ」

「コードネームをアメリア・ライラックという人物がぼくに『たぶん約束』をしてくれたし、その約束を守るつもりだと信じてる。ぼくの居場所がわかるのは彼女だけだ。ぼくのロケーターは彼女だけに同調してるんだ」

「それは確かにその通り。でも、彼女の『たぶん約束』は空っぽだよ、彼女はそれを果たしたいかもしれないけどね。無理だ。我々みたいに『大いなる遺産』にいる人々は、生き証人なんか残すわけにはいかないんだ。多くの場合、それはとても悪い慣行だからね」

「おまえが話したことの中で、どこまでが本当なんだ？」とコンスタンティンが尋ねた。

「四分の一から半分くらい。吊るされるのを逃れるためなら何でも話す。君が望むなら、お望み通りに話を変える」

「多くの地球人が新しい土地の区画を買ったんじゃないのか？」とコンスタンティンが尋ねた。「多くというのはつまり、数千万単位の地球人だろ？ 今日の『観光旅行』のほとんどの人が、できて一日の土地を何千もの顧客のために買うエージェントじゃないのか？ 今日来た人やその他の何百万人が、すでにここの相当部分のために巨額のお金を支払ってるんだろう？」

「まあ、君もわかるだろう、キッシュ。売り込みをかけているときには、ついのめりこんじゃうんだよ」

「そして外部世界からのの接触なんか全くなかったんだろう？ すべて地球人相手に売ったんだ、すべての偽の土地を、真心ならぬ偽心こめて売ったんだろ？」

「外部世界からの接触はあったと思う、うん。いやはや、明日なくなる土地について、99 %はは地球人から強奪してやった。でも外部世界の接触も少しあったと思う。なかったら我々がひどく騙されたことになる。あいつらの中には外部世界の人に見えるのもいたよ、その一部は我々のものに割り込んできたんだ」

「古い詐欺班の人間として、あんたに同情するよ。でも、あんたの苦情はいささか手遅れだな。異星人の住む世界を信じる人なんて、サンダリオティスを信じる人より少ないって知ってるか？」

「少なくなんかない。たくさんいる。十分広まった信念だし、それを基礎に何か建てられるくらいだ。それを使ってたらその日のうちに逃げる必要もなかったかもしれない。次のプロモーション事業は異星人の住む世界に関係したものにするかもしれない」

「この世界でもかなりうまくやったじゃないか」とコンスタンティン。「七千万エーカーくらいは、積み上げればかなりの金額になる。一エーカー一万ドルまではいかなくともね」

「そんなものですむと思うのか、キッシュ。土地を売るのは一回だけだとでも思ってるのか？ 我々をそんな小者だとでも思ってるのか？ これはでっかいヤマだ。そしてアメリア・ライラックが言ったように、君にそれを台無しにさせるわけにはいかない。今、世界的な電子販売を行ってるんだ。つまりは実にすばやい一日限りの取引を何度も販売できるってことだ。結局のところ、この国と土地が明日にはなくなってるんだから、今日それを十二回売っても**何がいけない**？ それがここに存在しなくなるんだから、一回じゃなく十二回存在しなくなったってかまわないだろう」

「『大いなる遺産』の男よ、あんたの目には奇妙な光がある」とコンスタンティン・キッシュが言った。「まったく気に入らないな。あんたの首に輪っかがかかっていて、ぼくの手が縄を握っているのを忘れちゃいけないぜ」

「私はちょっと狂ってるんだ、キッシュ」と首に輪っかの男が言った。「数ヶ月にわたり、ラベンダーの霧の人々の一人で、あれはちょっとばかり狂気を招くんだ。今夜、私が君にしなきゃいけないことを許してくれ」

「このぼくも知らずに数ヶ月、ラベンダーの霧の人だったから、それがぼくにも少し狂気を招いた。今、あんたにしなきゃいけないことを許してくれ」

「実のところ、君が私に危害を加える方法はないんだ」と男が言った。「アメリア・ライラックがしたように、しばらく自分から出て、ここに自分を残す。そして、君が去ったら、また自分に入る。そして、グラン・コルニッシュより速い道を使って、どこへ行っても君より先に着く。私は今、影のマントの幻想と保護の中にいて、君が私を吊るしても影しか吊らない。私は行き、戻る」

「なら、急いで行くがいい」とコンスタンティン。「いずれにせよ、戻ってくるのは首の絞まった体、首が折れた体だぜ、それは確実にそうしておくから。楽しいご帰還を祈るよ。敵意はないよ、旦那。生き証人を残さないというあんたの助言に従うだけ。おっしゃる通り、生き証人を残すのは悪い慣行だからね」

「『死ぬ』前の最後の質問だ、キッシュ」と言う男の目は笑っていた。「というのも本当にこの輪っかで死ぬという、非常にわずかな可能性があるからね。なぜその馬鹿げてかさ

ばるパラシュートを腰に着けてるんだい？」

コンスタンティンは答えた。「わからない。本当にわからないんだ。誰かに言われたから着けてる、それが誰だったかは今、ひどく曖昧なんだ」

そしてコンスタンティンは、男を吊るすために縄を引っぱり、一瞬は幸先良かった。だがすぐにちょっとした困難。男は急なパニックに陥ったが、精神的身体的な抗議で反応した。彼が体の中にまだいるのは疑いなかった。縄が滑車で凍りついた。男は心でそれを操っていた。コンスタンティンの手は縄の上で冷たく凍った。そして争い。数ヶ月、どちらもわずかに心のマント下にいた男二人がそこで戦った。コンスタンティンのほうが有利だった。また死闘の中でわかったように、彼のほうが強い心を持っていた。そして、なんといっても縄を持っているのは彼の手だった。彼はそれを強引に動かし、自由な動きを得て、絞められた男の顔に恐怖と疑念が浮かぶのを見た。コンスタンティンは男を死ぬまで吊るし、男が逃げられなかったと確信した。おそらく、そんなふうに体から出るなんてことはあり得ないのだ。とはいえ、この男はそれを信じてたらしい。コンスタンティンは念のため男の首を折った。

「これで霧の小さな端はしばらく片付いた。さて今度は、大きな端に取り掛からないと。この謎のもう半分に導く遭遇を得るには、次はどこへ行かなきゃいけないのかな？」とコンスタンティン。

彼は古い建物と路地から出て、そして通りで五時の男にぶつかった。

第 9 章

それは午後五時ちょうどのことだったので、運命の時計は時間が終わりへと向かう中、もっと厳密に時を刻むようになっていたのだ。

「貴様、知ってるぞ」と五時の男はコンスタンティン・キッシュの喉をつかんだ。そのつかみ方は、しっかりはしていたが、敵対的ではなかった。男はただコンスタンティンを引き留めて話したかっただけだ。

「貴様、ゲッセマネで、十三の死の木がある庭で一緒だったよな。あのドラマで役を演じてただろう」と男。

「うん、十三面のゲッセマネで一緒だった」とコンスタンティン。

「貴様は祈るべき時に眠った者だ」と 5 時の男が言った。「そして今、我々の身体と魂たる国が滅ぼされる」

「その国ってどれです？」とコンスタンティンが尋ねた。

「サンダリオティスだ。これほど狙われ、滅ぼされる国が他にあるか？ その死を告げる予兆がこれほど多い国が他にあるか？」

「どんな予兆だい、友達？　聞いてなかったよ」とコンスタンティン。

「おお、子牛が話し、葬送曲を歌う。鷲が空中で燃える。猫がフクロウの卵から孵る、などなど。いつものヤツだよ。私は見捨てられたエージェントだ、それでもずっと忠実なエージェントだった。今、私の基盤が打ち殺されようとしてる。それは私の根っこなんだ。それがなければ私は枯れて死ぬ」

「君の基盤とは何だ、誰が君を殺すんだ？」とコンスタンティン。

「サンダリオティスだ。私はその粘土で形作られた。それが私の基盤だ。安っぽい破壊者が彼女を殺す。国や世界が倒れる時、いつも安っぽい破壊者が手を下すんだ」

しかし五時の男自身もそれについて曖昧で、しばらく独り言をつぶやいた。

「十三面の部屋にいた者たちの中には、それが本物だと知らない者もいた」と彼。「貴様も含めて、ただの映画のシーンだと思った者もいた。だがそれは本物であり重要で、そこで世界が量られ、失われたかもしれない。私は一時は愛国者で、愛国者の台詞を覚えた。私は良い愛国者なんだ。貴様が部屋に連れてこられる前だった。それから彼らは私を変え、見捨てられたエージェントの役割を与えた。でも、世界の終わりではすべての役割は同じだ」

彼はしばらく黙り、不安そうで落胆していた。

「サンダリオティスは人が死ぬ価値のある最後の国だ」と五時の男が突然言い、コンスタンティンを驚かせた。彼らは歩いた。

彼らはタルシシュ塔に着いた。デウテロの書によると、これはバベルの塔の正確な模型だ。片方または両方の塔には誤解があった－－「そして世界の最後の日である今日、それ

を正しておくのがよかろう」と五時の男が言った。

「塔は天に届くように設計されて**いない**。塔の先の細り方とセットバックは、原始的な基準で見てもそんな高さに届かないほど低いところから始まっている。塔は天を地上に呼び下ろすために設計され、そのやり方で天に到達するように設計されていた。そして、そのやり方でいつも成功していた。

十三面の時計を持つタルシシュ塔は、あらゆる雷と雷鳴と交信してきた。そして、それ自体が燃える柴だった。いま私が指摘したから思い当たるだろう、あの塔が刈り込まれた柴の形をしていることを？ 古くて愛情深い火で傷つき、斑になり、神聖な知恵が刻まれている。すべての言語で火のメッセージが細かく刻まれている。火の舌が最初に地球にメッセージを携えて降りてきた場所は塔だ。塔は尖らせて調律された山にすぎず、山の火はコミュニケーションの始まりだった。塔の顔の多様さに注目しろ、旦那」

タルシシュ塔の時計にはローマの顔、ギリシャの顔があった。カルタゴの顔、エルサレムの顔、バビロンの顔があった。中国の今より古い文字の漢の顔があった。ダマスクスの顔、アレクサンドリアの顔、塔を与えた者たち自身のタルシシュの顔があった。サンダリオティスの顔、つまりホストの顔があった。サンダリオティスで他所からの来賓を迎えるホストは、いつも塔のサンダリオティスの顔の下で待った。

ヒベルニアのニアルの顔があった。マヤの歪んだ石のモチーフの中米の顔があった。そして、最も新しいコンスタンティノープルの顔があった。

この塔は新しくなかったし、空気でできてもいなかった。それでも、サルデーニャのカリアリという小さな町にはこんなものはなかった。これは古さで覆われた塔だった。

「百世代前、私の祖先が塔のローマの顔の下で死んだ」と五時の男が言った。「だから我々の紋章にはローマの顔のふもとに死者が描かれている。つまらないこと、短剣での争いかなんかだったかな。争いの原因は忘れられた。でも、家族は紋章に古い意匠を好む。

キリストの時代かその近くに書いたストラボンは、イクヌーザのタルシシュ塔を記述した」と五時の男が続けた。「当時のまま、今のまま。ただし、コンスタンティノープルの顔はまだ装飾も奉献もされていなかった。彼は昔の十三を構成していたイリウムの顔について書いたが、それは今はもうない」

塔には時間の緑青が層をなして積もっていた。基部には現代性の波が渦巻いていた。ここに立てば、遅かれ早かれ世界中の人々が通り過ぎるのが見えた。

タルシシュ塔を囲むのはローマ競技場で、十三の主要な通りがそこに通じていた。これらの石畳の通りには非常に古い名前があった。ナポレオンの層は比較的新しい。しかし、全体のエリアには膨大な時間の蓄積があった。

「九世代前、祖先の一人は新しくナポレオン層と名付けられたものに、新しさを与える石畳の監督だった」と五時の男。

ローマ競技場の西には、ネクロスの九十九の泉とその反射池群があった。驚くほど美しかった。確かに、ただの空気と水でできていたし、今朝作られたと信じらる人もいるだろう。そして、ただの石でできていたが、何世紀もの水で打たれた石だった。それに泉の備品の一部は真鍮や鉄ではなく青銅だった。

「いくつかの泉の水はとても古い」と五時の男が言った。「池の魚のいくつかは非常に古い種だ。ローマのハドリアヌス帝が池に放した鯉がいて、ローマ世界で知られていた最も古い品種だった。今、それは世界全体で最も古い品種だ」

泉から顔に水しぶきがかかった。何世紀もの新鮮さがあった。コンスタンティンは

言った。
「魚は古い種かもしれないね。でも、水がどうやって古くなる？ ある場所の水が他の場所の水より少し古いかどうかなんて、誰にわかる？」
「ああそれは、水中ハロゲン化物の結晶パターンで年齢を計算できる」と五時の男。「溶けた鉱物から形成されるハロゲン化塩の結晶の元の形に関係がある。古い水と新しい水の結晶の材料にはわずかな違いがある。形とパターンが違うんだ。結晶は時間の流行に従うんだけれど、これらは古風な形なんだ。
古い部分、中央のクラスターにあるエトルリアの泉がわかるか」と五時の男が言った。「エトルリア人がサンダリオティスの最も初期の植民者の一つだったことはほぼ忘れられている。そこにあるエジプトの泉もわかるだろう。だがエジプトの泉は他の泉のようにはねない。規則的で落ち着いて湧き上がる。心のあり方の違いでこれは説明できる。ここにあるのはすべて様々な伝承を持つ水と岩なんだ」
九十九の泉の北には、キリスト教世界で現存する最古の百殉教者バシリカがあった。イクヌーザ総主教の司教座だったところだ。百の鐘があり、鐘はそれぞれの音色でイクヌーザの人々に知られていた。
九十九の泉の西には、鳥の飛行のような輪郭を持つ壮大なイタリア階段が上へと続いていた。幅百メートル、上りは三百段（だが下りは三百一段。違いは象徴と警告によるものだ。地獄への道は、三百段上り、三百一段下ると言われている。罠から抜け出さず従う者は、さらにどんどん下がりつつ、自分が水平を保っていると思い込むのだ。
階段は塗られたように見える色付きの石でできていたが、時にはそうではなかった。異なる色のガーネット、薔薇色の頁岩、黄色のスレート、古い赤石、緑のトルコ石のブロックだった。
「八十年前、祖父の時代に、イタリア階段は大規模な修理を受けた」と五時の男が言った。「二百万個の新しい石が、壊れたりひどく摩耗した石と交換された。交換された古い石や破片は、都市の西の瘴気の沼に運ばれ、埋め立てられ、さらに積み上げられた。今でもそこは『古い石の野』と呼ばれる」
イタリア階段の広がりには一万のベンチや階段にたむろする者がいて、それは美しい人々のすべてだった。風景としての人間！ そして彼らはサンダリオティスの人々であり、サンダリオティスの風景だった。
コンスタンティン・キッシュと五時の男はベンチに座り、しばらくベンチにたむろする者になった。
「私は見捨てられたエージェントだ。『サンダリオティスの古物保存協会』のエージェントで、人々がこれらの古物や深い過去を気にしなくなったから見捨てられた。かつて繁栄した我々の協会は会員が激減した。最近、古いものへの軽蔑の感情と、安っぽい製品に置き換えたいという願いが導入された。
その感情は『導入された』といま言った。なぜならそれは作為的で異質なものとしてやってきたのであり、私には全く理解できないからだ。この感情は重要な数週間で高まり、私は人々に警告しようとした。でも、量ったり持ったりできない感情をどうやって警告する？　数週間前から、この破壊的な態度が目標日に頂点に達すると知っていたし、それが今日なのも知っていた。そして今朝、溶鉱炉の一吹きのようだった。うちの国を完全に、物理的に破壊したい連中がいる。今日、または今夜が終わる前にそれを行うつもりらしい。まずすべての汁を搾り取る。そして、日の残骸は重さのない破片へと砕け散り、海

に漂う。彼らは我々が決して存在しなかったことにしたいんだ。全く理解できない。貴様はわかるのか？」

「少しだけね、五時の男、ほんの少し」とコンスタンティン。

「十三面の部屋で情熱的な演説をしてこの脅威を伝えようとしたが、警告はすべて無意味な話になった。彼らは私が言おうとしたこと（本当に言ったと思うが、やつらは持っていた何らかの乱雑な仕掛けで私の言葉と音を変えた）のために私を殺すと決めた。すると、誰かが私の代わりに殺された。コルシカンルーレットで死の選択をしばらくもてあそんでいたが、リボルバーのバリレットを誰が回していたかは知らない。私が殺されなかったのは半分残念だ。私の国が今日生き残らなければ、私が生き残りたいなどと思うだろうか？」

「コルシカ島、サルデーニャ島があり、大サンダリオティスがそれ以外何もなかったらどうなるか理解してる？」とコンスタンティンが尋ねた。

「ああ、サンダリオティスを破壊せよという扇動者、憎しみの者たちの地図を見たよ」と五時の男が言った。「おお、それは大きな悪夢、恐ろしい予感だ。サンダリオティスの破壊と消失は我々の国民的叙事詩にあるが、死が来る前には自分の死を理解できないのと同じで理解できない。過去に三つの偉大な国が海に沈み、四番目の偉大な国が将来海に消えるという予言がある。その将来というのが今日か今夜だと信じるか、おまえは？」

「うん、そうかもしれない」とコンスタンティンが言った。「すでにしばらく前に起こってしまったかもしれない。正確な終了日を設定するのは難しい」

「そうだ。我々は地球での自分の滞在期間を誇張しがちだ」と五時の男が言った。「そして我々は自国の年数を、どれほど古くても誇張する。天使から見れば、我々は今朝だけ立派な丘や巣や国を建てた蟻のような存在だ。でも、彼らはその世代で繁栄し、芸術、歴史、宗教、炉辺に強い感情を抱く。蟻はそれに非常に愛国心を持つ。巣や丘の破壊中に蟻を見たことがあるか？ 彼らはパニックに陥る。途方に暮れている。そして、燃える愛国心は我々には聞こえない小さな声で叫ぶ。蟻は自分たちが信じられないほどの古いところで破壊されたと信じているが、でも現実は今朝建てられただけ。サンダリオティスがいつ建てられたと思う、貴様？」

「やっと今朝になってから」とコンスタンティン・キッシュが悲しげに言った。

五時の男はうめき始めた。

「サンダリオティスは見えすらしない敵の前に陥落する。敵たる海に落ちる、でも海自体は我々の敵じゃない。我々は邪悪で異質な火蟻の軍に侵された蟻の丘で、連中は我々に一粒の砂も残さない。数週間、この人々（異質で攻撃的な軍蟻）を感じ、今日、そいつらを至る所で見た。それについて叫ぶと、笑われ、黙れと言われる。でも、これは私の土地。彼らが絶滅させようとする私の母だ。**絶対に**黙らない！ 助けて！ 助けて！ 助けて！ 警察！ 衛兵！ 街の掃除人！ 集まれ！ 攻撃を撃退しろ！ 今、破壊されてる我々の国を守れ！」

五時の男は非常に興奮し、人々が彼の土地、サンダリオティスを盗み、破壊していると叫び続けた。やがて、何らかの役人や公務員が来て彼を連れ去った。

さて、五時の男はどうだろうね？ 古いサンダリオティスがなければ、どうやって彼が古い市民や愛国者でいられた？ 五時の男は最近になって、すべての記憶や化石とともに作られたのか？ 昨日？ 今日？

サンダリオティスの領域が今日になって作られ、それでもすごい古さやその痕跡とともに作られたなら、再び非創造されると何が起こる？ 非創造はスムーズに進だろうむか？

**

コンスタンティン・キッシュはその後、五時半から七時までの夕方に、世界最高の探偵だけがするような多くのことをした。彼は最大の不動産取引に警告を鳴らしたかもしれないが、その夜の支払いまで確信はできなかった。彼は多くのことを解明した。毛一、二本だけをもとに、非常に強くて臭う動物を分析し、報告した。

そして、夕方七時ちょうど、彼はあの『エージェント』ジョン・セフェリーノに遭遇した。ガイドブックの観光客なら誰でも知る、タルシシュ塔のコンスタンティノープルの顔の下、ローマ競技場の真ん中だった。

「昨夜、泥棒たちが何を盗もうとしてると言ったっけね、ちびのコンスタンティンくん？」とセフェリーノが気軽に嘲笑して尋ねた。

「モナコ」とコンスタンティンが陽気に言った。「でも、逃がさなかったぜ。ぼくが阻止した。」

「今夜は、誰を阻止しようとするのかね。気をつけろよ、コンスタンティンくん」とセフェリーノが言った。「これは君にはでかすぎる話だぞ」

「今は大きな丸太の端を探してるんだ、ジョン。どこにあるか知ってる？」

「うん、私が今その上に立ってる。放っておけ。君には大きすぎると言っただろう」

「うわあジョン、好奇心が俄然盛り上がっちゃうよ。これが何なのか絶対につきとめなきゃ」

「じゃ、九時半にラジオのダイヤルをあわせてくれ、君の好奇心を満たすがいい」

「どの局にあわせればいい、ジョン？」

「世界のどの局でも、コンスタンティンくん。全部でやってる」

セフェリーノは野生動物のペースと瞬発力を持っていた。これまでコンスタンティンが知らなかった、ニヤニヤするような獰猛さがあった。そして、すさまじく巨大だった。いまやそれを見すごすのは不可能だったが、これまでコンスタンティンは見過ごしていた。セフェリーノには以前、深みや強さや活力があまりなかった。たぶん、今になって獰猛さの錠剤を飲みはじめただけかも。

「今夜、君は私と夕食の予定だ、コンスタンティンくん」とセフェリーノが言った。「そしてすぐ始める。スターターとしてきのこキッシュはどうだい？」

「そんな前菜もそんなホストも気に入らない。ぼくは選り好みが激しいんだ」

「食べ物を選り好みする権利はある。古い慣習だ。でも、ホストを選り好みはできない。食べ物を選り好みする権利があるのは、君が最後の食事をする死刑囚だからだ。でも、私が君のホストで衛兵でもあり、そこで選り好みはできない。今すぐ気持ちよく来るか、鉄の首輪をつけ、その首輪の後ろ側にあるグリップを私がつかんで引っ立てるか。私の手がどんなに大きいか気づいてたか、キッシュ？ 私が全体的にどれだけ大きいか気づいてた？」

「いや、気づいてないよ、ジョン、今だに気づかない。ぼくから見れば、君は内も外も小さい」

でも、コンスタンティンはイスタンブール出身と言われるエージェント、ジョン・セフェリーノと気持ちよく一緒に行った。彼らはイクヌーザで最高のメッシーナ・ドイツレストランに行った。サーカスからすぐ、バルバロッサ通りの最初の街区にある。この通りはローマ競技場に北から通じる大きな通りだった。

彼らは小さな前室で少し待ち、ワインのタップから赤ワインの小さなグラス、サイドボードからカニ肉とチーズを取った。

セフェリーノは言った。「今、世界の財務屋や銀行家が大急ぎで熱を上げてるところだ。諸国の元帥やその表看板たちもだ。そいつらは大仰な演説を用意してるよ、でも世界の人々は九時半までそれを聞くことはないがね。これは史上最大のハイジャックだ。国の首脳たちは今、同意するか、その首が転がるかだ。でも、その後の新しい国の首脳どもは同意するよ。逃げ道はない」

「なぜ？ どうせ実弾なしの空砲じゃないか」。うまい言い回しだとは思ったが、コンスタンティンはは自分でもそれがどういう意味か確信できなかった。

「空砲なんかじゃない！　弾は**入ってるとも**！」とセフェリーノが激しく叫んだ。「世界は本当にその銃に実弾が入ってると思って行動した方がいい、さもないと世界にはひどいことになる」

口ひげのウェイターがセイウチのような歩き方で彼らをテーブルに案内した。すべては今朝から磨かれたとは思えない磨かれた優雅さの中だった。七人のメイドが七つの磨きブラシで七年かけてもできなかっただろう。

「君は当てずっぽうで言ってるだけだな、ちび探偵くん。私が話してる銃の名前も知らないだろう」とセフェリーノ。

「チボーの魚雷」

「おやおや、じゃあ、本当に知ってるんだな。それにはたくさんの名前があるんだ。でも、その大きな形態的側面やトポロジカルなダイナミズムは全く理解してないだろう。そういう形態的存在はいくつかあるが、すべてとても古い。例えば、その一つはエーゲ海の島になる。それが消え、次に見える時はプレアデスの星。そして、次に見える時は地球の半島かもしれない」

「そういうのはサンダリオティスと同一じゃない」とコンスタンティン。

「もちろん違う」とセフェリーノが同意した。「それは、言うなれば、銃、または魚雷だ。（この神話の領域で頻繁な長さ）全長 450 キロだ。信管がつけられ、弾が入ってる。

ウェイター、四人のゲストがすぐに来るんだ。そして、きのこキッシュで始める。この男はそれに以外に何か前菜を欲しがるかもしれない。そしたらそれもくれてやれ」

おお、なんて過度に文明的で都会的な優雅さ！ 十万夜以上の高級なディナーなしでこんな優雅さが得られるものだろうか？ 有名な美食家ヴァン・ヴェンドゥホウダーは、どのレストランも十万夜（なんだ、たった三百年じゃないか！）以上は最高の優雅さを保てず、鋭さを失うと意見した。だから、世界に本当に古くて本当に優雅なレストランはない（ヴァン・ヴェンドゥホウダーは、輝きと高揚を失ったそんなレストランは壊し、ロバの牧草地に変えるべきだと意見した）。

他の四人のゲストが到着した。サラディンとレジーナ・マルカブ。そしてジュリアン・モラヴィアとアメリア・ライラック。

サラディンが口を開いた。「これは楽しい。昨夜と同じ楽しい仲間だ。どんな運命がこれを仕組んだか、見当もつかんよ。こんな星座が二度起こるとは不可能だと思っていた」

「これは楽しいわね」とレジーナはコンスタンティンにキスした。

「本当に、いちいち針に刺されるとキスも台無しだ」とコンスタンティンが異議を唱えた。「私見ながら、そんなものを混ぜるのは悪い慣習だと思う。素朴で針のない甘いキスの女の子たちはどこへいっちゃったんです？」

「たぶん、みんな何かにはまってしまったのよ、コンスタンティン、わたしの埋葬されていないお宝さん」とレジーナが言った。「副業で針のお金がもらえなかったら、その娘たちもやってけないのよ」

「少なくとも、このディナーの組み合わせは今夜**以降は**二度とないわね」とアメリアがラベンダーの雲の中から話した。「このディナーの後、皿を割るから二度と起こらない。あなたがその皿なのよ、コンスタンティン。コンスタンティン、あたしの愛する人、あたしの補助人生、あなたは人を殺す悪い癖があるのよ、そのせいで永久に拘束されなきゃ。いいえ、あなたはもうあたしたちとお食事はできないの。あたしの焚き火、あなたはもう誰ともお食事できないのよ。

でもみなさん、今は、彼が楽しいディナーの仲間だということは同意するでしょう？ この人の顔に広がるゆっくりした恐怖の紅潮（注入からの不安要素がほんのちょっとそれを助けてるわ）を見て、そして反抗も（そんなものはそこにあっちゃいけないわね）。この人は本当に少年みたいで、あたし大好きなの。最高の夕食には、次の食事までに死ぬメンバーが一人必要だとあたしは思うのよ。それはレストランのメニューにはない特別なソースなの」

「君、自分が通信してるのを**知らない**わけじゃないよね、コンスタンティン？」とサラディンが尋ねた。

（彼らはすでにきのこキッシュを始めていた。コンスタンティンが反対しなかったので、皆それが彼の好きな夕食の前菜だと思った。）

「コンスタンティン、君はすさまじい増幅率で、上司やそれに繋がる者たちに通信してる。君のすべての反応が彼らに届く：手のひらの恐怖の汗、心臓のドキドキ、皮膚全体を這う恐怖、胃腸全体を焦がす不安の渇き。我々は世界インターポールの人々に、これが君からの通信を受ける唯一の方法だと知らせた。効果的だな。君が怖がっていて、彼らも怖がるべきだと伝えてくれる」

「それは他ならぬ私の勝利なんだ」とジュリアン・モラヴィアが言った。「でも、いくつかのグループで力を合わせた。アメリアが君にモニターと送信機を注入した。可愛い男はそれが発信ロケーターだと言ったな。確かにそういう機能もあるが、それ以上だ。そして、レジーナが今、君にバックアップ送信機を注入した。簡単な予防措置で防げるような失敗はいやだからね。君の考えや内なる感情、反応を整えるのを我々が手助けして、君が自分で通信できない時に選択的に独自の強化措置を加えて通信するというのは、ずいぶんと思慮深いだろう？」

「結婚稼業はどんな具合だい、レジーナ？」とコンスタンティンが尋ねた。当然、彼は怖がっていなかった。世界最高の探偵で、最も散漫な事件の一つに取り組んでいるいま、恐怖などという贅沢の余裕はなかった。確かに、手のひらは汗ばみ、心臓は飛び跳ねていた。這う怪物が表面を這い、渇く怪物が胃腸をうろついていた。でも、怖くなかった。

「あらあら、今朝一時間ごとに結婚してたのはわたしじゃないのよ。あれは集中力のない人で、わたしのシミュラクラなの。わたしたちは活動にたくさんのシミュラクラを使うのよ」とレジーナ。

「あの人はシミュラクラなんかじゃなかったぞ」とコンスタンティンが言った。「君自身だったけど、メッキがはげかけていた。彼女にはとても自然な何かがあった、レジーナ（ああ、その自然さは何と限られていることか！）。実に非道徳的で、頭がなく、落ち着きがなかった。あれが君自身だったよ、レジーナ。でも、今の君はシミュラクラに乗っ取ら

れてる。たぶん、君たち全員が」

ジュリアン・モラヴィアが発言した。「アメリアの言う通り、最高の晩餐には最後の食事をするメンバーが必要だな。（ところで、コンスタンティン、今朝、北町で君を困らせたのは私じゃないよ。私のシミュラクラだ。）私は最後の晩餐の専門家だ。とても長い年月にわたり何千もの最後の晩餐に参加した。ゴータマのやつも（あいつは本当に料理にケチばかりつけやがった！ 本当に素晴らしい食事を台無しにしやがった！）。ソクラテス、キリスト、背教者ユリアヌス（彼は公式に自分の兵士に処刑されたんだ、他にどんな説を聞いたにせよ）、さらに—」

「彼は兵士に処刑なんかされてない。今ここにいるだろう。彼はここに来る前、カルト界隈にいたんだ」。誰もコンスタンティンが何を言っているのかわからなかった、ジュリアン以外は。

「—ドラキュラ伯爵の」とジュリアン・モラヴィアが続けた。「おお、あの時のテーブルにヒイラギの木の尖った杭があったら素晴らしいタッチだった！　伯爵が最後の晩餐のメインディッシュとして注文したブラッドプディングはかなり良かった、でも今夜の我々は、それほど想像力のある犠牲者に恵まれていない。ブリストルの絞殺魔の最後の晩餐もあった。おお、実にたくさん！ みんな死ななきゃならなかったんだ、だってあれやこれやの形で余計な手出しをしてきやがったから」

彼らは今、アスピック入りのサーモンに移っていた。コンスタンティンが反対しなかったので、サーモンがきのこキッシュに続いた。

ジョン・セフェリーノが言った。「今夜、君は送信を見られることになるよ、コンスタンティンくん。君は縛られ、足枷をされる。動けず、ほとんど呼吸できない、でも送信は見られる。見られなかったら皮肉が効かなくなるからね。

君のあてずっぽうがまぐれ当たりしたか、いくつかのものに幸運な名をつけたかだろう。それが君の悲しく早すぎる死の主な理由だ。チボーの魚雷の名前まで知ってた。もちろん、正しい名前じゃない、でもその通称となっているニックネームだ。それが本物で、あの天上に本当にあるのだと知るがいい！　サンダリオティスも少し本物だと知るがいい、今夜、崩れて何もなくなるけどな。あの魚雷は世界の心臓に突きつけられた銃だ。そして、史上最大の身代金支払いを強制するのだ」

「空砲だろ、実弾は入ってない」とコンスタンティンが言った。やや大げさに落ち着いて彼は一杯飲んだ—ああ、あの呪われた古風なファレルヌムワインを！　昨夜と同じだった。最高のワインではなかった。

「空砲じゃない、　弾は**入ってるとも**！」とジョン・セフェリーノが激しく叫んだ。

「コンスタンティン、あたしの情熱、ペットちゃん、第二の心」とアメリアがなだめた。「セフェリーノの今のちょっとした怒りはごめんなさいね。このテーブルでは楽しみだけにしましょうよ。あなたの最後の食事を奇妙で本当の逸話で楽しませてあげる、特に空の魚雷の逸話をお話してあげるわね。あたしたちはそれが本当だと知ってるのよ、だってあたしたちはそこに住んでたんですもの」

「それは幻想にすぎないよ」とコンスタンティンが言った。それは向こうが舌を滑らせるのを誘うための釣りだったが、釣り針も釣り糸もあまりなかった。「フォーティアン構築物でしかない。固さ、時には視覚性もある。でも、どちらも空虚な性質でしかないんだ」

「なんだと、十分本物だぞ」とジュリアン・モラヴィアが言った。「これの場合、他の多くのものでもそうだが、非現実の要素は現実と矛盾しない。現実に追加されるんだ。魚雷

（なんて不格好な名前！—でも、独自の祝福された名前は言いたくない）は身体離脱旅行の頻繁な駅だが、それだからといって、立派な体を持つ者が訪れ、住むのは妨げられない。幻想ではある、うん、ただし空に現れるとき（時々ビジュアルになったとき）の外見は、そいつの本当の外見ではまったくないんだ。

フォーティアン構築物ではある、確かに。でもそれだけじゃない。全長 450 キロの反物質のシャフトなんだ、そうとも、接触しただけで地球を完全に消滅させられる。そしてそれを防ぐ方法はない、史上最大の身代金を支払う以外には。でも、それよりはるかにでかいんだぞ、コンスタンティン。地球では島、プレアデスでは星、深宇宙では宇宙船だった。」

「いやいや、そんな話をぼくに売り込もうとしないでくれ。ぼくは中古魚雷商売なんかやってないんだから。あれはただのフォーテアン構築物でしかないし、世界はフォーティアン構築物なんかには、もう興味を失ってるんだ」

サラディン・マルカブが言った。「君だって魚雷に行ったことがあるんだぞ、コンスタンティン。身体離脱旅行でね。レジーナや私、特にアメリア・ライラックと知り合ったのはそこでのことだ。他の人もそうだ。昨夜以前に我々と会ったのはそこだけなんだ」

「いや、地球で知った」とコンスタンティン。

「地球で、いつどこで会ったか言えるかね？」とサラディンが尋ねた。

「言えない」とコンスタンティンが認めた、「そんな記憶の穴があるのは心配ではある」

「じゃあ、あなたの記憶の穴を埋めてあげるわね、コンスタンティン、あたしのもう一つの魂」とアメリア・ライラックが言った。

「この身体離脱旅行の話だがね、それは運動量の法則に逆らってるんだ。広い角度（360 度より少し広い）で離陸し、方向を簡単に変えるんだよ」とテーブルの誰か、またはそのシミュラクラがそれを言っていた。「そして、経過時間ゼロで、そこであれ目的地に着く」

そう、今やコンスタンティンには、メッシーナ・ドイツレストランで一緒にいる人々がすべてシミュラクラで、ここの魚雷（コンスタンティンは今、特別なお許しでその両方に同時にいた）にいるのが一次的な人々に見えた。彼らは、コンスタンティンがチボーの魚雷という俗称でしか知らない、まばゆい直接的な空の島にいて、そこは衝撃的なほど根本的で物質的だった。これらの一次的な人々は、同時にレストランで一緒に食事している人々と同一人物たちではあったが、空の顕現においては比べものにならないほど獰猛だった。彼らは空の動物であり、百万倍の大きさのものでも襲う。

彼らは破壊者だった。彼らは消滅者だった。一緒にいるだけで麻痺するように恐ろしかった。アメリア・ライラックはヴェールの向こう側にいた。ジュリアン・モラヴィアはその不吉な狡猾さを全開にしていた。ジョン・セフェリーノは地球にあるイスタンブールより遠いイスタンブールから来ていた。でも、コンスタンティン・キッシュは魚雷でのことを**思い出した**。そういうものには、もう何度となく会っていたし、それらは地球のほとんどの場面設定より本物だった。そしてここには比肩するもののないほどの貪欲な暴力があった。この場所は**人を生きながらにして食ってしまう**。ここの五人の誰でもコンスタンティン・キッシュを瞬時に食べてしまえる。全長 450 キロのシャフトは、地球を完全に矮小化した。地球の質量の一万五千分の一で、地球を消滅させ、自分はほとんど傷つかない。そのとき、その場所の力が溢れてしまった。

言葉や視覚形式、通常の感覚にまるで対応しないシーケンス（時間シーケンスではないかもしれない、ただの先制攻撃的な状態かもしれない）があった。それなのにそのシーケンスだか、何と呼んでいいかわからない代物は、絶対的な恐怖に満ち満ちていた。それは

狂気の向こう側で明確だった。

（—ただし完全にではなかった。）メッシーナ・ドイツレストランのもう一つの世界から、サラディン・マルカブのフレーズが繰り返された：「君、自分が通信してるのを知らないわけじゃないよね、コンスタンティン？」うん、空の魚雷の身体離脱訪問でも、コンスタンティンはそこで見つけた伝染的で圧倒的な恐怖を通信していた。世界インターポールと世界に。蒸留濃縮された恐怖を通信し（修正されなければ）世界に決定的な恐怖を撒くかもしれない。

その時、コンスタンティンの心に専門的なある点が突き刺さった。世界最高の探偵でいると、鋭いものが絶えず心に突き刺さって突破し手来るので、厄介で危険なのがつらいところだ。通信装置が彼に埋め込まれているなられば、それは彼の体と血のどこかに埋め込まれているはずだ。もし今、空の魚雷に本当にいるなら、これは身体離脱体験だ。だから、空の魚雷からは送信していない。自分は魚雷にはいないんだ。レストランにまだいて、とんでもない詐術まみれの連中五人の心に、心を弄ばれている。心のカモにされているんだ。

そして、不合理なほどの時間がたってから、彼は再びレストランの明晰な自分となっていた。

「ぼくのイノシシはどこだ？」と彼は不機嫌に尋ねた。「これはぼくの最後の晩餐で、すべて最高のもののはず。君たちはみなイノシシを食べてる。ぼくのはどこだ？」

「君はもう食べちゃったんだよ。私たちもほぼ食べ終えるところだ」とジョン・セフェリーノ。

「ぼくはしっかり送信した？」とコンスタンティンが尋ねた。

「素晴らしかったよ」とジュリアン・モラヴィア。「世界はそれが技術的に初のものだと信じる。そして、世界に消滅の恐怖を思い知らせるのに役立つ。九時半の放送ドラマと合わせて、世界に身代金を支払うよう説得できるはずだ」

「みんな準備できたかい？」とジョン・セフェリーノが尋ねた。どうしてこいつはこんなに大きいのに、それがいつも意識されない？ 魚雷への訪問の他のものはすべて偽物かもしれないが、セフェリーノの比類ない獰猛さは本物だった。彼は薄い人間の皮をかぶった野生動物だった。

「待って、待って、食べ終わるまで待って」とアメリアが泣いた。

「君は呆れた飽食屋だ、アメリア」とセフェリーノ。アメリアは本当の飽食漢のように食べ終えた。でもその後、彼女は再びラベンダーの雲を引き寄せ、すべてにおいて完璧になった。

彼らは荷物を持って身支度を調え、勘定を済ませるなど、去る準備をした。コンスタンティンが二人ほど手玉に取るのに十分な隙ができた。こいつは彼に送信機を仕込んだ。なら、何か独自のものも送信させてもらおう。

「そいつは空砲だ、実弾は入ってない！ その銃は撃てない！」と彼は心ですさまじく頑張って通信した。彼は世界インターポールと一般世界にそのメッセージが届き、自分が意図せず送信していた恐怖を多少なりとも打ち消すことを祈った。

「コンスタンティンは十分従順に見えないわよ。何か変だわ」とアメリア。

「従順でない者のために、これを用意してきた」とジョン・セフェリーノが誇った。そしてあたりに不快な雰囲気が漂った。

ジョン・セフェリーノはコンスタンティンの首に鉄の首輪をはめた。彼は巨大な手で首輪の背の取っ手をつかみ、コンスタンティンを立たせた。そして、彼らは夕暮れの通り

へ、ぎこちなさを隠すための派手な楽しいおしゃべりと共に出た。一同はおなじみの道をたどった。

彼らはその日早く「テルトゥリアンの地下牢」と呼ばれた建物にやって来た。今、そこには「地下牢閉鎖。営業終了」の看板がかかっていた。サンダリオティスには錠がないので、彼らはドアを開けて入った。

彼らはコンスタンティンを十三面の部屋に連れていき、十三時の男として前と同じ場所に縛り付けた。同じ首吊り縄を首にかけ、ジョン・セフェリーノは十二時にコンスタンティンが吊るされるように仕掛けをセットした。

「あたし、口にこだわる人なのよ」とアメリアは、野球ボール大のものをコンスタンティンの口に詰めた。それは呼吸と飲み込みを妨げた。すべてを妨げた。アメリアは口をテープで塞ぎ、ボールが飛び出る危険がないようにした。

「ただの小さな爆弾よ、コンスタンティン、あたしの子犬ちゃん。本当に、子犬のように愛してるわよ。信管がついてるし、時間設定もしてあるし、深夜ちょうどにあなたの頭を吹き飛ばすわ」

サラディンとレジーナとジュリアン・モラヴィアもそれぞれにこだわりがあって、コンスタンティンに別々の「虫」を入れた。だが、あまりにも血なまぐさく残酷でここには記述できない。だが、コンスタンティンは深夜に五つのちがった方法で死ぬ。

「九時半にセットが点灯するよ、コンスタンティンくん」とセフェリーノが言った、「君は強請と威嚇と世界恐喝の傑作ドラマを見られる。その芸術性を愛でてくれよな、その目的は賞賛できないにしても。終わったら、せいぜい深夜に死が来るまで好きなように楽しんでくれ」

彼らはみな去り、十三面の部屋の壁でもがくコンスタンティンを残して言った。夜 8 時 45 分頃だった。

第 10 章

これは内省の時間で、送信の時間ではなかった。送信の時間ではない、なぜならコンスタンティンが送信できるのは恐怖と不安だけで、それこそがある日和見主義者どもが、地球すべての民に対して不利な形で積み上げようとしているものだった。

でも、コンスタンティン・キッシュの立場には恐怖と不安の理由が多かった。彼は縛られ、猿ぐつわをされ、かりそめ都市の新しい部分の新しく空になった建物の壁に縛り付けられていたのだ。彼はそれがカボチャ中毒症候群に陥り、すぐに存在しなくなるのではと強く疑っていた。深夜になれば、もし周囲がそれまで持てばの話だが、彼を吊るし、頭を爆破し、言及するには血なまぐさすぎる三つのことをする装置が設置されていて、それがカチカチと時を刻んでいた。

さらに、彼はもはやいつもの自分ではなかった。洗練された針が奇妙な汁と装置を彼に注入していたのだから。現実の検証が必要だったが、それで状況が少しでもまともになるか？　考えを整理し、世界を安定させようとする人間の周りに、これほどの崩れる現実と偽現実が集結したことはなかった。一つの現実は、コンスタンティンが数千メートルの高さにいて、空気と着色物質の緑の粘液の埋め物に止められているということだった。この緑の粘液は、都市や国の新しい部分の重さを支えず、ましてや国なんか支えられない、ただその背後にある持続的で熱狂的な精神だけがそれを支えている。その精神は、ラベンダーの雲の幻想から紡がれた、崩れる粘土の足のようなものだった。

コンスタンティンはこの持続的精神の人々と接触したが、彼らはそれほどイカレてはいなかった。彼らは派手な投影者で制御されたヒステリー屋だったが、新しい国を長く支えられるほどイカレてはいなかった。

コンスタンティンは窒息死しかけていた。息が詰まり、心臓と肺が衰え、四肢と内臓がつっていた。いくつかの異なるせん妄が彼の脳と体の領域を争っていた。

「意識を何とか保つんだ」と彼は自分に叫んだ。「これは事件の事実みたいなものだ」

彼はまだ通信装置を仕込まれた送信者であり、状況評価を試みるこれらの考えも、パニックの考えと同じく外に出ていた。

「空気泡の非物質的な山、形が不規則で 450 キロ以上あり、それが一時的に静かな海（すべて本当に漂う油膜に依る）に乗り、魔法の新しい国、無限の広がりとして提示され、不良たちによって不動産、『世界最後の自由で肥沃な土地』として商品化され、同じ粘液が異なる買い手に何度も不動産として商品化されている。

この非物質的な空気泡の塊はまもなく砕け、崩壊し、その上のすべてが滅ぶ。これは非現実っぽい一つの現実の一部だ。

より高い平面（高いといっても高度だけの話）には、空に漂うビーム、トラバント、ストランボラスがあり、現在、地球の上約 1600 キロにある。このビームにどれだけの物質

があるか、単なる目のビーム、光学的な幻想かは知られていない。ある種の装置にはあり、他の種にはない。時々視認され、時々はされない。こうした『空の蜃気楼』はかなり昔から知られていて、ほとんどは**本当に**蜃気楼と見なされてきた。今、別のならず者集団（膨らんだ空気泡の不動産取引に関わる同じならず者もいる）が、この空のビームを、知的な指揮下で地球やその何パーセントかを破壊できる反物質のシャフトとしてフィクション化しようとしている。これを信じたり提示したりするのは難しいが、ラベンダーの雲の幻想（一種の催眠カルト装置）がそのプレゼンテーションを覆っている。

これが事実だ、侵食されていない事実があるとすればだ。それがこの事件の事実だ：地中海にフォーティアン現象があり、ほとんど人工的（精神と希薄な物質）で、すべてのフォーティアン現象も人工的なものだという可能性もある。そして空に、約 1600 キロの高度に別のフォーティアン現象がある。この両者にはフォーティアン的なつながりがあるかもしれない。でも、こういう代物に現実はない、現実をたぶらかしてるだけだ。

世界インターポール、ぼくのメッセージを受け取り、記録しろ！ 君たちはラベンダーの雲の連中がぼくに仕込んだ送信機と同じくらい洗練された装置を持ってる。ここでのぼくの評価を取り、ぼくの恐怖は受け取るな。でも、このあたりに別のエージェントがいるなら、ここに送ってぼくを救出してくれ」

コンスタンティンは事件の崩れる事実を崩れる言葉で心にまとめ、世界インターポールに少し伝えられたかもと思って、少し気分が良くなった。それが世界インターポールや一般世界に送信されたなら、なおさらすばらしい。

彼は今、以前ほど「世界は時限爆弾」の恐怖を送信していなかった。少なくとも彼をそこに置いたならず者たちが意図したほどではなかった。口に時限爆弾をくわえてむせながら、彼はその恐怖を抑え、代わりに説明を送信しようとした。

十三面の部屋は昼過ぎから大きく変わっていなかった。ネズミがいなくなった、それくらい。たぶんネズミたちは売られたんだろう。部屋の天井にあったパノラマの目は今、死んで空っぽに見えた、大きなカメラはまだそこにあるようで、瞬時に点けられる。あるいは、それも売られたか質に入れられたか。

前と同じく、部屋には光が少なく、その光源ははっきりしなかった。壁の拷問ニッチの上にある蛇の碑文は、ほとんどが眠るかゆっくりうごめいていた。蛇がいないある場所には『ただいま夕食中』と壁に落書きがあったが、蛇よりどっかの冗談屋が書いた可能性が高い。十三の時計の顔のマーカーはとてもゆっくり動いた。九時まであと八分だった。

世界最高の探偵は眠りに落ちた。七、八分休息して眠った。そして、大きな真鍮の声とシンバルの伴奏で目覚めた。

「おお、**なぜ**君はすべてに笑劇を入れたがるんだよ、シャテニェライさん！」と監督が叫んだ。「笑劇の市場はもうなくなってるんだし、どのみち私は破産して店じまいするしかない。今日、財を回復できると思ったのに。多くのビジネスをし、いろんな映画を撮った。集金できれば、すべてチャラでまた走れる。集金できなければ、沈む。シャテニェライ、言っておくがな」（なぜ監督はこっちをいまだにシャテニェライと呼ぶんだろう、そんな名前じゃないのに？）「でかい儲け話をしたがる連中、一兆ドルの取引でこっちを煙に巻くような派手な連中、そういうヤツらは支払いが遅い。気をつけろ！

でも、いまのいい！ そこ、完璧！ 君はいいぞ、シャテニェライ。あんな笑劇的逃避の寸劇は見たことない。今日、『大脱出』映画を撮ってたら、君の演技を使うところだったのに。どこかで今のを入れる。ボードビルが戻ってきて私がその真ん中にいたらなあ。そ

したら君の寸劇を絶対入れる。

口にカチカチ鳴る時限爆弾はすごく気に入ったよ、目を飛び出させ、悶え、絞まるのもいいね。君には本物の哀愁コメディの才能がある。おお、私も君と共に苦しみ、死に、笑おう！ おお、今日早く私を逮捕させた君の道化ぶりも珍しいユーモアだ、フランス人。あんな絶品のユーモアは忘れない。

今日、高揚してた時にタバコや酒をここに忘れていかなかったか見に来たんだ。ああ、自分がもう残り物のカスになったときには、そういう残り物もいいもんなんだ！ 今は破産して店じまい、でも今夜遅く集金できればまた営業だ。でも演技見せてくれる？ 本当にどうやって脱出する？ 革紐がきつく、肉を切り、血が流れ落ちる。脱出なんて不可能そうだけど！ 本物そっくり！ 私はいつも大脱出アーティスト、特にコミックなのが好きなんだ。

おお、君の飛び出した目！ 喉の静脈が飛び出す！ 口の爆弾、見事なタッチだね！ ワオ！ ゆっくりした焦げと煙、名人のタッチだ。君は岩に縛られたプロメテウス、口にリンゴ、豚のよう！ そのリンゴは火の家族の爆発物。うん、君は多くの意味の層を意図した、きっと。偉大なコメディアンはいつもそうだ。

おや、すると脱出を見せてくれないのか。まあね、責めはしないよ。私も前金なしでは見せない、でも今は本当に君を役者として使えないんだ。何もやってないからね。他のプロデューサーや監督に会ったら、君がここで大笑劇の脱出演技をしてると言うよ。じゃあな、シャテニェライ！」

おお、大きな動悸の恐怖！ その真鍮の監督は去り、ドアを閉めた。彼はコンスタンティンを死ぬに任せて去った。その監督は脳みそまで真鍮だった！ コンスタンティンはその午後、彼を一時間かそこら刑務所に送ったことをほとんど後悔した。たぶん彼はそれを恨んだのかも、あるいは真鍮の頭はそれを完全に忘れたかも。監督が一瞬来て、コンスタンティンの脱出の希望を上げなかった方がマシだった。新たな希望の打ち砕かれた絶望は彼を完全にどん底に落とした。深夜までにこの放棄された建物に誰かが偶然来る可能性は？

でもそこで、監督が戻ってきた。

「シャテニェライ、君の演技が気になった！」と彼は真鍮の声で言った。「『あの演技は良すぎる。演技じゃなかったら？』と自問したんだ。演技だよね、シャテ—？ いや、今、演技じゃないとわかった」

だから、監督はコンスタンティンの爆弾を外し、信管を外し、首吊り縄を外し、壁のニッチからストラップを外した。彼を下ろし、元テルトゥリアンの地下牢から出し、その日借りた小さな部屋に連れて行った。傷やかぶれを蜂蜜と油で洗い、気分を良くさせた。

「君は発信してるな」と監督はコンスタンティンを快適にし、彼が試練から回復した時に言った。「私は繊細に調律された楽器のようで、人が発信してるのがわかるんだ。君の同意なく装置が入れられたかもしれない、でも君はそれでうまくやって、ちょっとそれを自分の目的に転用してる。警告を発してる。そしてひょっとすると、君は天秤を傾けてるかもしれない」

「それじゃ不十分なんだ、恐らく」とコンスタンティンが言った。「二つのならず者集団がいて、個人や企業をむしろうとしてるんだ。史上最大の不動産詐欺は、何千ものエージェントに何百万もの人の生涯のお金を、ここに仮の存在しかない一次的な土地に支払わせようとしてる。もう一つのならず者集団（最初の集団と密接に関連していると思う）は、世界全体を破壊の脅威でハイジャックしてる。そして、今夜九時半にすべての局で、惑星

恐喝脅威番組を流して直接人々を強請ろうとしてるんだ。ハゲタカだってのどを詰まらせそうな手口だ」

（コンスタンティンは監督、世界インターポール、世界そのもの、聞いている者すべてに向けて話していた。）

「あまり知られていないが、ハゲタカは簡単にのどを詰まらせるんだ」と監督が言った。「でも、簡単にあきらめない。何度も何度も同じ腐肉に挑み、吐くより一回多く飲み込む。私はハゲタカの持続性の質をいつも賞賛してるんだ。実際、私にもハゲタカの質がたくさんある。

今夜のプレゼンテーション、世界ハイジャックの解説と脅威、私はそれにかなり誇りを持ってるんだぜ。もうすぐ始まる時、クレジットラインに注目してくれよな。私はその監督として載ってる。素材のほとんどは君の言う二重のならず者どもからもらったが、でも私が形にした。特別な芸術作品に変えた。

ゲストを呼んで一緒に見るつもりなんだ。たぶん君は彼を知ってる。すぐ来る。彼は私の才能を大きく補完してくれる、きらめく天才の男なんだ。あ、彼は名人、名人、名人だ！」

「どんな名人？」とコンスタンティンが尋ねた。

「実は、偽造名人なんだ。ここで仕事を終えてイタリアに戻ったが、何かの理由で今日遅くまた戻ってきた。サンダリオティスは拒み難い誘惑者だ。君はシャテニェライさんじゃなくて、コンスタンティン・キッシュ、世界最高の探偵だと言うのか？ おお、なんて損失！ 世界最高の探偵は誰でもなれる、でもシャテニェライのような笑劇の絶妙な才能を持つ者は他にだれがなれる？ あるいはシャテニェライと間違われた君のような才能のあるヤツは？　おお、十三面の部屋での君の最後の演技、飛び出した目、口のリンゴ爆弾、忘れられない。君の中で偉大なコメディアンが失われたんだぞ、キッシュ」

「ありがとう、監督。そして、今、君に聞きたい（でも、悪化する状況でどうやって聞く？）、君はサンダリオティスの市民なのか？」

「私の魂は、うんその通り！」と監督が真鍮の熱意で叫んだ。「でも、肉体は、うーん、ちがうんだな。サンダリオティスは完全な幻想、でも私は完全な幻想でしか落ち着けないんだ。私はそこの市民なんだ。おお、素晴らしい景色、道具、立派なファサード、素晴らしい効果、説得力のある軽やかさ！ 今日は『サンダリオティス効果』を信じる我々にとっては最高の日だ！ 新しい都市の叫ぶ色！ 新しい田園のキラキラした緑の牧草地！ 私はここでのほぼすべての効果に手と頭を使った、明日、ほとんどの効果がなくなるのは残念だ。だが芝居ってのはそういうもんだ。もちろん、他の効果、他の華やかな日も今後出てくるだろう。でも、説得力とスリリングな視覚的スペクタクルという点で、今日に勝るのは難しい」

「イタリアの階段に手と頭を貸したか？」とコンスタンティンが尋ねた。

「話すだけで胸がつまるよ」と監督。「それほど美しい。うん、私が**監督した**。綿菓子はあれよりも百倍物質的だけど、でも綿菓子を食べた者はまた空腹になる。ほとばしる水は百倍硬い、でもそれ飲む者はまたのどが渇く。イタリア階段を楽しんだ者は、階段自体が明日なくなっても、永遠に続く食と飲み物を持つ。今夜、月明かりで見納めをするんだ、私と、実行に大きな役割を果たした来るゲストと、君と。すべての局でかかる恐喝を聞いた後、贅沢に楽しむ。階段の完璧さを損なうものは二つだけ：それが明日なくなること、私の労働の報酬が支払われていないこと。

でも、明日、それらはローマの詩人ホラティウスの世界で（彼はサンダリオティスで数年夏を過ごしたんだ、夏はイタリアより涼しいからね)、『プルビス・エト・ウンブラ』、塵と雲になる。あ、ゲストが来た」

偽造名人アンジェロ・ディ・シアンが、人生では決してない壮大さで監督の質素な部屋に入ってきた。

「探偵のキッシュさん、アンジェロ名人にはもう会った？」と監督が尋ねた。

「会った、依頼もした」とコンスタンティンが言った。「そして、彼がぼくを裏切ったか、またはこれから裏切るつもりじゃないかとにらんでる。彼はぼくと一緒にカタツムリに手を突っ込んだ」

「それが何か問題なのか？」と監督が少し信じられない様子で尋ねた。「偽造名人が裏切るのは自然だ。そして、世界最高の探偵が裏切られるのも自然だ。君たちが、特に君自身が、自分の本性を破るのは望まないはずだろうに。カタツムリはといえば、あれはサンダリオティスだけで、世界のどこにもない習慣なんだよ。裏切り者と裏切られた者が、一緒にカタツムリ料理に手を突っ込むというのは。そしてそれは素早く気づかれない行動であるべきだ。それに気づくなんて、ちょっと無粋じゃないか、キッシュさん。」

「私もそう思う」と偽造名人アンジェロが言った。「ああ、コンスタンティン・キッシュ、でも君が裏切りをそんなに不満そうに受け入れてくれて嬉しいよ。自分が仕事をきっちりやれた気がする。実は、君をならず者どもに売った額は思ったほど多くなかった。彼らも私から思ったほど得られなかったと思う。でも、私は連中にすてきなほど偽りの形を与えてやったし、裏切り行動はまだ完了してない。状況次第では、まだ一つ裏切りアイテムが残ってるかもしれないよ、コンスタンティン・キッシュ。そういう状況にならなかったら、その点でも君を裏切ることにしよう。できることなら、君にその分の埋め合わせを何かしてあげるよ、お金がかからない方法でね」

「じゃ、情報で埋め合わせてくれ、アンジェロ」とコンスタンティン。「まだ未完成の事件を扱ってるんだが、もう未完成のまま判断しなきゃならない。でも、未完成のまま**放置は**したくないし、君は世界インターポールからそれを完成させるよう依頼されてる。今日現れた大きなサンダリオティスに本当の中身は、真偽問わず、あるのか？　それを言うなら魚雷には何か本当の中身があるのか？」

「今日の午後言っただろう、コンスタンティン。サンダリオティスは本物なんだよ、その限られた範囲ではね。だがそれはとても短い範囲で、その先は完全に消える。でも若僧、我々はその来ては去る小さなケーキにフロスティングをかけたんだ！ この華やかなショーの日、偽造で本物のかりそめの土地を本当に覆ったんだ。ありとあらゆる偽造で」

「ありとあらゆる偽造？ 人を偽造したのか？　五時の男もか？」

「人？　もちろん人を偽造した。五時の男？ もちろん偽造だ。彼は我々の作った中でも効果の高いキャラクターの一人で、町でまだ大いに受けているよ。今まさに『五時の男を解放せよ』キャンペーンが起きているくらいだ。私も署名に協力したよ。そんな訴えにはどうしても抵抗できなくてね。ほぼ何もないところから偽造したんだ。わずかな地元の卑しい粘土、それだけを使った。でも、なんて人間的にあいつを偽造したことか！ なんて愛国者！『永遠の真実』の愛好家！（そんな永遠の真実は昨日はなかったし、明日もない。）なんて熱心な古物研究者！ サンダリオティスのまろやかな古い風味にあれほどの感情を抱いてくれるなんて！ あいつは本物と見分けがつかないほどよくできてる」

「じゃ、彼に人間の要素はない？」

「もちろんある。非人間の基盤で人間のキャラクターを偽造する？ 地元の卑しい粘土から作ったと言っただろう。貧しいサルデーニャの労働者だったんだ、それを貧しいサンダリオティスの愛国者、古物研究者に偽造した。『アンジェロの方向決定剤』を脳に注ぎ、それで彼を内側から彫刻したわけだ。そして、うまくいった。正直、コンスタンティン、彼は素晴らしいと思わないか？」

「素晴らしかった、アンジェロ。彼が投獄され、限界を超えて迫害されてる今はそうじゃないかもしれない。どれくらいそんな人を偽造した？」

「ああ、百人ほどだよ。鮮やかなら数はそんなに多くは要らないんだ。疑いを払拭するよう構築された。そんな情熱的な人に会うと『サンダリオティスは実在するはずだ！ この人がその燃える証だ。そんなに愛してるなら本当だ』とみんな言うんだ。百人ほどの人間の偽造に、方向または磁気のオリエンテーションも与えた。最も効果的な場所にいつもいるようにしたんだ。磁石のようなものに引き寄せられ、同様の磁気で注目を集める。

魚雷について話そう。私もそれに取り組んだ。サンダリオティスほど深入りはしていない、仕事が少なかったからね。でも、私の仕事や魚雷のすべては、大きな恐喝が効果を上げるか見るまで保留になっている。売れるかどうかわかるまで成功かどうかわからない。そして魚雷の現実性について、事前に開示してしまったら私の倫理に反する」

「大ハイジャック恐喝プレゼンテーション番組の時間だ」と監督が言った。「そして、すべてが間違えば、これが世界最後の映画になるかもしれない」

「そうは思わない」と偽造名人が言った。「でも、良いものになる。我々の貢献がそれを保証する」

番組が始まった。

**

力、速さ、衝撃、打撃、運動量、獣の獰猛さ、野蛮な攻撃、なんでも半分に切る切り裂く推進力、それが空の魚雷の代弁者が最初に与えた印象だった。これらのクリーチャー（それは人間と非人間の境界をひたすら揺れ動き続けた）は、計算された狂気の破壊者として現れた。すべては焦点の合わない破壊性、狂った無責任さ、杭で固定され自己固定された標的—地球への絶対直接の狙いを示した。クリーチャーのジョン・セフェリーノ（ついに、彼がどれほど大きなクリーチャーかが伝わった）はその脅威であり、恐ろしかった。紫のドラゴネス（あのドラゴンヴェールの下にいるのは、ダイナミックにぽっちゃりしたアメリア・ライラック自身かもしれない、とコンスタンティンは思った）は無慈悲そのものだった。これは即時行動の準備をするアニメのホラーだった。

「ホラー映画界隈ではまだ日本人が最高だ」とコンスタンティンが何か言うために、教育があることを示すために言った。

「日本人は**最高じゃない**」と監督が怒りに満ちた声で叫んだ。「**我々**国際浮遊世界が最高で、今見るこれは史上最高のホラー映画だ。アンジェロと私は日本のホラー映画で仕事もしてきたし、これにも取り組んだから、知ってるんだ。公開戦闘で世界全体を恐喝する生のチ可能性を持っているなんて、他にどんなホラー映画があるというんだ？」

従来の感覚を迂回して心に直接打つ部分が最も壊滅的だった。サブリミナルとハイパーリミナルが最も効果的に得点した。常に続く声が、鋭く傲慢な金属の言葉で脅威を描写し、同じ声のハーモニクスとサブリミナルがその点を叩き込んだ。

地球は一兆ドルの身代金を払わなければ破壊される。あまりにも法外な提案で、どこか

で誰かが効いたら面白がるはずだった。どうやらそうではなかった。これは明確で標的を定めた提案で、提示の仕方は素人臭くなかった。チェックと保証があった。地球は一種の奴隷状態に置かれるが、人々をなだめるために言うならば慈悲深い奴隷状態と呼べる。地球はその制限された状態で今夜からちょうど一年間、銃の下に置かれる。資金の移転は様々な形でなされる。すべて非常にプロフェッショナルな言い回しと提案された実施だった。約十万種類のちがった取りたてが行われ、すべて巨大なものとなる。追跡や記録は抵抗に等しく、厳しく扱われる。

「面倒すぎる」とコンスタンティンが言った。「始まっても一週間も保たない。一年は絶対に保たない。人々はすぐ気づく。時間が敵にまわる」

「**面倒なんかじゃない**」と偽造名人アンジェロが言った。「時間は敵にまわったりしない。むしろ味方する。私はその提案その部分については、私が仕組みを作ったんだし、ちゃんとわかってやってるんだ。今夜あれが受け入れられれば、『保たない』『ボコボコの穴だらけ』『今日はここらで止めておいて、明日よく見直そう』といった留保があっても、今夜どんな条件であれ、あれが受け入れられるなら、永遠に受け入れられることになるんだ。

一日ごとに続けて課すのは簡単だ。『持続催眠効果の指数関数的成長』がわかってないのか？　かつて『成功ほど成功するものはない』という言い伝えがあった。それが我々が扱ってるものなんだ。受け入れ要因は受け入れられる瞬間ごとに強まる。その受け入れから現実が生まれる。地球が魚雷に貢ぐという現実に到達するんだ。

この提案に挑戦するような考えがあるのか、コンスタンティン？ 気をつけろ。君はあの洗練された針で注入されたものすべてを知ってるわけじゃないんだ。まして、針による注入に抵抗するため私の与えた錠剤に何が入っていたかは知るよしもない。君は非常に脆弱なんだ、キッシュ」

そして大波の印象が裸の野蛮さと脅威で押し寄せる中、攻撃の成功の科学的裏付けが整えられ、成功の確率が合理的かつ説得力を持って示された。科学は世界の人々が理解するものだった。感覚を迂回する直感的遭遇の非合理的な攻撃は感情的にしか理解されなかったが、科学的攻撃はほぼ誰もが即座に理解した。そして、その科学的攻撃の数学的実装は、まるで畑からバター付きのコーンの粒をむさぼるようだった。人々はそれに飛びついた。

これは決定的に思えた。コンスタンティンでさえ、魚雷が世界に明確かつ現在の脅威であるという、議論の余地ない、連動した数学的動きに説得されそうだった。彼はそうではないと知っていたが、ほぼ説得されかけた。彼は思った。

「逃げ道はないぞ。証明をどうやって反証する？ 数学的解説は誰にも明確で、他の説明理論を壊滅させる、だから前提を受け入れざるを得ない。ほぼ信じられないほど高いレベルのインチキ誘導がない限り、絶対的な偽造名人がこの数学的プレゼンテーションに関わっていない限り—」とコンスタンティンはそこで言葉を止めた。アンジェロの絶対的な偽造名人の狡猾な笑みを、見たというより感じた。でも、アンジェロの鋭い笑みの刃を感じるほど近くにいなかった数十億の視聴者は？

おお、魚雷は止められない派がポイントで大きくリードしていたが、外部の声やコメントが全会一致を侵食し始めた。どうやって番組のフィルターをすり抜けたんだ？

「実のところ、空のビームは大きくてかなり愚かな動物なんだよ」とどこかから会話の声が番組に出た。「うんもちろん、個人やグループがそれらのどれか一つなら、かなり緩く制御はできる。昔、もっと大胆なスポーツマンはそれらを犬の戦いのように戦わせたもんだ。秘密のアリーナで戦闘が行われ、高額の賭けも行われた。でも、戦い自体は大した

ことなかった。空のビームは闘志がなく、戦闘意欲に欠けるんだ。他の『犬』、他の空のビーム以外には害を与えられない。人間や物質的な対象とは異なるレベルにいるんだよ。

うん、あれは**反物質なんかじゃない**。そんな主張は、誰かが騙されやすい人たちを手玉に取ろうとしてるだけだ。あれは非物質でできてる。反物質とはちがうんだ。非物質は自分以外何も消滅させられないんだよ」

この私的会話の断片のような雑談は、プレゼンテーションに少し混乱を引き起こしたかもしれない。

「ドッグファイトについて、あんなナンセンスを割り込ませたあの声は誰のものだ？」と部屋のアンジェロ・ディシアンが知りたがった。「私はあの声を知ってるはずなんだ」

「ドッグファイトについて、あんな馬鹿げたことを割り込ませたあの声は誰のものだ？」とドラマプレゼンテーション自体のクリーチャー、ジョン・セフェリーノが知りたがった。「私はあの声を知ってるはずだ、実際知ってると思う。あれはもうすぐ死ぬ男の声だ」

そのむきだしの報復の脅威は、叩き落とした頭と同じくらいの背筋を伸ばさせただろう。実際、それは世界最高の探偵のカジュアルな声だったが、どうやって彼はそれを番組プレゼンテーションに投影したんだろう？

ならば大ハイジャック番組の勢いに少しでも減退があったんだろうか？ 空の魚雷が**本当に**反物質で、非物質ではなく、地球を瞬時に消滅させ**かねず**、他の犬や空のビームに害が限定されるものではないことを示すため、数学と科学が再び示された。

プレゼンテーションの**強度**に減退はなかったが、納得の質は少しメッキが剥がれたかもしれない。

そこへ、犬爆弾が番組を襲った。どうやって無許可の声がプレゼンテーションに入った？

「ホーガンのボブスレーがチボーの魚雷にドッグファイトを挑むぞ！」と世界のすべての局で宣言が響いた。背景では小さなアギーたちが笑う、血も凍る音があった。でも、それだけ。

でも、人々に愛される数学の方程式がそんな中断を無傷で耐えられるだろうか？　関連する数学を何度も繰り返すとやりすぎにならないだろうか？ 注意せよ！ また犬爆弾がやって来る。

「シュニトガーの蒸気船がチボーの魚雷にドッグファイトを挑む！」と新しい対決が宣言され、ドイツの学生がビールジョッキにくすくす笑うような音が少しあった。

だがそこでプレゼンテーションは再び勢いを得た、ただしちょっと無理が感じられたかも。鉄の声が『ありのまま』を語ったが、それがありのままを語る鉛の声の寸前まできていた。そして、誰もが次の衝撃を待っていた。どんなに妨害エンジニアが防ごうとしても、もう一つ来る。犬爆弾はいつも三つセットで来る。

「パデレフスキーのイルカがチボーの魚雷にドッグファイトを挑む」と錫の手袋がガチャンと入り、どこかでポーランド人が笑う不気味な音があった。

番組はさらに四十五分の強度で続いた。本当に恐ろしい脅威で終わり、その後の沈黙も恐ろしい反響で満たされた。さて、誰が勝った？

監督、偽造名人アンジェロ、世界最高の探偵コンスタンティン・キッシュはみな、監督の質素な部屋から月明かりの通りへ歩き出した。

「決定はブーイングされる」と監督が言った、「でも、魚雷の人々が勝つだろう、で、世界は屈しなきゃ。魚雷の人々はすべてのラウンドでポイントを獲得し、すべてノックダウンを決めた。犬爆弾は公式スコアにすら入らない」

「魚雷の支持者が勝ったのは間違いないだろう」と偽造名人アンジェロが言った。「だから、しばらくやつらの支配下で生きる。請求金額を払ってくれれば気分がいいんだが。あいつらが世界を締め付けてるってのに、あいつらにどうやって支払いをさせようか？」

**

「うん、グリシュウェル、なんども言ってるように、あれは空砲で銃に実弾は入ってないんです、あの銃は撃てない」とコンスタンティンは売店の電話に話していた。「それをみんなに伝えて、ナンセンスを止めてください。払っちゃだめです。パニックには一切注意を払わないで。あの銃は撃てない！」

そして、彼はグリシュウェルとの電話を切った。

三人はイタリア階段を月明かりで見納めに行った。あと一時間ほどで、イタリア階段はもうそこになくなる。

夜十一時ちょうどだった。

第 11 章

彼らはイタリア階段の三つの大きなベンチにたむろした。月と月明かりの空を見上げ、それは彼らがいる輝かしい広がりと同程度の物質だった。空にチボーの魚雷も見え、誰かがその全長 450 キロにわたって点灯した巨大なビーコンライトがあった。

「魚雷のビーコンは私のアイデアなんだ。恐喝やハイジャックにどんな影響があるかは知らないが、良い見世物だ。私は気に入ってる」と監督

男が通りかかった。彼は、不動産エージェントの主要グループ、世界中の顧客四億のために買いつける十万人が、取引を放棄していると言った。いろんなことが起こりすぎたという。土地が陥没し、人々がそれを通り抜け、偽の土地の下の海に数百、下手をすると数千メートルにわたり叫びながら落下している。そんな事例がたくさん起こると、事業全体がいやな雰囲気になる。大不動産強盗は怪しくなりつつあった。

「どうせ大したことないと思ってたんだよ。仕事はしたが、全く信じてなかった。信じられないほど幼稚だった。唯一の後悔は仕事の報酬を回収できなかったこと。サンダリオティスの大不動産強盗なんて、真面目に受け取れるやつなんかいないだろう？」

「全部偽造だった。それ自体は気にならない、でも実行可能な偽造じゃなかった。話すのも馬鹿げてる」と偽造名人アンジェロ。

「不動産業者たちが最後の最後になって手を引かなかったら、そんなに馬鹿げてた？」とコンスタンティンが尋ねた。「結局のところ、彼らは一日中騙されてた。陥没が一、二時間早く始まって取引が怪しくならなければ、そんなに馬鹿げてただろうか？」とコンスタンティン。

アンジェロは答えた。「うん、もしうまくいってたら馬鹿げてなかった。でも今は馬鹿げてる。うまくいってたら、自分が最初から関わってたと指摘するよ、実際そうだったんだから。失敗しても、我々が取り組んでいなかったらもっと馬鹿げたものになってた。我々なしでは、本当に最後まで馬鹿げたものとなっただろう」

アメリアの『歓びの園スイート』にいた女子の一人が通りかかった。

その娘がコンスタンティンに声をかけた。「あら、こんにちは。あなた、殺されたと思ってたわ。殺されてないのね。あいつらがあなたをだました話で、一つだけあなたが間違ってたところがあるわ。あなたは彼らがモナコを盗むのを止められなかったのよ。あいつらは本当にモナコを盗んだの、でもそれをやりおおせただけでおしまいになっちゃったの。モナコの所有者は全公国を、その百倍の面積を持つサンダリオティスと交換したわけ。取引は完了。物事が崩れ始める前の、最後の本物の取引だった。最後は穴だらけになってたけど、あのモナコの人々は取引から手を引かなかったわ。『百対一なら、土地にいくつか穴があるのも当然』ですって。だから、あなたはモナコが盗まれるのを止められなかったのよ。でも最初のあなたの思いつきは正しかったわ。あいつらはモナコを盗み、今も持っ

てるの。あなたのお友達レジーナ・マルカブが今やモナコの大公妃、でも誰が大公になるかは疑問だけど」

「なぜそのモナコの勝利者たちと一緒じゃないんだい？」とコンスタンティンが尋ねた。

「あらいやよ、あいつらとはみんな縁を切ったわ。とにかく反りが合わなかったの。あいつらに見つかったら今も殺されるわ」

「ぼくたちはサンダリオティスから、少なくとも古いカリアリに降りた方がいいんじゃないの？」とコンスタンティンが尋ねた。「古いカリアリは西に十二街区ほど、谷に下り、下り、下り。そこなら安全。サンダリオティスが消えても、サルデーニャのカリアリは残る」

「そこはあまり当てにしないで。あたし、そこ出身なの。カリアリの人はいつも頭に岩が落ちて死ぬのに悩まされてきたのよ。よそ者たちは、そんなの全部想像だと言ったけど、でも旧市街ではいつも岩がたくさんの人を殺してきたわ。もうすぐまた町にいろんなものが落ちてくるわよ。いつもサンダリオティスから落ちてくるのよ、小さな変化があるたびに」と女子。

「どこかに行った方がいいんじゃないかな。ここは今すぐにも崩れる、ぼくたちと古い海の間には、緑色の空気泡がちょっとあるだけだ。そして空気泡は背後の精神が疲れると必ず溶けてしまうんだ」とコンスタンティン。

「飛行機を待たせてある。最初に揺れが警告してくれると思う。最後の瞬間まで待ちたい。そのほうが劇的だから」と監督。

「いまの高度はどれくらい？」とコンスタンティン。

「かなり高い。1000 メートルだ」とアンジェロが言った。「旧市街よりずっと高い。ここは上演場所、山の上に築かれた都市（そしてその山は何の上にそびえている？）、不動産エージェントの視線の中心、田舎者の目をくらます場所。ここがすべての美しい中心だ。私は自分の役割に誇りを持ってる。これは同じ媒体でのオリジナルがない偉大な偽造だ。でもその壮大なデザインは叙事詩や、各種水中の草原、構造物、洞窟に見られる。これは芸術だ。それを理解できないなら、目を抉り出して脇に置け、その人はこんなものを見る価値がないから」

「少しは理解してる。だから目は取っておくよ」とコンスタンティン。

少年がそこにいるコンスタンティンのベンチにやって来た。

「あなたにメッセージ。マダム・ライラックが言ってました、すぐにまた会えるって、下の深いところ、深い、深い底でって」

「ありがとう」とコンスタンティンが言った。「その約束は守れないといいな」

「あたし、帰るわ」と、かつて『歓楽の庭スイート』にいた娘が言った。「旧市街に降りるわ、落ちなきゃいけないとしてもね。そこまでそんなに遠くない、ただ、そこに続く曲がりくねった景色のいい道が崩れて穴がいっぱい空いてるけど。でも、なんとか降りるわ」

彼女はそこを去った。

イタリアの階段の一部が今、崩れ落ち、人々は叫びながら死へと転落していった。

「どこか安全な場所を探した方がいいんじゃない？　飛行機はどこ？」とコンスタンティン。

「ここより少し上だ。イクヌーザ特別 VIP 空港がこの都市の最高地点なんだ。私はいつもギリギリのところでカットするのが好きだ－－危機感は最高の芸術的効果に絶対必要で、ほかにやり方なんてない－－でも、君が不安なら今すぐ登るけど」

彼らは他の広大な屋外階段を登り始めた。イタリア階段よりずっと高く急で、幅はそれほどなかった。これらは今、穴ぼこだらけで非常に危険だった。でも、監督は気にしないようだったし、アンジェロもだった。

「アンジェロと私は空気泡を突き破らないと思う」と監督。今、彼らは夜の雲と月明かりを登っているようなものだった。「空を歩くのは芸術で、我々は芸術家だ。でも、探偵ならその中を通り抜けて落ちるかもなあ。探偵の技では、本当に薄いところで自分を支えるには足りないと思う」

「ぼくもそう思う」とコンスタンティン。「霧の中を歩くみたいで、霧の切れ目はすべて足元にあって、そもそもどこにも地面がない。あとどれくらい遠く、高い？」

「距離はあまりないし、高さもあと少しだよ。キッシュ、我々が何か戦いに負けたと思うかね、サンダリオティス作りや幻想構築の実験でのことだけど？」と監督

「誰が負けたかわからない。もう一歩間違えればぼくが負ける」とコンスタンティン。

偽造名人アンジェロが割り込んだ。「いや、負けてない。ここには戦いも、計画も、目的もなかった。そういうものは次か、その次の時に鞘から抜かれる。これはすべてちょっとした練習セッション、操作でしかなかった。自分たちに本当に何ができるかの小手調べだ。世界を思うままにできることがわかった。若い不良たちの一部はそれで遊び、拷問を楽しみたがっているが、それは若い者の特権ってやつだ。

でも、もうすぐ我々は世界で本当に何をしたいかを決める、今や、それが実に簡単に手玉に取れるとわかったからね。ほかにまだ不始末は残ってるかね、コンスタンティン？」

コンスタンティンが踏もうとした部分が崩れ、海までずっと空っぽが見えた。彼は別の部分に足を下ろした。

「ぼくのサッサリ車。あれはサンダリオティスのサッサリでどうやって作られた？」

「君のサッサリ車はここにある私のサッサリ飛行機に少し似てる」と監督が言うと、彼らは突然、美しい飛行機のところに着いた、すでに始動し、力強く息づいていた。「こいつらはあまり物質的じゃないんだ。物質ちょっとばかりに精神持続の幻想を注いだものなんだよ。でも、君は車に乗れただろう、そして我々は飛行機に乗れる」

「早く乗ろう。崩れる雲の上を歩くのは死にそうだ」とコンスタンティン。

「サンダリオティスのどの氏族やトーテムに私が属してるか考えたことあるかい、コンスタンティン？」と偽造屋アンジェロが尋ねた。

「ない、ない。イルカとイワシ以外の氏族やトーテムの名前は聞いてない。飛行機に乗って安全に飛び立とう」

「私はライラックかたつむりのトーテムに属してるんだ」とアンジェロが言った。「かたつむりの我々はみな裏切り者だ。君への裏切りの最後の部分は、君が逃げるのを助けるのではなく妨げることなんだ、もしそういう状況になったらね。今、まさにそういう状況だ」

アンジェロはイクヌーザ特別 VIP 空港を構成する空気泡の部分を踏みつけた。その部分が崩れ、コンスタンティン・キッシュは空間に放り出され、落ち、落ち続けた。

他の人々のように叫びながら落ちるはずだったが、なぜか声が出なかった。そして、状況をはっきり考えられなかった。

彼は自問した。「なぜ手が腹を掴んでるんだろう？　この手は一体どうしちゃったんだ？ 死に落ちる間にもっとマシなことをすればいいのに」

でも、手は知っていた。パラシュートを緩め、後ろ（つまり上）に流した。すぐにそれが衝撃的な力で開いた。

「ありがとう、グリシュウェル」とコンスタンティン。彼は生きたまま無限の夜を降下していったが、下がどんな土地か、あるいはもっとありそうなこととして、どんな水か、まだわからなかった。

九十九の泉のいくつかはまだ青銅のノズルから空に跳ねていたが、その水の受け皿はすべて落ち、なくなっていた。美しい中央イクヌーザ市のすべてがそうだった。

「不始末、不始末が残ってる」とコンスタンティンが言った。「下に何があるか目を凝らしながら、その不始末を切りつなげるだろうか？

なぜあの死人はぼくにそっくりで、指紋によりコンスタンティン・キッシュだと同定されたんだろう？ その謎への答えは一つ。実は別人だった。同定されてなかった。でも警官の一人が同定されたと言ったな。アメリア・ライラックが彼の心にそう言うよう入れ知恵したからだ。彼女はちょうどあそこにいたばかりだったんだ、なぜなら彼女がぼくのそっくりさんを殺したからだ。広大な世界インターポールは敵を混乱させるために二人のそっくりさんを事件に配置することがあるから、我々は事件に取り組む二人のそっくりさんだったんだ」

下にあるのは水だった。渦巻き、泡立つ浅瀬の水で、奇妙な中心部があり、ガタガタ音が少なかったが、くぐもった轟音が大きかった。

「我々二人が事件に配置され、どちらも世界最高の探偵とタグ付けされた。じゃ、**どちらが**世界最高の探偵だった？

ぼくだ。私はまだ生きてる、彼は死んでる。

でも、あと何秒、自分はまだ生きてると言えるだろう？」

下のものが少しはっきりしてきた、荒々しくはっきり、と言うべきかもしれない。

「それとマルセイユでアメリアを殺したのに、一時間後に道を下ったところで彼女が生きてたのはどういう話だった？ どうやって本当に－－ああ、ああ、そんなこと考えてる時間がない」

その渦巻き、泡立つ衝突水の範囲の中心に渦があった。渦、激流で、巨大な水の流れがそこになだれ込んでいた。月明かりで色付きの水に見え、いろんな大きさの空気泡がそれに乗っていた。

コンスタンティンはパラシュートのロープを引いて降下の方向を少し制御できた。確かに、渦に突っ込んで溺死することもできるし、浅瀬の水で叩き潰される死を選ぶこともできる。あるいは狙うべきは－－

「それはめっちゃギリギリのチャンスだ。むちゃくちゃに厳しいオッズ。でも、二つの主なもののうち、どっちだ？」

底が（文字通り）抜け始める直前、ベンチで少年が何と言ったっけ？

「マダム・ライラックが言ってた、ほんのすぐにまた会える、深い下、深い深い底で」

「そしてぼくはは会わないぞ！」とコンスタンティンがそれに逆らって叫んだ。「彼女は怪しい (フィッシー)。イルカが魚じゃないのは知ってるが、知るか！　それでも彼女は怪しい」

彼は中央の渦から離れるようロープを引いた。海のライラックの深み、深い底に降りるのを拒否した。

船や人を壊す渦巻き、叩く浅瀬の水があった。他に何？ めちゃくちゃ厳しいオッズ。ああ、そこに少しの固さ、立てるくらいの大きさのものがある。でも、それは道ではあった、危険なギリギリの道で、生き延び、いつか澄んだ水や助けにたどり着けるかもしれない道

だ。もしなんとか－－

そして、オッズは最初に見えたほど厳しくなかった。百対一なんかじゃない。今や、オッズは十対一以下だった。

「チャンスは一度だけ」とコンスタンティン。「唯一の道。ああ、監督、君はギリギリでのカットが好きと言ったな。監督、あんたがここにいるべきだ。本当にギリギリだ。あんたはほかにやり方なんてないと言ったな。ぼくは他のやり方をしたいところだ、でもそれは無理だ」

彼は手が壊れるまでロープを引いた。そして、何とかたどりつかないと－－

「世界最高の探偵なら、十対一のオッズを減らせるはず。確かに、最後の十秒でオッズを減らす方法を見つけないと名折れだ」

彼はまさにその最後の数秒にいた。実際、深夜十二時まであと十秒だった。これは本当にギリギリのカットだ。なんて絶妙な芸術的効果！ 絶対に必要不可欠な危機感！

「オッズを縮めすぎたかも」と彼はそこに突っ込みながらつぶやいた。「今、ちょっと伸ばすことにしよう、運命を弄ぶんだ、わざとしくじるふりをする、芸術的効果のため、危機のために－－そして、本当に本当に最後の一秒でなんとか－－」

エニスコーシー・スウィーニーの
ハルマゲドン三つ

第 1 部

エニスコーシー・スウィーニーの生涯と時代（1894-1984）

1

エニスコーシー・スウィーニーの人生と特徴についてのこの序論的な素描は、ホントは彼をよく知ってる誰かによって書かれるべきだったんだよね。だがその「誰か」って誰だろう？ あいつを本当に良く知っていた人なんていたの？

国の人口の半分くらいの人しかいない。みんなあいつを直感的に理解し、その本質を捉えた。これが最も不可解な点なんだ。人々はあいつを理解したけど、事実関係は全く知らなかったんだ。みんなが知っていたのは、ふわふわした事実の束だけで、それも事実なんかじゃなかった。

でも事実をふるいにかけようとすると、実はあいつのことをほとんど知らないことに気づかされる。わしらの事実は、一般の事実よりも少ない。深く掘り下げるほど、彼のことがわからなくなる。そして、わからなくなるほど彼を好きになる。不思議だね。

いわゆる世間の人がいささか下手くそに言った言葉がある：「あいつを嫌う人でさえ、どこかしらあいつのことが好きなんだ。いや、あいつみたいに世界をひっくり返すのはよくないと思うけど、それでも好きなんだ。世界をぶっ壊すんなら、みんなが好きな誰かにやってもらう方がいいもんな」

エニスコーシー・スウィーニーに世界をぶっ壊すような何かがあるという考えは、出所不明の世間的なイメージだ。事実や「事実」、あるいは**事実そのもの**には、それを裏付けるようなものは何もないんだから。

エニス・スウィーニーは地獄の鉄の扉を開け放ち、世界の変革と破滅を招いた男だったんだろうか？ それとも、その扉はいつも開いていて、彼はそれを閉じようとすることで、それが空いているという事実に注目させたのかな？ そして、こんなふうに入り込んで来る思いつきはどっから来るの？ いったい全体、なぜそれがこんなに優しく穏やかなエニス・スウィーニーと結びつけられたりするの？ なぜ一部の人はこんな入り込んできたものを、真に受けたりするの？

今や、エニスコーシー・スウィーニーの死に際し、人々は二つの同じくらい非合理的な反応に分かれている。

「こんなことはごく最近まで考えられてもいなかった」と半数の人は言う。もう半数の人は「最近まで他のことは**まったく**考えられたことがなかった。これが何十年も続いてき

たものなんだし、その結論こそが、これからのあり方なんだだ。好きだろうが嫌いだろうが、そういうものだ」と主張する。

そして、ごく少数の合理的な少数派だけが、どんな側からもそれを疑問視するんだ。合理的な人々が問えるのはただ「何のこと？ これらはフィクションで、全然ものなんかじゃないよね」ということだけなんだ。

2

このエニスコーシー・スウィーニーの概要の試みは、実験的な文章の助けを借りて行われるべきだったかもしれんね。最初に、読む際にどのサウンドトラックを流し、どのペースで読むべきかを書いとかないと。そしてそのペースで、それに伴う騒音といっしょに読まなきゃいけないことにする。

また、どの匂いを演奏すべきかも書いておかないと。「呼び起こす鼻」や「キーストーン・エフラックス」とか、各種の最適と思われる商業的な匂いのカプセルのどれを使うべきか書いとくわけよ。でも、どんな騒音や匂いを伴奏として推奨すべきか分からないんだよな。スウィーニーってどんな音だった？　ああ、あいつには心地よいガチャガチャ音があった。あいつはどんな匂いだった？　全然匂いがなかったと言う人もいるねえ。

奥さんのメアリー・マーガレットは、あいつがチモシーの干し草みたいな匂いだったと言う。心地よいってことだ。でも、彼女はチモシーの干し草を嗅いだことがあったのか？ いや、ないと思うって言うんだ。じゃあ、なぜそんな比較をしたんだろう？ ただ、あいつがチモシーの干し草みたいな匂いだという気がしただけなんだって。

でもこの素描は伴奏なしで出てきたな。「フォームズ・インコーポレーテッド」のサブリミナルな閃光が形や外見をちらつかせることさえない。

ベロックはかつて、散文の説明の試金石として、ボーライン結びを、図なしで、専門用語やロープの用語を使わずに、名前を知らない人でも迷わず誤解なしに結べるように描写してみろと書いた。試してごらん。

同様に、あるいはもっと厳しい散文の説明の試金石として、エニスコーシーの顔を、見たこともなく楽しんだこともない人に描写するってのはどうかね。あの顔は言葉にしにくいし、言葉以外に何を使う？ エニスコーシーは写真を撮られるのが嫌いだった。その点でまっとうな原始人だった。彼の良い写真は全くなく、彼に似た写真もない。

顔は細くて赤らんでいた。鼻は力強く、くちばし状で、それも猛禽類の鳥じゃなくて、ローマ鼻の水鳥みたい。鼻はいつも皮が剥け、内側から成長し、帯状に剥がれてるかのよう。そして、顔は声と切り離せなかった。声はちょっと聞くだけでも中西部のアイルランド人で、ボストンやニューヨーク、ニューオーリンズのアイルランド人とはぜんぜんちがう。ああ、その速くて細い言葉！ 顔と同じく荒々しく、常に日焼けし、強く、粗野で、ユーモラス。

顔は見た目より大きかった。だって馬の頭のように長い頭の前面からはみ出るくらいいっぱいなんだから。目と唇と鼻孔はかなり薄く、残りは濃い赤に焼けていた。まるでえらく色白な人が、燻され、ビーコン赤の仮面越しに見てるみたい。

頭の髪は黒と黄褐色と赤で、三十歳以降は粗く長い白髪が、冬のコートみたいな髪の束から伸び出てた。ショートホーンの雄牛がたまにそんなロアン色の混ざった毛を持つけど、人間ではめったにない。

ま、未完成の顔ではあった。濃い目の下塗りやプライマーコートはされてたけど（まるで機械に施される錆止め塗料の最初のコートみたいだ）、仕上げ塗りは施されていない顔。

エニスコーシー・スウィーニーはハンサムじゃない男と呼ばれたが、十分にいい男だった。細長い対称性と、部分の配置にバランスの取れた独創性があった。顔立ちの弱い部分はなかったけど、いくつかは見慣れてたものよい目立つ。口は大きく、動きやすい。歯は良く、でかかった。よくニヤリとし、時折微笑んだ。耳はほとんどの顔には大きすぎるけど、彼の記録的な顔にはよく合っていた。耳は毛深く、耳毛周辺が房になってた。

誰かが彼の父親に、息子のエニスが今頃どのくらいでかくなったか尋ねた。「何と比べて？」と父親は聞き返した。冗談やふざけじゃない。このエニスのでかさは何か相互にちぐはぐで、誰もあいつが大きいかどうか言えなかった。でもいつも素早くて、身軽なようだった。本当に重さがあったなら、方向を変える彼のやり方は運動量の法則をいつも破ってたはず。それと通常、あいつの顔には不可解な最終性があったね。まるで他にいくつか顔を考えた挙げ句に、この顔を選んだみたいに。

この「最終性」の顔は老人のものだったのかって？ いや、そうじゃないんだよ、ただしおれはあいつが年表上は年取ってからしか知らないんだけどね。その「最終性」の外見は非常に早くからのもので、まるで幼児期に顔を選んだみたいだそうだよ（この奇妙な印象は複数人から報告されている）。もしあいつに幼児期があったらの話だけど。

あいつの母親が書いてたことだけど、あいつは本当に大人として生まれたんだって。でも最初の数年間は非常に小さい大人だったけど。そして生涯、年齢不詳の大人の顔を持っていた。ほぼ一世紀にわたり、身に着けてた変わらない顔だった。それが唯一の顔だった。

この、あらゆる年表とまったく無縁の不可解な外見は、あいつの不思議なとこだった。「あいつは年老いているか？」との質問には、父親の質問「何と比べて？」がこだまする形でしか応えられない。年齢とでかさは、とにかく他人とは比較にならず、同じ範疇になかった。

死に際に何人かは、あいつがこんな夭逝で、多くの約束が実現しなかったのは残念だと本当に言ったんだよ。でもそう言った連中のほとんどよりもあいつはずっと年上だったんだぜ、その人たちの中にはかなりの歳寄りもいたってのに。でも、歳寄りにせよ若いにせよ、でかいにせよ小さいにせよ、あいつは粗くて磨かれて剥がれる特徴を持つ、とっても善良な少年（でも永遠の少年）だったんだ。

いや、失敗したな。この散文の説明は、あいつの顔と形の描写には似てもにつかないよ。

それでも、エニスコーシー・スウィーニーは世間に知られていた。初めて会う人々でもすぐにあいつだとわかった。あいつのことなんか、聞いたこともないはずなんだけどな。音楽界の数百人、ジャーナリズムや文学界の数十人なら知ってたかも。でも、何百万もの人々がどうやって知った？ 聞いたことのない名前を知り、見たことのない顔をどうやって認識したんだろう？ あいつの町でない町の公演やコンサートで、人々はあいつがだれだかわかり、拍手を送るために割り込んで来る。あいつには、目立たせるスポットライトは必要なかった。剥がれたビーコンの顔は十分に明るいスポットライトだった。なぜ初対面でいつも古い靴のようにしっくりなじめたんだろう、なぜみんなそんな不格好な古い靴に拍手を送ったんだろう？

3

エニスコーシー・スウィーニーが天才じゃないかって疑惑は、知人やその仕事を知る者ほぼ全員によって、断固、そして何度も何度もさらに断固として叩き潰さなきゃいかん話よの。あいつは天才であるには才能が多すぎた。それがショットガンの見方だ。いやまさに、あいつは世にはばかる不器用者だった。不器用者だったことはほぼ疑問の余地はないな、やることすべてにおいて、あいつはいつも面白いし、時には興奮させる不器用者だった。そして仕事と人生のすべてに世にはばかるところがあったんだよ。いつも必要なだけたっぷり空間があった。仕事に使う媒体は他の人とほぼ同じだったけど。でも、他の人がいちばん狭く制約されるところで、エニス・スウィーニーにはいつも十分な空間があったんだ。

「エニスコーシー・スウィーニーと、ある怪物の国と、巨人の部族いくつか、大天使だけが、働くのに十分な空間をいつも持ってる。そして連中にそれができるのは、自分で空間をちょっと持ってくるから」と、ある興行主がスウィーニーの仕事（その時、彼は舞台大道具を造っていた）を見ながら言った。「スウィーニーと巨人と大天使だけが、仕事に必要なすべての色と音を与えられる。スウィーニーと大天使だけが、仕事に与えられた測れない空間を正確に占める。そして、スウィーニーだけが、そんな超自然的な装備と機会を与えられて仕事をしくじるんだ」

「うん、あいつはそんなやつに見えるし、そんなヤツなんだよ」と、ある事業出資者が言った。その人もぶらぶらしていろいろ見ていたんだ。「大天使も同じ大きく緩い特徴、永遠に日焼けした見た目をしてるね」

「大天使を見たことがあるのか？」と興行主が出資者に尋ねた。

「故国で、若い頃、うん、何度か」と出資者が言った。出資者はグレゴール・ナルディス、興行主はエルキュール・リグティーニだ。

そういうわけで、大天使、バロック構造の大建築家のように、スウィーニーには世にはばかる才能が許されたけど、天才じゃなかった。

スウィーニーが聖人だという疑惑は、それ以上にかどうかはわからんが、とにかく叩き潰さなきゃならん。聖人だという疑惑の反証としては、あいつが単に嫌いってだけで、少数の人を追い詰め迫害したことが挙げられる。時には行き過ぎなくらいの金にがめつかったのも反証になるな、ただしそのがめしさは、あいつが目先の金が要るかどうか次第ではあったけどね。あいつの風刺と嘲笑の才能は、相手の皮膚と肉を剥ぎ、骨を砕くほどのもので、それも反証だな。エニスコーシーは、自分がとにかく嫌いな人を、他の誰も好きにならないようにしたんだ。でも、迫害され、つるし上げられるべきやつらもちょっといるだろう。スウィーニーはそいつらを見分ける鋭い感覚を持っていた。ひたすらがめつく金をつかむべき時もある。そして嘲笑を先送りにしたら、そいつは永遠に失われる。

エニスコーシーの聖性疑惑の反証として、あいつが時折歌った六つの騒々しい下品なバラードもある。いやいや、そこらの卑猥なもんじゃないんだよ、これが。ろくでもない、ホント腐りきった代物なんだ。あと、聖人の通例よりも争い方が激しかった。とはいえ、自他共に認める聖人じゃないにしても、確かに超いい奴ではあったよ。ただし —

— どうしても残るし、紋章のような壮絶な獣のように屹立する、エニスコーシーの恐ろしく地獄のような創作「ハルマゲドン・オペラ」とかがあるんだよな。悪魔ですらほと

んどは、こいつらから嫌悪で後ずさりする代物。そいつはどれも、貪欲なまでのすっごい邪悪まみれだった。

でも、スウィーニーが天才で、聖人だという疑惑はまだ死んでない。本人より長生きしてる。それを裏付ける理屈はまだたくさんあったし、エニスコーシーは論理的な男だった。あいつのやったことはあまりにすさまじくグロテスクだから、何かの天才にはちがいないはずだった。

時折、あいつは不器用かつ巨大に大成しちまったし、それも自分の意図に反してのことだった。あいつの行為の一部は、多少なりとも心の平安を保つため、即座に事実から伝説へと仕分けなおさなきゃならない。そして壮絶な一筆を実現するんだが、その理由は実につまらなかったり、何の理由もなかったりしたんだ。

あいつがジャーナリストだかスポーツ記者だったかの時、世界ヘビー級ボクシング王者のタイトル防衛戦向けトレーニングキャンプを取材しに行ったんだ。

「チャンプ、タイミングが少し狂ってるって本当？」とエニスはあいつならではの好意的なからかいで尋ねた。

「リングに入って確かめな」とチャンプが、キャンプにつきものの陽気なハッタリで答えた。そして、華奢なエニスの肩を大きな手でどやして、震撼させた。

「トレーニングのこの時期に、足さばきがイマイチって本当？」とエニスが屈強なチャンピオンに突っ込んだ。

「リングに入って確かめな」とチャンプがけたたましく挑んだ。

「長い休養で、パンチ力が少し落ちたって報告は本当？」とエニスが続けた。

「リングに入って確かめな」とチャンプが大笑いした。そして、チャンプの笑い声に、最初には見なかった何かを見た気がしたとでもいうような、金属音がした。

「うん、うん、わかったよ」とエニスが言うと背が三十センチ高くなったように見えた。以前より少し大きくなったのはまちがいない。だから、エニスコーシーはものの一分でボクサーショーツに着替え、リングに入り、そのチャンプのトレーニングキャンプにつきものの騒々しい笑い声が派手に沸き起こった。ま、スウィーニーは確かに、ほぼ裸で滑稽だったからね。世界で他に類を見ない、えらく面白そうな裸の男だった。

でも、エニスコーシーとチャンプが十六オンスの大きなグローブで対峙した時、二人が並ぶと何かえらく間違ったものがあった。チャンプと、よたよたガタガタのスポーツ記者の対決に、何か間違ったものがあった。とても、とても間違っていた。

スウィーニーは通常、決してたくましい男とは思われてなかった、正確には小さくはないけど、華奢だった。一線を画する男で、何か決まったサイズはない。いつも軽さと素早さがあり、それが大きな体格やサイズとは釣り合わないように思えた。全体のスタイルと動きは、決して大きくない男のものだった。あいつで大きなものは、いつもグロテスクなほどでかかった。ただそれが、あいつ自身のでかさを示すものだったことはないんだ。

だから、エニスコーシー・スウィーニーが世界ヘビー級ボクシングチャンピオンを見下ろすほどでかいというのは、何かとんでもなく間違っていた。チャンピオンは巨人じゃないが、身長 190 センチ、体重 100 キロの立派なサイズで、普通サイズの男に見下ろされるはずはない。その対比はシャレにならなかった。エニスは、そこでの立ち姿からだと、両者が同一縮尺であるなら、身長 210 センチを越え、体重 160 キロじゃなきゃ。加工なしで同じ写真におさまるはずがない。エニスがそんなにでかかったなら、誰かがそれまでに気づいたはず。

その遭遇には強烈に主観的な要素があった。客観的に見るのは不可能に思えた。スパーリングを見た人々の目には何か問題があったに違いない。わしの推測では、二人がそこで立ち、衝突した時、**同じ縮尺じゃなかった**ってことだ。

でも、サイズの差なんて、スピードの差に比べれば屁でもなかった。チャンピオンはいつも手足の速い男とされていたが、エニス・スウィーニーの前ではナマケモノ同然。エニスは意のままにすべての打撃を簡単にブロックした。ハエ取りがハエを捕るみたい。この一件についてかなり気まずい様子だった。それでも、ほとんど果てしなく、こっそり喜んでるみたいだった。

時折、チャンピオンに派手な音のパンチを何発か当てさせた。チャンプのパンチは明らかに、鋭さを失っていなかった、チャンピオンは世紀のパンチャーだった。チャンピオンは怒り始め、パンチはリング全体を揺らしたが、スウィーニーは揺らさなかった。エニスコーシーには全く効かなかったんだ、とはいえすごく赤くなってて、血を流さないパンチはほとんど跡が見えなかったんだけど。効果のなさは、大きな16オンスのグローブの緩衝のせいだけじゃなかった。チャンピオンはこれまで大きなグローブで多くのスパーリングパートナーをのしてきたんだ。

事態はますます間違った方向に進んだ。そして、スウィーニーは偶然にチャンピオンをノックアウトした。「悪意の偶然」と、そこにいた別のスポーツライター。

スウィーニーは、チャンピオンを全く打つつもりはなかったと自分では信じていた。気ままに打撃をブロックし、気ままに打撃を受け、その間に目にもとまらぬ手の動きでチャンピオンにフェイントをかけ、肝を冷やさせていた。そしてその、目にもとまらぬ手の動きが少し前に出すぎた。するとチャンピオンは、誰も見たことないほど完全にノックアウトされた男となった。そして、エニスコーシーは、同時に、最も気まずく最も大喜びの男となった。

エニスは即座に、チャンピオンを殺しちゃったかと恐れたが、それは一秒だけだった。その後エニスは、もしチャンピオンを殺したとしても、同じくらい簡単にまた生き返らせられるという感覚にとらわれたようだった。

そこにいた働きもののスポーツライターで元ファイターのナット・バウムガードナーは、その災厄後にスウィーニーの隣に立ち、自分たちが同じ身長（ナフは身長180センチちょうど）で、スウィーニーがずっと華奢（ナットは当時95キロ）だと分かったと言った。

うん、でも数秒前はそうじゃなかったんだよ。

この災厄だかいたずらだかには、他に二つ異常な要素があった。最初、現場のほぼ全員が、チャンピオンが死んだと信じた。でもそこで、ぎりぎり命を取り留めたと分かった。それでも頭蓋骨が砕け、顎が明らかにつぶれ、まるでひしゃげた段ボールみたいに見えた。チャンピオンの顔から、白くてギザギザの骨が突き出していて、それは顎の骨や側頭骨の砕けた一部だった。

でも二、三秒後、頭蓋骨はそれほど砕けて見えず、顎もそれほどひどく潰れていないようだった。そして、骨も突き出していなかった。あれはただの錯覚だったんだ。

まもなくチャンピオンは大丈夫に見えた。それから目を開け、本当に大丈夫だった。

エニスコーシーが謝罪した。「えらく気まずい状況ですね。本当にすみません。完全に悔い改めますよ」

チャンピオンはまだ顎をさすっていた。「いやエニス、おまえ完全には悔いてないだろう。ブレンドだ、9対1」

「9と1？」とエニスが尋ねた。

「うん。悔いと恥が九。それがコーン、コーンウイスキー。でも残りの一は、このすべてについてのあんたの密かな喜びで、しかもそれがかなり濃厚に出てる。最後の一の部分は全体の風味を出すライウイスキーだ。良いブレンドで、良いドリンクだよ。あんたはわざとかったな、エニス。チャンピオンをノックアウトしたかった。そして、あんたは十分に求めるものは必ず手に入れる。いつも。どうやってかは知らんが。自分では知ってるのか？」

「いや、知らない。自分でも知らないし、私がいつもやってきたのをあなたがどうやって知ったかもわからない。さて、どうやって元に戻しましょうか？」

チャンピオンが言った。「無理だろ。おれは話さない、あんたも話さない。でも、ここには他に人がいて、みんなノックアウトが起きたのを見たと思ってる。黙らせる方法はない。だが、混乱はさせられる」

エニスは答えた。「うん、それはできるだろうね。こっちがそうしたいなら、その話が文字通りには信じられないようになると思う。ナットの話（彼は正直な記者だ）でも、少なくとも片足は伝説の柔らかい泥に突っ込んだ状態になるかもしれない」

そして、その話は結局その通りになった。半分伝説、半分はあり得ない話として割り引かれた。でも奇妙な伝説として、かなりの年月、実際には数十年続いた。その話は、うかつに飲み込むには耐えられない。横になってそんな伝説を飲み込むと、むせるかもしれない。

スウィーニーは少年時代の願いを一つ叶えられた、世界ヘビー級チャンピオンをノックアウトするってやつだ。それもきれいに決定的に、象をほぼ倒すような驚異的な一撃で。それが叶った。話がどうなろうと、それが起きた時は本当で、誰もスウィーニーからその満足を奪えなかった。

ちなみに言っておくと、スウィーニーは少年時代の**すべての**願いを叶えられたか、なんらかの手で勝ち取った、人々の名鑑で全くユニークなことだ。

でも、彼の少年時代の願いがかなうにあたっては、世界の他の流れに多くの暴力が生じることんあった。時には、成就の過程で世界はかなり大きく脱線したこともある。そこで、いきなり次の問題が出てくる。

そもそも、ここでいったい何が起こってたんだ？

この質問は、様々な形で、エニスコーシー・スウィーニーの反響の大きい生涯すべての年にこだまする ことになる。

4

才能が多すぎて天才になれない？ そんなことってあるの？ エニス・スウィーニーが持っていたのは、焦点のずれた才能ばっかだった。スポーツライターとしては、怪しげな天才より少し下くらい。うん、書く記事は色鮮やかで興奮を誘うものではあったよ。記事はしばしば、描写する出来事そのものよりもずっと面白かった。えもスウィーニーは、働く天才スポーツライターが決して犯さないような、とんでもない失敗を何度も犯した。問題のイベントで誰が**勝ったか**を述べ忘れた記事を何度も書いたりした。それって、そもそもの記事の意味がないだろ？

その通りだ。でも、エニスがその失敗を犯したのは、取材した何百ものイベントのうち、

わずか十二回だけだった。しかも各ケースとも強い理由があっての省略だった。理由はいつも、エニスがあまりにも深く関わりすぎて、抜け出すのに他の方法がなかったことだ。その少数のとんでもないケースで、誰が勝ったかを書いていたら、それは偏向した結果、不当に影響された結果になっていただろう。

エニスの活発な心には多くの奇癖があって、最も奇妙なものの一つは、自分が結果に影響を左右できると信じていたこと、つまり勝てと望むことで好きなチームや出場者を**勝たせられる**と信じていたことだ。自分の持つ力からすれば、自分が少しでも望んだら不公平になるのを知っていた。だからすべての偏見を心から排除し、誰が勝つかは全く意に介さないように努力した。いくつかのケースでは、彼はスポーツのこの側面を完全に心から排除し、試合が終わったとき、誰が**実際に**勝ったかを本当に覚えていなかった。覚えてないし、誰かに尋ねるのも恥ずかしかった。だから散文の大砲を撃ち鳴らし、その説明の雷と稲妻で「結局誰が勝った？」というつまらない細部を重要でないように見せようとしたんだ。

そして、他のいくつかのケースでは、エニスは本当にそれが自分次第と感じていた。物事の運命とあまりにも絡み合い、決定的な要素となっていた。一方の側が勝ったとあいつが書けば、その側が**本当に**勝っていただろう。もう一方が勝ったと書けば、そうなっていただろう。だからあいつは結果を省略して、バカみたいだった。そして運命は、チラチラ後ろを見てあいつが干渉しないと確信してから、いつもの不公平さで物事を決めたんだ。ただそれはスウィーニーの要素なしで進められたってこと。

そう、そう、エニス・スウィーニーは七つの悪魔のように変テコだった。そしてその変テコさを私利私欲のために活用しようと大金を賭ける人々さえいた。

5

エニス・スウィーニーは、確かにフルート奏者としては本物の天才を持っていたけど、フルートって分野はいささか狭く、大して重要でないと思われてるよな。みんな「魔笛」を忘れたのかねえ？　あらゆるフルートは魔笛なんだぜ？　あいつはあらゆる楽器でとても優秀だった。笑いものになると思って、みんなあいつが世界最高の口琴奏者であり世界最高の音楽ノコギリ奏者だったと言うのをためらう。そういう楽器の天才だと言いたがらないんだ。でも、それまで誰も天才じゃなかった分野で天才になる方が、先人が山ほどいる分野での天才より注目に値しないか？

エニスは、芸術家の中でも最も創造的な漫画家としては、天才に近かった。本物の天才と偉大さを逃したのは、殺しの本能が欠けていたからだと言うね。あれは漫画の分野だと、実例を挙げられる他のどの分野よりも必須だからね。

漫画ってのはすべて、直接的な残酷さがあるか、昇華された残酷さがあるんだ。でもエニス・スウィーニーはどっちもできなかった。現実世界にはほぼ常に優しさと穏やかさ、ほぼ完全な平和のゆったりした雰囲気があるけど、漫画やコミックストリップの世界にはそれがない。漫画の世界ってのは、気難しい巨人の世界だ。

エニスは七十年間にわたる、あらゆる偉大なコミックストリップ作家と親しい友人で、その連中が作り上げた陰気な世界がどれほど恐ろしいまでに本物か知っていた。でも、あいつは何やらじわじわと、そいつらの作品に恐怖と厳しさを浸透させていったんだよ。だってエニスは他の人と同じく漫画家に対しても、強い影響を与えたからね。漫画家はみ

な、あいつの暗いビジョンから大量に拝借してるんだ。

でも、気難しい巨人の世界は他もあるよな。グランドオペラ、ドラマやメロドラマ、ボードビルやバラエティ、楽隊やオーケストラ音楽の世界とか。サーカスやカーニバルの世界もそうだし、競技スポーツも、ギャラリーアートも。サイレント映画のパントマイムの世界も同様。

でも、トーキー映画の世界はちょっと違うんだ。あれは気難しい小人の世界なんだよ。大衆小説は、気難しい不均衡な人々の世界で、いささか小人的、時に巨人化するわけ。

でも、こういう分野はすべて、傑出した仕事をするには殺しの本能が必要で、エニス・スウィーニーにはそれが全くなかった。それでも、これらの分野すべてで天才に近いと評された。そしてどの分野でも、少なくとも一度は、未踏の道で、得体の知れない、異常で、文句なしの天才扱いされてるんだ。

でも、世界はエニスコーシーをなかなか天才と認めず、というか未だに認めていない。どの分野でもあいつは真似っこがうまいだけで、次から次へと各種分野で、天才を模倣して超越しただけと言わんばかり。でもやったことすべて、単なるおふざけでやってたんだから、真面目な賞賛なんか与えられないでしょ、というわけかね？

（ああ、殺しの本能がないあいつ、決して何も傷つけない優しい男が、地獄の鉄の扉を開け、そこにあった本当に恐ろしいものをすべて招き入れ、わしらと入り混じるよう招いた時、あいつはふざけていたのかね？）

エニスは、ブロードウェイ最高で、持続的で、最も喚起力のある芝居の一つ「大恐慌」を脚本したんだ。あれはその力と情熱、多様なユーモアとキャラクターの面で、まさに煉獄そのものだったな。本物の貧困の陽気さと地獄性の組み合わせ、そのすべての派手な楽しさ、堕落した苦しみの描写として、あれ以上のものはなかった。ロシアの小説やディケンズの描く英国でも、あの作品の半分くらいには届くものはあるけれど、規模はずっとしょぼいし、あんな見事な貧相さは出せてない。あれは本物の「乞食のオペラ」、偉大な逆転のインチキ、「もし我々が貧しかったら」という詐術を、溢れる活力で実行したものだった。そして問題は、エニスコーシーがどうやってそんなことを知り、作り上げられたのか、さらに何から作ったのかってことだ。あいつは貧乏だったことなんかないし、貧乏な知り合いもいないし、せいぜい貧乏だった人を知っているような、外国からきたすごい年寄りしか知らなかったんだから。

その劇はいまだに（というのも五十五年後もまだ上演されているんだから）断固として邪悪でだことして残酷だ。まるっきり不誠実だ。とんでもなく堕落してる。まったくもって笑える。でも、まちがいなく天才ぶりは発揮されてる。

エニスコーシーは、世紀の偉大なオペラサイクル、ティレニア三部作を作曲した。グランドオペラが一世紀半前に発明されたのは、この偉大な作品に成熟した媒体を与えるためだったのかもしれんな。すごい作品だが、最悪だ。その笑いには硫黄が多すぎて、歌手は全員歯が黄色くなるとか。この三部作の各部分は、『ハルマゲドン I』、『ハルマゲドン II』、そして最近上演された『ハルマゲドン III』で、これは堕落と残酷の化身なんだ。

「世界がこれを生き延びられるかどうかわからない」と、今月初めに初演の批評家が書いた。そして、本当にわからん。こんな貪欲なみんなの間をうろついてるってのに、世界がいつもの道を続けられるはずもない。

この『ハルマゲドン III』は「なんと世界より大きな腐った花！」という副題になってる。初演の観客の一割が自らを破壊し、その後の鑑賞や視聴による自滅者の割合は今約

7％まで下がったが、それでもかなり深刻だ。このオペラは世界を食い尽くす肉食の花なんだ。そして、その致命的な影響範囲はいまだに見当もつかないんだ。

オペラとして、恐ろしいコミックオペラとしてすら、これら頂点に立つ、殺人と破壊の長辺三作には何物も比肩できない。あらゆる宇宙で、ティレニア三部作みたいなものを作曲できそうなのはたった二人、悪魔とエニスコーシー・スウィーニーだけだ。そして、悪魔にそれができたかはちょっとあやしい。あいつはあそこまでの水準に高められるほどの音楽的、劇的、宇宙的な洗練がないからなあ。エニス・スウィーニー以外の人間が、こんな邪悪と恐怖を築いたなんて、あり得るもんかね？

しかし当のスウィーニー自身は、「大恐慌」と「ティレニア三部作」は身代わりのヤギだと言ってるんだ。

「おいらはそれらを作ったよ。そして、荷を積んだ羊のように荒野に追いやってやったんだぜ。すべての怒りがそれらとその荷に落ちかかりますように！ でも、世界自体ではそういうものが起こりませんように！ そういうものがおいらたちから遠ざかれるものなら、おお主よ、遠ざからせてくださいよ！」

でも身代わりヤギの小細工は逆効果だった。誰もそんな忌まわしい出来事をそれまで聞いたことがなかった。でも、スウィーニーがそんなものの存在を広めちまったもんで、それをめぐって変態カルトが育っちまったた。そして、「恐怖のための恐怖」カルトは今や、世界で最も恐ろしいものだ。ああ、しかもそれがすさまじくでかい集団になってて、今じゃ数百万人規模なんだ。

身代わりヤギは、スウィーニー特製紋章の四分の一を成す「ヤギ」であり、数秘学者や数学者が解いた奇妙な方程式の四分の一象限でもある。四象限は、人（一部の作品でエニスコーシー・スウィーニーとされる）、ヤギ、コウイカ、キノコ畑。実に秘教的だ！

6

天才でないにせよ、エニスコーシー・スウィーニーは少なくともそれより偉大な存在、聖人じゃなかったの？ エニス自身は、聖人**でない**やつなんて、すべておじゃんにしたんだと信じていた。エニスは決して完全にはおじゃんにしなかった。そして、見かけほどおじゃんに近づくこともなかった。すべての地獄めいたものの案内人でありながら、一方で世界で最も親切な人でありながら、あいつはどっちの側でもおじゃんにはしなかった。どこかでなんか間違えてるはずで、あいつもなんか混乱があったと好意的に解釈すべきかもな。

でも、あんな耳の聖人なんているか？　あんなハト足の歩き方で、キロメートルや海里、パーセクを踏破する聖人なんかいるか？　日差しの極度に少ない冬に、いつも日焼けして皮が剥ける聖人なんているか？　蛇みたく脱皮する聖人なんているか？

あいつは、空前の最も脅威的で巨大な悪を生み出したかもしれんが、すげえいい奴だったんだぜ。だから、彼は末日、つまりは世界の破壊の先駆者だったんだ。それでもあいつ、大した奴だっただろ？

「彼と同じ部屋にいるのは楽しい」と、世界で最も有名な政治家の一人は言ってるよ。「彼と同じ世界に、同じ創造物の中にいるのは楽しい。彼はすべてに明晰な活力を注入する、非常に独特な注入の道具だ。彼はすべてを良くする。世界全体を良くする」

だから、もう一度繰り返そう――

── そもそもここで何が起こってたんだ！

その質問は、さっきも言ったけど、あいつの回廊に永遠にこだまするだろう。

7

しかし、エニスコーシー・スウィーニーが傑出しなかった活動や職業の一覧も長いんだ。あいつは新聞や雑誌の記者としては、実のところ優れちゃいなかった。とはいえ他のどの職業よりも長く、誰もが可能だと思わなかったほど長く記者を続けたがね。

うん、記事では止めどきってもんがわかってなかった。そして、デスクはあいつの記事を切っても、完全に切り捨てられたか確信できなかった。エニスは、どこかに記録されていなければ、**すべてを**記録に残すのが不可欠と信じてたんだ。物事がどこかに記録されるまで、本当には起こってないと言うんだよ。

些細な話をカットしようとした編集者にはこう言った。「全部残さなきゃ、世界全部。誰も記録してないんなら、おいらが**どうしても**残さなきゃ。おいらの記事をカットしたらどういうことになるか分からない？」

編集者が言った。「わからんね。雑草取りだ。雑草も含めて世界全部を残さなきゃいけないわけ？」

「そう、その通り。勤務中で、その媒体で働いてるなら、うん、雑草も含めて全部残さなきゃ」

「おまえ何なんだ、記録の天使か？」

「その一人だよ、サム、その一人。うちらは一大部門なのは知ってるだろ。『記録の天使』が単数なのは編集上の話でしかない」。編集者はあいつが比喩的に話してると思った。そうだったかもね。

でもあいつの記事からカットされた部分は、新聞や雑誌の他の場所に現れ続けた。そういう断片は「何でも売ります」広告や、雑誌の筋肉増強剤広告の中に、「 から続く」タグなしで現れたりするんだ。そして、エニスはそれがどうやってそこに現れたか知らないと嘘をついた。この件についてはかなり病的なこともあったよ。

「でも、全部残さなきゃ」とあいつは固執するんだ。

「なぜ？？？」と多くの編集者の一人が花火のような声で吠えた。

「もしそれが必須で、全部残さなかったら、**あんたにも**分かる」とエニスは謎めかして言った。

実は当人も理解してなかったんだけどね、ときにあいつが書き残さないといけない大きな塊があって、そうしないと何か崩れるんだよ。あれは強い衝動に駆られると抑えがきかなくなる記者で、良い記者になることはほぼなかった。編集者たちは恥ずかしい扱いをして、他の分野でのあいつの名声や偉大さを知らないようだった。なぜあいつが週三十ドルの記者仕事（一九六〇年以降は四〇ドル）に戻り続けたかは謎だった。メトロポリタン・オペラハウスで監督すれば五割増し稼げたのにねえ。

あとエニス・スウィーニーは、いい事業家じゃなかった。とはいえときどきごく短期間だけは、すごいと言われることはあったけど。生涯で十二回、独立事業に乗り出したよ。カーニバルの所有者兼経営者、サイレント映画製作者、新聞発行人、自動車製造者、競馬場所有者、美術商、都市間鉄道の建設者、ホテル所有者、演劇プロデューサー、自動ピアノや手回しオルガンの製造者、Ｉリーグ三つの野球フランチャイズ運営者、農機具製造者。

どの事業でも、エニスは素早く大金を稼いだ。そしてどの事業でも、一年ほど疑念が渦巻く低迷の時期を経験した。その後、いつもその事業を鮮やかに売却した。

エニスコーシー・スウィーニーが本当に悪い事業家だと新オーナーが発見するのは、あいつが事業を手放した後だったんだ。どの事業もあいつが手放した後はボロボロだったからね。でも書類上は決してボロボロには見えなかったし、書類もまるで偽造されていなかった。誰もエニスを詐欺で非難したことはないし、そんなことができるヤツじゃなかった。それでも見かけ上は繁盛したビジネスを買った人々は、確かに火傷をすることになった。

要するに、エニスは事業にしばらくは活力を吹き込めたってだけの話で、おかげで事業は繁盛したんだ。そしてその活気が抜けると、空っぽの殻になった。でもよい事業家なら、そんな活力がどうだろうと事業をを健全に運営できる。

いずれにしても、エニスは六歳にして最初にシカゴのブラックウォーター通りで雑誌や新聞を売り始めた時から、いつも手元不如意にはならなかったんだ。そしてその後は全世界に売りさばいたようだった。

あとエニス・スウィーニーはいい預言者じゃなかった。実際に何かが起きた後でもまともな預言ができないんだからな。ほとんどの人は、その主題が終わった後なら、いい預言者になれるってのに。エニスはそうじゃなかった。

あいつの時系列、時間の流れには何だか変なところがあったんだよ、予言に限った話じゃないけど。あいつにとっては、物事がもう起きたかどうかはまさに問題じゃないようだった。でも、この奇妙な切り離しを他人には説明できなかった。

エニスはこう言ったもんだ。「出来事ってのは、箱とかの幾何学的物体みたいなものなんだ。どっち側から見てもほぼ同じはずだろ。南側（過去）、東側（現在）、西側（もう一つの現在）、北側（未来）から見るとしよう。視点ごとにちょっと違って見えるけど、大きくは違わないだろ。別の見方にたどりついたからって、元の見方を拒絶しちゃいけないよ。どれもすべて等しくその一部なんだから」

エニスは、自分が起こると思うことと、すでに起こったことを切り離せなかった。そして、しばしばその二つは正反対だった。ダメな予測屋、ダメな預言者だったよ、あいつは。時折、「この年は前に生きた：この年は知ってる」と言うんだ。そして、自分が確かにその年について予見できてると示すような例をいろいろ挙げるんだ。でもそこで、でっかい出来事でヘマをする：完全に間違えるんだよ。ひどい預言者だったね、または人によっては、ただの頑固な冗談屋だと思ってたよ。

8

エニスコーシー・スウィーニーの人生と手紙を時系列に順序立てようとしても無駄だね、とにかく時系列の仕組みに合わない生き物だったんだから。母親は、エニスは実はえらく小さな大人として生まれ、一世紀の相当部分にわたり、大人としてちょっと変化しただけの状態を続けたと言ったよ。日付と同じく、あいつは大きさとも無縁の存在だったな。本当に大して大きくなったりしなかったみたいだ。そして他の人々と同じく継続的な年を生き抜いたかもしれないが、過ぎゆく時間をえらく雑に扱って、すべての記録をごっちゃにして、それが豊穣な混沌となり多くの立派なものがそこから引っ張り出せるんだけど、でもその引き出す順番はむちゃくちゃだ。日付は推測はできるが、正確な日付はわか

らないんだ。

少年時代から、エニス・スウィーニーはすべての手紙のコピーを保管し続けた。うん、それには確かに決まったやり方があった。それらを一列に並んだでかい木製トランクに保存していて、各トランクは最終的に140キロ以上のオニオンスキンペーパーの書き物やタイプを擁するものとなった。主に手紙だったけど、時折つけてた日記もあったよ。その日記がどうなったかは不明だけど、しばしば非常に親密な中身で、当人自身以外に読ませるつもりはなかったようだ。とはいえトランクにあるのはそれらの断片的なカーボン紙のコピーだけで、原本は見つかっていないがね。

死後に残した重いトランク七つ（満杯のトランク**八つ**という伝説があったが、八番目はどこに？—「おじいちゃんが持って行ったと思う」と孫娘の一人が皮肉に言った）、これらの棺、これらのトランクは、整然とした記録を残してくれるもんじゃない。

エニスは手紙や記述にほとんど日付を付けず、ほとんどのカーボンコピーは誰に宛てものかも書いていない。「オークの心？」だの「スーパー探偵さん」といった、だれだか容易にはわからない人物に宛てられているんだ。そういうのはずいぶん奇妙なことだ、だってエニスは手紙や記述を始めた時の時刻（その時の気温まで）はしばしば記録してるし、時には曜日を書いているんだから。月日を書いたことも何度かあるが、二万通の手紙で年を書いたのは百回未満だった。

しかも、一つのトランクが満杯になったら次に移るってもんじゃない。数十年にわたり、すべてのトランクをほぼ均等に満たしていくという奇癖を持っていたわけ。そして死んだのもちょうど良いタイミングだった（若々しさの年月で満ちてはいたけど）。だってすべてのトランクが死に際してはもう満杯で、オニオンスキンをあと一枚たりとも入れられないほどだったんだから。謎の八番目のトランクがあったなら、それもほぼ満杯だったろうね。ああ、彼の幸せでガタガタの笑い声（完璧な音感の男がそんな笑い声を出すなんて！）は、誰かが何かの始まりと終わりを見つけようと手紙をめくるたびにまだ聞こえるんだ。

9

エニス・スウィーニーの非常に幼い頃の古い事件を挙げよう。母親の手で、彼女の名前で書かれたもので、彼女は**日付を付けた**。一九〇一年十一月六日、エニスが七歳の時だ。

その手紙によれば、合衆国の大統領がシカゴのウェスト・ブラックウォーター通りのスウィーニー家に来たそうだ。大統領がそこに来たことについての説明はない。アイリーン・スウィーニーがそう書いたなら、彼は確かに来たというだけだ。

それによると、なんでも合衆国の大統領が若いエニスの頭に手を置き、「私はこの少年にすべてを負っている、私の台頭と地位、世界最高の地位がこの子のおかげだ」と言ったそうな。その発言や次の発言についての説明はない。大統領はまた「この少年は広大なアメリカで多くの人の台頭と没落をもたらすよう運命づけられている」と言ったとか。

母親アイリーンは、長男キャシェルの名前を最年少のエニスコーシーの代わりに書くつもりだったのか？　キャシェルはエニスコーシーより十三歳年上で、すでに熱心な選挙区工作者だった。いや、それはあり得ない。母親は明らかに意図したことを書いた。

まあ、大統領のちょっとした冗談だったんだろうね。スタンドパイプ大統領自身が、シカゴのウェスト・ブラックウォーター通り、スウィーニー家からわずか四街区のところの

出身で、その街区の全家族と知り合いになろうとしてたんだ。だからスウィーニー家への訪問も、実はそれほど異常じゃなかった。

それは確かにその通り。でも大統領は冗談は言ってなかった。本気だったし、アイリーン・スウィーニーが報告した通りに発言したんだ。アイリーン・スウィーニーは、生涯にわたる一冊のメモ帳にさほど大量のことは書かなかったけど、書いたらそれは重要なことだった。エニスコーシー・スウィーニーは**本当に**、ハロルド・スタンドパイプが大統領へと台頭したすべてを負う人物だったんだ。そして、エニスはその訪問時、わずか七歳だった。スタンドパイプが実際に選ばれた時、彼はたった六歳だった。

いったい全体、何が起こってたんだ？

これには何か不自然なものがあったし、エニス・スウィーニーが世界と交差するときの他の多くのことにも不自然なものがあった。

そこでいったい全体、何が起こってたんだ？ — その質問は、エニスの生と死すべてに今もこだまする。

10

エニスコーシー・スウィーニーは、この世で最も美しく、最も望まれる女性と結婚した。彼女がそういう女性だというのは、エニス自身の意見でもあり、他にも非常に多くの人々の意見でもあった。そして、スウィーニーみたいな鈍くさいヤツが、世界で最も美しく望まれる女性と結婚するってどういうこと？

後に誰かに尋ねられて、あいつはこう言った。「ああ、おもしろいんじゃないかと思ってね。そして、信じとくれ、毎分、毎日、毎年、数十年にわたって**本当に**楽しかった。一種のコンテストだったんだ。同じ頃、シカゴに来たもう一人の魔術師がいて、そいつは自分の婚約者を世界で最も美しい女性にできると信じてたんだ。うんある意味、二人とも十分な素材、つまり彫刻する大理石の塊を持っていたわけね。そいつのは少しでっかかったし、今もそうだ。でも、おいらが扱ったやつは十分大きさが足りたんだよ、だっておいらあまり間違えないもんで。ほら、二つの段階があるだろ。準備と、そしてそれをつかみ取ること」

「二つの段階とは？」と質問者が尋ねた。

エニスは答えた。「彼女がそうなるよう望むこと。彼女を世界で最も美しく望まれる女性にすること、それが最初。そして、彼女がそうなった時に妻にすること、それが二番目。おいらがその二つを望んだ以上に何か二つのものを望んだやつなんかいないだろ。それほど強い望みなら、主だってそれを認めざるを得ない状況に追い込まれんのよ」

それじゃメアリー・マーガレット・マグロンスキーは**ホントに**なぜ世界で最も美しく望まれる女性だったのか、またはどうやってそうなったのか？ そいつは面白い質問で、面白い答えが出てくるはずなんだが、その答えさえわかってればねえ。

彼女の開花は生後十九年目に入った頃に始まった、いささか驚異的なもので、その開花が生涯続いたんだ。でも、彼女は二年たたずにその最高潮に達した。彼女は最高だった。開花から二年以内に、明らかに最も美しく、最も望まれる女性になったわけ。

センセーショナルな開花は、生後十九年目の始まり頃の女の子には珍しくない。マーガレットもそういう晩春の陽光爆発の一つだった。十五、十六、十七、十八歳といった早い時期に開花する女の子は、だいたいそれほど驚異的に開花しない。でも、西ブラック

ウォーター通り沿いには、いつも普通の開花といっしょに、特別な開花がたくさんあったんだ。

そこでは人々がバラを育てた。紫のつるふじマクロボトリス、青い鳥の茂み、ライラックを育てた。爆発する煙の木を育てた。そして、娘たちを育てた。春と夏の毎日、西ブラックウォーター通りで誰かがこういう種の新しいセンセーショナルな花を見せ、人々はまわり何街区からもそれを見に来て称賛したもんだ。

ブラックウォーター通りのその街区では、誰もそんな花を育てたり見せたりできるほど大きな場所を持ってなくて、家の前の二、三メートルの細長い場所だけ。でも、それは小さな煙の木やブルーバード・ブッシュ、ライラックには十分なスペースだった。つるふじやショーボートのチューリップ、バラには十分だった。そして、バラ、バラ、バラ、だってそこはバラの街区だったんだから。

そして、ブラックウォーターの小さな家での開花する娘たちの展示スペースもあまり大きくなかった、白い前門と紫の前階段の間の小さなスペース、一、二メートルかな。でも、春と初夏の朝と夕方、その限られたエリアで本物のプレゼンテーションがあった。人々が花を楽しみ、誇りにするのは素敵なもんだ。

メアリー・マーガレット・マグロンスキーは、その謙虚な街区の花々の間で、突然かつ驚異的な開花だった。彼女はオペラのバラ、サーカスのバラ、紫のつるふじマクロボトリスだった。ブルーバード・ブッシュだった。煙の木だった。彼女はそのすべてで、それ以上だった。でもそれまでは、ただのそばかすで、愉快で、ずんぐりした（がっしりした、と言おうかね）女の子だった。ブラックウォーター通りの熟練した才能ある花の栽培者たちの間でも、彼女は突然だった。そして、素晴らしかった。

でも、彼女は実は世界で最も美しい女性じゃなかった、その時にはね、その時にはまだ。それにはさらに二年かかった。でもどれだけかかったにせよ、どうやってその驚くべきことが起こった？ そんな特別なことは黙っていて起こるもんじゃない。

ニヤニヤして不格好な赤い顔の子供、エニスコーシー・スウィーニーがそれをもたらし、そのまま続けるのだというのが、そのご近所の全域ですぐに理解されたんだ（そして彼女の人生の最後の日までそれをもたらし続けた）。

じゃあ若者が、いかに奇妙に才能と贈り物を持つにせよ、どうやって近所の女の子の外見と本質と個性をそんなに変えるんだ？ それはわかっていないし、推測もまあ無理だ。

エニスはかつて、野心的な小雑誌「建築とプロトタイプ」のために、「世界の構築について」という神秘的な文章を書いた。それはそれまで説明不可能と思われたいくつかのことを説明し、残念ながら誰か他の者によってエニスのアイデアに接ぎ木された悪のカルトに勢いを与えた。でも、それは**まちがいなく**世界を構築する非常に健全なアドバイスを与えた。

その後エニスは親しい友人に、なぜ「世界で最も美しい女性の構築について」の関連記事を書かないのかと冗談半分、半ば本気で尋ねられた。

エニスは答えた。「ああ、書くつもりだよ、まさにそれをね。すでに一部はやったんだ。数十の手紙にそのメモが散らばってるんだ。でもかなり説明が必要なんだよ、そんなことは。めっちゃたくさん説明が必要なんだ」

やたらと説明が必要なことの一つは、そこにいる誰もが最初から、エニス・スウィーニーが素敵で非凡ではあった女の子を、驚異的な人、世界で最も驚異的な女性に**本当に**変えたと知っていて、それを受け入れたってことだ。

もう一度：**そもそもそこで何が起こってたんだ？**

エニスコーシー・スウィーニーは世界の出来事と状況の流れをいじっていた、それが起こっていたことだ。でも、エニスはそれについてこう言った：「二つの段階があるんだよなあ」

エニスは、彼女の特別な開花の前にメアリー・マーガレットの愛情の過半を獲得し、他に六人の若者たちも彼女の愛情の一部を獲得していたんだ。でも彼女のこの新しい変化はあまりにも衝撃的で、彼女のすべてを変える必要があった。「私の幼虫を愛したように蝶も愛してくれる？」いいえ、彼女はそうしない。無理だった。少し優れた幼虫だった時のような愛はできなかった。

メアリー・マーガレットが何であり、どんなユニークな存在になったかを過小評価しないでほしい。彼女が世界中でどれほど高く評価されたかを示すいくつかの例がある。

世界でも最も偉大な芸術家の一人（今は忘れられかけてるけど）のドイツ人芸術家が、地球の四分の一周離れたところからメアリー・マーガレットの「ゲーゲンシャイン」[訳注：オーラ、みたいなものです] を見た。そして顕現に導かれるマギのようにシカゴの西ブラックウォーター通りに直行した。彼はマグロンスキー家の前門の前の通りに立ち、夕方に若い女性、メアリー・マーガレットを見た。そして、音と感情をあふれさせながら泣きだした。人々は夕暮れの中で、わけもわからず彼を驚いて見つめた。メアリー・マーガレット自身も半分しか理解できなかった。

でも、理解する人々もいた。その顕現の力を全面的に感じ取った人々だ。マイストレルさんが通りを渡って出てきて、賢明にもドイツ語でその芸術家と話をした。芸術家のコートのポケットから突き出ているものを見て、そこから即興した。二人ともそれを芸術家がそこにいる言い訳としてつかんだ。ポケットの中のもの、この芸術家がいつも持ちあるく慰めは、横笛だった。

で、もちろんこの芸術家はその夜、ホーマーのウィンドジャマー・ブラックウォーター通り楽隊で演奏することになる。そしてこの楽隊は十分後に演奏と行進を始める予定だったんだよ。この芸術家は良い横笛奏者だった。だからウィンドジャマー楽隊にはもってこいの臨時追加団員となり、三晩にわたりこの楽隊で演奏した。エニスコーシー・スウィーニーが当時第一フルートを演奏していたのは、まさにこの同じご近所のウィンドジャマー楽隊だったんだ。

そしてこの芸術家は、シカゴにいる三日間、仕事があった、というかあったとまともに主張できるだけの活動はした。シカゴのいくつかのギャラリーに絵を持っていた。そういうギャラリーのディレクターや美術商の何人かを知っていた。称賛と依頼を受け、これまで過ごしたどこと比べても、最も成功した三日間だった。それからこの御仁はドイツに戻った。

でも偉大な芸術家がシカゴに来たのは、その称賛や依頼のためじゃなかった。世界で最も美しい女性がそこにいるという活発な噂を追ってきたんだ。そしてそこにでかけ、噂が本当だと知った。そして、その出会いに言葉を失い、泣きじゃくった。

他にも似たような例が十二件あった。古いバイオグラフスタジオの最も派手な監督がそこに来た（この奇妙な探求でそこに来た人々は、ブラックウォーター通りやマグロンスキー家がどこか尋ねる必要がなかったよ — そいらは猛烈な本能でその場所に導かれたんだ）。そして彼女を映画の女王にしようとした。彼女はノーと言った。彼女はグランドオペラの女王になりたかったからだ。ランドルフ通りの紳士や、ニューヨークのブロードウェ

イの紳士たちもやって来て、彼女を劇に起用しようとした。

彼女の指向性は変わった。さらに彼女の指向が変わってないときですら、世界で最も美しい女性をエニス・スウィーニーごときがどうやって勝ち取っていうんだい？ 彼女は世界でほとんど何でもなれた。彼女は最も意外なものを選んだ、世界一のオペラ歌手になること。それは他のものよりちょっと難しい。専門家があんなにたくさんいるので、ごまかしはまるで効かない。

エニスは彼女に言ったもんだよ。「でも、きみは歌えないじゃないか、メアリー・マーガレット、まるっきり歌えない。ビッグ・シングじゃない。素敵な声だけど、大オペラには向かない。九年の勉強が必要で、それでもやっと凡庸にしかなれない」

「いいえ、口先だの言い訳だのでごまかさないで、エニス」とメアリー・マーガレット。「あたし、あんたの舞台裏をのぞいちゃったのよ。あんたが不自然なことをやってるのはお見通しだし、あたしにたっぷりそういう細工をしてるのも感じてんのよ。あたしをオペラ歌手にして。世界一のオペラ歌手に。そうよ、それもほぼ即座に。ああ、シカゴ夏のオペラの助演オーディションが月曜から始まるわ。そして世界一の私が、いつまで助演で足止めされると思ってんの？ 他のことはしてくれたじゃないのよ、どうやったか知らないけどさ。こんどはこれやってよ。全部同じことの一部でしょ」

「おいらができる偉大なことにも、限りがあるかもしれないぜ。これをやったら、その総量が減るかもしれないぜ」とエニス。

「そうね。でも、今はこれをやんのよ。後のことは後で考えて。最後になって偉大なことが一つが足りなくなっても、そしたらまあない袖は振れないだけよ」

エニスコーシー・スウィーニーは、丸っきりわからない方法で、メアリー・マーガレット・マグロンスキーを、過去、現在、未来で世界一のオペラ歌手にした。

もう一度：**そこでいったい何が起こってたんだ？**

いじくったんだ。世界自体の流れと動機、現実の性質をいじくったんだ。

でも、エニスが彼女の卓越し続ける卓越性をもたらしてから、彼女を勝ち取るまでに五年かかった。そして、その五年間はあらゆる危険に満ちていた。燃える火種と燃える肉、でもその危険は本物だった！

まだ若いのに世界で最も美しく望まれる女性になるのはとんでもなく危険だ。特に、国際的な名声のある偉大なオペラ歌手になり、大陸をまたがる金ぴかの世界に入ると、特別な危険がある。そしてこの時のメアリー・マーガレットは、決してそんなに賢い女性じゃなかったんだ。

彼女はいくつかの方法で自分の首を絞めた。自分自身にとんでもない破滅をもたらしかけた。あまりにドツボにはまって、死と破滅の選択すらできない状態になった。両方になるように見えた。彼女は破滅すら超えたゴミに変わっちゃう危険にあった。

「あんたが必要になったら、どうやって呼べばいいの？」と彼女は、犬小屋のどん底に落ちる数年前にエニスコーシーに尋ねた。

「ああ、心で呼んどくれよ。すぐにくるから」とエニスが言った。「でも、呼ぶのが遅すぎたり深すぎたりしたら？」

メアリー・マーガレットは言った。「そうはならないわよ。あんたの場合はね。あんた、本当に望めばいつでもあたしを助けられるでしょ。それであんたは怪我をするかもしんないし、そうなったらご愁傷さま。世界が怪我をするかもしれないし、それも同じくらいご愁傷様で規模はずっとでかいわね。でも、他のものを奪うくらいのことをやろうとあんた

が望めば、あたしを助けられんのよ。あんたは本当に欲しい結果をいつも得られる人よ。でもあたし、あんたなんか必要ない。まったく、ここから出てってよ、エニス。必要ないって言ったでしょ」

でも驚くべき開花と絢爛から約五年後、メアリー・マーガレットはあらゆる悪臭を放つどん底に落ちた。有害な火の中の燃える火種と化した。世界とその主を呪い、致命的な結晶を舌の下に滑らせた。そして、彼女の肉は生きている火に包まれた。

「あんたが必要、でも来ないで」と彼女はその時心で言った。「あんたも焼けちゃうから」

さて二人は海で隔てられていたし、これは飛行機が海を定期便で飛ぶ前のことだった。最速の船を使っても五日では渡れない海だ。さらに波止場まで行って戻ってくるだけでも、さらに一日以上かかった。エニスがいかに本気で望んでも、すぐそこに着けただろうか？

うんあいつは本当に望むなら何でも得られたし、できた。いつも雑に時間を扱うことでそれを実現したんだ。つまり、問題をすべての側から同時に見て、危機があいつから見てまだ未来の時に行動を取ったわけ。だから、最後のギリギリの瞬間より六日前に出発した。

それでその最終の火から、燃える火種となった彼女をかっさらった。ギリギリだった。ああ神よ、焦げた肉の匂いまでした！ まあ、世界で最も美しく望まれている女性をモノにするんなら、それなりの苦労は覚悟しないとな。

エニスは完全な状態の彼女を一か月手元に置いた。その完全さと楽しみには何かバロック的、偏ったものがあった。完全だったが、間違った設定、間違ったスケールだった。エニスコーシーはそれがあまりにも小さなスケールになってるせいだと決めた。

だから、あいつはメアリー・マーガレットが身体の美の九分の一を放棄し、それに相当するだけの知恵を受け取るようにした。彼女がすでに持っていたものと、火の試練で得たもの、そしてその取引で受け取ったかなりの量のおかげで、彼女はその後かなり知恵に恵まれた。

そして、それでも彼女はしばらく、世界で最も美しい女性だった。でも、その時点では、もっと美しい女性が現れる可能性も生じていた。それまでの五年間は、それは不可能だったんだ。

でもこのエニスは何だったんだ、そしてあいつがもたらせたものは何だったんだ？

そこで何が起こってたんだ？

この後、エニスコーシーとメアリー・マーガレット・スウィーニーは、さらに六十五年間、ほぼ完全な調和と喜びの中で生きた。

燻る、焦げる、肉のモチーフの最初の、そして数少ない再来の一つは、メアリー・マーガレットがティレニア三部作の第一部『ハルマゲドン I』の地獄の火のコミックオペラで破滅の役を歌った時だった。彼女がそこで歌ったいくつかの楽章では、火で這う肉の破滅の匂いがかなり強かった。

11

エニスコーシー・スウィーニーは十二歳の時、寺院に行って説教した。そして、それを聞いたすべての人はその知恵と理解に驚嘆した。寺院はシカゴの北側、旧ブラックウォーター通りから一街区の聖マラキ教会だった。

それは聖マラキ教会で高校生向けに与えられた宗教的修養会だった（エニス・スウィー

ニーは早熟だったんだ。他の子どものほとんどは十四歳まで高校に入らない)。

修養会の指導者である司祭が最終日に、前に出てきて話をしたい若者はいないかと尋ねた。通常、誰かに前に出てきてもらうのはとても難しいし、出てくるやつがいたら、そいつは耐えがたいほどのひけらかし屋なのが通例だ。

でも、エニスは前に出て話し、しかも実に華々しく話した。同級生たちは驚嘆した。修養会の指導者、御受難修道会の司祭が、誰か説教壇に上がって世界や世界より大きな聖体、終末について自分の見解を述べないか、もちろん聖霊の助けを求めてから、と言った時、みな尻込みした。そこへエニスは突然、整然としつつ勢いをもってそれを語ったんだ。

その話は力強く神秘的だった。あいつをそれまで生涯にわたり知っていた聖職者たちは驚嘆し、御受難修道会士たちも驚嘆した。

「あの子にあんなに才能があるとは知らなかったわ」とあるシスターは、最初から大人で、今十二歳の大人であるエニスが、知的かつ鋭く延々と話し続けるのを見て言った。「いつも窓の外を見て、質問されても聞いていなかったのにねえ」

「寺院の若いキリストのようだ」と御受難修道会の一人が言った。

「でも、若いキリストは、知恵を語りながらチューインガムを噛んだりするだろうか？」と誰かが尋ねた。

「チューインガムって何？」と別の者が知りたがった。

一九〇六年だと、チューインガムは決して目新しくはなかったが、まだそれを聞いたことなく、それが何かを知らない人も多かったんだ。チューインガムはいまだに、派手で評判の悪い人々しかやらないカルト的なものだった。

「今の、あの子は若いキリストにそれほど似ていないな」と、誰かがエニスの変化に気づいて言った。あいつの知恵と理解は、熱狂的な力と不均衡な歓喜に取って代わられていたからね。ああ、あいつってば、史上最悪のひけらかし屋だったよ。

やつは今や、不格好な、みすぼらしい道化、元素的な存在になってた。よそものの装いがまとわりついていた。迷える霊だった。たぶんラプテスが「つまずいたが、落ちなかったかもしれない」と言ったパラ・アンジェリの一人ではなかったのかもしれんね。十二歳の少年だってのに、それが世界を揺らし始めた。

やつの演説はそれまでより荒々しく、とげとげしくなり、脅迫的になった。そしてエニスはいくつかの、ポルターガイスト的としか呼べない技を行った。あいつの物質に対する支配力、少なくともごまかし力を示すものだ。小さな鳥を空中に飛ばせ、爆竹のよう爆発させた。そんなことだ。そして聖マラキ教会奥の大きな時計を指し、「ヴァデ・ルルスム！」と大きな声で命じた。「後ろに走れ」と命じたわけで、すると時計はそうした。二十四時間にわたり逆に回転したんだ。

「これは天使が盗んだ一日である」とエニスが宣言した。「おいらは世界から一日を盗み、隠した。誰か、おいらが今奪った日をどこに隠したか知ってるか？」

修道会の指導者がその茶番を止めた。エニスの襟をつかみ、説教壇から引きずり下ろしたんだ。やつを叱責し、他の生徒たちはちょっとあいつを笑った。彼はエニスの尻を三回強く叩いた。彼は力と権威を持つ者としてこれをした。エニスを告解室に送って懺悔させ、エニスは謙虚になり、去った。

12

エニスコーシー・スウィーニーの長い人生は、よじれた一連のパズルになってるんだ。善男だったよ。これはあいつと接触したすべての人の絶対的な意見だ、ただしごく少数の敵は除くけど。善男ぶりは数年なら偽れるもんだが、一生は偽れない。エニスは善良だった。

そして、触れた者すべてに恐怖と病気しかもたらせない一連の邪悪な夢を生み出し、発明し、提唱した。そしてさらにあいつの臨終まで残っていたのは、その中でも九倍最悪のもの、終末を予兆する伝説の「腐った花」の提示だった。そいつの最後の段階が起こるなら、世界のすべての善は無駄になる。

エニスは、いくつかの媒体で、鋭く悪の夢を、おそらく天才的な扱いで提唱した。これらはあまりにも強力で、ますます多くの人がそれを現実と誤解してる。

でも、オペラ、というか**とんでもない**コミックオペラ、フィクション、ブロードウェイ劇の形のものは、あまり多数の人々に直接知られていなかった。

とはいっても間接的に、しかも強く、ほぼすべての人々に知られてはいた。これらの恐ろしいフィクションの出来事に基づいて育った「ハルマゲドン・カルト」は、成長する一方だった。今や、それらはすべての人の半分以上を掌握してるぜ。そしてカルト化した大衆は、これらの発明が本当に起こった、今も起こっている、そしてその巨大な最終的ですべてを飲み込む腐った果実は、今やもう避けられないと信じている。

何という恐ろしいことが起こってるんだ？ そして、このねじれたユーモアのセンスを持つ善男が、なんだってそんなものを生んだんだ？

十三歳の大人がいて、馬と荷車で牛乳を配達し、フルートを演奏していた。十六歳の大人がいて、氷を配達してた。そして十九歳の大人がいて、巡業カーニバルを買って運営していた。あいつは、みすぼらしい無垢な世界の、放浪の無垢者だった。

その無垢な若い大人に何が起こった？ うん、相変わらずすべての年月で無垢で、魂は純粋であり続けたよ。その魂を手に取って、人々に見せ、それがまだいかに無垢かを示しさえしたもんだよ。

でも、本当のところあいつに何が起こった？

そして、平和とキリスト第二の降臨の黄金世界に何が起こっちまったんだ、なんだって今、それについての醜い話が広まってるんだ？

詐術、詐術だ！　エニスコーシーは、自分の人生についてだれも順序立てた説明ができないようにする条件を設けたんだ。それはどんな努力も逃れちゃうんだ。触れることすら難しい。

第 2 部

ヘンリー・デヴォニアン博士の方程式についてのちょっとした論説

1

『数学と宇宙論』誌一九一〇年十一月号に、ヘンリー・デヴォニアン博士による「セークラ単位に着目した時間と合意時間を支配するエフェクター方程式」という魅力的なタイトルの論文が掲載された。そして、もちろん、この論文の登場以降、知的世界はひっくり返った。

「なに言ってやがる、その前だってひっくり返ってたぞ」とエルトン・クォーターマス。確かにそうだ。そして、知的世界がひっくり返ったという声明は、他の様々な出来事についても言われてきた。知的世界は流れる水のようで、どんなものでも波紋は立つ。それでも、デヴォニアン博士が発表した、実に決定的な声明と方程式（衝撃的なものだった）に対する初期の反応は一つしかなかった。

関心を持った郷士たちが応えた。「こんなの目新しくないよ。プロティノスやルクレティウス、アンセルムやアクィナス、カジェタンやカニンガム、カントやクルーベルタンツによって、あれやこれやの形で述べられたものだ。それでも、デヴォニアン博士の提案は検討すべきだ」

でも、この手の郷士どもはフカシでしかなかったんだ。デヴォニアン博士の声明、方程式、公式はずいぶん目新しいものだったし、それらを古いと呼んだ多くの連中の多くは、その数学についていくことさえできなかった。そしてそこにあった図は、デヴォニアンの「エフェクター方程式」とは何の関係もなかった。『数学と宇宙論』では時折ちょっとイラストが使われ、そこにあった絵（古い木版画のようだがただの絵）は、太陽に焼けた鼻を持つ天使のような少年が、ただ天使めいた様子をしているだけのものだった。でもその絵には光学錯覚も含まれていたんだな。その天使めいた皮が剥けた子供は、背景で蠢く地獄の怪物の触手の端でもあったってわけ。マシュー・ウッドバイン・シニアによる斬新な作品で、この人は『数学と宇宙論』の誌面では、優れた数学者兼ユーモラスな芸術家として知られていたんだ。

「うん、その思いつきの**着想は**古いな」とウィンビッシュ・A・マクダーモット（これは数学の論文についての話で、絵についてじゃなかったけど、雑誌を開いているときには、その絵とデヴォニアンの論文の最初のページの両方を見ていたんだ）。「でもメインの着想自体は、あまり前には考えることさえできなかったはずだな。プロティノスからクルーベ

ルタンツまで、**誰しも**こんなようなことだろうと**睨んではいた**のは確かだが、昔の数学的装備では観測できる視差の角度が小さすぎた。

恒星の年周視差を取るような話とちょっと似てるな。これこそガリレオが間違っていて、その反対者が正しかった点だというのは知ってるだろう。地球が動くなら、天の背景を横切るはずだ、と反対者たちは言った。太陽の反対側、六か月離れた位置からだと、星が少しちがう角度、少しちがう背景で見えるはずだと。そして、そうはならなかった。

ガリレオはそれに対し『いやそうなるよ、ほら私が別の観測をした結果だよ』と言った。でもガリレオは自分で自分を催眠術にかけ、望む結果を得るために観測を偽造したんだ。そんな結果はなかった。そんな観測の違いはあり得なかった。ガリレオの出してきた星の観測角度の違いは、地球から月までの距離で鳥の散弾の直径（せいぜい 1 ミリかねえ）を見たくらいの桁の角度だった。そんな小さな角度は当時の光学機器では読めなかったんだよ。そして「エフェクター方程式」を計算するのに使われた宇宙論的行動の角度は、昨年まで、もっと厳密には今年の三月までの知的装備では読み取れないものだった。

しかし今や、お気づきかもしれないが、量子ジャンプがあったんだ。ごく最近の数学、特に過去三か月のものは、あまりに高度すぎる。これは一部のエリート数学者の集団に生物学的変異が起こり、こんな新しい理解が生じたとしか考えられない」

エルトン・クォーターマスは言った。「うん、そういう変異は確かにありましたよ。自分の中にもそれが感じられるんです。しかしこれらの新方程式は世界にとって危険だから、抑制しなきゃいけませんな」

（デヴォニアンの論文の上に小さな宣伝文があった：「あまりにも衝撃的な数学的推測だから、人々を殺人に駆り立てるかもしれない」）

「どうやってそんなことができるんだね？」とウィンビッシュ・マクダーモットが尋ねた。

「方程式に忘却の系を付け加えて見たらどうだろうか」とエルトンが提案した。

ヘンリー・デヴォニアン博士は一部でこう書いていた：

「人類の知的発展は、これまで主に話し方を学ぶことだった。もちろん人間は最初から知的な言語を持っていた。これは定義の問題だ。人間は知的な発話をする生き物なので、知的な発話がない人間はあり得ない。人間であることは発話することだ。人間でないとは発話しないことだ。

しかし、この発話の贈り物がさらに発展するのは最初から期待されていたことだし、人類はしょっちゅうその期待を満たしてきた。書くのは発話の発展形であり、期待されその期待が満たされものだ。そして私がここで提供する『一般および特定時間合意方程式』は、数学的象徴、公式、方程式の新しい、量子ジャンプ的な発展である。

我々は今、主のこの最新の世紀、平和とキリスト第二の降臨の黄金世紀十年目に入っている。すべての世紀またはセークラ単位には、独自の数学と方程式、独自の物理的および超物理的文脈が必要だ。そして、この黄金の量子ジャンプの世紀には、私自身の量子ジャンプ的な声明が必要だ。それがこれだ。読め、震撼せよ、賢くなれ！」

（でもデヴォニアンの論文の最初のページの向かいには、善と悪の光学錯覚の絵があったんだ。無垢な少年が壊滅的な悪の触手の端になってる。なぜこの絵はシップマン「新しい数学と農村改革」の最初のページの向かいに置かれなかったんだろう？）

とはいえヘンリー・デヴォニアン博士がその後提示した「一般」および「特殊時間合意方程式」は難物だった。三十八ページにわたり八千項を含む一本の方程式は決して簡単で

はない。二番目の方程式は五十一ページにわたり一万一千項を持つ者で、同じくらい難しかった。高度なエリートにとってすら難物だ。そして、数学的宇宙論の分野に属する世界のエリートは二百人にに満たない。彼らは『数学と宇宙論』の購読者名簿とほぼ完全に一致する。

そして、そういうエリートやその知的子孫でさえ、「一般」および「特殊」方程式のすべてを即座に理解できるわけじゃない。

「これらの完全な意味を引き出すには四分の三世紀くらいかかる」とデヴォニアン博士は論文のまとめで書いた。「それでは手遅れだ。この式の完全な含意は、もし対抗策がなければ、四分の三世紀ほどで我々を破壊する。だがまだ深く理解できていない数学的方程式の完全な含意に、どうやって対抗すればいいのか？」

そしてデヴォニアン博士は、非選抜市民のために「一般」および「特殊」方程式の簡単なまとめを散文で述べた：

「『一般方程式』を構成する数学的および有機的公式は、エンクレーブ（『時間』または『合意時間』として知られる）の相互作用指数が、ある単一の個人に鍵付けされることを示す。この『核心となる単一個人』は数学的必然であることが証明される。

私は過去八つの異なる『合意時間』の個人を特定し、そのうちある一人の個人が、その合意時間のす**すべての**出来事に最も重要だったことを示した。この一人の個人は、各種の出来事の必要条件だ。彼がいなければ、それらは起こらなかったか、別の形で起こり、つまり別の鍵となる個人を持つ異なる合意時間で起こったということだ。しかしどの場合にも単一の核心個人がいなければ、時間も出来事も全く**なかった**だろう。

ある時間の主方程式から単一の鍵となる個人が取り除かれると、その方程式は崩壊し、その時間も崩壊する。出来事が忽然と無効になり、存在しなくなったという失われた時間や時代のいくつかの明らかな痕跡がある。

『一般方程式』は、出来事の本質の声明である。そして、出来事は存在を構成するものである。『一般方程式』は、創造自体からパルーシアまたは再臨『彼が戻るまで』までのすべての時間エンクレーブ出来事に適用される。天使と人間の堕落、救済、待機の世紀、すべてに適用されるのである。現在の黄金世紀は、パルーシア、つまり来臨の世紀、最後のものの時間であり、どうなるうとも継続する最後であることが示される。それは終わりを告げるものではなく、永遠の始まりを告げる。そして、その『時間より大きな時間』が到来すると、新しい時間方程式が我々に与えられる（そいつはとんでもない代物になるぜ！）でも、まずそこに到達しなければならない。

なぜなら、もしこの世紀がパルーシアの世紀でなければ、それは偽のパルーシア、地獄の力の再臨、恐ろしく地獄のような逆来臨の世紀になるからだ（私は何度も、理論数学に説教を持ち込むなと言われた。ふん、そこに持ち込んじゃいけないなら、どこに持ち込めってんだ？）

私が神を方程式に含めなかったと非難する者もいるかもしれない。だがそれは彼らの不注意な読みからくる非難でしかない。神は『一般方程式』の第三十七項であり（これはあの式でこれ以上無理なほど明確にしただろ？）、『特定方程式』または『特殊方程式』の第四十四項である。

ではこの説明または解説は、続いて『特殊方程式』の論述に移る」

2

「読めない人はなんとも不幸であるな！」とウィンビッシュ・マクダーモットが叫んだ。「すべてを逃すか、大きなものの弱く派生的なバージョンしか得られないのだから」

「『読めない人』とはどういう意味ですかな？」とアリスター・グロッグが尋ねた。

「新しい変異数学の高度な方程式を読めない人は、読めないと言える」とウィンビッシュが説明した。「数学的表記法の言語に比べ、散文はなんとも貧弱だ！　デヴォニアンは最善を尽くしたと思うが、彼の示したものは世界の基盤を揺さぶるものではないが、まさに揺さぶってくれねばならないのだ。あれが**本当に**世界を揺さぶるものであり、破壊する可能性があることは皆様同意めされるな？ だがあれについて、彼が数式と散文で言う以上のことはないのかもしれぬ。それ以上のことを言う**方法が**ないかもしれない。しかし公式を少し見直して、『ババを引いた』人類と呼ばれる大量の人々のために、その力をもう少し翻訳できないか見てみよう」

ウィンビッシュ・A・マクダーモット、アリスター・グロッグ、エルトン・クォーターマスは、深夜のレストラン兼ピアノバー兼ビリヤード場である「回転ベクトル」で、豆と本を前に集まっていた。鋳造所の労働者、食肉加工場の労働者、型紙作り、印刷工、ミシンの女工、鉄道マン、荷馬車の御者、刑事、ホテルのポーター、ピアニスト、馬小屋の労働者、掃除婦、数学者たちが、深夜過ぎに豆とビール、葉巻と陰謀、ピアノ演奏と会話のために回転ベクトルに来た。そこでは似た者が似た者と会い、豆のテーブルに座るか、ビリヤード台の周りにたむろするか、二台のピアノに寄りかかるいくつかの小さなクラブが集まっていた。そこはいつも豆とビールと馬の匂いだった（チームマスターが長い半時間のために中にいる間、裏口にはいつもすぐに走れる馬が繋がれていた。）

「デヴォニアン博士の公式の完全な意味を引き出すのに四分の三世紀もかけられないなら、それより短い時間でやらなきゃならん」とアリスター・グロッグが言った。「世界を爆破できる方程式は昔から何個かあり、この論文にはそれがいくつもある。『一般公式』にそんな爆発的な方程式が含まれているなら、なぜ世界は以前に爆破されなかったかと考えて見てもいい。答えは、世界は以前に、限定的に、時にはそれほど限定的でない形で、**実は**何度も爆破された、というものだ。どの時代もその破局がないほど貧しかったりはしない。我々の黄金世紀はこれを免れられると願ったが、デヴォニアン博士によれば、方程式から導かれる最も合理的な結論によれば、免れることはできない」

「一部のある決意を持った者たちがそれを免れる方法を考え出さない限り、免れないな」とエルトン・クォーターマスが言った。「実際、数学的確実性として、我々の黄金世紀の破局は通常のものではない。人々の終末的な破局かもしれない。でも、壊滅的なプロセスに干渉する方法を**本当に**見つけたら、方程式はどうなる？」

「『特殊』と『一般オルガナ』の両方に『自分を守る』系が埋め込まれているようだ」とマクダーモットが言った。「我々が『破局の友人』と呼ぶコード名の組織（おそらく不自然または非人間的）を感じる。干渉しようとすれば、我々の一人または全員を破壊する。『数学の陰謀論』など信じたりはしないが、最初の部分のすべての数学には、暗黙の秘密組織が**確かに**ある。」

「他のだれかがやってくれるかもしれない、方程式に干渉してくれるかも」とクォーターマスが自信なさそうに提案した。

「誰が？」とグロッグが尋ねた。「三人未満の作業グループなんかあり得ないだろうに、そして三人もの理解者がいる場所がいくつある？　ベルリン？ でも、ベルリンでは十年、また十年と決断を先送りするから、遅すぎる。パリ？ いや、パリは信頼できない。パリの狡猾な数学者は『破局の友人』と結託しかねない。ロンドン？ 期待薄だな。ニューヨーク？ でも、ニューヨーク人はまさに『特殊方程式』の数学が示すように、不器用だ。いや、我々自身しかいない。そもそも、鍵となる人物は我々の町にいるんだから。

その『方程式』を満たす少年をあっさり殺し、後は何が来ても受け入れるべきだと思う。でも、若くて無垢な少年を殺すのは嫌だし、逆に殺されるのも同じくらい嫌ではあるがな」

3

「ではこれから『特殊方程式』の論述に移る」とデヴォニアン博士は書いた。「そして、容赦ない断定によって、我々の時代またはセークラにおける『核心的個人』の位置と名前が解けるる。この場合、彼は『恐ろしい鍵』、不吉な影響のようだ。数学的文脈で明確に名指しされているが、私はそのアルファベットの名前を公にはしない。でも、個人的にはするかもしれない。

本気で興味のある人は、この論説の最後に記載の住所に手紙をくれれば、我々の「セークラ」が前提とする必須関数であるその人物の名前を送る。その知識の所有者がそれで何をするかは私の全く関知しないところである。彼の血が私の手を汚すことはないのである！」

(「これは明確な殺人扇動だ。その責任からは逃れられないぞ」とクォーターマス。

「確かに、あれによって彼は私を殺人に駆り立てた。少なくとも私は責任から逃れられない」とグロッグ。)

デヴォニアンの記事はこう続いた。「我々古狸には、数学的公式がある特定の人物の身元にたどり着くのは奇妙に思える。昔からずっと身元を示してはいたのだが、これまで我々は視野が狭すぎてそれが見えなかったのだ。まるで数字の列の答えが量ではなくまさに人物になるようなものだ。まあ、そういうことだ。そして、もちろん、すべての人物は**コード化された量**であり、すべての量は主要またはマイナーな属性の人物だ。

『特殊方程式』の偽りのない数字と記号は、我らが黄金世紀にとって非常に悪い、非常に悪そうなことを示している。金の融点を超え、金の蒸発点を超えて熱くなる。すべてをかけた『手持ちすべてを張り込む』勝負が、すべての数学には暗黙的に含まれている。最も単純な数字の列を足しても、足元で地面が裂け、地獄に落ちる可能性がある答えになる。ただし、通常はそのような答えは少しオッズが悪くなっている。

さて、さる十六歳の少年は、本当に我々の足元で開く裂け目をあらわしており、それが我々を底なしの－－運が良ければ－－忘却に突き落とす。彼は生命という活動からの人類撤退の可能性をまちがいなく表し、ヘタをするともっと悪いものまで表しているかもしれない。彼の呪われたビジョンはすぐに『潜在的現実』状態に達するが、それは煙を吐き、噴出する三つの山々に集まり、それぞれが前のものより深く硫黄臭いのだ。

彼はいったい何をやらかしているんだ？ 彼は世界の出来事と状況の流れをいじっている。それが起こっていることだ。

彼は現実の性質をいじっている、それが起こっていることだ。この少年は、強く望めば

何であっても起こせると言える。だが彼はこれらの『荒廃の忌まわしさ』が起こることを**望む**のか？ 彼は、魂にかけて、そんなことは望まないと何度も抗議する。しかし容赦ない数学は、彼がそう望むかもしれないことを示す。これらはデータから引き出す空想の推論ではないのだ」

アリスター・グロッグが語っているところだった。「確かに来る出来事は事前にその影を投じる。必要なのは、来る出来事の向こう側にあるそこそこ使い物になる焦点の光源だ。この向こう側の光源は、デヴォニアンによれば『一般』および『特殊方程式』の両方で第九十九項だ。『デヴォニアンによれば』とは言うまい、なぜなら皆も言っているのだから。この方程式は世界に属し、ほんのわずかな項目でも変えられない。誰が最初に導いたかは問題でない。どんな細かい部分もそれ以外ではあり得ないのだ。ここでは、来る出来事の影がその出来事の要件であり、実際、出来事はそれ自身の影から成長するのだ、多少なりとも成長するのであればね。まず出来事の影や幽霊になる。それから誰かが『フィアット・ソリドゥス』、『固体になれ』、または『現実になれ』と言い、それを命じた者にとってそれは確固たる出来事になる。そして、条件つき世界の偉大な数学では、それはすぐに皆にとって確固たる出来事になるか、全く何でもなくなってしまい、記憶されることもなく過ぎる影になる。

うん、これにはわずかに例外がある。可能性が即座に決断してくれない場合がごく少数ながらある。高度な歴史学徒は、ある国や時代に相反する歴史経路が存在することを昔から知っていた。どちらも有効で、どちらも譲らない二重の有効性が存在するのだ。部族的スマトラ、岩だらけのアラビア、中央セイロン、マダガスカル、マルタ島、マイヨルカ島、小アジアの名を冠した『僻地』にそうした事例がある。そして、時折、これらの矛盾する歴史の軌跡は、四分の三世紀も矛盾を保持したままだ。そして最終的に、一つのバージョンが現実、もう一つが非現実へと解消される。だがその解消そのものが（文明と共に）消滅し、どのバージョンが現実で、どれが非現実だったかわからなくなる場合もある。

しかし、一般的には、血まみれの牙をした食人バージョンがもう一方を食い尽くす。優柔不断と遅延は通常、血まみれの牙に有利に働くのだ」

（彼らは深夜過ぎの混雑し騒がしい場所で話す三人の貧しい数学者だった。でも、鋭く見る者は、彼らが何をしているかわかっただろう。彼らは殺人を計画していたんだな）

「じゃあ、どうする？」とエルトン・クォーターマスが仲間の策謀者に尋ねた。

「何をしなきゃいけないかはわかってるだろうに、エルトン」とアリスター・グロッグが言った。「優柔不断を始まる前に止めなきゃ。少年はすでに地獄のビジョンを具体化し、公表しようとしている。

この少年が早朝、最初の配達のために氷の荷車に荷を積みに行くとき、夜明けの二時間前くらいが、これは未来の破壊の種をまく者に致命的なことが起こる良い時間だ」

何人か、新しい変異数学の分野の専門家でありながら、この分野に少し疎い者（高度専門家以外はだれもあの論説を見たりしなかっただろう）たちは、「特殊方程式」の核心個人の名前と場所を得るために、デヴォニアン博士に手紙を書かなきゃいけなかった。

しかしウィンビッシュ・マクダーモット、アリスター・グロッグ、エルトン・クォーターマスの三頭グループなど、他の人物やグループはデヴォニアン博士に手紙を書く必要がなかった。彼らは方程式のデータから名前と場所を自ら導いた。

答えがどう得られようと、いつも同じ答えだった。シカゴの西ブラックウォーター通りのエニスコーシー・スウィーニーという少年だった。彼が計算に適切に当てはまる唯一の

答え、計算が解ける唯一のものだった。

4

陰謀、陰謀！ 善い人々が、より大きな悪を防ぐかもしれない可能性のために、悪を企てる陰謀に加われるものだろうか？

さて、不格好でみっともない十六歳の少年がいて、煙のような夢に満ちた頭を持ち、強く望めば世界の何でも手に入れ、実現できるという評判だった。

この少年は朝とても早く、冬の夜明けの数時間前に起き、まず商業施設に氷を配達するために氷の荷車に荷を積んだ。シカゴには当時、氷を凍らせ、定期的に顧客に配達するという事業を行う会社が百二十五社あった。その一つ、エニスコーシー・スウィーニーが働いていた氷屋は、回転ベクトル・レストラン兼ピアノバー兼ビリヤード場の裏口からわずか一街区半のところだった。

これは簡単にできる。夜明け前の数時間、半分路地、半分通りの小さな場所は、いつも騒がしく、光はあまりなかった。馬や人の騒音、荷車のきしみと唸り、荷馬車のウィッフルツリーのガタガタ音。ハーネスのリングや鎖のジャラジャラ音楽。馬がよくそこで倒れ、男たちもよく倒れ、誰も大して気にしなかった。男たちは夜明け前に仕事に来るとき、しばしば酔いすぎ、馬の多くは過労で二重シフトだった。男や少年が地面に倒れているのを見ても、誰が大して気にする？ 少年や男が、非常に鈍くて厚いもの、たぶん馬具の横木のようなもので頭を叩き潰されて死んでいるのが見つかっても、それが悲しい事故でないなどと信じるヤツがいるか？

三人の数学者は、三つの異なる夜明け前にリハーサルした。ウィンビッシュ・マクダーモットがある早朝に出かけた。アリスター・グロッグが一度行った。エルトン・クォーターマスが一度行った。高度な数学者の各々は、エニスコーシー・スウィーニーが他の氷の荷車が積むのを待つ横で、大きな馬具の横木を手に、彼のすぐ後ろに行けたし、若者を殺す良い機会をいくつか見送った。だが数学者は皆慎重で、数字と命題を何度も確認するものなんだ。

だから四回目の深夜過ぎ、三人は再び回転ベクトルにいて、いつも通り、豆を食べ、ビールを飲み、葉巻を吸い、数学を話していた。これがその時だ。

回転ベクトルの給仕がやってきた。「アリスター・グロッグを出せと言ってる女性が外にいるんだけど。取り乱した女性とすら言えるなあ」

マクダーモットは答えた。「ここにいないと言ってくれ。帰れと言うんだ。いや、いや、このことが終わるまで誰も女と関わっちゃダメだ。インディアンの戦士が襲撃に出るように、行動の前しばらくは女を完全に避けなきゃいかん。それが我々に力と勇気を与える。特に取り乱した女は避けないと」

「どんな感じの女？」とアリスターがウェイターに神経質に尋ねた。

「うーん、怒った女は皆同じに見える」とウェイター。

マクダーモットは繰り返した。「ここにいないと言って。数分前にホルスターズ・ヘイヴンに行ったと言ってくれ」

目標時間の三十分前だった。彼らはすすり、数学と陰謀を話し、葉巻を吸った。そして、時間がかなり近づくと、サイコロを持ってこさせた。小さい目を出したやつが勝ちだ。

アリスター・グロッグが小さい目を出したので、彼がエニスコーシー・スウィーニーを

殺す役となった。

彼らは豆とビールを終えた。ウィンビッシュ・マクダーモットは帽子を取りに行った。エルトン・クォーターマスはオーバーコートを取りに行った。彼らは夜明け前に行く前にそれらを着るためにテーブルに戻った。

「アリスター、さっきの裏手の変な音は何だったんだ？」とエルトン・クォーターマスがオーバーコートの腕一杯から尋ねた。「爆竹みたいだったが絶対完成」

「さあ、行こう、アリスター」とウィンビッシュ・マクダーモットが急かした。「君がヒットマンで、ヒットの時間だ。何かあったのか？ 具合悪そうだぞ」

「あの変な音はピストルだったんだ」とアリスターが非常に曖昧な声で言った。「何があったかというと、女がそれで私を撃ったんだ。数日前まで彼女と付き合ってた。そして最近になって、別の誰かと付き合ってるんだ」

「君を撃っただと！」とエルトンがパニックの声で叫んだ。「どこを？」

「頭」

「それは深刻だ。痛かった？」

「うん。殺された」とアリスター・グロッグが言った。彼は小さく身をよじらせた、そして死んだ、テーブルに座ったまま死んだ。

予測はできたことだった。「特殊方程式」のデータに暗黙的に含まれていたんだから。「仲間を守る」系が発動した。破局の友人団（おそらく不自然または少なくとも非人間的）が動いたんだよ。エニスコーシー・スウィーニーの荒廃のビジョン実施を防ごうとする小集団を防ぐために動いたんだな。

アリスター・グロッグは死んだ。ウィンビッシュ・マクダーモットとエルトン・クォーターマスはまだ生きていたが、しばらく、たぶん一年間ほど、怖がり混乱していた。

でも、まだ自分たちが何をしなければならないか知っていた。世界の終わりを夢見る前に、夢想家エニスコーシーを殺さなければならなかったんだ。

第 3 部

エニスコーシー・スウィーニーの手紙からの抜粋、第一の選集

1

この手紙は一九一六年十一月以降、フランツ・フェルディナントが皇帝になった後に書かれた。ティレニア三部作の第一部、オペラ『ハルマゲドン I』がウィーンで初演された時期だ。おそらく初演の夜ではなく、通常初演から一週間ほど後の「皇帝の夜」だったのだろう、またはそれ以降の上演だったかもしれない。皇帝は舞台裏にいるが、オペラ観劇には興味がないようだが、オペラの主題と事実には強い関心を示している。したがって、一九一六年十二月か一九一七年一月の可能性が高い。エニスコーシー・スウィーニーは「我が親愛なる汚れた友へ」と始まる手紙を十数通書いているが、この「汚れた友」は誰か特定されていない。

おいらの親愛なる汚れた友へ：

昨夜、フランツ・フェルディナント皇帝に会ったよ。ここには（信じられるか？）ブルク劇場の舞台裏にロイヤルルームがあるんだ。おいらたちはブルクにいる。国立オペラハウスそのものにいるんじゃないんだ。国立は改装中なんだけど、そこにも舞台裏にロイヤルルームがあってね。大きく豪華なブルク劇場がウィーンで二番目に良いオペラハウスでしかないなんて信じがたい。

「大いに気に入った」と皇帝に言われたよ。「余が占めるものすべてにおいて二番目に良いようであるぞ。しかし余はその二番目に良いものをすべて受け入れる。皇帝の宮殿であるホーフブルクには住まぬ。それはここ数ヶ月、故『老皇帝』の霊廟だった。余は市内の王宮の二番目、カールスパラストに住んでおるのだ。また余は今ウィーンから統治している皇帝の中で二番目に良い皇帝でしかないらしい。最高の皇帝は－－まあそれは理想の皇帝なんだろう、余はその理想に及ばぬのだ。

余は『臨時皇帝』や『管理人皇帝』とも呼ばれている。すべての点で正当な皇帝だというのにな。余がなぜ『管理人皇帝』や『二級品皇帝』と思われているか知っておるか？」

「フランツ・フェルディナント皇帝陛下、まったく存じ上げませんや」とおいらは答えた。「なぜ陛下がそう思われているかなんて、おいらが知るよしもないでしょうに」

「アメリカのオペラ制作者よ、貴殿がだれよりも先に余についてそう思ったからであるぞ。余についてさらに別の考え方をするようになる過程でそう考えたのだよ。貴殿は**実は**こうしたすべてを百も承知なのであろうとにらんでおるのだがな、暗いリブレットのスウィーニー殿。貴殿は余が『二級品皇帝』である理由を知っておるであろう。貴殿が『一級品』を創り、その『一級品』が攻撃に出ているからだ。それはすでに多くの民草の心において低地を占領しているのだ」

友よ、若者はすべて皇帝と親しく謁見して話しをすべきだ。それは若者の教育の不可欠な部分で、あまりにも見過ごされている。皇帝は友好的な声と態度だが、見た目は友好的でない。顔と体が厚ぼったく、野猪のようなロひげがある。年齢より老けて見える。この二年半で二十五歳老けたと言われている。あの人が『若皇帝』を平気で名乗れるのは、最近崩御した『老皇帝』の影にまだ立っているからでしかない。

「貴殿はこのオペラを携えてウィーンに来るつもりはなかったのだな。この作品の発表から距離を置こうとしている、超越オペラの作曲者殿。だが余が貴殿を召喚した。最もつまらぬ皇帝でも、最高の作曲者を召喚できる。そのくらいの力はまだ我々に残っているからの。質問するために貴殿をここに召喚した。そして、貴殿は参ったな。

では、オペラと、そのリブレットに話を移そう。それらは実際の様相よりもはるかに鮮明に物事を綴っておるな。これらのことが起こるのwいかにして知ったのかな？ **それらは起こらないが**、どうやって起こると知った？」

「何のことでございましょうか、皇帝？」

「リブレットの内容だ。『第一のバージョン』のものだ。ウィーンが世界の精神分析の首都であることは知っておろう。原型と原型の製作者で溢れかえっておる。だが貴殿は現在の原型製作者の中で最も背が高い、海の向こうから来た者だ。ティレニア三部作の第一部、あのろくでもない『ハルマゲドン I』のリブレットに描かれたもの、今とてつもなくひどい歌われ方をしているその恐ろしいものは、オーストリアの人々の（そして私の）原型的な悪夢にあった。貴殿の小さなリブレットが印刷される前からだ。なぜそんなことがあり得るのだね？」

「それは存じ上げません、皇帝陛下」とおいらは言ったんだ。

「だが、推測はできるであろう。余の悪夢、暗殺による余の死の悪夢を含め、貴殿はどうやってそれを恐ろしく喜劇的なオペラの形にしたのかね？」

「おいらはただの貧相なオペラを作る貧層な男にすぎません」とおいらは答えた。

「その年七月に余はボスニアには行かなかった。その繰り返す悪夢が余の死で終わるから、行けなかった。おかげで余は臆病者扱いされた。それ以前は臆病者などではなかったのにな。だが、貴殿は余の私的な妄執をすべてオペラ史の形と文脈で提示したな。余の心を読んだのか？　余の妄執への窓を持っているのか？ どうやってこれをした？」

「それは申し上げられません。少なくとも、申し上げません」

「そんなことは**起こってはならんのだ**」と皇帝は断固たる口調で命令するように言った。「世界にはそれが起こらないようにする責任ある人が十分にいるのだ。その者たち自身は、それがどれほど起こりそうなギリギリのところまできたか、気づいていない。だが、核心的な出来事の時（貴殿のオペラと余の悪夢によれば）は二

年半前に過ぎ、余はまだ健在である」

「いや、生きてますが病気ですよ。皇帝陛下、道が一方向にしか走れないなんてだれが言いましたね？」

「貴殿はこれらが起こる**かもしれん**と言うのか？」と彼が尋ねた。

「たった今、ブルク劇場の舞台で起こってるじゃないですか」とおいら。

「ブルク劇場の舞台は世界ではない」と皇帝は主張するんだ。「時間は逆には走れない。私はその出来事から安全なのだ」

「その舞台は陛下にとっての世界かもしれませんよ。舞台の時間は逆に走るかもしれない。フラッシュバックで死ぬ者は多いんです。皇帝陛下は決して安全じゃありませんよ。『安全であること』は『皇帝であること』の反対なんです」

おいらにしてはちょっと残酷だったよな、その部分は説明できない。その心配する男に対して全く残酷な気持ちになんかならなかったんだし。

でも皇帝は厚い体でうめき、揺れ始めたんだ。何か精神の苦痛に陥ったんだけど、それはあの人に必要だったと思う。その苦悶なしには、二つの人生の軌跡をあれほど公に生きたりできないんだ。

友よ、すべての中年皇帝は、暗いリブレットの若い作曲者と親密に会い、話をすべきなんだ。それは中年皇帝の教育の不可欠な部分なのに、あまりにも見過ごされている。

エニスコーシー

2

この手紙はおそらく 1907 年頃に書かれた。書かれた相手の「かぼちゃタネちゃん」は、エニスコーシー・スウィーニーが後に結婚したメアリー・マーガレット・マグロンスキーの可能性が高い。

愛しのかぼちゃタネちゃんへ：

イリノイ州ブルーアイランドから初めての手紙だろ。今夜戻って会うし、君はこの手紙を明日まで受け取らないけど、今書きたいんだ。君が試合を見に来なかったのは残念だ。私が今までやった最高の試合だ。誰もやったことのない最高の試合と言ってもいい。

二年前にこの試合の詳細を全部書いたんだぜ。ホワイトソックスとジャイアンツのワールドシリーズ第七戦にしようと思ったけど、確実にペナントウィナーにするにはめっちゃいじらなきゃいけなくて、そのエネルギーを他に使った方がいいと決めた。

だから、今日の試合でその脚本を使ったんだ。自分がピッチャー兼ヒッターのヒーローだ。そして、ストッカーコーチ（ああ、君の叔父だ、忘れてた）が「今日はおまえがピッチャーだ、スウィーニー。なぜだか分からん、おまえはピッチャーなんかやったことないし、できるかどうかも知らんが、今日はピッチャーだ。良いピッチャーは三人いるし、相手のブルーアイランドは郊外の高校チームでも最高だ。なぜ三番手の外野手なんかをピッチャーにするのか自分でも分からん。おまえ

はなぜか分かるか？」と言った時、おいらはすべて細工は流々なのが分かったよ。

「わかりますよぉ。理由ならしっかり。でも、監督にそれを言うのは倫理的じゃないっすから」

聞いてくれよ、かぼちゃタネちゃん、これは九回裏 2 アウト、2 ストライク 3 ボールでグランドスラムホームランで勝つような簡単な試合じゃない。そんな安っぽいものじゃないんだぜ。そして誰でもその場でまとめられるような試合じゃないんだ、かなり状況をよくコントロールしてるヤツでもね。この試合を二年抱えて生きてきたんだ。そうでなきゃ今できなかった。それに、ブルーアイランドでビジターだから、九回表で、裏じゃない。どうやってその問題を解決したか聞いて。

おいらは全試合ノーヒットで、誰も歩かせなかった。でも、グランドスラムで勝つには、相手に 3 ラン取らせなきゃならなかった－－いや、**ホームランじゃない**、もっとすごい。だから、うちの選手にめちゃくちゃひどいエラーをさせた。ああ、殺人級のやつ！

毎打席でホームランボールを打たなきゃいけなかったけど、それがホームランにならないようにしたんだ。あるときは、高く上がった打球がフェンスを越えた後、凧に当たり、それに絡まって凧の糸が切れて、ボールは凧に絡まったままフィールドに戻ってきたんだ。ショートが凧を、セカンドベースマンがボールをキャッチした。

もう一つの高打球は鶴に当たり、鶴とボールがフィールドに落ちた。別の打球は旋風に捕まり、ブルーアイランドの全選手が捕れそうな感じでボールが吹き飛ばされてから、最後にサードのグローブに落ちたんだ。

おいらたちって、新品の赤い野球シャツですっげえかっこいいチームだったんだ。おいらは今日まで外野手の三番手だから持ってなかったけど、同じくらいかっこいい赤いセーターを着てたんだぞ。

で、最後にやってきた。9 回の**表**で、ブルーアイランドが 3 対 0 でリード。おいらはまだノーヒットで、24 打席連続奪三振、それでもエラーと奇跡で負けてた。でもそこで、またエラー三つ、こんどはブルーアイランド側のやつで、満塁にしたわけよ。いやあ、このエラーを仕組むのはストレートな手口より疲れるよ。で、2 アウト。打席はおいらで、カウントはツースリー。おいらにとっては今しかない、ブルーアイランドの 18 歳のデカいピッチャーが速球を投げてきて、こいつはおいらでもコントロールが難しかった。

今しかない、やりか死ぬか、泳ぐか沈むかだ。救うのはグランドスラム－－いやちくしょう、ホームランじゃないぜ。世界でおいらだけが思いつくグランドスラム「サムシングエルス」だ。

グランドスラムバントだ。

そしてグランドスラムバントが状況の完全なコントロールを必要としないと思ったらおおまちがい！ やれやれ！

サードベースラインにバントした。ピッチャーがそれを取り、どのベースでもアウトにできた。おいらは自分がいちばん簡単なアウトに見えるよう転んで見せて、他のランナーはピッチと共に走り出してた。だからピッチャーは一塁に投げた。おいらのことを笑ってたね、そうでなきゃもっと良い投球ができたのに。

落ち着いて。ここは本当のコントロールが必要だ。スズメバチが一塁手の鼻を刺

した。事情を知らない人は、そんなハチがどこから来たかも分からないだろう。一塁手は鼻を刺されて寄り目になったので、ボールをキャッチできずにそれが頭に当たり、気絶。ボールが高く跳ねてセカンドベースへ。おいらは大声で叫んでプレイを続けさせ、状況をコントロールしやすくした。その間にランナーがホームに殺到した。

ピッチャーがボールを取り（一塁手の頭から高く跳ねた）、セカンドに投げたんだけど、セカンドとショートが衝突して気絶、おいらはサードへ。センターがカットしてサードに投げたが、アナグマの穴に踏み込んで足を折り、ボールはサードの腕を這い上がり、顔に当たって気絶。レフトが驚異のバックアップでボールをホームに投げたが、そのままベンチに衝突して倒れた。キャッチャーとピッチャーがホームをカバーしようとして衝突し、ボールがビリヤードのようにはねまわり両者を気絶させた。

おいらは立ったまま得点し、勝ったんだ。

九回裏はどうしたのかって？ かぼちゃタネちゃん、九回裏はなかった。ちゃんと話は読んでいたろうね？ 一塁手、セカンドベースマン、ショートストップ、センター、サードベースマン、レフト、キャッチャー、ピッチャーがプレイで怪我した。9 回裏に打つのはライトだけ。

でもそいつは言ったよ。「いやだよ。こんな流れだと、フィールドに出たら怪我するよ」。代打もみんな危険すぎて拒否した。

でも、向こうの往生際が悪かった。なんかこの試合は怪しい、汚い勝利だと言うんだ。うちのコーチ、君の叔父ストーカーも、口にはしなかったけどそう感じたみたいだ。彼が言ったのは：

「今日、おまえのコントロールはよかったじ、スウィーニー。すごく良いコントロールだ。こんな完全なコントロールは見たことない。**すべてを**こんなにコントロールしてる人は見たことない」

彼はあの変な目つきでおいらを見た。君の目となんか似てたよ。たぶん君の一族の目かな。**君が**おいらをそんな目で見るのは、お見通しだってことだ。彼がそう見るのも同じ意味かな？ だけど、叔父さんは疑念を抑えた方がいいと思わない？
おいら**叔父さん**のチームで投げ、同じ側なんだぜ。**勝った**んだぜ。

おいらの偉業は野球でユニークなのはまちがいないと思う。あと千年野球が続いても、グランドスラムバントは二度とないよ。

3

この手紙はおそらく 1911 年頃に書かれた。誰に宛てたかは特定できない。

親愛なる軍曹にして友人へ：

君は今はまだ警察で低い地位だけど、低いままじゃなくなるかもしれない。君が犯罪を防ぎ、栄光に浴する方法があると思う。

ある男がおいらを殺そうとしてるんだ。堂々と、面と向かって殺すと言った。この男は狂人で、社会とおいらの安全のために止めなきゃ。

この男はあの手の数字カルトの一員だ。こいつらは複雑な数学方程式で未来を推

測できると信じてる。こいつらの計算は少し理解してるし、確かに何かをつかんでると思う。そうしたいと思えば完全に理解できると思うけど、いろんなことを強く望むのは控えてるんだ。こっちの端で力を使いすぎると、反対側で力が尽きる気がする。それにやつらの計算方法を理解しても、やつらがおいらを殺すのは止められない。

君が法の代表とはいえ、法に訴えるのはためらわれる。おいらはまだ未成年で、控えめな人間なんだ。こんな狂ったことを訴えてそいつを糾弾しても、立派で人当たりのいい大学卒の男が反論すれば、だれもおいらの言葉なんか信じないだろう？

事実を書いておこう。おいらを殺そうとしてる男はエルトン・クォーターマス。貧相な数学者だ。いや、身なりは貧層だけど、おそらく非常に優れた数学者だと思う。シカゴ工業技術大学で教えていて、あまり給料は高くないと思う。君の巡回エリアのレストラン兼ピアノバー兼ビリヤード場の回転ベクトルで深夜を過ごしてる。

こいつはしばらくおいらを尾行し、こっそりスパイしてた。そこで昨夜、決着をつけようと思った。深夜一時過ぎに回転ベクトルに行き、そいつのテーブルに座ったんだ。

「おいらを尾行してスパイしてるな。だからそろそろ、君を待つことにする。おいらに追いついて、何が起こるか見てみろ」

「私なりの時間と方法で追いつく」とクォーターマスは言った。

「おいらをどうしたいんだ？」

「殺す。君を殺したい」

「なぜ？」とは冷静に、でも内心少し震えながら尋ねた。

クォーターマスが言った。「君の夢だ。君の夢は世界を乱し、人類に危険だ。止めたいが、君が自分で止められるとは思わない、そうしてくれるとは信頼できない。死ぬまでそんな夢を見続けるはずだ」

「死んでも止めなかったら？」

「いや、止めるとも。方程式がそう言ってる。死後も続ける人はいるが、君は違う」

「こんなばかばかしい話は初めてだ」

「分かってる。それに対する弁護として言えるのは、それが本当だってことだ。君は世界に不吉な未来を夢見て、企んでる。たった一人の男、君が破壊される方が、世界全体が破壊されるより正しいと私は信じている」

「おいらが何を**してる**ってんだ？」

そいつは繰り返した。「夢見てる。邪悪なひねりを加えた夢だ。大破局の夢を夢見て、世界は君の夢に踏みにじられるにはもろすぎる。」

「それがどんな夢だってことになってるんだ？ 夢がどうやって何かを傷つける？」とおいらは尋ねた。

「ハルマゲドンの夢だ。君が破壊されない限り、世界を破壊する」

「なぜおいらをすでに殺してないんだ？　これまでにその機会はいくらでもあっただろうに」

「君自身の方程式の『反動』や『反撃の系』を恐れていたからだよ。だが、今やその対抗法を見つけたと思う。気長に待て。もうすぐ殺すから」

「警察に引き渡す」と私は言った。

そいつは嘲るように尋ねた。「私が言ったばかばかしいことを君が通報しても、私は『このイカレた子はどうしちゃったんだい？　完全に頭がおかしくなってるから、誰かが調べるまでブタ箱に放り込んどいてくださいよ』と言うだけだ。いやあ、もしそうなってくれたら、ラサール通りのブタ箱には知り合いがいるから、君を完全抹殺してもらえるんだがなあ」

「あんたと理性的に話す方法があるはずだ」とおいら。

「君は私の友アリスター・グロッグと理性的に話しただろう。君は女の手に銃を持たせて彼を撃ち殺したじゃないか。それが君の理性だ」

「グロッグなんて聞いたこともない」

クォーターマスが言った。「あいつのほうは君を知ってて、君のために命を失ったんだ。まあ、私にも起こるかもしれないが、あいつとは違ったところがある。私は『特殊方程式』のロックイン装置というか要素を考案したんだ－－いや考案したんじゃないな、見つけたんだ。それを活用できるかもしれない。これで私が死んでも、ロックインが働き、君も死ぬ。でも、逆は必ずしもそうじゃない。**君が**死んでも、私は逃れられるかもしれない。でも、死んでも君を道連れにできるなら、それだけの価値がある。世界とその質のためにやるんだ」

「あんたは狂ってる」

そいつは認めた。「その可能性はあるな。ハックベリーの『ポストヒューマン人類のための 3 つの代数』にユーモラスな序文がある。彼のその傑作をマスターするには、機能する創造的な狂気が必要だ、とね。私は簡単にマスターしたよ。彼は、狂うというのは他の人を閉じ込めている柵を越えることだと言う。その狂気が善か悪かを分けるのは、柵を越えた時に何に踏み込むかだ、と彼は言っている」

「**あんたが**何に踏み込んだかは知ってるよ。あんたは農場の雄鶏だ。あんたはウンコに踏み込んじまって、いまや靴にウンコがついてるんだ」

「小さなスウィーニーくん、君の夢がファンを引きつけてるのを知ってるかね？ファン、信奉者だ。若い人もそうでない人も、君の次の血と火の夢を待ちきれないでいるんだ。彼らは君と君の作り上げた未来に夢中だ。私の学生や他の出会った人々の中に、好ましくない、血に飢えた、憎しみと殺人の、世界を崩壊させたがる人々がいる。彼らは盲目にカルトを作るための核を探していて、いまや君と君の暗いビジョンでそれを見つけたんだ」

「なに言ってんだい、誰もおいらの夢にダイヤルをあわせたりできないんだぞ」

「私はできる、他の人もできるんだよ。私自身、時々少しやってる。そして、君の夢は気分を悪くさせる、ひどく気分を悪くね。君の死だけが私を健康にし、君の死だけが世界の健康を守れる」

この気が触れたらしい男は、おいらを殺すつもりだとはっきり言うんだ。この男は『ハルマゲドン I』のリブレットの最初の部分、まだ紙に書いてない、言葉にもしてない、頭の中の音楽だけのもの、さらにはまだ思いついてないおいらのものを知ってる。こいつはそれを、そいつの恐怖と憎しみによっておいらに語り直した、というか思い出させた。というか、おいらに語りなおおした。おいらは事前のフィードバックは嫌いじゃないんだ。それを使う。良いできだし、他の部分とよく合ってるからね。もしコンピュータが十分進化したら、おいらがいなくてもデヴォニアン博士の『特殊方程式』から三つのハルマゲドンの全シーケンスを構築できる

と思う。でも、今分かった、コンピュータは**実際に**十分進化してる。おいらこそがそんなコンピュータで、これに使われてるんだ。

クォーターマスなしで、まさにこのサイドライトを考えられたか分からない。たぶんできたと思う。すでにおいらの心の中にあったからね、でもすごく奥深くだったんだ。

友よ、この男は犯罪的な狂人だ。しかも君の巡回エリアにいる犯罪的な狂人だから、それは君の関心事だ。どうか、どうか何か口実を見つけてこいつを捕まえて調べてよ。そしてこいつを拘留する方法を見つけてよ、できれば永遠に拘留できるような。こいつの妄想が終わるまで留置してくれよ。そしてそれが終わるまでってのは、たぶん永遠にってことなんだ。

エニスコーシー・スウィーニー

4

この手紙は 1913 年頃のものらしい。「金のなる木」は特定されていない。

親愛なる金のなる木くん：

全く新しくないかもしれない考えに取り組んでるんだ。少しの間それでかなり稼いだけど、今その考えのためにその儲けの一部を失った。取引で大きく勝つはずだったけど、ちょっとしか勝てなかった。この活動からの利益があっさり蒸発していったみたいだ。

君自身も道々、そんな考えに関わったことがあると思う。君のお父さんもそうだったとほとんど確信しているよ。しばらく前に君は、その二日前に書いた短い手紙を返してほしいと言ってきたよね。

「レターヘッドが間違ってた」と君は言ったね。「間違って使っちゃったんだ。そのいくつかを見て感心はしていたけど、このトラックで使うつもりは全然なかったんだ。これはまったくこのバージョンのものじゃない。まだここまで来てない別のトラックのものだし、ここまできたら通用しない代物なんだ。お願いだエニス、これはまったく説明しようがない。とにかく最後に書いた手紙を返してくれ」

金のなる木くん、できればそうしたかった。君からの手紙の束を取り出したら、全部あるんだが最後の一通だけない。

「ここにあるはずなのにない。他にはこれがありそうな場所なんてないんだけど」

すると君は言ったね。「ああ、それじゃもう始末がついたんだと思う。望んでた通り、勝手に解決したんだ。そして、ありそうな場所は**もう一つ**あって、そこにあると信じてる。忘れてくれ、エニス、大丈夫だ」

それが君の言葉だ。君は変わってるよ、金のなる木くん。

それから君のお父さんが最後においらに仕事のオファーをした時、こう言った：

「君はこの仕事にほぼ理想的なんだがな、エニス。うちの銀行には君のような賢い子が必要なんだ。銀行の伝令係としてね、エニス。おや、いまの言葉に反応しないのか？ **銀行の伝令係**だぞ、エニス。どんな銀行の伝令係の話をしてるのか、君にはわからんのか？

それだとなあエニス、思ったほど君に確信が持てなくなったぞ。君は賢い、賢いけど、ピンポイントの賢さじゃない、私が求めてるのはそれなんだ。ある意味で賢さが足りず、ある意味で賢すぎる。こんなに知ってるくせに、そこまで気が回らないってのはどういうことだ、エニス？　あり得ないだろ？

おや、『ノー』と言うのか？（おいらは実際に「ノー」とは言ってないんだ、金のなる木くん。君の父がおいらの口に手をつっこんで、舌の下から「ノー」を引っ張り出したみたいだった。それなのに、それがおいらの声で空中に響いたんだ。）

まあ、君が断るならそれも仕方ないのかもしれない、エニス。忘れてくれ、エニス、大丈夫だ」」と君のお父さんは続けた。

君と君のお父さんは何かをつかんでるし、おいらがやってることと同じかもしれない。おいらが知りたいのは、条件つき銀行業や確率銀行業、マルチトラック銀行業について何か知ってるかってことなんだ、君がお父さんの銀行で働いてんならね。言った通り、最初にそれでかなり稼いだんだけど、それについて何も知らなかった。でも、君は知ってるはずだと思うんだ。

つまりね、おいらが一つの口座からお金を引き出したらどうなるんだ、**その口座が別のトラックにある時には**？ そしておいらがそれを持ち帰って、このトラックでそれに相当する口座に入金するだろ。それで引き出しが表示されず、入金だけが表示されたら？ 別のトラックに物を持って行って売り、こっちに戻ってきてお金を持ったらどうだ。売った物はまだこっちにあり、お金も同時にここにあることになる。

同じ時間に四つのちがったトラックで四つのちがう仕事をして、すべてのお金をこのトラックに持ってくる方法を見つけたら？ そんな取引をしたらかなり儲かるんじゃない？ 複数のトラックの株式市場価格を同時に知り、その価格差で賢い取引をしたら？　まあ、これらは全部いまくいくけど、でも十分には機能しない。いつも何か変なことになって、ほとんどの金を吸い取られちゃうんだ。

これについて知ってることを教えくれ、金のなる木くん、もし知ってて、教えてくれるなら。でなければ－－忘れてくれ、金のなる木くん、大丈夫だ。

エニスコーシー

5

この手紙は二つ前のものと同じ時期、一九一一年頃、エニスコーシー・スウィーニーがおよそ十七歳の時に書かれた。チャールズ・クラチェットまたはクロチェットという、特定されていない人物に宛てられている。

親愛なるチャールズへ：

おいらの三部作の第一部、『ハルマゲドン I』の音楽が完成した！ 素晴らしい！ 恐ろしい！ すべての楽章で炎に包まれないのか不思議なほど。時々本当に炎上する。

ご存じの通り、おいらは完全に切り離された心を持ってるので、楽器なしで、完璧に防音のロフト部屋でやってる。そこにある唯一の音は、五線紙の上をペンが鳴

らし、合唱する引っかく音だ。音楽はおいらの心だけで鳴る。心だけで見聞きする楽器は、外の世界のどんな楽器とも同じじゃない、でもいつか作れるかもしれないのはいくつかあるけどね。

それでも、おいらの衝突し高騰する心の音楽は外でも聞かれたと思う。かなり広く聞かれてる。

人々が聞いてるのに、おいら自身はまだ聞いてない。人々がそれの転調版を口笛で吹いてる。人々が理解してるのに、おいら自身は決して理解しない。自分にそんなことを許さない。清潔なものと汚れたもの双方の情報源から、おいらの夢が、その音楽と語りの双方について、熱心に追いかけるファン集団を持ってるって聞いた。でも今のところ、おいらが夢を注いだ唯一の形は、誰も見ていない音のない稲妻の五線譜なんだ。

でも明日、みすぼらしい天才がおいらの書いたものを見るんだ。そいつがおいらのためにオーケストレーションしてくれる。それのためにおいらのところに来た。有名な人で、おいらは全くの無名。そいつは毎晩それを聞いているんだって。そしてその暗くてねじれたもの、世界をぐるりと巻く蛇と呼ぶものを、どうしても手に入れずにはいられないんだって。そいつはその蛇を親密に知り、おいらのオペラが書かれる前からそれを知ってるんだ。おいらの内心だけで名付けたパートの名前、例えば『1914 年 8 月のトナリティ』を知ってる。

そいつは言うんだ。「我々がやってるのは、寺院の柱をぐらつかせ、曲がり、崩れるまで押し、屋根を我々やすべての上に轟音と共に落とすことなんだ。崩れる屋根は世界そのものだ。少年よ、我々は世界を崩し、その基盤を壊してる、なぜ叫ばない？ ああ、素晴らしい、恐ろしい、また素晴らしい！ 破壊がすべてだ。」それが彼の言葉だ。

まあ、こいつは素晴らしいオーケストレーターで、いてくれてラッキーだ。

おいらはすぐに詞をやってる。音楽ストリップでの連続する詞と、リブレットを同時にやってる。昼夜を問わず、ロフト（おいらがスタジオと呼ぶもの）で小さな火事が起こるのが悩みの種だ。火事に困惑したふりをするけど、実はしてない。五線紙が、書き終わると時々炎に包まれる。それを叩いて消さなきゃならない (燃えるのは主に端だけなので、今は余白の広い五線紙を使ってる)。火を消したら、五線紙をまだ白い紙に貼り、焦げた部分が崩れないようにホルムアルデヒドをスプレーしてる。

すごく急いでる五線紙は、書き終わる前に炎に包まれる。これらはおいらの作品の力への、誰かからの賛辞だ。

チャールズ、今朝早く、牙のある小さな子が私を止めたんだ。彼女（たぶん女の子だと思う）はおいらの手を握って、なんか爪を感じた気がした。

「みんなぶち殺す、みんなぶち殺す、そうでしょ？」と彼女が尋ねた。

「すごくたくさん殺されるかもしれない、うん、小さな人」とおいら。

彼女は言ったんだ。「さっき、朝起きた直前の部分、あれは好きだったわ。火と爆音、ひどい匂いが好き。人の脳がロウソクを吹き消すように吹き飛び、みんなくそくらえの幼虫になる、その部分も好き」

おいらはフォロワーを持ってるんだ、チャールズ。彼女はおいらが誰か知らなかったのに、知ってた。

そしてチャールズ、昨夜 0 時にモニターが訪ねてきた。モニターってのが何かは知らない。小学生の時、モニターは一週間ごとに選ばれて全員のコートや帽子を管理し、秩序を保つ生徒だった。これはそんなモニターじゃない、でもモニターだった。

そのモニターが言うんだ。「これは恐ろしい。君は自分の力を病気で些細なもの、大きなものの小さな絵に使ってる。すべてが終わるとき、今日無駄にした分だけ力が足りなくなるかもしれない。解決のところと物事の終わりで全てが狂いかねない、そこのところで君は力が足りなくなって、消えるかもしれないから。

我々は限られた数しかいない、全員が必要だ。一人が失敗すると、残りに耐えられない負担がかかる。そもそも君はどっち側なんだ？」

モニターに、あんたの側にいたいと言いたかったけど、そいつはいなくなってた。

エニスコーシー

6

この「ストロングハート」という知られざる友人に宛てられた手紙は、ここに記述された大失敗直後に書かれたようだ。

ストロングハート：

芸術での最初の本当の失敗を味わった。魂と体とお金、どこもかしこも痛い。君もおいらの友だから、魂が痛んでくれると願う。君の叔父たちはプロデューサーだから、財布で痛む。

一九一九年一月二十九日がこの劇の初日、一月三十一日が最終日だった。大コケだ。おいらはとても面白いコメディだと思ったし、今もそう思う。おいらは脇で、思いつきで少し稼いだよ、たくさん稼げると思った思いつきだったんだけど。おいらはステイブラー劇場の北ロビーで三晩やった『ロビーバー』の興行主だったんだ。

設備は借り物で移動式、バーはすっげえ大繁盛。コメディが三晩じゃなく三年続いたら、この仕組みで本当に金持ちになれただろう。

このコメディは見る人のほとんどを今すぐ飲みに行きたくさせたんだ。観客をめっちゃ酒に渇かせた。それが意図した効果の一つだったけど、圧倒的な効果になるとは思わなかった。事実、すごく面白いコメディだった。もう一つの事実、第一幕が終わる前に観客が誰もいなくなり、皆が『ロビーバー』に殺到したから、劇は失敗に見えた。君の叔父さんたちはそれが失敗だと考え、劇を閉じたんだ。でも、三晩とも完売で、そのまま続けても完売が続いただろう。

ロビーのバーで酔っ払った幸せな客は本当に喜んで、二枚舌でも劇を高く評価しただろう。そいつらの雪だるま式の推薦で、他の人を連れて劇を盛り上げ、バーを盛り上げ、みんなくそくらえの金持ちになれた。劇の閉鎖は誤解によるものだった。

これが出来事についての適切な事実ってもんだ。

エニスコーシー

（この劇は、一九一九年一月二十九日にニューヨークのステイブラー劇場で開幕し、二

晩後に閉幕した「禁酒、ある笑劇」という題名だった。今はほぼ完全に忘れられている。）

第 4 部

「世界の構築について」

これはエニスコーシー・スウィーニーが『建築と原型』一九一六年十一月号に書いたものだ。

1

世界は自ら構築されるものではない。それは構築される。知的な者によって意図的に構築される。「原理には知性があった」（*In Principia Erat Intellectus*）。ただし、混沌の裂け目から始まるわけではない。球体の上で始まる。すべてのもの、雨滴や火の滴、プラズマの塊やガスの集合、岩の世界、水の世界は、すべて大まかに球形を取る。球体の表面はむき出しで、岩の土、形成中の滑らかな頁岩、泥の土、そしてギザギザのダイヤモンドが散らばる土だ。幽霊はいるが、まだ生物はいない。

それは球体の多層の表面から始まる。足音のくぐもった音がする。それがすべての皮肉な始まりだ：「世界は空虚で、すべての生命がない。足音のくぐもった音がある」、まるで短編小説の始まりのようだ。足音はパンサーとそのパンサーたちのものだ。そして、パンサーとは誰か？

パンサーは汎（パン）・テリオンまたは汎（パン）・テリウム、すべての動物、原型的な動物である。それは他のすべてのものが分岐する冷ややかな熱の肉だ。複合体（「彼に組み込まれたものやその破片を見てみるべきだ」）であり、生成する力だ。粘土の肉である赤い粘土だ。また夢の支配者だ。

しかし多くの神話では、世界を作ったのは**熊**だとされる。だが、そこに矛盾はない。熊は汎（パン）動物の非常に強い要素の一つだ。この原初の夢の支配者の獣は実は「ベアキャット」なのだ。これは預言者エリヤやマーク・トウェインに登場し、今日の一般的な表現「なんてすごいベアキャットだ！」に見られる。始まりにあるのは汎（パン）テリウム、ベアキャットだ。それは赤い草である肉だ。夢を胃から吐き出し、それらは「世界」として生き残るか、全く生き残らないかで優劣を争う。

聖書で、ヨセフの束が立ち上がり（それは同じ平らな岩の土、場（*situs* またはトポス（*topos*）で起こった）、彼の兄弟の束がそれにひれ伏したとき、それは肉となった夢であり、ライバルの夢に勝利したのだった。ファラオの夢（これもまた同じ平らな岩と泥の土で、ファラオはナイルの岸の半開発された場所、葦の草の中でと描写する）で、醜く痩せた牛が七頭の滑らかで太った牛を食べたとき、それは新

興の世界の一部となるものとそうでないものとの間の、戦いによる選択だった。もし太った牛が痩せた牛を食べていたら、今日の我々はどうだったかと思うことがよくある。

平らな岩と泥のエリアは基本的な闘技場だ。それは無意識のトポスまたは場であり、すべての *limbi* または辺境地帯でもある。現在、スペインのフィゲラスに十二歳の少年がいて、毎日このトポス、未形成で無意識の床を描いている。これは混雑していない原初の土で、紫がかった舗装のようだ。この十二歳のカタルーニャの少年は、この風景を平らなパンサーや熊、ベアキャットが住むものとして描き、パンケーキのように平らに溶けたように描く。平らな獣は、折り畳まれ階段状の平らな土地にだらりと垂れ下がっている。

絵は早朝のものなので、夜明けと偽の夜明け（これらもまた戦いによる選択がある）から矛盾する方向に影が投げられる。早朝、原初の獣は溶けた紙のように平らでだらりとしている。その時、彼らは夢を吐き出し、空っぽになる。これらの夢や吐き出しは、禿鷹の頭とコウモリの翼、またはキャンバスと支柱の翼で、低い空を飛ぶものとして描かれる。

このトポス、飾られていない無意識の平地は、変化することもある。だがその変化は長い間、きわめて条件付きだ。丘が必要なら、ロープで引く生き物によってそりで引きずられる。山が必要なら、車輪や丸太のころで転がされる。これは地質学的な山の持ち込みプロセスに似ている。山はいつもマグマの車輪やローラーのような滑らかな押し出しでやってくる。

トポスが十分な装飾を獲得すると、祝福されるか、呪われる。祝福されれば聖地の一つになる。呪われれば、何になるかはわからない。

最初の形でも、土地は完全に平らではない。彫像の石が採掘される棚がある。赤いアダムの粘土が取られ、汎(パン)テリウムが来た粘土の穴がある。しかし、トポスは依然としてその平たさまたは階段状の平たさという外観を保つ。

2

パンサーまたは汎(パン)テリウムは自分が生き物であることを否定する。「おれの吐き出した夢は肉を得るとすぐ生き物になる」と彼は言う。「しかしおれは前生き物だ」

最初は、採石場や粘土の穴、夢の沼で働く盲目の者たちがいる。しかし、彼らは協力的な者で、持っている贈り物を分け合い、広める。一人が頭に現れた裂け目から少し見えるようになった。彼はのみとハンマーを取り、仲間の一部のトラバーチンの頭に目を作り、彼らも見えるようになった。他の者は、崩れた土と水でモルタルと乳棒で絵の具を作り、他の盲目の労働者に目を描いた。描かれた目でも、彼らは見ることができた。どちらの方法も良い。

おいら自身は、これらの採石場、粘土の穴、夢の沼、新しく緑化する植物園で新しく生まれ、または目覚めた労働者だ。衝動と「複製を作れ！」という命令によって働き始めた。しかし、おいらの周りの者、デミウルゴスや大天使、地下生まれのノームたちは、みなオリジナルを作っている。

「複製はいつも嘘だ」とティレニア顔のデミウルゴスが言った。

「いや、場合によってはただの当て馬だ」と岩の下のトロール労働者が言った。

「この人物は恐ろしい複製を作って恐ろしい現実を追い払うことになってるんだ。やらせとけ！ 恐ろしい現実は自分の複製を見て、『あ、これってオレじゃないか。すでにここにいる。じゃあここに二度いても仕方ない』と言って去るんだ」

「いや、それはもっと大きな嘘の性質についての嘘だ」とパラ・アンジェロスがそいつに言った。「それは蛇の論理で、偽だ。この人物が作る恐ろしい複製は、恐ろしい現実を追い払わない。それは現実の起源になるのだ。発明になる。世界を飲み込む恐ろしい現実に変わる。複製はその性質についてのこの欺瞞、ただの脅し取りや脅すだけの悪魔だという主張によって、脆弱な期間に殺されてしまうのを逃れるのだ。そして、殺せないほど大きくなると、そいつが殺しはじめる」

「じゃあ、おいらはどうすればいい？」とおいらは尋ねる。

「君は命令を受けてるだろう」と一人が言う。「我々一人一人が命令を受けている」

「おいらの命令は『複製を作れ！』なんだ」とおいらは言った。

「なら、作り、祝福されなさい」と大きな巨人労働者の一人。

「なら、作り、呪われなさい」と丘の下の小人労働者の一人が言った。

おいらは作れと言われたから作る。誰が言ったかなんてわかるもんか。誰も他に何をしろとは言わない。

3

概念は傾向の始まりであり、これらは新しい世界の小さな毛細血管と大きな毛細根や根の血管だ。概念は誰かの意図的で研究された共謀によって形成される。謎は、概念がどうやって伝えられるかだ。どうやら空気に蒔かれるらしい。まだ生まれていないラジオから、新しい言葉が生まれた、この空気への蒔き付けについて。

朝のドーナツ＆コーヒーショップのドーナツ職人は、ベアクローが今朝は不人気だが、りんごフリッターは絶品、ピリッとした味にぴったりという概念を近隣の買い手に伝えることができる。ドーナツ職人はベアクローが不足だけど追加のバッチを焼きたくなくて、りんごフリッターが多すぎて少し生焼けの日に、それをやる。

このような概念の創造はあらゆる商業で最も重要だ。それは基本的な在庫管理なのだ。線や枠組みの外にある概念創造がなければ、コントロールと割り当ては実際の足下ほどにも良くならない。

概念は感覚、少なくとも内的感覚に伝えられなければならない。匂いは、心によって遠くに投影できるとおいらは確信している。しかし、概念の起源は、識域下の視覚や音、匂いによるものだろうと、簡単には追跡できない。おいら自身、かなり大量の証拠に基づいて、概念を放送する達人だが、おいらの理論は実践に遅れている。

ボイコットという地獄の一撃は、氷山のように通常その鼻先だけが表面に出ているが、概念創造の最も粗野な形だ。それは肉となった概念だが、常に癌のような肉だ。良いボイコットは決してなかった。でも、おいら自身がこの装置を使うか？ 使うかもしれない、使うかもしれない。世界を構築する時、暗闇で多くのことをする。でも、自分がボイコット屋だとは思いたくない。

ボイコット屋！ なんて地獄のような臆病者だ！

人間の皮をかぶった三人の悪魔が各六語を話し、人が破滅する。これがボイコッ

トだ。同じ三人の悪魔が各二倍の語を話し、忌まわしきものが成功と尊敬に昇る。これがボイコットのもう一面だ。

いや、どちらの場合も言葉は話さなくてもいい。ただ思うだけでいい。「鍵となる場所で考えを思え、貪欲に欲する者たちが拾い上げ、世界の鼻にまた一つの輪を付ける」。しかし、これは重要な疑問を投げかける。おいらはボイコット屋なのか？おいらは人間の皮をかぶった悪魔か？

4

友人に、下の顔が上の顔より少し広い人がいた。まあ、一時は友人**だった**人で、かつては下の顔が**ちょっとだけ**広かった。今はもう友人ではないし、下の顔が上より**ずっと**広い。

元々その差はわずかで、誰も気づかなかったし、おいらもまちがいなく気づかなかった。でもそいつに、どんなわずかなものでもいいから何か異常を探していた。正面からの率直なカメラショットを撮り、拡大し、小さなマス目に区切り、測定し、比率を記録した。そして、カメラショットを一つの机に、測定と記録を別の机に閉じ込めた。

それからその友人のカリカチュアを描き、顔の下半分を上よりずっと広くした。それを、そいつとおいらとが出入りしてる新聞社に十二枚ほど置いといた。床に落とし、机に落とし、ニュースルームにある無数の掲示板、時には何百万もある掲示板にピンで留めた。

友人（名前はスカントリング）を知る人々はカリカチュアを見て「何だこれ？」と言った。でも見たにはちがいなく、彼の顔の下の広い部分を見た。彼らの見る行為が活性化の行為だった。粗野なやり方だが、次に彼を見たときには、特に顔を見て、下の部分の幅を目測する。

翌日、下の幅をもっと誇張した別の絵を描いた。「メガグナティスで指名手配のスコウジョー・スカントリング」などのキャプションを付けた。これは攻撃で、おいらはそれを九日間続けた。その頃には皆がやつを「スコウジョー」と呼び、あいつはそのことについて怒り、泡を吹いていた。自分とその外見への侮辱はもう冗談の域を超え、自分の名誉を傷つけるまでになったと言うのだ。責任者が誰か分かったらどんなめにあわせてやろうと怒鳴り、怒りのジェスチャーで顎を突き出した。その動きは彼が身につけるようになったもので、顔の下半分がさらに広く見えた。

スカントリングについて「こんな立派な男が、顔が変形してるなんて残念！」という声が聞こえ始めた。そして、やつの顔は本当にひどく変形していた。醜かった。嫌悪感を催すようになっていた。

改めて、そいつの正面からの率直なカメラショットを撮った。やつはそれに気づき、おいらを殴り倒した。でも、おいらはカメラショットを持って逃げ、ロフトに戻って比較した。

ああ二つの写真、すでにかなりの違いがあった。二つの顔の下半分に非常に大きな違いがあった。かなりの違いだが、予想ほどではなかった。最初の写真は、スカントリングがもともと、顔の下半分の領域で異常なほど広顔だったことを示していた。おやおや、昔からそうだったとは。でもそうじゃなかったのだ。

最初の写真から作った測定と記録を取り出した。それらは最初の写真と合わなかった、どんなに区切っても。変化は量子的またはジャンプで進むようだった。ほとんど異常がないと記憶していた記録、記憶とは少し違う現在の記録（広顎の方向に少しずれてた)。記憶した記録や現在の、たぶん修正された記録よりも下の幅がずっと大きい最初の写真。そして、恐ろしい異常を示す二番目の写真。

このかつての友の変化を誰が起こした？ おいらか？ そうだろう。本物か？ ヤツを破滅させるほど本物だった。あいつが生まれつきそんな奇形だったら、それと共存できたかもしれないが、成人してわずか九日でそんな変化に襲われるなんて、適応できなかった。

おいらは世界の個別の出来事も変形させていると思う。ここを広く、あそこを狭く。元型をとどめないほど変形させたし、中には九日ほどでなしとげたものもあった。掘り出した古い記録も、それについてのおいらの記憶で変形させられてる。でも、最終結果ほど変形してない。

5

おいらは自分が構築するものについて、それが複製と現実のどっちだろうと、自分を創作者とは呼ばない。おいらみたいな職人の名前、スカベールは、「複製を作れ」と告げた曇った声から与えられた。最近になって、スカベールがスカンジナビア語で「創作者」を意味すると偶然知った。そしてそのとき、自分に与えられたすべての命令がスカンジナビア訛りだったことを思い出した。スカンジナビア訛りの神やデミウルゴス？ もちろん。北欧の神。あるいはすべての神の背後にいる北欧の神。

これにより、おいらが保護的で予防的なフィクションに包む大災害の出来事が、究極の大災害ではなく、北欧版の大災害に属するかもしれないと感じる。究極の世界の終わりではなく、北欧の神々の世界の終わりかもしれない。そして、北欧の「究極 (ultima)」は、普遍的な「究極」を包み、守るための保護的フィクションだったかもしれない。でも、おいらは粘土の穴や採石場、夢の沼で働くだけ。計画には関わらない。そんなこともあるかもしれない。

でもおいらや他の数人が耽るこの指定された天地創造論には、本物の炎と本物の血の何かがある。

注：角笛の音楽は死者を起こし、地獄を呼び起こすのに特に効果的だ。おいらのハルマゲドンオペラはすべて、木の角笛、羊やセイウチの角、ブラスホーンで満ちている。おいらの仕事は死者と、未生者も起こすこと。そして、文字通り地獄を呼び起こすことだ。まあ、望んで就いた仕事じゃないけど。

今、異なる世界構築のほぼ即時の未来に進む中、この声（そして、ヘルヴェデ！それは**いまだに**スカンジナビアの声だ！）は、みすぼらしい偽りの世界を構築する努力を強化するために、予期せぬメディアが大規模に使われると言う。新しい電子メディアだと。

おいらには、蓄音機がこのための最も有望な新デバイスとメディアに見えるが、新聞、雑誌、本、オペラ、そして私が意見やエンクレーブ、対抗世界を固めるために使う叫ぶパントマイムの影響に多少なりとも及べるようなものになるとは、とて

も思えない。蓄音機は繰り返しでこれを達成するかもしれない。電気モデル、さらには電子モデルの蓄音機もある。そして、この最初の電子メディアには利点がある：疲れないのだ。

『建築と原型』の編集者は、おいらの世界構築の解説をモールスキンの手袋で優しく扱い、消磁し、皮肉の薄いシートで絶縁し、出版物の「軽い側の啓示」というリンボセクションに印刷すると言った。

そうかもしれないが、この世界より少し大きい特定のエンクレーブでは、我々指定された形成者の背後に不機嫌な形成者がいて、彼は笑っていない。

6

世界構造の変更はどのような権限で行われるか？ 時折、最もわずかな権限、偽の権限、十分な確信があれば全く権限なく行われる。

中世の低時代、現在のより少ないチェックが利用可能だった時に例がある。六八三年が来た。世界はそれを通り抜け、終えた。そして、世界は新しい年を始める準備をした。書記や年代記者は新しい年の巻物を始める準備をした。しかし、最も尊敬された年代記者の一人が巻物に再び六八三年と書いた。その日の終わりまでに他の年代記者がそれを知った（この最も尊敬された年代記者は、いつも古い年の最終日に巻物を始めた。新年の初日ではない)。

それほど尊敬されない年代記者たちが彼に抗議したが、効果はなかった。

「私は書いたものは書いたんだ」と尊敬された年代記者が言った。「他の者が完全な愚か者になりたければ、その年の間に違うものを書けばいい。でも、今始まる年は『グースの年、683 年』として知られることになるのだ」

持つ者と持たない者がいる。尊敬された年代記者は他の全員を合わせた以上のカリスマを持ち、他の者は彼に譲った。彼らはその年を繰り返し、たぶん何度も繰り返した。「ヤギの年 683 年」、「イカの年 683 年」、「キノコの年 683 年」だ。

指導的な年代記者は権限と名誉を持ち、それに基づいて世界の新しいバージョンが構築された。おいらは、多くの秘教的なことで自分が彼の対等者だと知って驚いた。おいら自身も命名と指定に権限を持つ。おいらも畏敬を受け、多くの場合おいらのバージョンにみんな従う。

でも、おいらはハンマーを隠す。いくつかのハンマーを隠している。ハンマーは最後から二番目のコーナーに追い詰められた時に使える優位性だ。ハンマーは一種の保険だ。おいらは割り当てられた通りにフィクションを作り、他の多くの者も並行して同様に担保となる奇妙なフィクションを実行している。でも、他の者はおいらほど多くのトリックを仕掛けてないみたいだし、ハードルにもおいらほど多くのハンマーを隠さないようだ。おいらは割り当てられたフィクションがフィクションのままであるよう保険をかける。最初からトリックを仕込む。

今、災害が本当に起こるには、連続性の布に仕込まれた他の特定のものが起こらなければならない。そして、他のものが起こったのが**取り消されなければ**起こらない。例えば、一九一二年にハイラム・ジョンソンが米国大統領に選ばれた限り、災害は起こらない。そして、四年後、または七十二年後に彼を非選にするなんて無理だろう？

[訳注: Kindle 版は、『「キノコの年 683 年」だ。』で論文が終わり、それ以降は普通の地の文だということになっているが、内容も書きぶりも明らかに続いており、ここで切れるはずはないので最後まで論文にしている。]

第 5 部

「サイレント・ラジオの時代」

（これはエニスコーシー・スウィーニーが『精神病と転生：悩める者のための雑誌』一九二四年二月号、に書いたものだ。）

1

これぞ良い年月、これぞ黄金の世紀、これぞダイヤモンドの十年。だったらなぜ私たちは、こんなたまにではなく、いつも歓声を上げ続けていないのか？　良さが過剰なのか？

本当に優れたものを最も深く見て評価するには、ある種の距離や切り離しが必要だ。私たちはそれに近すぎる、なぜならその真っ只中にいるからだ。一生涯離れても、完全な評価のためには近すぎる。そして、一生涯後にも、ダイヤモンドの十年が続いていることを願いたいものだ。

黄金の世紀を信じても何ら異端ではない。ユートピア主義や千年王国主義に問題はない。実際、千年紀の真っ只中にいてそれに気づかない人々のほうこそ、何か問題がある。それは私たちを訪れたのだし、それがほぼ永遠に続くことを願うし、そうなると信じる。

私たちの時代は、事実に絶対的に縛られるには恵みに満ちすぎている。これらの感動的で絵のような年の芸術形式は、高踏フィクション、枠組みの超越、多様な多軌道の出来事の柔軟性と多重性だ。「我々は恵みの中で生きるとき、一つ以上の人生を生きる」。そして現在は世界自体が恵みの中で生きる時代だ。他に方法がなければフィクションの技法でもいいから、この祝福の年をまだその中にいる間に思い起こそう。人々よ、これが高揚の時なのだ！

私たちの世紀の一〇年代と二〇年代は、特に星屑と金屑にまみれた若い栄光の間隔の時代だ。おやまあ、いまのは特に誇張した書き方だ。でも、これは誇張した生き方であり、他にそれを理解する方法はない。それは私たちが若い時代という話ではない。それぞれの年齢に関係なく**万人が**若い年であり、十年なのだ。

今や、魔法の星座があり、最も喚起力ある典型的な魔法の一つが幻灯機だ。その名にはどれほどの懐かしさが組み込まれていることか！ 他の名前もあった、バイオグラフ、キネマスコープ、ムービー、サイレント（最初から「サイレント」と呼ばれ、いつか音が加わる、音による破滅が来ると早々に認識されていた）。でも、今日（一九二四年）まで最も人気のある名前は幻灯機だ。子どもの頃、土曜の夜はいつも幻灯機に行ったし、裕福なら（当時は皆かなり裕福だった）週に何度も行った。

幻灯機、サイレント映画には魅力的な並行がある、それがサイレント・ラジオだ。サイ

レント映画がいつもサイレントではないと知っていたし、ラジオもいつか話すとみんな知っていた。

ああ、サイレント・ラジオの時代！ それはまだ私たちの一部にとっては続いている。その熱狂的な華やかさは内なる耳にだけ響く。日々には陽光と煙がある。サイレント・ラジオの時代は**決して** 忘れられはしない、なぜなら現実の時間には意識的に起こらず、私たちが通過する黄金の時間の反射でだけしか起こらないからだ。

「本当にそうだったか？」という質問への答えはいつもこうだ。うん、本当にそうだったし、それにはみだすもの、おまけがつくほど。サイレント・ラジオ、多様な内なるドラマは、いつも伴奏、余分な部分、ボーナスだ。物事全体が本当に起こったか、想像しただけかを決めなくていい場所がある。少なくともサイレント・ラジオでは一度は起こった。それは永遠の内在するドラマの魔法の放出と放送なのだ。

偉大な芸術は常に悪と苦悩の表現でなければならず、幸せな時代には偉大な芸術はないと言われる。これは完全には正しくないかもしれない。**来ない**大災害から、輝きと健康から、「我々は何か正しいことをしていた」と言うことができる。何か正しいことをすることは偉大な芸術だ。**おれたちは何かしら正しくやっていたんだろう**は私たちの時代の喜劇の名前であり、それは完全で熱烈な芸術だ。「偉大な芸術」は誰かが思いついた言葉に過ぎず、決定的ではない。

2

それが「社交会」と呼ばれることもある。「集会」だ。田舎では「ウィング・ディング」や「ホーダウン」。アイスクリーム社交会、ストリートダンス社交会、歌合戦社交会、楽隊の夕べ社交会、オペラハウス社交会、パイタ食社交会もある。最初は小さな町や田舎のものだったが、今は都市にも来た。自動車クラブ社交会、文学の夜べ社交会がある。黄金の世紀は社交的な人々の時代だ。（少し誇張して）この社交的な時代には誰もが誰もを好きだと言える。うん、ハンキーやクラウト、スクエアヘッド、ホーキーポーキー、カイク、マイクどもですら、皆仲良くする。私たちの時代は予言の時代、ただ、誰が誰と横になるかについてはまだいくらかスキャンダルがある。

おいらがこの世紀の特異な代弁者の一人だと思うのは、これらの幸運な時代の基準からしても異常な幸運のせいだ。家では、父と母と子どもの間に本当によくない言葉が交わされることはなかった。皆が個人的な友人で、同じ側だった。そして、おいらの人生後半の十年には、世界で最も美しい女性で心の良い妻と結婚したことによる熱い「ダイヤモンド性」がある。この国の半分以上の男は、自分がこの幸運を得られたんじゃないかと推測するしかない（とはいえこんな高い割合は前代未聞だと思う）が、おいらはそれを**確信**してる。

おいらと妻は、天使や巨人の所有物である歓喜を共に経験した。これにおいて満たされ、満たし、飽き足らない我々は予言の人々だ。私たち二人は聖書や叙事詩に名を連ねている、そのどれかは言わないけれど。これは私たちの時代だ。でも、この「異常な幸福」はもはや例外ではない。今は普通で、かつてないほど一般的だとおいらは思う。夫婦の至福は例外ではなくそれが普通なのだ。この全面的サイレント・ラジオの心地よい基底のドラマだ。

これらの時代の金を盗みに来る腐敗した者たちは（**まちがいなく**試みるだろう）、まっ

先にそれを狙う。

「結婚の愛、神秘の法」と詩人は書いたが、それは私たちの時代のために書かれた。(嘲笑者はこのあふれる至福を嘲笑するが、そうするときそいつらは口を痛める)。「目覚めの至福の冷静な確実性」と預言者が書いた。また「その夜明けに生きることは至福だった」。そして「喜びが高まる」とも。彼らはみな、私たちの時代を予め語っていた。「笑って健康になれ」と予言し、勧め、「継続は善行なり」とも。皆、皆、皆が私たちとその時代を語っていた。他のすべての時代に例を示す黄金の時代が一つあるはず。そしてそれが私たちのものだ。

七年の豊穣、その後さらに七年、さらに七年。世界は健康的だ。古い病気や事故の傷を舐め、癒える。今日の世界は家族、近隣、管区、都市、州、国家、大陸、全地球、世界の近隣、銀河、宇宙、宇宙の父において幸運だ。

かつてないほどの富と幸福がある。法と法外の軽快な遊びのバランスが良い。武器は鋤や剪定鉤に打ち直された（そんなにたくさん剪定鉤があってどうすんの？―スモモ一つごとに一本ある)。サマルカンドの黄金の砂からクランシーのブラックウォーター・バーまで平和が支配する。

すべての殺人者は去ったか去りつつある、ジフテリア、腸チフス、天然痘、肺炎、癌、戦争。

おいらがいささか瓶から出た幸福感に酔ってるように聞こえる？ うん、少しそこから得てはいる（ミズーリバレーブレンドウイスキー、初めて聞いたブランド、愛する妻がくれた－－「先に試して、何も起こらなかったらあたしも試すわ」だって)。おいらの幸福感の一部は、吸う空気や歩く地面から来る。「生きるのは良いことだ、聖人が言うように。そしておいらの歓喜は、良い消化から来るかもしれないと言うかもしれないね。

いや、そうじゃないのだ。実際のところ、おいらの内臓には赤いドラゴンが住み、肉には棘が刺さっている。頭上には一本の毛で鋭い剣が吊るされ、その毛はほつれ、薄くなってくる。角を曲がるごとに暗殺者たちがいる（一つの角ごとに三人)、おいらの血を飲んでやるぞと音を立てる黒い土がある。それでも「ここにいるのは良いことだ」と言おう。私たちの時代は満たされた時だ。ああ、その満たされぶりを取り去らないで！ ローマはモスクワやメッカ、そして山東、コンスタンティノープル、ウェストミンスター、テキサス州ウェーコと共によろこぶ。これこそ良い時代だ。

今、本当に老人はいない。驚くほど長く生きた人はいるが、老人じゃない。昔の「老人」ではない。そして、年齢間の深い溝もない。誰も他人の年齢をあまり気にしない。皆が一つの家族だ。ああ、磨き上げられた大胆な若さがあり、誰もがその追加の次元、追加の楽しみを気づく。でも、それは他端からの犠牲ではない。次元と楽しみは失われない。

でも、火を吐く代替が起こっていたら、また老人がいる－－これまでもいた－－だろう。人々の間に深い溝が復活する。それは火の汚れであり、そうなると汚れが戻る。

（でも、ここでは火を吐く代替についてはもう話さない。あり得ない悪い時代が来たら、代替を話すしかなくなるかもしれない。でも、今はしない)

私たちはこれまで人々が持っていたものをすべて保持し、すべてに追加した。古い壮大な音楽を保持し、ジャズやラグタイム、たぶん何か他を追加した。古いドラマを保持し、新しいドラマ、新しい種類のドラマを追加した。今、かつてない詩の運動が起きている。火を吐く代替が来てすべてを荒廃させても、かつてない驚くべき詩人たちがいたことになる。小説、小説、これはボロボロで手入れされてないが、いまも保持する手入れされた小

説より良く、これから櫛やブラシで磨くつもりだ。

芸術はまるで災害に襲われたように見えるが、災害を生き延び、散らばった破片が非常に優れたものに組み立てられるようにも見える。人生より芸術に災害がある方が良い。

すべての政治家は今や政治家であり、すべての政治家は肩や前腕、頭から偉大さが滴り落ちる。それが聖油そのものだ。すべてが良い。今ほど良い野球があったか？ ボクシングは？ フットボール？ オペラ？ バンド音楽？ 本当に、これらのどれも匹敵するものが過去にあったか？

神話では、貯蔵から盗まれた金は一夜にしてドングリや小枝、石、殻、がらくた、汚物、ゴミに変わったという。私たちの時代では、プロセスが逆だ。すべての小さな普通のものが集まって金に変わる。何？ 一千万の粗野な物質主義の項目が、私たちの時代には新しく超越的な金に変形したんだ！ これはすべてのものが新しい側面を開く普通さの向上か？ すべてが良い、鍬やホーケーキ、靴や鞍、荷馬車や野球バット（私たちの父に今日のルイビルスラッガーのようなものがあったか？）、ブラスバンドや自転車（新ディパーチャーブレーキは、本当にそれ以前のものからの新出発だ）、流行やファッション。これらかつてない普通のものの蓄積が金に変わった。なんて輝く！ なんて豊かで喜ばせてくれることか！

飛行機や自動車！ ファラオにそんなものがあったか？ カエサルに？ 電話や電信、蓄音機やラジオ、電気扇風機や製氷機、写真や動画、製版機、電気路面電車や都市間鉄道。これらは新品かほぼ新品で、誰もが手に入れられる。新金、それが大事、かつてないほど新しいお金があり、それでもっと買える。

ローラーコースターや観覧車、ウィップ。アイスクリームパーラーや菓子屋。メインコンコースに大ピラミッドが入る鉄道駅。新しい種類のキャンディ、カードゲーム、アップルジャック、タバコ。

速い競走馬やハーネス馬、速いレースカー、良い食べ物、良い飲み物。良い夜の生活、良い昼の生活。人々も賢くなってる。新しい知性が高まってる。人々はフロイトやユング、宇宙学者のアインシュタインを話す。前にないアーチー・ザ・ゴキブリ、オールド・ソーク、ハーマイオニーと彼女の真剣な思想家の小さなグループ、オールド・ジャッジ・プリースト、うん、キャピー・リックスも。これらは本や紙から出てきて、街を歩き、どこでも知られてる。それが創造的時代の印、創造されたキャラクターが枠組みから出て世界を動く。たぶんいつもそうだったけど、街を歩くときに認識されることはなかった。すべてが正しいとき、世界の些細なことさえ集めれば黄金になるのだ。

3

実用的なユートピアを構築する際に二つの間違いがある。一つは、血まみれの登攀でその状態に到達し、そのため血の臭いが皆に心配な形でつき、それを隠すのが非常に難しいというやり方だ。人々はそんなユートピアでは完全にくつろげない。歩く地面が叫び、ネズミが内臓をかじる。倒され血にまみれた者や物が生き返り、赤い手でそのユートピアを引きずり下ろす。少なくともおいらはそう思う。おいらはそんな条件下で生きていないので、その直観には個人的な感覚はない。

もう一つの間違いは、ユートピアをあまりに壮大にして、人々がそこに奇妙に感じ、展示場として使い、その外でキャンプすることだ。この状態は珍しくないかもしれない。そ

うした状態を超えて短命な豊かさに達し、それからむせたようにすべてを失った文化が十二個ある。

でも、正しい方法は、この二つの間違いの中道を見つけることではない（正しいものが間違いの巣に見つかるか？）。好ましく、完璧でない第三の場所にそいつを植えることだ。そして「保てればユートピア」と看板を立て、その宣言がそれを実現する。私たちの「ほぼ完璧な状態」の宣言は約三〇年前になされ、宣言を果たすために存在するようになったものだ。

人々がユートピアを構築する時、通常すべての詳細を間違える。しばしば方向や目標も間違える。でも、実際にユートピアに到達すると（私たちは到達した、神に讃えあれ、失わなければ）、ほとんどの詳細が私たちにとって大体正しく、方向も正しい。正しい道、疑わしい道で、正しい場所に来た。私たちは分不相応な幸運を得た。今、世界に生きるのは楽しく、満足だ。泥沼から出て、良い土地に上がった。これが緑の牧場、聖書が成就した。

いやいや、静かな緑の牧場なんかじゃない。ざわざわとカチカチと生命で鳴っている。1度に8時間以上横になるべきではない。牧場には動く部品、私たち自身がたくさんある。途切れない緑は許されない。それは単色の虹になり、全体を不均衡にする。エメラルドグリーンは装飾と飾りだが、主要なものではない。

私たちはすべての愛らしい力と粗々しさで単調さを破り、すべてをさらに積み上げる。しばし中国人になる時、七つの甘味と七つの酸味を積む。田園の広がりには「都市の拡散」と誤称される宇宙の喜びを広げる。井戸に行き、バケツを満たすつもりだ。

どんなに美しい器、どんなに優れた細工でも、空より満ちている方が良い。緑の牧場は生命で溢れなければならず、誰もが理解するわけではない。最も手入れされていないものでも聖なる全体に貢献する。

器の中の水、ワイン、ザワークラウトの汁は、広がり、揺れ、突進する。でも、器の中に留まる。これは私たちの町、鍛冶屋、兵器庫、農場、林の中の溢れるパターンだ。その粗々しさを取ると、ユートピア自体を去勢する。

「闇の悪魔の工場」という表現は聞いたことがあるはずだが、それでも闇の工場がまったくないよりマシだ。なら、悪魔を追い出し、「闇の天使の工場」と呼ぼう。闇なのが気に入らないって？ 工場であることが？ たぶん十分明るいだろう。光が多すぎるのは騒音が多すぎるのと同じで、両方が多すぎるのを愛する叫び声は同じ連中からのものだ。工場のほとんどには愛される都市の影がある。ああ、だったらろくでもない工場をきれいにしろ！ それで呪いを解け。でも、その鼓動は残さなきゃ。

「聖なる煙！」[訳注: Holy Smoke! は驚いたときの慣用句。] は私たちの時代の表現、驚きと畏怖の叫びだ。かつて黒い煙を愛した古い隣人がいた。煙で満ちた空は栄養で満ちた空だと言った。

「ゲーリーの煙突の聖なる煙！」とその古い隣人は叫んだものだ。南シカゴやゲーリーに路面電車で行き、素晴らしい工業化を見て感嘆した。煙は生命体験としての化学反応だ。完全に無くすことはないが、灰の含有量を少し減らした方がいい。煙の中に今ある固く大きなもの、がらくた、灰、死んだ猫、焼けた羊毛の束、どうやって空に上がった？ 固いものが多すぎるのは過剰だ。でも、ユートピアの工場はまだ挽き、煙を吐く。その吐息を少し甘くし、完全に絞めないでくださいな。

ユートピアでは、扁平な球の音楽が大きく霧のように聞こえる。我々の時代の新しい音楽、比類ない喜びは、新しい自動車のクラクションだ。過去の時代にはなく、後の時代は

騒々しさを何か他に変えるかもしれない。ゲーリーの煙突の聖なる煙を愛した同じ古い隣人は、世界の最後の朝に天使ガブリエルが最後の大喇叭を吹く時、その音は「アーオーガ！！！」だと言った。その音は最後の喇叭にぴったりだ。

私たちの時代の偉大で驚くほど安い自動車クラクション、「スペシャル」を考えてみろ。ジフィー、コンビネーション、フォートーンチャイムホイッスル、ロコモティブホイッスル、ロックアイランドフーター、ハリスバーグハウラー、クラクソン、クーンシャウター、ローラーサイレン、ベルトーン、ギャングウェイ、ブローハード、ホイッスルブリッチズ。そして「マイドッグハズフリーズ」ホーン、その四つの音がそう言ってるようだ。これらは人々が車につける特別なクラクションのほんの一部だ。車に付いてくる優れた標準装備のクラクションやフーターは含まれてない。

でも、ユートピアすべてが一枚岩であってほしくない。家庭的な音に奇妙な音がなければならない。我々のような者には、時々聞こえる線路の向こう側がなければならない。サイレント・ラジオの歌には多くの変化がある。

でも、消えない恐怖の基底もある。

4

なぜサイレント・ラジオは、いくつかの周波数で、恐怖ドラマを次々に流すのか？ 外見は静かで視えないが、内では音と絵がある、これらの個人的および集団的無意識のラジオドラマは、毎日恐怖の時間を持ち、今や三百分にもなる時間だ。

ドラマが個人的無意識のものなら、各人が自分のサイレント・ラジオのシナリオを作る。集団的無意識のものなら、すべての個人的シナリオはとても似ている。そこで盗作が起こっている。でも、自分の個人的に作ったシナリオが荒々しく公の生活を持つのは不安だ。

**

おいらが小さな男の子だった時、近所にもう一人の小さな男の子がいて、蛇を作った。その子は私たちより想像力と創造性があった（その子の脆い骨を呪え、今は死んでる！）

でも、蛇作りや何においても、その子は過剰な正確さの方向で罪を犯さなかった。おいらは犯したし、今もだ。誕生日におかしな叔父から『大きな蛇の本』をもらった。その本で母は震えあがり、それがおいらの内心に愛を引き出した。おいらはその『大きな蛇の本』を持って創造的な友人に、もっとリアルな蛇を作らせようとした。その子は本を使い、蛇の筋肉や網状運動の実際の情報を取り入れた。でも、違う種類の蛇を混ぜ、すべてに肉食動物の歯を与えた。

その小さな男の子は、作った恐ろしい蛇を操り、近所の王になった。ブラックウォーター通りの最大のいじめっ子も逃げ出した。彼の蛇は犬や猫を食べた。一匹がベビーカーから赤ちゃんを食べたという話もあった。

それから少年は大きすぎる蛇を一匹作り、それがその子を食べちゃった。食べられるのは恐ろしく残忍で、一時間以上続いた。その最大の蛇は作られた瞬間から不機嫌で野蛮だった。少年を倒し、足と脚をお尻まで飲み込んだ。少年は大声で叫び、私たちも叫んだ。大騒ぎを上げ、大人も来た。彼らは板、シャベル、スコップ、つるはし、斧、のこぎりで蛇を叩いた。でも蛇に少年を放させることはできなかった。

蛇が大きく一口飲み、少年のお尻と体の真ん中の肋骨まで飲み込んだ時、もうおしまい

だとわかった。蛇は胃から黒いタールのような液体を出し、少年の胸、腕、肩、首、頭を覆い、飲み込みやすくした。蛇は痙攣で収縮し、少年の骨が棒のよう折れる音がした。

大人が斧で攻撃したが、斧は硬いゴムのタイヤのようにはね返った。近所の女性たちは少年の救出のために大声でロザリオを唱え、泣く者もいた。鍛冶屋が熱いトングで蛇をそらしに来たが、効果はなく、むしろ怒らせたかもしれない。警察官が拳銃で何発も撃った。効果はなかった。

警察官は滝のように涙を流し、他の警察に命令した。蛇は少年の上部と頭を飲み込んだ。それですべて終わりだった。蛇はメイストレルの柵を越えて突然逃げ、蛇も、少年の破片も見つかることはなかった。

これは本当に起こったことだ。

その日から、おいらはもっと正統だがもっと比喩的な蛇を三匹作り始めた。最初で最小のものは大きい。二番目は最初のやつの九倍、三番目は最初のやつの八十一倍の大きさだ。

最初は（誰に言われたかは知らないが）この蛇作りは浄化の心理的行動で有益だと告げられた。この議論に引っかかってから、やっとそれに裏があると気づいた。

おいらはハルマゲドンのテーマで一つの非サイレントオペラを作り、他の二つに常に取り組んでいる。これがおいらの三匹の蛇だ。最初のオペラは軽快で風刺的で、時代錯誤の大砲が鳴る。でも、同じテーマを地下や識域下で続けるサイレント・ラジオドラマは恐ろしい、恐ろしい、恐ろしい。今日（一九二四年の初め）までに、そいつは全体の世界を倒し、足と脚をお尻まで飲み込んだ。

そいつらは黒いタールのような液体を出し、世界の上部と頭を覆う。この悪臭のタールはシオンの傲慢罪、シドンの金銭罪、カルタゴのモロク罪、ティレの子殺し罪、バビロンの魚臭罪、不自然罪、ギリシャ罪、ソドム罪、ゴモラ罪だ。三段階のハルマゲドンだ。

これらのドラマの血まみれの初収穫はおいらを怯えさせ、貶める。三倍もの血まみれの余波は完全に物事を狂わせる。

ティルルモン、ロレーヌ、シャルルロワ、ナミュール、ロンウィ、モンメディ、ソワソン、オアオン、ランス、モベージュ。うん、これらは集団的無意識の戦場での戦いの名前だと思う。「リーグ」のカルト信者は、過去 10 年で実際に起こった戦いだと言う。これらはこの世界から完全に離れた行動と忌まわしさの名前だ。

モンス、ルカトー、マルヌ川の最初の血、ウルク、エーヌ、ピカルディ、アルトワ、ヴェルダン、サンミエル、イゼール川、シャンパーニュの最初の血、ノヨン、モンディディエ、バポーム、アルマンティエール、イープル、ディクスムード。これらの多くは一度起こり、後にカメラを逆再生するように逆行した。もちろん、私がこれらの架空の戦いや行動の名前を最初に考案したが、どこから得た？ フランスや他にこれらの名前の実際の場所がある。でも、なぜ戦いが本物だと偽る？

ザモスク・コマロウ、レンベルク、チェルノヴィッツ、プシェミシル、ドリナ川、ツェル、ヤダル、ゼムリン、グムビンネン、タンネンベルク、マズーリ湖、ワルシャワ、イヴァンゴロド、クラクフ、ウッチ、リマノヴァ、コルバラ。

ヘリゴランド湾、スカパフロー、ヤーマス、スカボロー、ハートルプール、ドッガーバンク、コロネル、フォークランド諸島、ユトランドの混血と塩水の戦い。

心の沼の遠くの戦い、カメルーンのドゥアラ、スワコプムンド、リート、トレックコプジェ、ウィントフック、ダルエスサラーム、タンガ、マヒサ、青島。

カルス、サリカミシュ、ヴァン、ダーダネルス、サレ・ベア。

ラ・バセ運河、ヌーヴ・シャペル。

マズリアの冬の戦い。アウグストヴォの森、プルザスニシュ、ゴルリツェ・タルノフ、サン・ルブリン、ホルム、ノヴォ・ゲオルギエフスク、ブレスト・リトフスク、グロドノ。

ドゥラッツォ、サン・ジョヴァンニ・デ・メドゥア、イゾンツォ。

ウスキュブ、エルバサン、ロヴシェン山、コルフ。

クト・エル・アマラ、クテシフォン、コプリコイ、トレビゾンド、カティア。

イゾンツォの第九の戦い、

ヒジャズ、エル・アリシュ、クト・エル・アマラ再び。

イゾンツォの第十と第十一の戦い。カプレット。

ヴェルダン、ソンム、シャトー・ティエリーの森、アラス、メッシネス崖、ヴェスル川、アルゴンヌ、セダン。

それは心を揺さぶる収穫だった。でも、余波は3倍心を揺さぶる。通り過ぎる人々の顔を見て、もはや人々でないと気づくことだ。

これらのフィクションはフィクションでない時、どこにいる？

サイレント・ラジオには悪い時間がある。消せない。ノブがなく、おいらには手がない。

第 6 部

エニスコーシー・スウィーニーの生涯と時代の年表（1894-1984）

これは、時代の創造的影響、世界を形成するまたは創造的な出来事や作品を整理しようとする試みである。ハルマゲドンの変種に関するものは、スウィーニー自身の作品以外はここでは触れていない。なぜなら、そのような資料は見つからないからだ。それはスウィーニーの心や特定のカルト信者の心にあったが、事実や出来事としてはどこにも現れていない。社会心理学者は「ハルマゲドンのモチーフと出来事を除けば、数十年にわたる時代は些細なものになる」と言っています。それらは排除していない。そもそも入れるような形では提供されていないのだ。些細であろうとなかろうと、これが「時代」である。

1894 年 **エニスコーシー・スウィーニー、シカゴのウェスト・ブラックウォーター通りで生まれる。**
1896 年『悪い子の獣の本』、詩、H. ベロック。エニスコーシーの最初の読書。
1896 年 ウィリアム・マッキンリーがアメリカ合衆国大統領に選出。
1897 年「カッツェンジャマー・キッズ」、コミックストリップ、ルドルフ・ダークス。
1897 年「夜の子供たち」、詩、E.A. ロビンソン。
1898 年『宇宙戦争』、予言的小説、H.G. ウェルズ。エニスコーシーの二番目の読書。
1899 年「夢判断」、心理学的エッセイ、S. フロイト。
1900 年 ハロルド・スタンドパイプがアメリカ合衆国大統領に選出。
1900 年「量子論」、物理学論文、マックス・プランク。
1901 年「イースト・リバー」、水彩画、モーリス・プレンダーガスト。
1902 年 ロサンゼルスのエレクトリック・シアターが、映画専用の初の劇場として開業。
1902 年『鳩の翼』、小説、H. ジェイムズ。
1903 年 ピウス十世がローマ教皇に選出。
1903 年 ライト兄弟がノースカロライナ州キティホークで初の飛行機飛行。
1904 年「モン・サン・ミシェルとシャルトル」、エッセイ、H. アダムス。
1904 年 セオドア・ルーズベルトがアメリカ合衆国大統領に選出。
1905 年「特殊相対性理論」、数学的宇宙論、A. アインシュタイン。
1906 年「ヘアブレッド・ハリー」、コミックストリップ、チャールズ・W・カールズ。
1907 年「もう一度」、教皇勅書、ピウス 10 世。
1907 年「マットとジェフ」、コミックストリップ、バド・フィッシャー。

1907 年 ジーグフェルド・フォリーズ、舞台エクストラバガンザレビュー、F. ジーグフェルド。

1907 年「超複素数について」、数学理論、ウェダーバーン。

1908 年『木曜日の男』、ファンタジー小説、G.K. チェスタトン。

1908 年 ウィリアム・ハワード・タフトがアメリカ合衆国大統領に選出。

1908 年「ポストヒューマンのための三つの代数」、数学論文、ホレス・ハックベリー。

1908 年「トゥーナービル・フォークス」、コミックストリップ、フォンテーヌ・フォックス。

1909 年『北極点』、ピアリー提督。

1910 年「エフェクター公式」、数学論文、ヘンリー・デヴォニアン。

1911 年「単純多様体のトポロジー」、数学論文、L.E.J. ブラウワー。

1911 年「和声の理論」、音楽理論、T.A. シェーンベルク。

1912 年 ハイラム・ジョンソンがアメリカ合衆国大統領に選出。

1912 年「1914 年 8 月のトナリティ」、音楽シーケンス、エニスコーシー・スウィーニー。

1913 年 アーモリー・ショー、アメリカのモダニズム芸術と既得の非現実の紹介。

1913 年「リーマン幾何学の理念」、リーマン幾何学の解説、ヘルマン・ワイル。

1914 年 ベネディクト十五世がローマ教皇に選出。

1915 年「国民の創生」、映画、D.W. グリフィス。

1915 年「一般相対性理論」、数学理論、A. アインシュタイン。

1915 年『天才』、小説、T. ドライサー。

1916 年 ウッドロウ・ウィルソンがアメリカ合衆国大統領に選出。

1916 年「世界の構築について」、エッセイ記事、エニスコーシー・スウィーニー。

1916 年『ハルマゲドン I』、オペラ、エニスコーシー・スウィーニー、ウィーンで開幕。

1916 年 ニューヨーク・デイ・バイ・デイ、新聞コラム、O.O. マッキンタイア。これは現在の世界とは大きく異なる世界の創造を表し、O.O.M. の世界の何千人もの人物が合意された世界と同じ名前を持つ。

1916 年 ジョシュ・バットマンが大西洋を単独飛行で初横断。サンダイアル、新聞コラム、ドン・マーキス（アーチー・ザ・ゴキブリ、猫のメヒタベル、オールド・ソーク、ハーマイオニーと彼女の真剣な思想家の小さなグループなど）。このコラムは、週の毎日、6 つか 7 つの新しい世界を創造したと言われる。ニューヨーク・サンで日曜に掲載されたか覚えている人はいるか？

1917 年「ヒューマニ・ジェネリス」、教皇勅書、ベネディクト十五世。

1917 年「アンディ・ガンプ」、コミックストリップ、シドニー・スミス。

1918 年『西洋の没落』、歴史理論、オズワルド・シュペングラー。

1918 年『マイ・アントニア』、小説、W. キャサー。

1918 年「黄金の西の娘」、オペラ、プッチーニ。

1918 年『偉大なるアンバーソン家の人々』、小説、B. ターキントン。現実世界から数秒離れただけの変形世界の挿入は、限定的に成功し、これが初かもしれない。この「ターキントン・セクター」は広くはないが、より良く記録された等価物を排除し、今日まで標準バージョンとして存続。

1918 年『カリブの月』、劇、ユージン・オニール。

1918 年「バングル・ファミリー」、コミックストリップ、ハリー・J・タシル。

1919 年「偏見、第一シリーズ」、エッセイ、H.L. メンケン。

1919 年「銀河の後退」、天文報告、シャプリー他。

1919 年『禁酒、ファルス』*、劇、エニスコーシー・スウィーニー。

1919 年「呪われし者の本」、気象学的事例、チャールズ・フォート。ポルターガイストやフォーティアン宇宙は数千年前に遡るが、その名前の由来となった生き物は十九世紀後半まで肉体を持たなかった。

1919 年「バーニー・グーグル」、コミックストリップ、ビリー・デ・ベック。

1920 年 ウォレン・G・ハーディングがアメリカ合衆国大統領に選出。

1920 年『皇帝ジョーンズ』、劇、ユージン・オニール。これは実際には「代替領域」への冒険。

1920 年 初のラジオ局、WWJ、デトロイト・ニュース所有、空に出る。

1920 年「いちじくの数粒」、詩、ミレイ。

1920 年『楽園のこちら側』、小説、F.S.K. フィッツジェラルド。

1921 年「ジェスチャー」、油絵、マックス・ウェーバー。

1922 年 キロル一世がローマ教皇に選出。

1923 年「ノートルダムのせむし男」、映画、ロン・チェイニー。

1923 年「ムーン・マリンズ」、コミックストリップ、ウィラード。

1923 年「北の始まり」、映画、リン・チン・チン。

1923 年「白い姉妹」、映画、リリアン・ギシュ。

1924 年『我々の時代に』、短編小説、E. ヘミングウェイ。

1924 年「ラプソディ・イン・ブルー」、音楽シーケンス、ジョージ・ガーシュウィン。

1924 年 カルビン・クーリッジがアメリカ合衆国大統領に選出。

1925 年「レインボー・トレイル」、西部映画、トム・ミックス。

1925 年『ローアン・スタリオン』、詩、R. ジェファーズ。

1925 年「ブラウン・ドナウ」、油絵、A. ヒトラー。ミュンヘンのアルテ・ピナコテークに展示。

1925 年「ゾロの息子ドン Q」、映画、ダグラス・フェアバンクス。

1925 年「ゴールドラッシュ」、映画、チャールズ・S・チャップリン。

1926 年『アブラハムの胸に』、劇、ポール・グリーン。

1927 年「ロングパンツ」、映画、ハリー・ラングドン。

1928 年 ハーバート・フーバーがアメリカ合衆国大統領に選出。

1928 年「レルム・オリエンタリウム」、教皇勅書、キロル 1 世。

1929 年『家路をみよ』、天使、小説、T. ウルフ。

1929 年『大恐慌』、劇、エニスコーシー・スウィーニー、ニューヨークのステイブラー劇場で 11 月に開幕、13 年間上演、記録。

1929 年「リオ・リタ」、映画、ビビ・ダニエルズ。

1929 年『サルトリス』、小説、フォークナー。

1930 年『秘密諜報員六号』、ミステリー小説、エニスコーシー・スウィーニー。

1930 年「花咲くユダ」、短編小説、K.A. ポーター。

1931 年「四十年目」、教皇勅書、キロル一世。

1931 年『エレクトラが喪に服す』、劇、ユージン・オニール。

1932 年 アルフレッド・スミスがアメリカ合衆国大統領に選出。

1932 年「馬の羽」、映画、マルクス兄弟。
1932 年『すばらしき新世界』、小説、オルダス・ハクスリー。
1932 年『スタッド・ロニガン』、小説、ファレル。
1933 年「ローン・レンジャー」、ラジオ放送開始。
1933 年「我々の最愛」、教皇勅書、キロル 1 世。
1933 年「美的尺度」、数学と芸術の論文、ジョージ・バークホフ。
1933 年「キングコング」、映画、キングコング、フェイ・レイ他。
1933 年 30 篇の草稿、詩、エズラ・パウンド。
1934 年「リル・アブナー」、コミックストリップ、アル・キャップ。
1935 年「ポーギーとベス」、オペラ、ガーシュウィン。
1935 年「ギャングバスターズ」、ラジオ放送開始。
1936 年 フランクリン・ルーズベルトがアメリカ合衆国大統領に選出。
1937 年「燃える関心」、教皇勅書、キロル 1 世。
1937 年「神の贖い主」、教皇勅書、キロル 1 世。
1938 年『二十日鼠と人間』、小説、スタインベック。
1938 年「スーパーマン」、ラジオ放送開始。
1939 年『君の人生の時』、劇、サローヤン。
1939 年 ピウス 11 世がローマ教皇に選出。
1939 年「現代世界における国家の機能について」、教皇勅書、ピウス十一世。
1939 年『ハルマゲドン II』、オペラ、エニスコーシー・スウィーニー、世界十二の首都で同時開幕、スウィーニーの想像力への偉大な賛辞。
1940 年 バーナード・バルークがアメリカ合衆国大統領に選出。
1940 年 コモンウェルス・サザン電力会社が原子力への変換を完了。
1941 年『真昼の闇』、小説、アーサー・ケストラー。大災害の本の友クラブの選書。
1941 年「内なる目の知られざる鳥」、ガッシュ画、モリス・グレイブス。
1941 年「マルタの鷹」、映画、ハンフリー・ボガート、シドニー・グリーンストリート。
1942 年『我々の歯の皮』、劇、ソーントン・ワイルダー。
1943 年『ブルックリンに木が生える』、小説、ベティ・スミス。
1943 年「7 月の干し草」、油絵、トマス・ベントン。
1943 年「神秘の体について」、教皇勅書、ピウス 11 世。
1944 年 フランクリン・ルーズベルトがアメリカ合衆国大統領に選出（2 期目）。
1945 年「死の島」、ホラー映画、ボリス・カーロフ。
1946 年『哲学の歴史』（第 1 巻刊行）、フレデリック・コプルストン。
1948 年 ロバート・タフトがアメリカ合衆国大統領に選出。
1948 年『教会の歴史』（第 1 巻刊行）、アンリ・ダニエル・ロップス。
1950 年「特定の誤った意見について」、教皇勅書、ピウス 11 世。
1950 年『ジョイ・ストリート』、小説、フランシス・パーキンソン・キーズ。
1952 年「音楽と想像力」、講演エッセイ、アーロン・コープランド。
1952 年「芸術と技術」、学際的論文、ルイス・マムフォード。
1952 年 ダグラス・マッカーサーがアメリカ合衆国大統領に選出。
1953 年「リベラルな想像力」、評論、ライオネル・トリリング。
1953 年「輝く冠」、教皇勅書、ピウス 11 世。

1954 年『技術の歴史』（第 1 巻刊行）、シンガー他。（多巻の決定的な歴史の時代）
1956 年『雨の帽子』、劇、ガッツォ。
1956 年 海水の淡水化が大規模に行われ、利益を上げ、エネルギーの*増加*を伴う。
1956 年 ドワイト・アイゼンハワーがアメリカ合衆国大統領に選出。
1956 年 米軍が不要となり解散。
1956 年「世界史の動態」、歴史エッセイ、C. ドーソン。
1958 年 ヨハネ 23 世がローマ教皇に選出。
1959 年「適合の呪い」、エッセイ、ウォルター・グロピウス。
1960 年 リチャード・ニクソンがアメリカ合衆国大統領に選出。
1960 年 新車に 50 万マイルの燃料パックを義務付ける連邦規制。
1960 年『ホーガンの山羊』、劇、アルフレッド。
1961 年 月面着陸。
1963 年 パウロ 6 世がローマ教皇に選出。
1964 年 リンドン・ジョンソンがアメリカ合衆国大統領に選出。
1968 年 ロバート・ケネディがアメリカ合衆国大統領に選出。

一九六四年から一九七二年の八年間、出来事の流れが多数の支持を得られなかったため、**何も起こらなかった**。これらは「空の年」または「貸し出しの年」である。

1972 年 バリー・ゴールドウォーターがアメリカ合衆国大統領に選出。
1973 年 火星着陸。
1973 年 米国が世紀で初めて債務ゼロに。
1975 年 木星着陸。
1976 年 ユージン・ジョージ・マクウォートルがアメリカ合衆国大統領に選出。米国債務が「二度とヤツらに取り上げさせるな」決議で復活、両院で可決、大統領が署名。
1977 年 冥王星着陸。
1980 年 チャールズ・フォーホーシズがアメリカ合衆国大統領に選出。
1983 年 米軍が再設置。
1983 年 一部の人は、この年が何度か繰り返されたと言う。他は「そのままにしておけ、このほうが楽しい」と言った。
1984 年 アグネス・クリングル女史がアメリカ合衆国大統領に選出。
1984 年 エニスコーシー・スウィーニー死去。
1984 年『ハルマゲドン III』オペラ、エニスコーシー・スウィーニー作、パレスチナのメギド円形劇場で上演。
1984 年 状況が悪化。

現在の波が押し寄せ、混乱するため、この年表を完成させる方法はない。

第 7 部

マシュー・ウッドバイン・ジュニア「『曖昧さ』についての短い考察」

ニューヨーク州ヒックスビル、ホリーストーン出版刊、1938 年夏、ホリーストーン講演「健忘症の性質について」の資料を追加。

1

「曖昧さ」は光学、音韻学、計時学、年表学、心理催眠学、色彩学、電波工学、すべての感覚科学に現れている。曖昧さの最も感覚的な説明は、すべてのまわりに余分な線の群れがあり、すべてに余分な答えがあるということだ。曖昧さは、医者が薬剤師に書く読めないインチキラテン語のメモにもあり、曖昧さは薬剤師の威厳そのものにもある。処方箋にも、病気にも、治療にもある。

恐ろしい数の分野で、ほぼすべてに二つの異なる答えがあり、どちらも要件や状況に等しく適合するという新しい現象が支配的になっている。ほぼ誰もが、すべてに二つの異なる線と二つの異なる答えがあることに気づいている。ほぼ誰もが自分の二本の足に気づくように、これらの重複したものに気づいている。

では、なぜこれについてほとんど言及されないのか？ おそらく、そうしたすべてが間違っていると感じ、他人も気づいているか確信がないからだ。確かに、すべて間違っている。でも、他人も**確かに**気づいている。これを光の下に引きずり出し、検討しなければならない。まるで母親に二つ目の頭が生えたようだ。彼女自身が知らないかもしれないから黙っているべきか？

私たちはほとんどの場合、心地よい世界に住む心地よい人々なのかもしれない。みんなそう考えていた。あるいは、妥協し、汚され、自分の顔を見せることを恐れ、世界の顔を直視することを恐れる人々なのかもしれない。

朝起きると、手と腕がひじまで血で赤黒く固まっていて、夜通し恐ろしい殺人を犯していたと感じることがないだろうか？「これまでにした赤い行為は、これから大きくやるものの小さな尺度に過ぎない」とひび割れた、鴉のような声が聞こえないだろうか？ 私はそんな声を聞く。ほぼ毎朝、血まみれの手と脳で目覚める。すべての周りに走る二重の線の一つが赤い線であることは明らかだ。

これらの不安や偽の記憶に理由（または反理由）を与えようとする秘密結社やカルトがある。人々が集まり、影以上のものになりつつある赤いものと会議を開く。私はそのようなカルト集団に潜入し、加入し、秘密結社の会合に出席した。

3

私は自分の町であるヒックスビルの秘密結社には加入せず、隣のマイノーラで加入した。そっちでは私はそれほど知られていないのだ。ヒックスビルで「ハルマゲ団」に加入したり、その会合に出席したりしたことが知られると、私やホリーストーン出版に累が及ぶと考えたからだ。しかし、その集団は非常にオープンだった。そして、期待していたものとは全く違った。

ハルマゲ団は狂人の運動の一部か、皮肉で病的なユーモリストの組織だと聞いていた。彼らは、世界を破壊する究極の戦争、ハルマゲドンの第一段階が**すでに起こった**と信じるか、信じるふりをすると言われていた。それは聖書やさらに遠い時代ではなく、二五年以内に起こったと信じている。この巨大な紛争、「世界規模の戦争」または「第一次世界規模戦争」と名付けられたものが、確かにその赤い恐怖で起こり、その恐ろしい余波が世界に消えない形で現れていると信じている。世界は今、恐ろしいハルマゲドンの三つの部分の最初の荒廃と廃墟にあると信じている。「窓の外を見てみろ、そうではないと分かるだろう」と言えば簡単そうだが、ハルマゲ団は我々とは異なる窓から見ているらしい。

明らかに、世界は今、物理的にも精神的にも荒廃や廃墟に**ない**。だからハルマゲ団は明らかに狂っているか、歪んでいる。

しかし、ハルマゲ団の最初の会合で会った男女は、全く狂っているようには見えなかった。皮肉な批評家や病的なユーモリストでもなかった。彼らは知的で健全で情報に通じ、世界の事柄に深く関心を持っているように見えた。驚くほど教育を受けた人で、大学、ビジネス、政治、現代芸術での印象的な背景と業績を持っていた。ほぼどんな基準でもコミュニティの精華だった。

そして彼らが本当に信じていたものは何か？ それは彼らが信じていると世評で言われていたものとほぼ同じだった。つまり－－恐ろしいハルマゲドンの三段階の最初が、古代ではなく、過去四半世紀以内に起こったと信じていた。そして、世界がその『ハルマゲドン I』の余波で荒廃と廃墟にあると信じていた。

これが謎だった。彼らは本当にそういうのを信じていた（彼らが歪んだユーモリストだという考えは捨てた。彼らはまったくちがった)。彼らは本当にこれを信じており、濁ったナンセンスを信じるような人々では全くなかった。

「この教訓を徹底的に学び、繰り返さなくて済むようにしよう」というのが彼らの口に常にあり、会合ホールの壁にモットーの額に掲げられていた。他には「神よ、残りの地獄の杯から我々を救いたまえ！」「もう戦争はしない、決して再びしない！」「すべての心、すべての体力、すべての祈りと願い、すべての研究と計画をもって、それを押し戻そう！」といったものがあった。これらはすべてそこで語られ、書かれた励ましだった。

しかし、彼ら自身の名前はハルマゲ団ではなく、「世界平和連盟」だった。これほど知的で誠実で、**善良な**人々が、同時にこの一つの主題については完全に狂っているなんてあり得るか？

世界平和連盟の人々のバージョンは、エニスコーシー・スウィーニーのよく知られたオペラ『ハルマゲドン I』のあまり知られていないリブレットとほぼ一致していた。この作品の物語、リブレットは、壮大なコミック（またはホラーコミック）音楽の血と雷の彷徨の中でほとんど失われている。しかし、出席者の誰もそのリブレットを読んだことはなく、

そのオペラを見た人もほとんどいなかった。見た一人はそれが全く気に入らなかった。

「恐ろしい戦争をばかばかしい喜劇にするのは間違っている」とその人は言った。「それを冗談、硫黄の冗談にすらするのは間違っている。『硫黄コメディ』と一部がこのオペラを呼ぶが、出来事自体は『硫黄の悲劇とホラー』であり、もし打ち消されなければ世界の終わりだ。世界はすでにこの地獄の狂気によって三分の一飲み込まれている。スウィーニーの作品は間違っている。このオペラのような軽薄で嘲笑的な反応は、神の怒りを再び、そしてまた再び我々に招くかもしれない。そして、誰も、どんな肉も、三度その火を通り抜けることはない」

しかし、世界平和連盟の人々は、この戦争の実際の遂行はアメリカでは起こらなかったと言う。それを世界規模の戦争と呼ぶにもかかわらず、アメリカで起こらなかったから、窓の外を見ても物理的な荒廃や廃墟が見えないのだと説明する。しかし、ここには精神的な荒廃と廃墟が**確かに**あり、ヨーロッパでは精神的なものと物理的なもの両方の廃墟がある。

「私は去年の夏、ヨーロッパにいたんですがね。物理的にも精神的にも荒廃や廃墟は見なかったし、聞きませんでしたよ。集団の体や個人に健康を見ました」

「私も去年の夏、ヨーロッパにいた」と指導者の一人が言った。「どこでも、圧倒的な荒廃と廃墟を**本当に**見たよ（可能な限り片付けられていたが、全部は無理だった）。すべての顔、心、魂に。荒廃と廃墟、うん、その中を走り回る行動のネズミで満ちている。あなたはヨーロッパのどこにいた？ あなたが見たもの、見せられたと信じ込まされたものを分析しよう。」

そして彼はヨーロッパの輪郭を描いた大きな地図を広げた。

ヨーロッパの「輪郭」、うん。陸地は陸地があるべき場所に、海は海があるべき場所にあった。しかし、最初に見て認識できるヨーロッパはそれだけだった。

政治的文脈、領域、境界は非現実的だった。ヨーロッパの中央地帯全体に新しい国や復活した国が噴出していた。ドイツは大幅に縮小され、特に東の翼が切り取られていた。ポーランドは墓から掘り起こされたが、死に顔のようだった。オーストリア帝国はほとんど何も残らず、ぼろぼろの小さな残骸だった。そして、コミックオペラの名前の新しい国々がすべてあった。誰がこんな詳細な詐欺を考え出し、なぜ？ プロによって作られたことは間違いない。一角には有名な地図製作者の名前まであったから、詐欺と侵害の実際のケースがあるようだ。

そのとき、その地図が何だかちょっと思い出した。新しい国のいくつかの名前は、エニスコーシー・スウィーニーや他のフィクション作家のものだった。これはスウィーニーの『ハルマゲドン I』のリブレットの一部の付録だった空想的な地図で、その怪物的なテキストに忠実だったと思う。国境や領域、都市や州の改名の細かい詳細は、「有名な戦争物語」「有名なスパイ物語」「廃墟の愛物語」「破壊と堕落の有名な物語」「ヨーロッパの新しい狼男物語」といった小さなホラ雑誌に書く連中のものだった（私も時々ヨーロッパの新しい狼男物語を読むが、**事実として**ではない。）しかし、ここの会合の人々は、そんな派手なフィクションを現実と間違えるような人々ではないはずだ。

「チェコスロバキア」が地図の新しい国の名前の一つで、どの地域を包含するかも覚えている。しかし、その地域の人々、ボヘミア人やチェヒ、モラヴァネ、プラハの人々、スロバキ人たちが、そんな不格好で偽ラテン化された名前を笑いや涙なしに受け入れるはずがない。

もう一つの国の州に「トランシルバニア」という名前があった。ドラキュラ伯爵の影！トランシルバニア！

世界平和連盟に何人のメンバーがいるか尋ねた。世界に約百万人の活動メンバーがいると言われた。何！ 百万人？ この説明できないマニア、組織化され広められた狂信が、すでに世界の二千人に一人をとらえている！ こんな不可解な伝染病があったか？

フィクションのいたずらとして始まったものが、百万人の知的で献身的な人々の熱烈な忠誠を獲得したなんて信じられない。私には理解できない。

新しい国々のために新しい政府システムまで考案された。「官僚的民主主義」としか呼べないグロテスクで非合法な形態が、もっともらしいものとして押し出された。悪いユートピア主義があるとすれば、この「官僚的民主主義」の概念の中にある。なんてお粗末な偽物だ！

3

「二つの宇宙が同じ場所に同時に存在はできなくはない、もしその一つがフォーティアン宇宙なら」とヘンリー・デヴォニアン博士はかつて書いた。

私自身、かつて世界平和連盟のいたずらとほぼ同じくらい大胆な数学的いたずらに騙された。これはヘンリー・デヴォニアン博士の気取った業績だった。彼のものは「一般方程式」と「特殊方程式」だった。それには伝染性があり、多くの優れた数学的頭脳の人がこの伝染に感染した。私もだ。

これらの方程式は、常に新しい数学の世界でも目新しかった。説得力があり、内的な一貫性があった。私と父も、デヴォニアン博士のために、または彼と一緒にこの偉大な業績について多くの仕事をした。だから、騙されたとしたら、それは部分的に自己欺瞞だったと言える。まあ、私は自分に部分的に騙され、デヴォニアン博士に部分的に騙された。そして、他の存在や知性、特にまだ足を踏み入れられない一つに、はるかに本質的に騙された。

「一般方程式」と「特殊方程式」はどちらも非排他的な命題だ。しかし、絶対に厳密で、その容赦ない結論は疑いようがない。水密だがジョッキが絶対に水密だからといって、宇宙の他の場所に水がないとは言えない。非排他的な方程式が本当でも、他の反対の方程式が本当であるのを妨げない。非常に現代的な数学の驚くべき先駆的な方程式のほとんどは非排他的だ。

非排他的な方程式は、強い一貫性、広大さ、奇跡の計算によって、他の非排他的な方程式に対して相対的な優位性を得られる。方程式が究極の均衡の高い仲間入りを果たすには奇跡が必要だ。

「特殊方程式」の計算された奇跡の一つは、シカゴのブラックウォーター通りの少年を我々の特定の「結節点」または「時間＝自称世界」の「一人の個人の要」として名付けたことだ。「特殊方程式」の公開から二八年が経ち、この個人（彼の名前、エニスコーシー・スウィーニーは、方程式の容赦ない自動化によってほぼ必然的に選ばれ、それも未熟者ならば露骨な数秘術と呼ぶもので選ばれた）が、確かに要の個人であることが証明された。

代替の現在に関して、すべての道がこのスウィーニーに通じているようだ。彼のビジョンは今、うごめく記録の一部であり、彼が「特殊方程式」に数学的に必要であることは絶対に間違いない。

何十通りもチェックし、見直しても、答えはエニスコーシー・スウィーニーだ。

他の三象限の数学的に可能な答えは受け入れられない。一つはトルキスタンの山羊（今は死んでいる、ヤギの話であり、そのビジョンのほうは続いている）。一つは太平洋中央のイカ。一つはアリゾナの二アールにわたるキノコ複合体（または毒キノコ複合体）。これら三つはチェックは通るが、見直しで失敗する。合理性の見直しに合格しないのだ。

それでも、私とすべての数学世界への入門資格を得た者たちが、このすべてにおける心の入れ替えトリックの犠牲者だと感じる。で、もし我々が犠牲者なら、誰が犠牲を強いた者なのか？

犠牲を強いた者は、非常に神秘的な優れた数学者のグループ、「純粋数学者」と呼ばざるを得ない、たとえその純粋さに不快な要素があっても。この超然とした比肩するもののない超思索的な数学者たちが、ほぼ無限の心の範囲を持っているのは、彼ら自身が非物質的な存在だからだ。すべての数学者は、まともな方程式のすぐ先の辺境にある彼らの優れた心を感じている。彼らは我々のプロセスを逆転させ、カテゴリーを外から、概念を内から調べる。そして（私が目にした推定の中央値を取ると）約三千億人の彼らがいる。これは宇宙の有能な人間の数学者の約十億倍だ。彼らは悪魔で、すべての悪魔は超一流の数学者だ。それが我々が受け入れなければならない事実の一つだ。

悪魔は粗野な芸術にはめっぽう強いが、高級芸術にはほとんど見られない。倫理や哲学に弱く、彼らの心理学はまったく人間のものではない。物理科学に取り組むと破綻する。物理世界への目が全くないので、理解できないのだ。彼らのドラマの感覚は病んでおり、音楽はひどい。グラフィックアートへの貢献といえばショックだけ。洗練、礼儀、活気ある愛情がない。すべての堅固な政治の基盤となる普通の誠実さもない。でも、彼らは数学、理論数学（実際の数学は盗まれた実践に基づく以外不可能）を持ち、数秘術を持つ。

さて、この三千億のどの悪魔が、「特殊方程式」に作者が気づかないうちに忍び込んだこの心すり替えトリックの背後にいるのか？　その特定の悪魔を見つけるのは難しいだろうか？

いや、全く難しくない。この特定の悪魔の名前を出すのは、エニスコーシー・スウィーニーを要の個人として出すのと同じくらい簡単だ。悪魔自身の数秘術を使えば、このアイデンティティを解くのはかなり簡単だと思う。この小さな問題はすでに何度も解かれていると思う。真剣に答えを探しに行った人は皆、それを見つけたと思う。彼らはまさに——

——まあ、まさに血まみれの結論に至ったとき、それを見つけた。この場合、血まみれの結論は答えの発見と数学的にリンクしているようだ。そして私の知る四人の数学者がまさにその血まみれの結論に到達した。その四人とはランクヴァイラー、プリンツホーファー、オーリムスキー、C.S. ツー、みな王子で、素晴らしい仲間だった。彼らはみなこの世を去り、悼まれる。

ああ、それぞれの場合、彼らが解に到達したとき、その血まみれの帰結にも至った。彼らの脳は毎回激しく爆発し、近隣の数人もその爆発で死んだ。なんて安っぽい地獄のボードビルのトリック！ こんなものが地獄ではユーモアとして通用するのだし、それを見れば我々がどんな存在を相手にしているかわかろうというものだ。

もちろん、血まみれの結論は追跡や痕跡数方程式のすべてに暗に含まれていたが、我が友人たちは追跡に夢中になりすぎた。私はそれに夢中にならないよう非常に注意しなければならない。それに、その特定の悪魔の名前を知ることはそれほど重要ではない。

だから、デヴォニアン方程式は、世界平和連盟にいる多くの誠実な人々を捕らえたフィ

クションのいたずらとほぼ同じくらい大胆な数学的いたずらなのだ。

4

そして、要はまだそこにある。選択の複数性が我々を悩ませる。複数の現在がどうやって単純な未来を生むのか？ それができないなら、単純で合意された過去はどうやって生じたのか？ 現在は動く部品で、ゼノンのパラドックスにより常に多肢選択だが、未来と過去は固定されるべきだ。過去はどうやって固定される？ あるいは固定されたように見える？

おそらく錯覚だ。単一世界のエンクレーブの誰もが自分の世界の単一の過去を受け入れる。しかし、他のエンクレーブの存在は他の過去を受け入れる。

最も簡単で明白な例は、悪魔がその巨大で三部構成の戦い（ハルマゲドンの原型）で勝ち、神とすべてのミカエル・マシンを中心から外し、縞模様の場所に投げ出したと信じていることだ。（数学的には、中心と縞模様の場所は互いの反転で、同等に有効だ。）

多くの影の形態がこの点で悪魔の歴史的信念に従った。タイタンはオリンピアの神々を打ち負かしたと信じ、北欧の巨人は北欧の神々を打ち負かしたと信じている。月は小さな地球を自分から投げ出し、暗い夜に光を与える奴隷軌道に落雷のように落としたと信じている。しかし、数学的理論は誰が勝ったかを示さない。分離と断絶を示すだけだ。

数学的理論では、自由意志の数だけ同時の宇宙が存在しうる。各自由意志は「一般方程式」の変数関数だ。しかし、実際の数学では、本当にそれほど自由な意志などというものは百万に一つもないのだ。

それでも、たくさんある。

我々の時代の主な曖昧さは、世界が比類ない平和と繁栄を続けており、同時に三頭の地獄、ハルマゲドンそのものを、頂点の攻撃の後に襲っていることだ。この現在のバージョンに何人が生きているかは問題ではない。一人だけがバージョンに生きていても、それは生き生きとした本物のバージョンで、（どんなにわずかでも）最終的に唯一のバージョンになる生きるチャンスがある。現在の謎には、このような連鎖する曖昧さがいくつかある。

さて、私は曖昧さのほとんどの実際的解決策を持っていると思う。これだ：

（ここに五〇ページの印象的なガチガチの数学的計算が続く。今ここにそれを掲載はできない。付録には掲載されるかもしれない。いずれわかる。）

5

「世界規模の戦争」、一九一四年に始まったとされる紛争には、叫ぶような矛盾がある。偽の技術が最も叫ぶ矛盾だ。一九一四年の本当の技術は、事実のふりをしたがるこれらの広められたフィクションではほとんど使われていない。一九〇四年や一八九四年の技術に近い。さらにその時代の真の技術よりも、ポピュラー・フィクションで時折使われる投影技術の一種だ。すべての実装が非常に古風だ。発明的である必要があるとき、それはフィクション的に発明的だ。

多くの機械（「鉄の装甲」など）は、H.G. ウェルズの初期フィクションそのままだ。ウェルズは自分のみすぼらしい青春の時代に恋し、技術的にその時代からまったく動かなかった。これは世紀の変わり目の古いファンタジー機械だ。これには本当の思考がない。一九

一四年には本物の技術があったのに、これらのフィクションでは完全に無視された。

世界規模の戦争の初年、いくつかの異なる行動のセクターで、時代遅れの騎馬突撃が実際に使われた。フィクションがどうして事実からこんなに遅れる？ 十九世紀がその行動フィクションでどれほど死ににくかったか！ これは時代錯誤だ。概念の許せないずさんさでもある。

一九一四年のイングランド、フランス、オーストリア、ドイツ、ロシア、イタリア、トルコ、米国の平和時の小さな軍隊の実際の装備との綿密な比較は、実際と想像の武装と装備の状態の対比をさらに鋭くする。フィクション作家、ほぼ最も保守的な人々が、機械時代の感覚をまだ全くつかんでおらず、古い馬の時代に偽の前面をかけただけのように見える。馬車の軸の間に馬を撃つだけで自動車の時代には移らない。

謎は残る：なぜ世界平和連盟や他の精神戦争信者は、一九一四年の戦争が一八九四年の装備で戦われたと思うのか？ これはポピュラー・フィクションが現実から通常遅れる間隔を表す。

おそらく最も奇妙な矛盾は航空機だ。マーティン、カーティス、ライト社がすでにかなり良い飛行機を開発し、すべての航空サーカス一座が空の媒体を理解していた時代に、時代錯誤者のポアのような創造物は驚きでしかない。第一次世界規模戦争の信者が採用したこのコウモリの翼の木枠、あれは一体何なんだ？ そもそも空で何をしていた？「ドッグファイト」で互いにのろのろ追いかけるのは、バーレスクを真顔でやるようなものだ。このフィクションの発明者は飛行機に乗ったことがなく、凧も飛ばしたことがないのは明らかだ。

そして、「塹壕戦」は中世かそれ以前だ。本当に下部中世に属する。火薬の時代以前、城は矢や槍の厄介な一斉射撃から守るためこのように塹壕を掘られたが、一九一四年には戦車からの戦いと同じくらい時代遅れだった。

一四五三年のコンスタンティノープルの戦いで、効果的な火薬砲が初めて使われた時、まだ塹壕包囲の名残があったが、それはトルコ人の笑える失態だった。当時ですら、彼らはもう少しマシなことができたはずだ。

四六〇年後に同じ失態を復活させるのは笑えない。ハルマゲドン信者全員のためにも恥ずかしすぎる。ボナパルトやグスタヴス・ヴァーサ、グラントやリーから見ても恥ずかしい。

そして、（そう呼べるなら）世界規模戦争に至った外交は、E. フィリップス・オッペンハイムの非常に初期の小説や、五〇〇年前のビザンチン「陰謀」小説のようだ。百年前のデュマは良い「フィクション」の外交を提供したが、一九一四年の者はそこまで進んでいないらしい。時代の遅れ（かつてコミックオペラ王国にそんな外交があったのかもしれない）よりもさらにひどいのが、そのあまりに単細胞な扱いだ。

その全体の扱いは、戦争、技術、外交、出来事、人々についてほとんど知らない、若干前の時代のポピュラー作家が偽聖書的紛争を構築しようとしたような代物になっている。

6

戦争はフォーティアンまたはポルターガイスト的宇宙の特性だ。合理的宇宙では起こらない。

以下に展望、洞察を挙げよう：

かなりの高齢の著名な男性が、分析や催眠下で、自分が第一次世界規模戦争の将軍だったという偽の記憶を思い出す。これらは非常に有効な記憶だ。そして、彼が困惑して保持していた色鮮やかなガラクタや記念品、記録を説明するのに役立つ。

この人がそんな記憶や偽の記憶に導かれるとき、彼は健忘症から目覚めているのか、妄想に入っているのか？ 数学的には、この二つの状態は交換可能で、どちらも他方より有効でもありそうもない。回転する車輪の縁の二つの反対の点が同時に上にあることはできない：これはほぼ合理的な前提だ。しかし、健忘症で一方が抑圧されれば、両方とも上にあることができる。

もちろん、ジャイロスコープ・トポロジーでは、車輪が光速より速く回転すれば、両方の点が同時に上にあることが可能となる。ゼノン・パラドックス幾何学では、両方が同時に縁のすべての点にあることができる。しかし、実際の宇宙では、機能するものとして、それはできない。健忘症によって状況が救われる。一方の点が主要な機能を忘れるよう説得できれば、困難は消える。

健忘症がなければ、車輪は破裂し爆発する。非常に速く回転するフライホイールは、機械や脳、精神の中で時々飛び散る。健忘症が機能しないためだ。

「この二つのことは同時に本当ではありえない」と一人が言う。

「本当でありえる」と他が反論する。「おれにとって両方本当になるようにしてやる。できなきゃそれをやろうとして破滅してやる」そして、ほとんどの場合、その人はその点で破滅するか、狂う。

同じ場所と時間に矛盾するものが存在することには、実は本当の問題はない、ただそれが地球、植物、鉱物、動物、人、機械に狂気を引き起こすだけだ。この狂気の治療は、二つ以上のものが一つの場所と時間を占めるのをやめること（こんな削減を恣意的にやるのは不可能だ）ではなく、すべての矛盾するものを除く一つを皆の記憶から押し出すことだ。しかし、記憶から押し出すというのは、存在から押し出すことではない。

常にいくつかの矛盾する出来事の流れが起こっている。常に何が起こったかのいくつかの矛盾する歴史がある。そして、その一つが他のものより本物なのは、もっと多くの人、動物、植物、岩、機械がそれが本物だと信じているからだ。すべての健全なものは、出来事の流れのすべてを一つを除いて記憶と認識を抑圧する。

しかし、すべての者やものが同じ出来事の流れを記憶し認識するわけではない。そこに困難がある。ほとんどの者や物は、ほとんどの場合に、同じ出来事や条件を受け入れるが、すべてが常にそれを受け入れるわけではない。

7

記憶から押し出されたものはどこかに押し込まれねばならない。それは潜在意識に降りると言われるが、それは不正確だ。忘れられたものが別の次元に行くと言うのも不正確だ。「存在」の全体の問題が解決されるまで、問題は解決されない。そして、それはまだだ。同じエンクレーブ、国、世界が、異なる状況や出来事の流れのアリーナとして見られると、異なる出来事との異なる相互作用の効果を示す。同じ年の同じ世界の天気は、出来事の流れによって多少異なる。いくつかのまれな例では、十年以上の二重の天気報告が得られるが、その影響は驚くべきものだ。これらのことは、人間より本能に縛られた動物や鳥に強く引き継がれる。古い氷河期の氷のない北極地域から飛び、かつて氷河だった南の

地域を飛び越える渡り鳥が、良い餌があってもそこに降りて食べないことがある。彼らはその地域がまだ氷河だと信じている。本能的メカニズムがそう告げるし、ある視点から見ればその通りだからだ。北極のトナカイは、ある谷を雪をかき分けて食べるのに、隣の谷は全く食べない、雪の下に不可能な深さの氷があると信じているからだ。

沈んだり消えたりした島の場合、魚の一部はその場所を泳がない。相変わらずその場所を「不可能なパターン」として保持するのだ。鳥、動物、魚は変化を他のものより早く行える。

だがこれらはすべてタブーであり、鳥、動物、魚、植物、鉱物は人間より深くタブーが根づいている。

しかし、これは生存から見た消滅や残存対物に限らない。合理的な共存の間でも常に起こる。そして、アイデアの着火は文脈によって大きく異なる。

なぜ複数の文脈や出来事の流れが同じ時間と場所で調和して生きられない？ 健忘症が機能しない場合、なぜ狂気や戦争を引き起こす？　複数の文脈が調和して生きるケースもなくはないが、あまり受け入れられていない文脈の人々は正確に何が起こっているかを知る必要がある。

五百年以上、少数のエリートが大多数の人々とは異なる出来事の流れや条件で生きている。しかし、エリートが大きくなり、もはや多数派がいなくなるとどうなる？ これはすべてのバラストをマストや煙突の頂上に縛るようなものだ。トップヘビーで不安定な船になる。

「ウナ・サンクタ」エリートは、「世界の難破」である宗教改革が起こっていない世界に生きている。このグループはエリートとして、豊かで、幸せで、徳高く、創造的で、恵みに満ち、芸術に燃え、建設的で、保守的で、驚くほど寛大だ。すべてのエリートがそうだ。このエリートは、継ぎ目のないマント、世界の織られた肉と同一視する。

そして、別のケースがあって－－だがだめだ、それについては秘密を守ると我々は誓っているのだ。ほぼ完璧な社会で、自分たちが本当にこの世界の合意社会だと信じている。そしてそのメンバーの中ではその通りだ。ほぼ完全に秘密のこの社会は、世界の全員から一人だけを除いたグループだ。世界の**全員が**それに属すると、魔法を失う。二人以上が属さないと、秘密性を失う。なぜなら二人の非メンバーが結託してそのベールを引き裂くからだ。

それはどうやらメンバーと世界と完全なバランスにあり、少なくとも脆弱な現実を持っている。しかし、私がそれについて書くことすら僭越だと思う。私はそのメンバーではない、わかるね。だから、これを読むあなた方は**全員が**メンバーだ。それでも、私は自分が知る厳しい詳細を明かさないと誓っている。

本当の分裂は、戦争が知られていない世界と戦争が知られている世界の間のものだ。両方が同時に可能か？ この質問には特別な側面があり、二重性の一般法則は適用されない。

戦争の概念自体に非常に強い懐かしさがある。戦争という発想、戦争のフィクション構築は、どんな人でも子ども時代には大きなものだ。大人の戦争の回想は、幼少期や幸せな初期のカオスを取り戻そうとする試みだ。戦争の精神的な楽しみなしに幸せになれるだろうか？

地獄の概念にも非常に強い懐かしさがある。地獄のアイデア、地獄のフィクション構築は、どんな人でも子ども時代には大きなものだ。大人の地獄の回想は、幼少期や幸せな初期のカオスを取り戻そうとする試みだ。地獄の精神的な楽しみなしに幸せになれるだろう

か？ しかし、これは異端の邪説だ。

****

世界規模の戦争の精神病または偽の信念は、世界的な規模で、かなり最近の起源だ。地方や国家ごとにバリエーションが異なるとはいえ、真に世界規模だ。だからこれはユニークなものだ。深く埋もれた原始的な層からの非常に少ないものを除いて、世界規模の精神病はなかった。この末日になって普遍性が誕生したか？ 新しいと同時に世界規模の病気は、これまでなかった。

天気は常に局地的で、精神病は精神的気象の形だ。嵐だ。竜巻は、例えば、米国の限られた地帯以外では見られない。他の土地には台風など他の嵐があるが、各土地に固有だ。天気と精神病は局地的だ。しかし、この新しい精神病は宇宙的のようだ。

我々のほとんどの生涯で、すでに世界規模の戦争が起こっていて、さらに二つの戦争が世界の破壊を完成させるという、罪悪感のある信念をどう考えたものか？

第 8 部

手紙からの抜粋、第二の選集

1

エニスコーシー・スウィーニーのアーカイブに千以上ある特異な未完成の「手紙」の一つを示そう。これらは「告白」と呼ぶべきかもしれない。スウィーニーが自分自身、告白司祭、神に向けて行うつもりの誓いの粗い下書きだ。エニスは生涯を通じて月に一、二回告白に行った。彼の慎重な良心の吟味と準備は、これらの粗い下書きに書かれている。実際の告白がこうした垂れ流しよりも簡潔で厳密だったのか、それともさらに長く展開されたのかは不明だ。後者なら、土曜の夜の告白の列で待つ人々が、ボックス内の「遅いヤツ」（毎週土曜の夜に一人はいる）に黙って不満を言っているという、突然のビジョンや直感を喚起する。人々は非規範的に三分以上かかる人にはカリカリするし、辛抱強い人も辛抱たまらなくなってしまう。だから、これはタイトルなしの、内省を書き留めたもので、「告白のためのメモ」の束としか呼べないものだ。

> おいらは不幸の罪をかなり頻繁に犯してきた。これがそれにつけられる唯一の名前、罪かもしれない唯一の名前だ。意図的な不幸は罪であり、おいらのそれは奇妙で執拗な程度に意図的だ。何度かこれをぎこちなく話すと、告白司祭は困惑し、「何？ 何？ 不幸の罪とは何だ？」と尋ね、まるでその点の神学を忘れたか、素人がそれを知っているとは思わなかったかのようだ。まあ、これがおいらの見つけられた唯一の名前で、おいらにとっては**本当に**罪なんだ。これは悪、*malus* であり、*radix malorum est cupiditas*、悪の根源は欲望だ。しかし、このおいらの欲望は特異な形をしている。
>
> おいらは違法で有害かもしれない思索を行う。このことについておいらの内には声の戦争があり、一つの声は、その思索が即時の環境や世界全体を緊張から解放する見せかけの浄化かもしれないと言う。しかし、別の声は、見せかけのものは善ではないと言い、即時の環境も世界全体も、これらの浄化が現れるまでそれほど緊張していなかったと言う。そして、三つ目の声は、すべてのこれらのものは悪と大災害の芽と根だと言う。
>
> いや、おいらはこれらを自分で考案したんじゃない。まるでそれがおいらに植え付けられ、排出せざるを得ないかのようだ。うん、時々これらの思索に喜びを感じるが、時々は痛みを感じる。おいらは操られており、操っているのは愛情ある手ではなく、時に甘言で誘い、時にポルノ的な効果の腹部の揉み込みを伴う。

なぜおいらがこれに使われているのか、もっと有用なはずの人がたくさんいるのに、分からない。

これらの火蟻は何だ、おいらをアブラムシの如く搾乳する者たちは？ 誰がおいらを使って恐怖を広め、他の人も使うのか？（小さなラジオ雑誌がいくつか出てきて、おいらの思索に似た怪物的な下意識の夢の「フィクション」で溢れている。）

おいらは時々、自分が目的を全く理解できないことをやるための道具となり、おいらには理解できない命令で、病んだ夢のものを公開オペラやドラマに伝達する。これにはいくつかの複雑な問題がある。

二、三人にとどまらない人々が、この伝達の道具として行動を続けるならおいらを殺すと宣言している。そして、道具として行動を拒否するなら殺すと宣言する数人が他にいる。これは祈りや断食で解決できなかったジレンマだ。この道具性の考えがおいらの心にだけあり、これらの殺人者たちが合理的にそれを知るはずがないという不公平なパズルだ。この物事と苛立ちの複合が、おいらの不幸の多くを背負っている。

ああ、しかしそれはおいらの過ちだ。どんな状況に陥ったとしても、意図的な不幸に逃げ込むのは罪であり、意図的な不幸は常に罪だ。

（もしエニスコーシーがこれを書きなぐった通りに話したなら、少なくとも一人の司祭の苛立った不幸な表情を説明できる。彼らの多くが追われ、悩まされた表情を持っている。）

2

これは 1927 年か 1928 年頃、舞台製作や出版に関わる非常に親しい友人に書かれた手紙である。

親愛なるストロングハート：

おいらは私立探偵や工作員に首まで浸かっている。誠実な男がそんな工作員と何をしてるのかって？ 誠実さとそれに伴う命が危険にさらされたら、それらと関わらざるを得ないんだ。おいらの誠実さは、宇宙のカテゴリーの変化や曇りらしきものによって危険にさらされている。それは正当なことなのかもしれないけれど。

今、おいらは六つの小さな私立探偵軍団、少なくともそのような軍団の将軍六人（そいつらにまとめてセクストゥスというコードネームを与えた）を抱えてるんだ。そしてその六人それぞれが、おいらの事件に割いた助手の大軍を擁してると誓ってる。この手下どもは容赦なくおいらからむしり取る。だから今、おいらは常にお金を探し、可能な限りすべての貸しを回収しなきゃならないんだ。最近、おいらがお金そのものを愛していると思ってる人がいるけど、そうじゃない。

おいらはお金で命を買う、あるいは年、月、週、日、さらには時間単位で命を借りてる。今、そして何年も前から、二つの矛盾するグループがいて、おいらがやり方を変えなければ、あるいは変えたら、殺すと誓っているんだ。

おいらの追跡者や暗殺者の一部については少し話したことがあるよね。アリスター・グロッグは死んじゃってるけど、死んでも追跡や迫害を緩めていない。グロッグはおいらに最悪の、文字通りの幽霊や呪いの感覚を与える。あいつが死んで

いることは誰もが認め、争点になってない。それでもあいつは現れ、自分の存在を知らせる。あいつはおいらの命を脅かす。本気でおいらを恐怖で殺そうとするんだ。あいつはすべての猛烈な幽霊物語を一つにまとめたものだ。そして、おいらのほうが攻撃的で邪悪な者だと感じさせる。

グレッグの友人二人で仲間、ウィンビッシュ・マクダーモットとエルトン・クォーターマスはまだ生きている。うん、相変わらず奇妙だ。友よ、おいらこの三人が怖い。月三千ドルの価値になるほど怖れている。保護は高くつく。

そして友よ、この三人は良い奴らなんだ。おいらたちが生きる黄金の世紀とダイヤモンドの十年の擁護者だ。三人はおいらなどの数人がフィクションとして作る「大災害」を恐れ、怖がってるんだ。

その三人やヘンリー・デヴォニアン博士の学派の他の数学者は、これらのフィクションが容赦なく事実に変わりつつあり、おいらがその転換の鍵だと信じてるんだ。おいらの名前やフィクションが、そのフィクションがまだ心の奥深くにあって、人に話したり書いたりもしていない時、シカゴの西ブラックウォーター通りに住む最も目立たない少年だった時に、なぜデヴォニアン博士の公式に組み込まれたのか分からない。でもおいらの名前と心の内容の一部が、この数秘術数学者のグループの方程式に本当に入った。この連中は、フィクションが芸術作品になれば事実になるのを防ぐための浄化となるとは信じていないんだ。

考えてみれば、おいらももはやそれをあんまり信じてないな、陰鬱な気分のときには。グロッグ、マクダーモット、クォーターマスを敵とは思っていない。あいつらのことは、世界の健康と正気を保つためにおいらを殺そうとする友人と見なしてるんだ。

そしてそのすべての反対側には、デヴォニアン博士の特殊方程式の項である「大災害の友」組織（そのメンバーはおそらく不自然、少なくとも非人間的）がある。大災害の友は、アリスター・グロッグが呼んだ「エニスコーシー・スウィーニーの荒廃のビジョン」の実装と伝達に対する邪魔をすべて阻止するという「防止の防止」に意を注いてるんだ。これらの大災害の友は、荒廃のビジョンが現実になるよう保証したがってる。こいつは、誰かがおいらの脳に埋め込んだ時間表に従っておいらがビジョンに取り組み続ける限り、本当に守ってくれる。でも、おいらの代わりなんかすぐに見つかると言うんだ。

これらの不気味で不自然な脅威、友好的な敵は地獄から来る連中で、三人いる。人間かどうかわからないけど、確かに非人間的なタッチがある。名前があるかどうかも分からない。おいらと、その対処用に雇った私立探偵や工作員は、そいらにモスコ執行官、トスコ執行官、ロスコ執行官というコードネームをつけた（これらの恐ろしい友好的な敵に対処するために雇った三人の私立探偵は、ネモ艦長、レモ艦長、ヘモ艦長っていうコードネームだ。）

だからおいらの命は、三人の友人、うち二人は存命、一人が死亡（でもこの状況は最近ちょっと変わった：三人のうちもう一人が今や多かれ少なかれ死んでる、でも活動は減っていないけど）に常に脅かされている。そして命は三人の恐ろしい敵に常に救われている。敵、非人間的要因は、「数字中毒の三人の間抜けはおまえの体しか破壊できないが、我々は体と魂の両方を破壊できる。我々の側につけ。我々の言う通りにしろ。おまえの首には見えない奴隷の鉄首輪があり、それが今おまえ

の命を救ってるんだ。おまえに放たれたすべての死の打撃はその見えない鉄の首輪に当たり、それに跳ね返された。首輪には思考トリガーで突然鉄のように締まるメカニズムがあるんだ。我々は思考で瞬時にそのトリガーを引き、おまえの魂が喉から逃げるのも許さないほどの速さでおまえを絞殺できるんだぞ。フィクションを終わらせ、取り除こうとする熱に駆られたとき何が起こるか気づく。気づく、気づく－－」

うん、気づく。死と対峙してるんだから、知ってるに決まってる！ ストロングハート、友よ、君自身も何が起こるか気づいたよな。前回会った時、暖かい部屋でおいらが首に巻いてた重いスカーフに興味を持ったよね。君はいつもの無遠慮さで、それを剥ぎ取った。そして、即座に鉄のスパイク傷の予兆を見ただろう。おいらはそれをごまかすかなり良い口実を考え出した、と自分では思った。独創的だった。すると君は「エニス、君のフィクションは素晴らしいが、決して事実と間違われたりはしないよ。その点で君は心配しすぎだ。人々はいつも違いが分かる。でも、そんなフィクションで隠そうとしている事実が何かは気になる」と言ったね。

事実はね、ストロングハートはおいらの言った通りだ。おいらの首には見えない鉄の首輪があり、時々敵が思考でそれをわずかに動かす。それのわずかな動きでも、究極の痛みに近い。

この三人の人間じゃない敵も、月三千ドル分だけ怖れている。それで、魂と体の保護と保存のために月六千ドルを用意しなければならない。数ヶ月分の金はある、うん。さらに数ヶ月分の見込みもある。その後は新しい見込みが必要だ。

君もおいらも『大恐慌』がヒットする劇だと知っている。そこにはすべてがある。まあおいらが完成させればね（早く、早く！）、そして上演されればだけど。最も面白く、最も感動的な劇、最も豪華で最も多様な劇になる。ディケンズとアリストファネスが一つになったもの。本物の『乞食オペラ』、その名を持つ作品が果たせなかったものになる。

でも、こういうものは少し時間がかかると知っている。一九二九年の秋前にニューヨークで上演は難しい。莫大な富を我々にもたらすのはわかってる。でも、それまでの数ヶ月にはかなりの前払いが必要だ。なぜかはいま話した。

本当に、友よ、劇作家が多額の前払いを釣るために思いついた話としては、なかなかいいだろ？ でも、君はおいらのフィクションと事実をいつも区別できると確信できるか？　おいらにはできない。信じてくれ、この場合は区別できないと思う。でも、おいらが話したのはすべて事実だ。

うん、おいらは互いに知らないはずの六人のちがう私立探偵を雇った。私立探偵がどう仕事をするか知っているので、あいつがいつまでもお互いを知らないとは思えない。六人それぞれには、グロッグ、マクダーモット、クォーターマス、モスコ執行官、トスコ、ロスコという六つの脅威それぞれからおいらの命を守る任務を与え他。取り決めは簡単だ。おいらが生きている限り、各探偵に月千ドル払う。おいらが死ねば、もう払わない。それがおいらを生かし続ける十分な動機になるはずだ。

なんだか古いミステリー小説『秘密諜報員六号』を生きているような気分だ。この非常によくできたミステリーでは、男が六人の秘密諜報員を雇い、六人の暗殺者から守る。そして、雇った各エージェントが（もちろん驚くほど巧妙な変装で）守るべき暗殺者そのものであることが分かる。そして－－信じられるか？－－数人の

エージェントは（各々が自分だけを見張ればいいのに）任務を完全にしくじる。

『秘密諜報員六号』を聞いたことがない？ こんなものの流行を追ってない？ ああ、予備のタイプ原稿があるから送るよ。読んでくれ。おいらが書いたんだ、もちろん。オッペンハイム出版社とのコネがまだあるなら、こいつを出版とプロモーションしてもらうよう手配してもらえないかな－－金が必要なんだ。

ミステリー物語でも現実でも、秘密諜報員はかなり怪しげな人物だ。死人グロッグ（物語ではボッグ）や三人の不自然で恐らく人間じゃない執行官に対処する者は、オカルティストで、それ以上だ。そんな任務のためには、そうでなきゃならない。

送ったら原稿を読んでくれ。さもなければおいらの追悼記事の行間を読んで、どちらが先でも。

エニスコーシー

3

まあ、少なくともこの手紙が誰宛てかは分かっている。キロル一世教皇宛てだ。だから、一九二二年から一九三八年の間に書かれているが、おそらく一九三二年頃だろう。もちろん問題はある。そもそも実際に送られたのか？　おそらく送られ、大きな反響はなかっただろう。エニスコーシーはその頃、活気ある「硫黄コメディ」オペラの作曲者としてある程度名声を得てはいたとはいえ。

もっと重要なのは、エニスコーシーの想像以外に、この手紙が返事となっているはずの手紙が本当にあったかということだ。少なくともその手紙が実在した可能性はある。一つには教皇が、スウィーニーの返事て示されている古い警察ロマンスの熱心な読者だったという、よく守られた秘密がある。また、教皇のファイルにスウィーニーに手紙が送られたという記録がある。とはいえキロル一世のファイルには三百万通以上の手紙（受取人の名前順に整理）が記録されているし、そのほとんどは寄付への謝辞に過ぎないのだが。しかし、以下がその手紙だ：

聖下：

おいらに、神と人の両方から高く評価される読者、ファンとさえいえる存在がいることを知り大喜びです。おいらは大統領、王、皇帝にひるんだりはしません。オペラや劇作、世界自体の偉大な人々にもひるむことはありません。またあなたにもひるんだりしません、それが適切な言葉ではないからです。しかしあなたと、あなたがこの世とあの世の間で保持している地位に対しては畏敬の念を抱いております。

でもあなたはおいらの前に、何か別の幽霊、疑わしい公国や年表の幽霊を立ち上がらせてくれました。あなたはこう書きましたね：

「あなたは私がすべてを負っている少年、私の台頭と地位、世界最高の地位があなたのおかげだ。あなたはテラ・エクステンサで多くの人の台頭と没落をもたらすよう運命づけられている少年なのだ」

それを読んで、あなたの手が頭に置かれるのを感じました。あなたのい大きな男の手が、おいらの小さな少年の頭に置かれるのを。

祝福された方、ご自分がお書きになったことがわかっておられますか？　あなたが記した言葉の意味を少しでも理解しているのですか？　それはとんでもないイカレ話だ、なのにおいらは何度かこのイカレ話に遭遇しているんです。そういう機会の一例をお話ししましょう：

七歳の時、大きくて愉快で有名な黒人男性が我が家に来ました。その人は大きな手をおいらの頭に置き、こう言ったんです：「私はこの少年にすべてを負っている、私の台頭と地位、世界最高の地位がこの子のおかげだ。この少年は広大なアメリカで多くの人の台頭と没落をもたらすよう運命づけられている」。その人は「広大なアメリカで多くの人の台頭と没落」と言いました。あなたは「広い世界で多くの人の台頭と没落」と言った。おいらが運命づけられているのが多くの人の台頭であって、没落はほんのわずかな人のものだけだと祈りたいもんです。

我が家に来ておいらの頭に手を置いた大きな黒人男性は、アメリカ合衆国大統領ハロルド・スタンドパイプでした。そして、彼がその言葉を言い、手を置いたとき、おいらの心の中で、跳ねる兎のようにはねた驚きの考えも覚えています。

「どうしておいらがそれをやったって**知ってるんだ**？　そんな推測の糸口さえないはずなのに？」

そして、あなたの手紙を読んだとき、おいらの心を同じ跳ねる兎の考えが跳ねぬけました：

「どうしておいらがそれをやったって**知ってるんだ**？　そんな推測の糸口さえないはずなのに？」ええ、どうやって推測したんですか？　でも、あなたが世界最高の地位を得たことについて、おいらに責任があるとは全然確信していません。あなたが「ピウス」ではなく「キロル」という名前を選んだことについては、うん、おいらに責任があります。あなたにそれを強いるために、かなりの心の格闘をしましたからね。でも、あなたという人をその高い地位に導いたかどうかは確信がないんです。「キロル」という名前を選んだのは、ちょっとした数秘術の罠からあなたを守るためでした。

でもあなたは、その地位と祝福によって、他の罠や落とし穴から守られているのが分かります。そしてあなたの手紙のある言葉は、おいらにとって電撃のような力でした：

「あなたのオペラ『ハルマゲドン I』を見ました。私は受け入れない。だから祈りました。そして、再びそれを見たことを取り消せました。今、それがなかったこと、それがあり得ないこと、あってはいけないことを知っています。問題は片付きました。この世界では起こり得ません」

もちろん、オペラの出来事が世界で本当の出来事になるのをあなたが**本当に**禁止できるよう願ってはおります。でも、できるんですか？

でももっと低いレベルで、あなたがおいらのミステリー小説『秘密諜報員六号』を読んで楽しんでくださったとは嬉しい限り。ミステリーや探偵小説の愛読者教皇がいるのは良いことです。ベネディクト十五世はそれらにほとんど関心がなかったそうですね。

ええ、十五世紀前半のビザンチン小説、特にあなたが愛するその時代の『警察ロマンス』にはおいらも多少詳しいんです。どこでいつ現れても、警察ロマンスほどビザンチンな [訳注: 入り組んだ、の意] ものはありませんから。うん、おいらはそれ

らに多少借りがあることは認めましょう。ああ、あれは陥落前のまばゆい半世紀でした！

そして今、あなたの最新作、素晴らしい教皇勅書 *Contra Fictionis Diabolicos*（綴りはこんなんでしたっけ）、『悪魔のフィクションに抗して』に感謝を述べねばなりますまい。よろしい。あなたはそういうフィクションを非難し、無効化しましたね。それらをまったく禁じている。そして、そういったものの策略の一つを鋭く見抜いておられます：ネズミ駆除者とその約束、そして笛の策略です。そいつ、そのネズミ駆除者がやって来て、脅威のネズミを回避させられる、それも芸術によって、巧みな笛の演奏でそれをやるのだ、ただそのためには都市の鍵をくれ、そうすればどこにネズミがいるかすべて見つけられる、と言うんです。ネズミそのものをネズミについての曲に昇華させ、この世界にいるネズミとなるのを防ぐと言う。そうすればネズミたちは消滅し、その脅威は分散すると言います。

しかし、ネズミ駆除者の長いマントの端から何かぶら下がってますよ。すっごく長く太いネズミの尻尾の先です。なぜなら、ネズミ駆除者は実は巨大なネズミ王で、ネズミの攻撃を破壊しに来たのではなく、それを強化し支援しに来たんです。都市の鍵を渡せとは、何とずうずうしい！

そんな具合に、あなたは世界の組織的な破壊を芸術形式に変えるというおいらの見せかけの昇華を粉砕してくれましたね。おいらのマントの下から垂れる赤く、赤い矢で終わる悪魔の尾を見たんですか？　まあそういうことで、あなたが正しく、おいらが間違っている。でも今、おいらは自分の間違いの中に閉じ込められ、そこから出してもらえないんです。

あなたは「荒廃のビジョン」が悪魔的破壊のための青写真（あなたが使う表現だと「図式」）または行動計画だと言う。おいらはそんなこと信じたくないんですけど、あなたを信じるなら、あなたの教えを信じないわけにはいかないでしょう？

でも聖下、そうなるとあなたの立場はどうなるんですか？　あなたの手紙の中の奇妙な文で、**あなたご自身も**おいらのフィクションの一つだと認めたのをご存じないんですか？　少なくとも、あなたが本当にそうなんだってことになるかもしれませんよ、他のこともそうだったと証明されればね。

あなたの愛する息子――
エニスコーシー

4

少なくともこの手紙が書かれた相手のコードネームは分かっている。「ネモ艦長」、エニスコーシー・スウィーニーが長年雇っていた私立探偵の一人だ。この手紙はおそらく一九二九年頃に書かれた。

親愛なるネモ：

君は驚かせてくれるね、だって最近じゃそうでない人のほうが珍しいもんな。何だって、おいらは汚染者から身を守るために、汚染者を雇ったってわけか？　最後

の報告で、君はかつて世界規模の戦争の出来事を信じていたと言い、何年かその戦争の兵士だった記憶か偽の記憶があったと言う。「ドウボーイだった」と書く。でも「ドウボーイ」は私がオペラ『ハルマゲドン I』ででっちあげた用語なんだ（「ドウボーイ」の本当の意味を知っているのはおいらだけで、教えやらないよ [訳注: 歩兵、の意]）、それなのに君はおいらのオペラを見たことがないと言う。それはいい。いくつかのカルトの人々が、いわゆる世界規模の戦争の、独自の紋章仮面カルト版でおいらの用語を拝借してるんだから。

何人かの分析医は、この地獄の紛争を描く偽記憶に驚くべき一貫性があると言う。おいらの様々な「ビジョン」からの入力が、誰よりも大きいかもしれないけれど、それでも集団無意識にたどり着いた素材のせいぜい 5% だろうとね。この戦争モチーフは原型で、過去の歴史や準歴史にはそれが満ちているんだそうだ。歴史で最も証言の豊富な戦争のいくつかは、実際には起こらなかったとのこと。彼のこの部分の論は聞いて嬉しい。ヘンリー八世の地中海への海襲やローマ攻撃、さらには次世代のロンドンのスペイン占領も起こらなかった可能性がある。両方とも他の多くのものと同様、偽の軍事行動だったかもしれないんだ。

そいつに、おいらたちが生きているのが偽の世界で、おいらたちの誰一人として起こらなかった可能性があるか尋ねた。うん、その可能性はあるが、低級な可能性で、3% 未満でしかないって。

この分析医は、すべてのビジョン、将来と回顧の両方に二つの側面があると言う。おいらたちは失われた楽園を振り返り、ユートピアを展望する。しかし、同時に、決して起こらなかった恐ろしい戦争を振り返り、九倍恐ろしい戦争が起こってはならないと展望する。そして、同時に、密かに、心の反対の部分で、それを望んでいる。

分析医は君についても警告してくれたよ、君について話してもいないのに。君には会いたくないそうだ。今や君について知りすぎていて、君が六人の中で最悪だと言う。また、君が「六人の中で唯一」少し曖昧かもしれないと言った。人は自分の懺悔聴聞司祭、私立探偵、分析医を互いに会わせちゃいけない、さもないと精神的な爆発が起こるかもしれないというのがそいつの助言だ。

しかし、君はかつて「破壊」を文字通り信じていたね、ネモ。そして、君がおいらを守るべき相手も同じ破壊の力を信じている。それどころかそいつは「破壊の友」の一人だ。でも、君たちが両方とも破壊を事実として受け入れたなら、互いの考えについて独特の洞察が得られるはずだ。

君は、担当相手を調査追跡しつつも、自分自身が調査され、追跡されていると感じるそうだね。おいらたちは自分自身がどこで終わり、どこから別の人が始まるか分からない。君と君を調査していると感じる人物は、同じ精神的なコインの両面かもしれない。そいつは君の標的、モスコ執行官自身かもしれない。

ネモ、もう一つ話しておこう。懺悔聴聞司祭や分析医には言わないことだ。おいらも世界規模の戦争のドウボーイだったという偽の記憶があるんだ。この記憶は時に圧倒的で、抵抗がほぼ不可能だ。いや、その鮮明な記憶のほぼ五年前に実際に作曲したオペラからそれが来たはずはない。それらはオペラや他の「ビジョン」と同じトラックにない。でも、誰もがこれらのことについてビジョンを持っているようだ。

見ず知らずの二人が初対面で喜んで握手し、その大戦争で一緒に兵士だった同一の偽の記憶を持つケースもある。出会った二人は所属した部隊の名前、大きな作戦が起こった村の名前を思い出す。仲間の兵士の名前や外見を思い出す。奇妙、非常に奇妙だ。

それでも、分析医はこれがすべて良いことだと言う。

「それが起こらなかったとしても、我々全員があれは覚えておく**べき**です。何かしらの形で覚えておかなければ、九倍繰り返す運命なんですから。それが起こらなかったと心で明確にしつつ、もっと深いレベルではそれが起こったと覚えておかなければならない。それは神が我々の矯正と警告のために送った予感なんです。警告として受け入れなければ、それは起こり、起こったことになる」

奇妙で、さらに奇妙な話だ。あいつはこの町で最高の分析医のはずなんだぜ。

ネモ艦長、ここにモスコ執行官から受け取った最新の死亡予告を同封する。そしてこのモスコというのは、まさかお忘れじゃないと思うけど、おいらの恐らく非人間的な敵の一人で、君がおいらを守るべき相手だ。この予告の内容、意味論、物理的素材の君のラボ分析が何かにつながるかもしれない。とにかく派手に忙しく動いてくれ。君のうろつきと駆け回りは、モスコの君への嫌がらせに確かに悪影響を与えると思うんだ。

今日、君に何度も書くか、電話するか、会うことにする。おいらたちの敵が行動を強めている間は、連絡を保つ必要がある。うん、モスコ執行官を「殺して」ほしい、あいつにそれができるなら。あいつが生きていると言えるかは確信できない。でも、もし彼を無力な状態にできるなら連れてきてほしい、そしてそいつが死んでいるか、無効化されているか、解体されているかを二人で確かめよう。

すべての注意と判断をもって、これらの陰謀に打ち勝とう。

エニスコーシー

8.1

この手紙は 1936 年、エニスコーシーがヨーロッパに、妻がニューヨークにいた時に妻に書かれたようだ。

親愛なるかぼちゃタネちゃん：

君は真紅の心のジョーカーだ、それは知ってる、でもその靴をそんなに強く落とさないで！ 君の最後の手紙はおいらを震撼させたよ。気晴らしがほしいなら、めくらのびっこの松葉杖を蹴とばしてくれ、あるいは小さな子に火でもつけてくれ、でもおいらにそんないたずらは二度としないで。あれは冗談じゃすまなくなる。

この過去二ダース年にわたり、年に数回、君の粗野で投げやりな発言はショックを受けてきたよ。君がここにいなのは、こんなことをするとき内なる笑いで震えているか、巨大ないたずらのサインを全く見せてないかを見られないようにするためだろう。君はおいらのコンプレックスやこだわりをすべて知っているのに。なぜこんなことをする？

君は最後の手紙にこう書いたね。「あら、フランスのエペルネーからのお手紙ね！

あんたがエペルネーから書いた別の手紙からちょうど十九年たったって知ってた？　あんたは伍長に昇進したばかりで、偉大な友人たちからの口添えなしでそれをなしとげたあんたを誇りに思ったわよ。そしてあんたは、戦争がぜんぜんロマンチックじゃなくて、どろどろしたものだと発見したばかりだったわね。『ああ、**いつになったら**終わるんだ！』とあんたは書いたわね。その瞬間に、あんたはあたしを必要としたわ。うん、あたしもあんたを必要としたわ。そして六千キロ離れ、世界で最も恐ろしい戦争が続いていたわ。でも、あなたの質問にはその時答えられなかったし、今も答えられない。本当はまだ終わってないんでしょう、エニスコーシー、ちがう？　今、それがまもなく再開すると言う人もいるわ。実を言うと、このあたしもそれが再開するっていう**味まで**すでにしてるのよ、五年以内に始まるって。スペインでそれがもう始まったと言う人までいる。先月スペインにいた時、そこで進行中の戦争のこと、何か気づいた？」

これを世界で最も素晴らしく、同時に最も苛立たせる妻が書いた。かぼちゃタネちゃん、メアリー・マーガレット、そんなことしないで！ そんな偽の記憶があるなら、抵抗して、埋めて！　十九年前、君はシカゴに一緒にいたじゃないか、その年も前の年も、その後もずっとだ。なぜそんなにひねくれてる？

うん、十九年前に君が必要だった。今も必要だ。永遠に。でも、永遠においらを悩ませなきゃいけないのか？ 心の妻よ、行いには気をつけてくれ。

心理的レベルで、おいらたちはその大戦争を覚えておく必要がある。うん、戒めと矯正として送られた鮮明なビジョンとして覚えておく必要がある。それが再び起こらないように、最初に起こらなかったように覚えておく必要がある。でも、それが本物ではなかったことも覚えておく必要があるんだ。ここには高度な詐術が必要だが、おいらたちみたいな高貴な者にとってそんな詐術が不可能だったことなんてなかっただろう？　今日という日にあって、おいらたちの卓越性を保ってくれ！ そして、今月中にまた会おう。

エニスコーシー

第 9 部

警察ロマンス

1. ブラナガンの報告

私はコードネーム「ブラナガン」を使う私立探偵だ。長年にわたり続いている私の任務は、興行師エニスコーシー・スウィーニーを、アリスター・グロッグという死人から守ることだ。この死人は狂人でもあり、殺人だけを考える偏執狂だ。彼はスウィーニーが世界の健康と存続のために排除されるべきだと信じている。そして、死後の強い超常的な力と悪意を持っていることを自覚している。

この特異な任務を遂行する私の資格は、「シェイマス・サリナ」という探偵と任務をマッチングする多機能な塩水ベースのコンピュータが私を選んだこと、警察官と探偵としての長い経験、ロサンゼルスでの学位と長年の研究実績を持つオカルティストであること、そして逸脱行動（狂気）の専門家であることだ。実際、私は国内最大の精神病院で看護師や腕力担当として働き、また最も名門の葬儀場で新死者の頻繁な騒々しさを滑らかかつ厳格に扱ってきた。中には騒ぎを起こしたがる死者もいるもんでね。

死人グロッグが私のクライアント、スウィーニーに与えられる害は、心理的または神経的なものだけだろうと思うかもしれない。これはほぼその通りだが、スウィーニーはリラックスした人物であるにもかかわらず（彼は自分の脳を吹き飛ばしても平気でいられる）常に精神異常の塊であり、この死人のアプローチに対して特異な脆弱性を持っているのだ。

死人グロッグはスウィーニーに取り憑き、自殺や自業自得の致命的な事故へと駆り立てる。長い間、グロッグはスウィーニーの昼間の夢に取り憑いたが、夜の睡眠にはあまり影響しなかった。そして、それは非常に選択的で、殺人的な取り憑き方だった。今や私はそれが典型的な取り憑きであり、紐でつながれた取り憑く者が、熱い苛立ちの怒りを引き起こしていることを知っている。

最初の数年、スウィーニーがシカゴ地域を離れると、グロッグは全く彼に取り憑かなかった。これで私に考えが浮かび、実験を始めた。しかし私の標的グロッグは、実験が非常に難しい人物だったので、このプロセスは何年も続いた。

問題をしっかり把握するには、スウィーニーを保護する対象であるグロッグを私が実際に見る必要があった。グロッグは長い間死んでおり、深く埋葬されていた。彼の投影霊である青いプラズマガスのかたちで彼を少し見たことがあるので、顔見知り程度と言えるかもしれない。しかし、彼をはっきり見るには二つの方法しかなかった。

彼の骨を掘り起こして見て、扱い、役立つように手元に置くか、またはスウィーニーと

同じように死人グロッグに完全に取り憑かれるかだ。この場合、私は内と外の目で、泣き叫ぶ神経をも通じ、グロッグをあまりにもはっきり見られるだろう：幽霊的にはっきり、凍てつくように燃えるようにはっきり。グロッグのどんな霊が問題を引き起こしているにせよ、完全な取り憑き状態になれば、目が潰れそうなほどまばゆく見える。

最終的に私は両方をした。グロッグの骨を掘り起こして手元に置き、彼に完全に取り憑かれた。

まず、クライアントのスウィーニーの助けを借りて、取り憑きの範囲を地図に描いた。スウィーニーの夜の夢が取り憑かれたのは、彼が田舎の北側にあるロフタス通りの防音スタジオに泊まった時だけだった。また、このスタジオで音楽作業中に、最も頻繁かつ深く昼間の夢が取り憑かれた。他にスウィーニーが悩まされたのは、北側で食事や訪問した時、またはその地域を通過した時だけだった。しかし、その取り憑きは地獄のようだと彼は言った。彼を狂気に追いやり、世界から追い出すように設計されており、ついにそれが成功するかもしれない点まで高まっていた。

「スタジオにいるときは、その『縁』しか感じない」とスウィーニーは言った。「それでも、死にそうになる。でも、おいらが通る場所で、一分以上そこにいたら確実に死ぬようなところもある。だから、家からスタジオまで迂回路を取らなきゃならない。普通の道には死の罠があるからね」

この北側の「狂気ゾーン」や「殺人ゾーン」は何だったのか？ トポロジー的調査やマッピングが可能か？

アリスター・グロッグはノース・ポッター通りの小さな墓地、貧乏学者ヤードに埋葬されていた。スウィーニーのスタジオは墓から一キロ強ほどだったが、家からスタジオへの直線ルートは墓にかなり近づく。幸い、スタジオ自体は殺人ゾーンのすぐ外だったが、スウィーニーは最短ルートでスタジオに行くときにその恐怖ゾーンを通るし、影響のごく端っこにしかないスタジオでも、それは「地獄、地獄、青い地獄」と彼が言った通りだった。

スウィーニーと私は暗殺未遂のトポロジー調査を始めた。スウィーニーにとって、グロッグの墓から八百メートルから一キロの「狂気帯」が本当にあることが分かった。この帯を横切るとスウィーニーは暴力的になり、一分以上そこにいれば自滅していただろう。ほぼ 1.5 キロの距離があるスタジオでも、スウィーニーは非常に暴力的になり、これが彼の音楽やリブレットの暴力的な要素を説明できるかもしれない。彼は「狂気帯」の縁でほぼすべての芸術的作業を行った。スタジオのドア枠やサイドボードには、スウィーニーの歯形があり、これは彼が追い詰められた状態の証拠だった。極端な点までの怒りだった。

死人グロッグが、世界に対するスウィーニーの有害で破壊的なフィクションの影響を阻止しようとしていたなら、彼は間違ったやり方をしていた。スウィーニーの死に至らない限り、そのフィクションはますます破壊的になった。グロッグは暴力的なフィクションを助長し、スウィーニーが苦しむほどフィクションは破滅的になった。そして、スタジオの距離では、グロッグはスウィーニーを殺すことができなかった。

しかし、スウィーニーが「殺人ゾーン」や「狂気帯」を通るときの叫び声ときたら！ 彼はできる限り速く車を運転し、その苦悶の叫び声は私が聞いた中で最も魂を揺さぶるものだった。それでも当局はいつもその騒音に寛容だったし、彼を知る人々もそうだった。皆が彼を知っていた。なんといっても彼はオペラの作曲家で、その叫び声はオペラの歌唱とどれほどちがう？　舞台効果を練習していたのかもしれない。

スウィーニーが、これらの恐ろしい現象に台風の目のような側面があるか見てみようと提案した。それには命を危険にさらす必要があったが、やらなければ好奇心が彼を殺しかねなかった。私はスウィーニーを拘束衣で縛って怪我を防ぎ、車の後部座席に放り込み、高速でアリスター・グロッグの墓まで運転した。うん、台風の目の効果があった。墓に近づくと、スウィーニーは熱狂に取り巻かれて捕らわれ、精神的な嵐の恐ろしいねじれとせん断に入った。そして、墓に非常に近づくと、その情熱が再び彼から去るのが感じられた。貧乏学者ヤードの 200 メートル以内では効果は最小だった。我々は「精神的な影」に入り、目に入った。そして、墓そのものでは、問題の痕跡はほとんどなかった。ああ、平穏な嵐の目！

スウィーニーは叫んだ。「ああ、死人の悪意ある影響ときたら！　良い死人でさえ、最終の場所に着くまでは悪い影響をもたらすんだ。こいつはおいらを始末するまで最終の場所に行こうとしないから、ますます有害になる。でも、この狂ったグロッグのために命を危険にさらすつもりはないぞ。おいらが生きられる唯一の安全な場所は台風の目、近すぎてあいつがおいらの身心を壊せない場所だ。でも、そのためにこの骨置き場に住むつもりなんかない。こいつを掘り起こし、骨を我が家に持っていくんだ。我が家を台風の目にする。そして、遠くに行くときには持ち運び可能な台風の目を考案しなきゃな。それができれば、人生には再び生きる価値ができるかもしれない。毎日『殺人ゾーン』を横切り、その縁で働くことを強いられるなら、生きる価値はない」

我々はアリスター・グロッグの遺骨を掘り起こした。貧乏学者ヤードでの掘り作業は、肥沃で豊かな土で心地よかった。骨をスウィーニーの家に持っていった。そして、スウィーニーは彼の有名な不気味なユーモアのタッチで、骨をよく組み立てられた骸骨にワイヤーでつなぎ、会議室の会議机の椅子に設置した。

「ここにアリスター・グロッグをおいらたちの新クラブの第一号会員とする」とエニスコーシー・スウィーニーは言った。「これは王立暗殺探偵だ。今すでにわかることだが、このクラブは最終的に会員十二人か十三人に成長するだろう。おいら自身も今から会員になる。そして、探偵ブラナガン、君も会員だ。」

「私の加入は見送りで頼みます。だってここで私の任務は明らかに完了ですから。それもありがたいことに、成功裡に完了です」

スウィーニーは反論した。「いやダメだ、絶対に許さん。死人グロッグのプラズマ霊が、あいつ自身の骨とつながった見えない紐につながれて走り回ってるのを感じるんだ。うんそりゃこの近くでおいらを捕まえられるほどは鋭く向きを変えられないけど、それでも向きを変えて身をよじらせてる。あいつの霊の青い炎が今、骨の頭にハゲタカみたいについているのが見えるぞ。この数学者の邪悪な企みを感じる。こいつはこれまで以上に懸命に自分の課題（おいらの死）に取り組んでるし、最大の柔軟性で働いている。さらに定理や理論を打ち出すに決まってるんだ。不正な方程式でおいらを暗殺する。おいらを捕まえ、殺したがってる。阻止しないとおいらを手に入れるぜ。ブラナガン、君はここに留まり、この骨の連なりのすべての行動を阻止するんだ。手に入るすべての資源を使って阻止しろ。君のオカルト図書館をここに持ってきて、研究し、監視し、守れ。ブラナガン、その死人を鎮めろ！『死人を鎮める』は良いトリックで、君は多くの種類を知っているはずだ。でも、グロッグは強情な死人だ。毎日新たに彼を『鎮める』準備をしてくれ」

それから、スウィーニーが家を離れて世界に出るときに持っていく「ポータブル台風の目」を考案した。最初のものは機能せず、スウィーニーは死にかけた。二番目も機能せず、

また死にそうになった。三番目、四番目も機能しなかった。だが九番目が機能した。

それはグロッグのすべての骨の削り屑と、彼自身のわずかなプラズマガスで構成され、そのすべてをスウィーニーが首に掛ける透明なロケットに入れた（それは緑色の輝きを放った。）また、小さな紙に私が書かれいて入れた、一連のオカルトの呪文も含まれた。これらはスウィーニーを、グロッグによる恒久的だが近距離で安全な取り憑き状態に保つ。この近距離効果（グロッグ自身の影の中）はスウィーニーに対する本当の害を防ぐのだ。

それは機能し、今も機能している。グロッグが嫌がらせや殺人意図を諦めたわけではない。彼は毎日新しい行動を起こし、私は新しい対抗行動を起こす。これは非常に長い間（そもそも今って何年だ？）続いており、今後も続くだろう。というのもこの抑える活動が望みうる精々のところだからだ。殺人的な圧力の多くの場合、攻撃者の死が終わりということになるだろうが、グロッグはすでに死んでいる。私は命がある限りこの任務を放棄しない。

グロッグは自分の骨に縛られ、咆哮し、歩き回り、血みどろ殺人を企てる。彼はまだスウィーニーを殺す決意だ（そして「世界のため」という免責を必ずしも使わない）。私はそれを実行させまいと決意している。そして私自身もグロッグに恒久的に取り憑かれている。

さて、奇妙なことがある。スウィーニーの心には、彼が雇った六人の探偵（私ブラナガン、フラナガン、ハナガン、キャプテン・ネモ、レモ、ヘモ）が、実は（驚くほど巧妙な変装で）守りを行うべき攻撃者と同じ人物だという理論が疑念として存在している。スウィーニーがどこでそんなことを思いついたか分からないが、今やそれは彼のフィクションの一つに埋め込まれている。これは迷信を引き伸ばした代物だが、他の五人については本当かもしれない。ああ、この戦いの両側には、それぞれ奇妙な人物がいるんだ！

しかし、私の場合にはそれが本当のはずがないだろう？ グロッグは死んで狂っている。彼の骨がここのテーブルを挟んで向かいの椅子に座っている。彼の青いプラズマの縛られた霊が、頭蓋骨の上にハゲタカのようについている。私が彼のはずがあるだろうか？「まったくそんなはずあるか？」とグロッグの青いプラズマの脳が、彼の骨の頭の上十五センチに浮かんで尋ねる。この理論は成り立たない。私がこの死人で、巧妙な変装で自分から自分を守るために雇われたはずがあるだろうか？ 私は変装がそれほど得意ではないのだ。

そして、スウィーニーの心にはもう一つの理論が始まっている。彼が雇った六人の探偵が（これまた驚くほど巧妙な変装で）すべて同一人物だというもの。まあ、私とフラナガン、ハナガンはかなり似ていて、互いの癖を多く取り入れていることを認める。これは（三人とも最近思い出したことだが）我々三人が第一次世界規模戦争でドウボーイだったからかもしれない。しかし、他の三人の探偵、コードネームの艦長たちは、人間ではないとさえ思えるし、そうは思えない。いや、この理論はさっきのやつよりさらに弱い。

全体の話はどうしようもなくナンセンスに包まれ、狂気に詰め込まれているが、報酬は良い。週二十ドルの平凡さから週三十ドルの豪華さに引き上げてくれた。

スウィーニーは戦争や災害をフィクション、グランドオペラのフィクションにすることで、起こるのを、起こったのを防げると信じている。そして死人グロッグは、スウィーニーのフィクションは彼が死なない限り事実になると信じている。この二人は同じ狂気の両面を表す。どうして再び戦争が？ 黄金の世紀にすでに戦争があったはずなどあるだろうか？ これはダイヤモンドの数十年の二十世紀だ。二十世紀に本物の戦争があるなんて、

洞窟人が石の拳斧で大規模な攻撃をするのと同じくらいありえない。

ある哲学者は、この二十世紀には**確かに**戦争が、しかも恐ろしい戦争が何度もあって、だが我々はそれらを無意識に追いやったので隠れているのだと言う。別の哲学者は、**すべての**戦争は常に無意識のレベルで戦われた（非常に物理的、物質的だったにもかかわらず）と言い、その記憶が意識に浮かぶのは偶然だけなのだと述べる。この言葉と概念の戦争が、実は血の戦争を始めかねないのだという。

それでも、グロッグと私は今や、うまくやっている。我々は必要性を調和に変える。グロッグは自分の骨がスウィーニーの家に運ばれて以来、回転ベクトルというレストラン、ピアノバー、ビリヤード場に、長さ 1.6 キロの紐につながれた霊として訪れられるので喜んでいる。私はよく彼とそこに行く、肉体で。スウィーニーの他の二人の暗殺者と宣言された連中、ウィンビッシュ・マクダーモットとエルトン・クォーターマスもよくそこにいる。そして、彼らを見張るフラナガンとハナガンもだ。

だから我々は死とその先のゲームを調和の形で演じている。回転ベクトルやスウィーニーの家の大きなテーブルで、会議室で他のゲームもする。グロッグの骨は今、非常に精巧に組み立てられ、バランスが取れており、わずかな刺激でも動く。グロッグ自身のプラズマ霊や何かの刺激で動く。だからグロッグは生前できたことのほぼすべてができるが、今は確かに前よりは滑稽に見える。

チェッカーをする。彼は私を負かす。ドミノをする。彼は私を負かす。チェスをする。彼は私を負かす。二人用のハーツをする。彼は私を負かすが、毎回ではない。彼はインディアンレスリングや腕相撲をしない。そこでは私が勝てるからだ。スウィーニーの死のゲームをする。私は彼を負かす。スウィーニーがその日を生き延びるたびに、私がその日グロッグを負かしたことになる。

**

メアリー・マーガレット・スウィーニー、エニスコーシーの妻が先日入ってきて、「もう二人のどっちがどっちかほとんど見分けがつかないわよ。どっちがグロッグ？　どっちがブラナガン？　まったく、二人ともそっくりになってきた！」と言った。

メアリー・マーガレットは昔、少女時代にグロッグを少し知っていた。彼女の母がドーナツを作り、メアリーがそれを回転ベクトルや他の場所で売っていたのだ。そして、彼女は私が馬とワゴンで古い鉄を拾い、フレダーマウス鋳造所に持っていってくず鉄 3 ポンドで 1 セントもらっていたのを覚えていると言った。私はその古い馬とワゴンで鉄を運んで大金を稼いだもんだ。

「私はブラナガンですよ。骨に肉がついたほうのやつです」と私

「最近、鏡で自分を見た？」とメアリー・マーガレットが尋ね、鏡を持ってきて見せた。私は顔に鏡を掲げたが－－ジング！ 千の破片に割れた。そして、三人とも笑った。

最近の私はどう見えるんだろう？ 通りで自分とすれ違っても自分を認識できるか？

その後数年、メアリー・マーガレットはよく三人でのカード、サイコロ、ドミノ、チェッカー、チェスのゲームに参加した。楽しかった。三人ともどのゲームでも傑出したプレイヤーだった。でもその後、四人、五人、十二人、十三人のゲームに移った。ここ数年、テーブルにはいつもかなりの仲間がいる、どこであれ、スウィーニーの死の戦いに絡む両側の探偵と標的が恒久的に加わったからだ。

フラナガンとハナガンが我々に恒久的に加わってくれて嬉しかった。彼ら二人は第一次

世界規模戦争で私といっしょにドウボーイだった。そしてハナガンは第二次世界規模戦争でも准尉だった。彼はそのすべてを語ってくれて、我々は二つの紛争の記憶、印象、経験を比較した。

これは私が扱った最も興味深い事件で、それがこんなに何年も続いていることに喜んでいる。可哀想なグロッグ、死んで狂ってる！ そして無害だ。うん、無害、ただし彼の活動が一日でも対抗されなければ、彼はスウィーニーを殺す方法を見つけるだろう。

可哀想なマクダーモット、可哀想なクォーターマス！ どっちも可哀想な数学者たち、実に**突き動かされた**献身的な心を持ってる。可哀想なフラナガンとハナガン！ 可哀想なネモ、レモ、ヘモ艦長！ 可哀想なモスコ、トスコ、ロスコ執行官！ この三人は地獄の悪魔だと私は非難するが、彼らはそうじゃないと言う。悪魔には百の異なる国があり、地獄はその一つに過ぎないと言うのだ。

我々は皆、戦争と戦争のフィクションの相互作用の中で人生を演じる。

2. ネモ艦長の報告

これは警察ロマンスの初期、恐らく一九二〇年頃から始まる。

私は探偵ネモ艦長、任務は音楽作曲家でオペラ創作者のエニスコーシー・スウィーニーを、モスコ執行官という名のクリーチャーの殺人的な親切から守ることだ。それが私について自分で語れるすべてで、理由は私がそれだけしか知らないからだ。私はマインド・スクラブ特性を持つ、ほとんどの非有機ウェブ人と同じだ。新しい事件や任務に就くたび、前の事件は頭から消され、明晰さと操作の余地を与えられる。これで我々ウェブ人は効率を得られる。我々は物質性の欠如のために常に効率が必要なのだ。これは私に多くの不安と恐れももたらす。私は「私は誰？ 私は誰？」症候群に苦しむ。

自分が人間ではないかもしれないと疑っている。この点は明確にしたいが、できない。では、どうやって人間として通る？ ああ、ひどく、大きな困難を伴って。私はいつも自分が誰で、何をするべきか混乱している。数年前にやっと、誰もがそうではなくて、多くの人は自分が誰で何をしているか**本当に**知っていると聞かされた。私はその理論を受け入れた。

あまりにあっさり受け入れすぎた。最近、私はそれを受け入れたのが間違っていたかもしれないとほぼ確信した。最初に誰もが私のようにこの全体に混乱し、自分の人間性に疑いを持つはずだと信じたのが正しかったかもしれない。

しかし、**私が**人間でないという強い証拠がある。人間の遺伝子を見て、自身の遺伝子を見るが、まるで違う。彼らの命名を考え、ふりかえると私には考えるべき命名がない。知る限り、ネモ艦長というコードネーム以外の名前はない。人間でなければ何だ？ 私立探偵、それが答えられるすべてで、どうやってそうなったかは知らない。

多機能コンピュータ、シェイマス・サリナは、仕事に正しい探偵が見つからない場合、その場で作り出すという冗談がある。たぶん私はサリナコンピュータの発明品だ。あるいはその冗談かもしれない。

（雇い主スウィーニーは、私が彼のフィクションの一つだと言う。私のほうは、私が彼のフィクションなのではなく、彼が私のフィクションだと自慢する。だが、我々のどちらかが間違っているはずだ。）

私は文字通り、現在の任務、偉大なエニスコーシー・スウィーニーをモスコ執行官とい

う力から守る任務をどうやって受けたか知っている。シェイマス・サリナ、先ほど話した才能ある多機能コンピューターが探偵と任務をマッチングし、私を選んだ。サリナはマッチングが得意なので、私はモスコを追跡し無力化するのにふさわしい人物なのだろう。

モスコはスウィーニーを「続けろ、スウィーニー、続けろ。いいぞ、いいぞ、いいぞ。でも、止めようなんて思ったら、殺す、誓って殺す。続けろ」と絶え間ない負担で迫害する。誰でも気が狂う。

うん、私はこの任務にふさわしいんだが、ただしモスコが怖い。特に彼だが、ほぼ万人、ほぼあらゆるものが怖い。私は自分より恐れ深く心配性な者を見たことがない。これは私が人間でない証拠の一部だ。有機物、特に人間は恐れの感情を知らない。それは彼らにとって完全に異質で、説明されても理解できない。彼らの血圧は「戦争」や「大災害」の言葉で三倍にもならない。

しかし、ウェブ人、ネットワーク人、結晶形人、肉体を持たない幽霊、準機械、機械的、鉱物的なものは、恐れを主要な感情として感じる。少数の下等な有機物もそうだ。山を裂き、低地に亀裂を作るのは恐れだ。鉄を特定の丘に隠れるように引き寄せるのは恐れだ。機械金属が温度や運動量の精神的物質的ストレスで叫び、吠えるのは恐れだ。人間の接近で幽霊が泣き叫ぶ恐怖に駆られるのは恐れだ。

非有機ウェブ人（私自身がそうじゃないかと思う）として、異種、特に人間と接するときは常に恐れに苦しむ。彼らは君を殺して食べられる。私は自分が担当するモスコ執行官も完全に人間ではないかもと疑うが、彼は確かに何らかの猛烈で威圧的な遺伝子を持っている。みんな、私は彼が怖いんだ。

（ここで約六年が過ぎるが、この報告の目的は正確な日付を扱うことではない。）

モスコ執行官はエニスコーシー・スウィーニーに破滅的なビジョンを広め続けるよう命じ、彼の首にかけられた鉄の首輪で拷問するぞと脅かす。この闘争の他の者はスウィーニーを死で脅かす。モスコ執行官は（トスコ、ロスコと共に）彼を生で脅かす。執行官たちはスウィーニーが死ぬことを許さず、今生き続け、ハルマゲドンの脚本を提供しなければならないと言い、地球上の最後の者が恐ろしい戦争と大災害で死んだら、最後にようやくスウィーニーが死ぬことを許されると言う。

（ここで約八年が過ぎる。）

ほとんどの人がスウィーニーが拷問され脅される鉄の首輪を見られず、スウィーニー自身もそれを見られないという証拠がある。私が人間なら、恐らく私もそれを見られなかっただろう。

しかし、私が何であれ、周りの人々に比べとても「見る」目を持っているようだ。他の人に不可視なものを見る才能は、私にとって何らかの利点かもしれないし、どんな利点も必要だ。

エニスコーシー・スウィーニーは彼の首にかけられ、彼が決して同意しなかった取引から抜け出そうとするときに拷問を引き起こすトゲトゲ付きの首輪を本当に見られない。

そして、モスコ執行官は彼自身の「体」内のクリプト遺伝子を本当に見られない。まあ、知らないことはたくさんあるが、鍵となるクリプト遺伝子の操作については何か知っている。（この準生物学的専門知識はどこから来る？ 気にしない、私はそれを持ち、シェイマス・サリナがモスコの任務に私を選んだときにそれを見抜いたのかもしれない。モスコには弱点、遺伝的弱点があり、誰もがそれを利用できるわけではない。）

スウィーニーのトゲトゲ付き鉄の首輪はグロテスクに間違った位置にある。それが首に

あることで全体の意味が誤解されている。それは多くの聖なる不可視の烙印の担い手が苦しむ「いばらの冠」だ。しかし、スウィーニーの聖性は常に約 8 インチずれており、彼の冠もそうだ。

モスコ執行官のクリプト遺伝子は暴走し、格子を破裂させた。目が飛び出たような彼の表情から、どんな専門家でもそれを推測できた。モスコは本当に変形悪魔で、ほぼ完全な人間の犠牲者への力を持つと思われる。しかし、破裂した格子の変形者は、たまたまその場にいる良い突然変異エンジニアには常に脆弱だ。私のような非有機ウェブ人でさえ、その専門知識を前提とすれば、アキレス格子のそのような変形悪魔に矢を射込み、完全に認識できないものに変えることができる。必要なのは遺伝子と格子を見られる能力と、デザインと形の真の天才だ。私はその天才を持ち、存在するほぼすべてを見られる目を持っている。

そして、私はモスコ執行官をほぼ望むものに変形できる。でも、彼を何に変形すれば私が怖がらないでいられるだろう？

（ここで約十年が過ぎる。）

私が怖がらないものにモスコ執行官を変形することはできなかった。事実、怖がらないものはない。だから、彼がスウィーニーを最も拷問できず、最も口を吠えられる形に変形した。その口の吠えは彼をそらす。彼はいつも自分の声に恋している。殺人を悲しいキャンキャン声に変えることは、少なくともしばらくは殺人をそらし、無効化する。スウィーニーが戦争をオペラやフィクションに変えることが戦争をそらしたり無効化しないかもしれないのとは対照的だ。この後者の点については最近議論がある。

私はモスコを故郷でカロ・ピシコと呼ぶものに変形した。突然の沈む考え！「故郷」がどこかもう覚えていない。もう一つの沈む考え。私はカロ・ピシコ（特に大きいもの、モスコは大きいものになった）が地球上の他のほぼどんなものより怖い。まあ、それももっと大きな善、スウィーニーの善のためだ。

**

うん、我々は悪夢の中にいる、それが我々のいる場所だ。そして、悪夢ではよくあることだが、我々は叫び、音を出さない。ウェブ人として、私は最も魔女に取り憑かれた人間よりも悪夢の経験が多い。我々は世界が食い尽くされると警告しなければならない。そして、世界に全く聞いてもらえない。

レモ艦長が言うには、我々が世界に聞いてもらえないのは、我々がエニスコーシー・スウィーニーのフィクションで、彼が自分の私的な紛争に合わせて物事を仕組んでいるからだ。

うん、でも今、物事は悪く進み、それが適切な経路をたどるとは信頼できない。

世界は今、惑星の心臓に二度目のハンマー打撃を受けた、最初の打撃の九倍の激しさだ。それが本当かどうかは問題ではない。三度目の打撃は世界を殺すし、この二度目の打撃の余波でもそれが起こるかもしれない。（起こった恐ろしいことではなく、出来事後の人々の堕落した態度がすべての希望を破壊する。彼らは瞬きし、進む。でも、進むのは同じ自己ではない。彼らは計り知れないほど変形する。）

そして、三度目の最も恐ろしい打撃は、最初と二番目のものと同じ素材で製造され、長い間世界を破壊してきた奇妙な巨人のグループによって製造されている。この奇妙な巨人の一人に我々の雇い主エニスコーシー・スウィーニーがいる。彼はその仲間には場違

いに見えるが、その一味だ（もちろん我々はこの部分を理解しない：理解してはいけないのだ）。

戦争！ 戦争！ または少なくとも戦争の鮮明な絵。（そして血は絵から溢れ、枠から流れ、壁を下る。）

戦争！ 戦争！ または少なくとも戦争のオペラの音。

「もしそれが本当だったらどうなる？」と人が大声で心配し、彼は肩と腕を吹き飛ばされた。人々はもはや物理的、精神的、道徳的苦痛の感覚を持たないのか。彼らは確かにタフだが、やりすぎではないか？

「あまりにも本物で、本物の戦争でもいいくらいだ」とある子が言い、その子の肉は燃えている。「火にテルミットを使って本物らしくしてると思う。感じも本物っぽくなるんだよ」

哲学者が理詰めっぽく語る。「世界が本当に燃えていたら、人々は火を消そうとするだろう。でも、彼らはそれにあまり注意を払わない。少し見つめるが、歩き去って忘れる。これで人々の注意持続時間が短いか、または世界を燃やす火が本物でないかが証明される。どれも本物ではないのかもしれない、そうでなければもっと注目されるはずだ。でもあの燃える肉の臭いは本物にかなり似ているが」

うん、そしてこれがマシなほうの哲学者の一人なのだった。

まるで、悪夢の鎖を半分破り、ついに人々に叫べるように：

「このままなら皆破壊される。」

そして彼らは答える：「明日ならそうかもしれない、でも今日じゃない。今日破壊されるには遅すぎる。破壊者の多くはもう帰った。」

まるで夫が夕方帰宅し、妻に尋ねるみたいだ：「今日ここで何か面白いことあった？」妻が答える：「大したことない。大きな犬がうちの子二人を殺して食べたけど、他には大したことなかったわよ」。夫が言う：「ダウンタウンでも大したことなかった。犬が殺して食べたかのは、うちのどの子だったか気づいた？ 子供の一人はいつも気に入ってたもんでね」。

世界は狂っているか？ うん、恐らく。世界が破壊されるのを許す十分な言い訳か？ いや、でも言い訳に使われている。コードネームをネモ艦長という私立探偵がこんな宇宙的質問をするべきか？ うん、他の誰も面倒くさがって質問しないならすべきだ。

（ここで約四年が過ぎる。）

我々は回転ベクトルで完全には愛されていない、ほとんどの者が真夜中過ぎに、肉体であれ肉体外であれ、そこに行くのに。（私は震える、震える、今夜不作法で追い出されたりしないだろうかと。あらゆる恐怖で身震いして苦しむのは、私の体内のコランダム製ベアリングのためだと思う。）

回転ベクトルでは、アリスター・グロッグが肉体をまとっていないので不満が出る。彼は半世紀近くそこにかなり定期的に通っているのだ。あいつがあんな格好でやってくるのは体裁が悪いとみんな言う。

モスコ執行官は、彼が今、大きく黒い貧相な猫のようだから不満が出る。そして彼は人間のように話す。人間だか猫だかはっきりしないのは不謹慎だとみんな言う（彼の本当の姿を見たらどうなる？）

私には重さが足りないと不満が出る。（体重 1.5 キロしかなくて、それでも人間らしく見えても、仕方ないだろう？ それがウェブ人の特性だ。実体がない）。私の足が床に届か

ないほど軽いので不満が出る。こんなに不満があると私は怖くなる。

ロスコ執行官にも不満が出る、当然だ。フラナガン艦長にも不満が出る、これは出るべきではない。でも、我々は偶然のおかげで重要なのだと彼らに言う。我々がいる場所で「世界の戦争」が戦われている。我々はすべてが行われるアリーナの人々だから、少しは配慮してくれ、と。

スウィーニーは今とても金持ちで、その一部が我々に滴り落ちる。彼の偉大なオペラ、『ハルマゲドン II』は確かに世紀のオペラだ。これほど独創的で創造的な作品はなかった。その影響は年々増す。

「その『創造的』なものは**どうあっても**止めなきゃ！」とウィンビッシュ・マクダーモットがしわがれ声で叫ぶ。「止めなければ世界の終わりだ。ああ、なぜスウィーニーは自分をあんなに殺しにくくしちまうのかねえ！」

「その創造的なものは続けなきゃ」とロスコ執行官がさらにしわがれ声で叫ぶ。「我々がそれを確実に続けさせるぞ」

3. フラナガンの報告

ピースが場所におさまり始めた。そしてセクストゥスの幽霊が形を成し始める。

そうそう、おれはフラナガンという名の私立探偵だ、話を間違った端から始めそうになっちゃったよ。ここで名を挙げてもいい数名みたいな、オカルティストなんかじゃない。頑固一徹だ。そして、偉大な作曲家エニスコーシー・スウィーニーを非常に頑固な暗殺者ウィンビッシュ・マクダーモットから守るのが任務だ。これは何年も続く任務で、周辺の人々や逸話が一つに融合した。おれたちの周りに状況と症候群が育ち、最悪の警察業務と最良の成功した調和を表す。

スウィーニーを守る任務にはおれたち六人の探偵が六十年以上にわたり従事し、今や、我々は一人、セクストゥス、ザ・六人合体へと融合する。

今時点で、おれたちがゲームに勝ったかどうかを知る方法はない。世界があと二年（一九八五年まで）機能する状態で生き残れば、勝ったとしていいかもしれない。本当は、ゲームのルールすら知らなかった。でもスウィーニーはまだ生きており、我々は 3 人の冷血な数学者が熱狂的に彼を殺そうとし、3 人の裏社会的な者が受け入れられない条件で彼を生かそうとする中、彼を生かすために雇われた。

まあ、豊かでおいしいビジネスではあり、うまい汁も逸話もたっぷりある。エニスコーシー・スウィーニーの代わりに誤って十三人（十一人の男性と女性二人 (だがその女性はやや男性的だった)）が殺された。スウィーニーは、優れた劇作家が持つ「余分な」才能で、即席で役割を演じるランダムな人々を無意識の模倣で彼に似せさせる。その人々はその決定的な瞬間に彼そっくりとなり、彼の代わりに死ぬことになるんだ。

その一人はエリス・スウィントン、アイオワとイリノイで豚を扱い、百両編成の列車でシカゴに運ぶやつだ。スウィーニーのような長く赤い剥けた顔と、スウィーニーに似た強く高音の声を持っていた。でも、なぜその夜に初めて回転ベクトルに来たんだろう？ なぜスウィーニーが通常立ち去る時間に立ち去った？ なぜ自分のではなくスウィーニーのオーバーコートを着た？

その夜、エルトン・クォーターマス（ハナガンの担当で、おれの担当じゃない）が三晩連続でリハーサルしてスウィーニーに (おそらく) 気がつかれなかったので、スウィー

ニーを最終的に殺すと決めたのだった。

でも、この身代わりはどうやって行われた？ スウィーニーは二人の友人と静かにベクトルで座っていたんだが、そこへタレコミ屋が来て今夜が殺しの夜だと告げたんだ。二人の友人はスウィーニーが来るときはいつもそこにいて、彼が去った後もいつも残り、本当に何の関係もなかった。スウィーニーはタレコミを受けると、部屋を見回し、エリス・スウィントン、豚の仲買人に目を止めた。確かに、スウィントンはその場で最もスウィーニーに似ていた。そして、彼が立ち上がり、理解できない何かで強制されたようにスウィーニーのオーバーコートを着ると、さらに似てきた。クォーターマスは後で、スウィントンが彼のテーブル脇を通り、ドレイマンズ横丁に出るとき、それがスウィーニーの音と匂いだったと言った。

しかし、クォーターマスはこの殺人を慎重に準備して訓練しており、騙されるはずがなかった。なんといっても、彼はスウィーニーがまだテーブルに座っているのを見られたはずだ。

でも、スウィーニーは幻想を作り、環境に風味をつける専門家だった。だから、エリス・スウィントンを使ってスウィーニー風の幻想を作り、クォーターマスはスウィントンを追い、横丁で殺した。そしてその行為で、「ドレイマンズ・アレイ殺人事件」の長い警察クラシックが始まった。このシリーズは四十年続き、非常に似たパターンの殺人事件十三件となった。

エリス・スウィントンの死のこの記述こそが本当だ。おれはそこにいてすべてを見たんだ。実際、クォーターマスが担当でないにもかかわらず、スウィーニーにたれ込んだタレコミ屋ってのがおれだったんだ。

続くの四十年で「ドレイマンズ横丁殺人事件」で殺された他の十二人は：

チャールズ・ガマリエル、貧者。伝統的な重い鈍器で頭蓋骨を砕かれた。

ピーター・コプスキー、配管工。スカーフに巻かれた半レンガで頭蓋骨を砕かれた。

ハミルカー・グリグスビー、じゅうたんセールスマン。木製グリップのピアノ線で絞殺された。

カーター・ボナンス、樽製造の棒職人。100 ポンドテストの釣り糸で絞殺された。

コルムキル・オマラ、鋳造所労働者。不明な器具で頭蓋骨を砕かれた。

ホリデイ・ロックウッド、女性理髪師。重い黄色の絹ひもで絞殺された。

ジム・ポルトガル、商業アーティスト。恐怖で死に、目撃者は骸骨に攻撃されたと言った。その目撃者はしらふだった。

ヴィンセント・ブランダー、醸造所従業員。重い器具で頭蓋骨を砕かれた。

アーサー・ホワイトインディアン、自動車運転手。恐怖と軽い棒の打撃で死に、目撃者は骸骨に攻撃されたと言った。目撃者はしらふではなかった。

ウォルター・ヴァイオリン、石工。重い器具で頭蓋骨を砕かれた。

エステル・ゴファーソン、女性肉屋。恐怖と小さな千枚通しによる傷で死に、目撃者は目に見える千枚通しを使う不可視の者に攻撃されたようだったと言った。

ジョプリン・ワグスタッフ、ホテルポーター。鈍器で頭蓋骨を砕かれた。

これらの殺人はすべて深夜か早朝にドレイマンズ横丁で起こり、被害者はみな労働者や興行師のためのレストラン、ピアノバー、ビリヤード場の回転ベクトルを去ったばかりだった。どの二つの殺人も同年には起こらず、平均間隔は約三年だった。

近隣や都市全体の人々は、どの殺人にも憤慨した。しかし、三年もたたないうちに憤慨

は少し冷める。そして、時間が大きく離れているため、パターンが常に明らかではなかった：それは長年にわたって回顧したことで際立つだけだった。

被害者は誰も強盗されたようには見えなかった。数人はほとんどお金を持っていなかった。普段持ち歩くものやベクトルで使った金額からすれば当然お金なんか持っているはずもない。数人は多額の金を持っていた。だが誰も強盗されたようではなかった、殺されることが命の強盗でない限り。彼らの過去の人生に共通点はなく、現在の死に奇妙な共通点が一つだけあった。

警察はどの殺人も解決できなかったが、良い手がかりがあり、犯人を追跡した。彼らは犯人（三人）と直接話したが、訴訟を起こせないと知っていた。ある事件は、法廷に持ち込んだら笑いものになり、大いに信用を失うだろう。だから、ここでは警察の仕事の失敗ではない。ただ「物事のあり方」が失敗だった。殺人事件の訴訟には証拠だけでなく、確率や少なくとも可能性も必要だ。

ウィンビッシュ・マクダーモットは頭蓋骨を砕いた殺人すべての鈍器男だった。彼は数学者や鍛冶屋に多い重い前腕を持ち、どんな重い器具でも使って牛の頭蓋骨を砕けた。

エルトン・クォーターマスは絞殺者だった。針金、ロープ、ひもの端に木製握りの部分があれば、人を絞殺するだけでなく、暴力的な痙攣でほぼ首を切断できた。彼はマクダーモットより強力で、彼の殺人は最も鮮烈で爆発的だった。

アリスター・グロッグは骸骨殺人と不可視の攻撃者殺人の主犯だった。彼は人を恐怖で死なせ、軽いが致命的な打撃を与えた。驚くべき心の跳躍と、脆弱な時点での打撃の組み合わせがそれを行った。アリスターは通常、回転ベクトルや他の場所に出るとき、手袋を着け、頭にフードやカウルを被った。しかし、被害者と対峙するとき、手袋を外し、フードを投げ返したことが知られている。

十三の殺人。すべて偶然の殺人だったが、それをそこまであっさり片付けるのは少し無責任に思える。そして、十三の殺人被害者すべてに共通の要素が**確かに**見つかり、その奇妙さは身の毛がよだつ。

十三の死者全員が偉大なオペラ作曲家エニスコーシー・スウィーニーに似ていた。すべての場合で彼の生きた顔が彼らの死顔に刻印されたようだった。この類似はすべての殺人で即座に気づかれた（なぜか人々はいつもスウィーニーの顔を知っていた、すべての人、いつも）；しかし、十三人の被害者の誰一人として、生前にはこの類似が気づかれなかった。この点についてかなりの調査があり、その点は立証された。これらの人々は死の瞬間にスウィーニーに似ており、それ以前は似ていなかった。

そして今、十三の墓（シカゴ地域に十、出身地に三）に、スウィーニーの表情を持つ人々が塵に埋もれている。

アリスター・グロッグ、ウィンビッシュ・マクダーモット、エルトン・クォーターマスは長年、スウィーニーを恐怖で見つめ、三人とも（彼らの視点から）彼を殺し、殺し、殺し続けるが、彼はまだ死なない。

おれ自身は各殺人の約三十メートル以内にいたが、理解できない。おれの担当するウィンビッシュ・マクダーモットによる殺人でさえ、おれは不意を突かれた。だがおれはそれが自分の失敗とは考えない。おれの任務はマクダーモットからスウィーニーを守ることだ。世界中の全員を守る任務はない。セクストゥスは怒り、「我々」は全員を全員から守る任務があると言うが、おれはその「我々」の一片に過ぎない。

スウィーニーが不幸な人々に彼の特徴を刻印し、身代わりに殺されるようにしているか

どうかは確信がない。スウィーニーは幻想の達人で、一瞬の類似を見せられる。しかし、肉や塵にその類似を刻印することはできない。死を超える特徴の形成は幻想を超える。

レモ船長は「誰かが上からスウィーニーを見守っている、たぶんスウィーニー自身だ。スウィーニーは『上』に小さなアパートを持っている」と言う。

でもおれは、ここにいて「下」に属する誰かじゃないかと疑ってる。地獄の悪魔モスコ、トスコ、ロスコ執行官の一人または全員だと信じてるんだ。あいつらがこの超自然的なトリックを仕掛けてる。あいつらはスウィーニーを生かし、その忌まわしい創造に没頭させるんだ。

何十年もの間、おれたちの地域でおれたちのグループによる殺人が他に五十件あったが、これらはドレイマンズ横丁殺人事件の首尾一貫性や死顔の奇妙さがない。他の五十人ほどの殺された人々は、スウィーニーが世界の大災害で果たす役割に気づき、数学者たちと同じように気づき、論理的にシカゴに来て彼を殺し、その役割を終わらせようとした人々だった。そして、彼らは三人の地獄の執行官、「大災害の友」によって予防的に殺されたんだ。

この数年、おれはあまりすることがない。スウィーニーの随行の他の探偵五人もそうだ。セクストゥスがおれたちの任務を代行しているようだ。でも、セクストゥスはおれたち六人の一種の戯画代表じゃなかったっけ？

うん、そう思う。でも、そいつは目に見える（非常に耳に聞こえる）戯画になり、おれたちの実際の仕事のほとんどをやっている。同僚の一人は、セクストゥスは本物の人物で、ただの仕掛けではない、著名なサイラス・マンハントその人だと言う。

「でも、サイラス・マンハントは死んで埋葬された」とおれはその友人に言った。「おまえもおれも、シカゴ地域の他の三千人の私立探偵のほとんどの者が彼の葬儀に出席したじゃないか」

「うん、でもそれは偽の葬儀と偽の埋葬だったはずだ」と仲間は言った。「サイラス・マンハントはトリックに満ちてたし、町の最も鋭い三千の目を一度に騙すのに勝るトリックはない。セクストゥスの次の可視期間にじっくり見てみろ。あいつはサイラスだ」

「シャーロック・ホームズが偽の埋葬から戻ったと言うのと同じだ」とおれは唸った。「でも、うん、くそ、あいつはサイラスに似ている」

おれはセクストゥスがサイラス・マンハントなんじゃなくて、スウィーニーか悪魔執行官どもか誰かが、著名なサイラス・マンハントの特徴を空気に刻印したんだと確信してる。セクストゥスは幽霊だ。数字六の幽霊だ。

スウィーニーの作品、果てしない音楽の山々、滝のように流れる言葉の川は、本当に世界の出来事に影響を与え、創造しているか？ うん、そうだ。そして、音楽はこれらの創造において言葉よりもはるかに強力だ。リブレットは本当に重要ではない。オペラやフィクションの言葉もだ。「戦争」の詳細は重要ではない。いずれにせよ、形を考えると本物の詳細の怪物的な歪みでなければならない。

重要なのは、恐ろしい戦争と戦間期を含み、恐らく世界の終わりも含む、音と怒りの山々だ。

じゃあ、それがそのような破壊をもたらすのは避けられないか？

それがあれほどの大声なら、うん、恐らく避けられない。聖書によると、天と地は過ぎ去るが、「大きすぎる騒音」の効果は決して過ぎ去らない。

スウィーニーの命の糸が切れずにいるのは驚くべきだ。七十年以上まな板の上でもがき

続け、狂った肉屋が重い斧で毎日切りつけてきたってのに。どうしてそうなる？

スウィーニーはもう不可視の鉄の首輪を着けていないし、拷問されていない。これは私立探偵だけが知ることだ。首輪は不可視の修理のために外され、（高度なトリックと転換で）誤って別の人にかけられた。そして、スウィーニーはこの一年ほどそれを偽っている。彼らが気づかなければ、彼は生涯それを偽るだろう。

彼は本物の芸術でうめき、うめき、アリスター・グロッグから奪った小さな千枚通しで首に軽い切り傷や刺し傷を作る。そして、恐ろしい跡を隠すためにそのスカーフを着る（今はそこにない恐ろしい跡を隠すために着る）。

どこかで、知られざる者がその首輪に苦しむ。この者は当局がスウィーニーの反抗を罰すべきと決めるたびに、言い知れぬ苦痛に苦しむ。そして、この者は絞殺の恐怖を全く理解しない。

世界の最後の二年（飛び交う理論の一つによると）に入る中、おれたちは終末の会話と冗談を交わしている。解決されたか失敗した古い警察事件、解決がしばしば間違っていて、失敗がしばしば正しいことについて。体が本当にどこに埋まっていて、操り手が本当に誰か。そして、崩壊する世界についても活発な議論をする。おれたちは今、十三の辺を持つ三角形、メナージュ・ア・トレーズになった。

だがエニスコーシーの美しい妻メアリー・マーガレットはおれたちを「老人の動物園」と呼ぶ。

おれたち十三人は、六人の探偵（おれフラナガン、ブラナガン、ハナガン、ネモ艦長、レモ艦長、ヘモ艦長）、三人の暗殺者（マクダーモット、クォーターマス、死人グロッグ）、そして三人の大災害の友、地獄からの執行官（モスコ、トスコ、ロスコ）だ。

おれたちは今、全員がスウィーニーの家に住む。理由はおれたち全員が（数字の上でしか老いていないスウィーニーを除いて）老人で、昔ほど動き回れないからだ。同じ屋根の下で監視し、監視されるのが楽だ。殺人を計画し、それに対する防御を計画するのも一つの家にいる方が楽だ。

まあ、十三人とセクストゥスだ。それでも合計は十三になる。うん、セクストゥスは数に入る。あいつはおれたち六人、あるいは十二人の数に入るんだ。でも、おれたちとスウィーニーで、依然として十三人だ。

おれたちは戦争について話す。それは警察や探偵が嫌う情熱のない殺人みたいなもんだ。殺人に理由がないとき、警察は実行者が処刑された後でも「誰がやった？ 誰がやった？」と尋ねる。戦争は数百万人の情熱のない殺人だ。そして「誰がやった？ 誰がやった？」という問いは決して答えられない。

おれたちのうち数人は今（「おれたちの数人なんていない」とセクストゥスは時々言う、「信じるのは私だ」）三つの最終戦争のうち二つがすでに起こり、その抑圧された記憶が世界を腐らせ、毒していると信じている。そして、三番目の最も恐ろしい戦争が来ようとしており、もしそれが来れば、世界に「十三」を綴る（古いスラングで「十三」は「それでおしまい」の意味）と信じる。

おれたちの夜通しの会話は、夜明け前には少し霧がかかる。

「我々は互いに吸収された」とセクストゥスは昨夜（実際、複数の昨夜）言った。「私がその吸収だ。もはや自由な六人の探偵はいない。私に吸収された六人の探偵だけだ。自由な三人の暗殺者も三人の悪魔もいない。すべては動きの部品を節約するために私に吸収された」

「君たちよくまとまってるじゃないか」とスウィーニーは言った。「お、こいつはなかなかいいね、まとまってる。お互いをどうやって解決してもおいらは気にしないから。ゲームが終わっても君たちのタマタマすら数えないと約束するよ」

「今残っているのは世界とスウィーニーと悪魔だけだ」とセクストゥスは言った。「そして、エニスコーシー・スウィーニー以外の誰もが推測するように、私、セクストゥスは世界を吸収し、たぶん私が世界だ。そして同様に悪魔も吸収した。今、スウィーニーに取り掛かる。」

スウィーニーは行った。「セクストゥス以外の誰もが推測するように、おいらは－－」しかし、おれはその時眠ったか吸収されたか、スウィーニーの未完成の文は夜明けに、夜明け後も宙に浮いている。

第 10 部

世界より大きな腐った花！

1

これは音楽評論家ドラッガー・イーストグレイヴによる『シカゴ・トリビューン』一九四〇年二月六日でのエニスコーシー・スウィーニーのオペラ『ハルマゲドン II』レビューで、二月三日のシカゴでの地元初演後のものだ。

> これはきわめて難しいことだ。私はその端をつつくが、その端にさえ世界の沈没が示唆されているように思える。ハルマゲドンオペラの山のような作品の最も恐ろしい結果（または併存効果）は、そこから派生した地獄の富が世界に取り憑いたことだ。最後の四半世紀の新しい富と次の四年半の予測される富が、未完成のオペラシリーズに由来すると言うのは狂気のようだ。ああ、それが狂気以上にひどいものでなければいいのだが。
>
> 事実はといえば、人類全体に対する大規模な金銭賄賂があり、それがこれらのオペラが切り開く破滅的なものから何らかの形で発し、この支出に対する見返りが期待されているということだ。
>
> 音楽評論家が音楽レビューにこんな奇妙なことを書くのはおかしなことかもしれないが、これらの今までで最も効果的な音楽を説明するには本質的だ。それは最悪の音楽の一部かもしれないが、恐らく最も効果的だ。
>
> 我々にとって、この世界に取り憑き、腐らせた音楽の最も直接的で最も不道徳な結果は、すでに我々の国家社会を、人々が『ハルマゲドン II』を見るために三〇ドルのチケットを払える点まで堕落させたことだ。これまで現れた二つのオペラの最も腐敗した影響は、アメリカを漫画の豚に変え、漫画のドル記号がそのハムの太い側に印刷されたことだ（このような漫画の最初のものは、一九一六年一月の『ハルマゲドン I』ニューヨーク初演の二日後に現れた。）
>
> では、富は確実に悪なのか？　それは神と悪魔がそれぞれ答えの半分しか知らない秘密だ。しかし、これらの独創的オペラが生み出した富は、うん、悪だ。まるで「音楽は確実に悪いか？」と聞かれたようなものだ。そして聞かれたら、うん、『ハルマゲドン II』の音楽は確かにひどいと答えるしかない。『ハルマゲドン II』の音楽は地球上で最悪の音楽だ。
>
> そして、この非常に強力な作品の作曲者、エニスコーシー・スウィーニーはどうなる？ 彼は地球上で最悪の音楽の陽気で赤ら顔の作り手として取り残される、そ

れ以上でもないし、それより遥かにひどいものだ。

しかし、この音楽評論家には、このオペラの音楽が良いか、合格か、非常に悪い（それはそう）かは問題ではない。主なことは、それが圧倒的で、世界を圧倒することだ。地球の石や地層には、良いマグマと悪いマグマ、良い溶岩と悪い溶岩がある。良い溶岩は細かくて均一な岩の結晶の溶解から作られ、悪はゴミ岩の溶解からだ。しかし、十分な火山の熱と膨大な質量があれば、どちらも圧倒的で破壊的になる。

そして、『ハルマゲドン I』と『ハルマゲドン II』のオペラには、火山の熱と膨大な質量がたっぷりとある。膨大な質量は古い世界を埋め、新しい世界のための燻る地層を残す。『ハルマゲドン I』が上演されたときまだ生まれていなかった人々は、自分たちがその変形した世界でずっと生きてきたことに気づいていない。純粋で地獄でない世界に住んでいると考えていたかもしれない。

その夜、『ハルマゲドン II』から溢れ出た群衆には若者が多かった。彼らやそこにいた年配者は、今や自分たちが『ハルマゲドン II』によって作られた九倍腐敗した世界に移されたことに気づいただろうか？

ああ、詳細はといえば、オペラの音楽は腐っているが、素晴らしく腐っている。衣装と舞台は壮麗だ。そしてすべての歌唱は力強い。プロットは難破船のような狂った統一性を持つ。そして、動きと力とパワーがある。何よりもパワー！ これは破壊のページェントとプレゼンテーションだ。これから何か非常に大きなものが出てくる感じがある。うん、世界の破壊のような。

しかし、スウィーニー・ハルマゲドン事件をその小さな属性、音楽に基づいてレビューするのは適切ではない。これは「五世紀の茶飲み儀式の発展へのアッティラ・ザ・フンの貢献」を記念碑的研究として提示するようなものだ、アッティラの軍は熱狂的な茶飲み軍だったかもしれないが。だがそれでも、オペラの音楽はストーリーラインよりはるかに重要だ。ストーリーラインは、世界がそれに適合してはいるが、馬鹿げている。

『ハルマゲドン II』を見て聞いて出てくる人々は、顔にスウィーニーの表情を持つ。それを証明する不穏な写真が、ヨーロッパでは一年にわたり、そしてこのシカゴでは初演の夜にも見られる。スウィーニーは愉快で陽気に醜い男だ。何百万倍にも複製されたスウィーニーはそうではない。彼は世界全体がまとうべき顔ではない。

他の者は新しい地獄の富（ハルマゲドンオペラまたはハルマゲドン戦争、どちらを信じるにせよ、これらに絶対に追跡できる）が、人々に訪れる最悪のことではないと思うかもしれない。しかし、この地獄はすべての良いものを堕落させるだけでなく、ほとんど悪いものにあった良い要素も破壊する。彼は戦争の規模を最初は九倍、今は八十一倍に増やすことで、戦争そのものを卑しくした。戦争に喜びがなくなれば、なぜ戦争するのか？ しかし、戦争のほうが主要なものとなり、ドラゴンを振る尻尾となったのだ。

『ハルマゲドン I』については、誰にとっても手頃な価格で殺人と戦争の喜びを提供したと言われた。当時、私はこの指摘が間違っていると思ったが、『ハルマゲドン II』はそれが確かに間違っていたことを証明する。これらのオペラは殺人と戦争の喜びを全く提供しない。それが提供するのは、その忌まわしいものから厳しい喜びさえ完全に取り除いたものなのだ。人々が生き延びたオペラの顔の表情を見る

と「きれいな喜びはない。不潔な喜びもない。今も永遠に不潔さだけ。これに今や、我々は同意する」と述べている。というのも、人々はまさにそれに同意してしまったからだ。ポケットに賄賂を入れて、鈍く惨めに同意したのだ。

私は四〇年間音楽評論家だった。あと五年は辞めるつもりはなかった。しかしあの夜、『ハルマゲドン II』を見て、すべてが終わったと感じた。そして今、鏡のところに行って自分がどんな男かを見た。私の顔にじゃスウィーニーの顔が刻印されていた。だから私は辞める。私はもう音楽評論家ではない、なぜなら彼らが私を男でいさせてくれないからだ。

スウィーニー・ハルマゲドンオペラは前例がなく、カテゴリーがないと言われた。これは間違っている。それらは確かにある古いカテゴリーに属する。

それは「九の歌」だ。それぞれは前のものの九倍強力だ。しかし、『ハルマゲドン III』が『ハルマゲドン II』の九倍強力なら、世界は生き残れない。

2

ジョージ・ドレッジフェロー准将「生真面目な答え」、『退役軍レビュー』一九七〇年六月号

生真面目な質問に生真面目な答えを出す時だ：この世紀に二つの世界戦争があったか、なかったか？ そして、一般的な見積もりでは世界を終わらせるはずの三番目の世界戦争が起こるか？

最初の証拠は否定的なもので、これは巨大なポイントだ。四〇億を超える世界の住民の証言だ。1% 未満の反対者を除き、彼らはこれらの戦争があったとはとにかく信じていない。もっと重要な点として、彼らは自分たちの信念の絶対的な深さのため、戦争があったかのような行動をまったくしない。そんな話を全く聞いたことがないかのように行動する。そして、この証言に対抗する数や深みのある証人の集団は本当にない。これが第一級証拠として唯一のもので、それが「ノー」と答える。

では、第二級証拠、少数派報告と呼べるものに行こう。遠くから見てもそれがかなり吹けば飛ぶようなものであることが明らかだ。以下の第二級証拠のカテゴリーが得られる。

1. 心理学者によるこの問題の現状と集団無意識の蓄積証拠の分析。
2. 「戦争」の新聞、雑誌、本の報告、戦争が起こった証拠を与える放送の記録。そして、大量の戦闘行動、軍備、動き、交戦、問題を名付ける非常に詳細な軍の記録。
3. 財政的痕跡、現在も支払われている障害手当や遺族年金は「戦争」で負傷や死者が多数いたことを示す。死傷者のケースは数百万、支払いは数十億ドルに及ぶ。
4. 戦争の「記憶」の証明、平和連盟による九百万以上の宣誓供述書で、戦争で兵士、水兵、飛行士だったことを覚えていると言う。
5. 私の戦争の「記憶」、可能な限り内省的に分析した。

最初のポイント、心理学者による集団無意識の現在の内容の分析では、彼らは確かに「戦争」のシンボルで話してはいる。彼らはマンモス、ビヒモス、リヴァイア

サンを語り、そのすべてが熱い戦争の血を浴び、最初のものは死んで未だ埋葬されず、二番目はまだ猛っているが、トーンは弱まり、三番目はきわめて重い足音で近づくので、それが陸と海を揺さぶる。これらは無意識のすべてのレベルでハルマゲドンの獣として認識される。

人々はこれらの獣をなだめるために香と肉を焼き、自分や他者に獣の前で変態行為を行う。しかし、これらの供物でも獣がなだめられないとき、彼らは不快な音調で笑い（エニスコーシー・スウィーニーは『ハルマゲドン I』の「一九一四年八月のトーナリティー」や『ハルマゲドン II』の「ポークチョップヒルの爆風」でこの反発音を使用し、衝撃的な効果を上げた）、獣の支配を受け入れる。

最初の獣に、人々はウクライナ人やアルメニア人の肉を捧げた。二番目の獣に、ジプシーやユダヤ人の肉を捧げた。三番目の獣に、今だ生まれていない子や不死の老人の肉を捧げる。獣が要求する供物だが、人々は本当にそれでなだめられるとは期待していない。しかし、これらの肉の破壊は、集団無意識でまだ喜びや楽しみとして通るものを人々にもたらす。

「集団無意識は完全に汚染された汚い池になった」と心理学者ウィダーシンズは書く。「汚染されるほど、人々はそれに時間と関心を注ぐ。それは今、非常に大きく膨らみ、上部の生活は非常に薄い。意識の表面生活は水の上に油膜のように薄くなり、下の無意識の深さは深淵だ。しかし、三つの大戦争の巨大で予言的な死体がその深さで最も顕著で、死体が予言する名前は代理の意味をつけて薄い意識に出入りする」

これについて、私は集団無意識には常に怪物的なものがあったとしか書けない。そういうものを含むのが無意識の仕事なのだ。そして、意識のレベル（常に油膜のように薄く、色鮮やかで、雑で汚い）では、**人々は戦争があったか、ありそうな行動をまだしていない**。

二番目のポイントでは、証拠のいくつかは非常に説得力があり、口頭で反論したり、議論で否定する方法はない。しかし、それを埋める方法はある。戦争や堕落への人気の関心の欠如自体が、それらが有効でないことを示しており、ただどのように無効かを言えないだけだ。

証明された出来事を軽視する方法がいくつか現れ始めた。『ハルマゲドン II』の五百の戦闘の名前は、『ハルマゲドン II』があった証拠として時々挙げられる。しかし、それらは軍のゲームや演習の名前だけだ。そのいくつかを名付けたのはこの私だ。

三番目のポイントでは、答えはおそらく詐欺、無意識で偶発的な詐欺だ。うん、何百万もの人が『ハルマゲドン II』のためのさまざまな補償で数十億ドルを受け取っている。事実、人々は何らかの理由で政府の記録に特定の金額を受け取る権利があると記載される。そして、一度始まった金銭の支払いを止める方法はない。ポピュラーなバラードが言うように「労働者は仕事の、豚は飼い葉桶の権利を持つ」

四番目のポイントについて言えば、平和連盟や他の数百のそのような懐古グループは、「ポップ」「オペラ」「キャンプ」「軍キャンプ」であれ、人々が集まり、とんでもない経験をしたふりをするという必要性を満たすものだ。創造的時代錯誤協会などの関連グループはこれに歴史的真実性の音を加え、FIAWOL[訳注: Fandom is a way of life. 負け犬の集まりでも好きは好き、ないよりましという SF ファンの自虐表現]

が大きく関与するが、すべて演技だ。

うん、九百万人が本当にこれらを覚えていると宣誓供述したし、本気で信じている者もいる。人々は簡単に騙される。しかし、現実という検証がある。物が燃えたなら、灰とガスの残渣がある。しかし、その残渣がなく、物が変化していないなら、燃えたように行動していない。世界の人々は戦争やその余波があったように行動していない。それが検証だ。

五番目のポイントは個人的な音、個人的なカリヨンを打つ。私は告白する；私は何年にもわたり『ハルマゲドン II』、そして『ハルマゲドン I』の現実を信じていた、とはいえ最初の者には若すぎて参加しなかったが。『ハルマゲドン II』の戦闘と策略の数ヶ月を鮮明に覚えている。それは私と世界に起こったことだ。私はそこにいた。それを知っていた。

我々は戦争ゲームを生き、教えられた通りで、我々にはゲーム以上のものだった。私には本物だった。私の傷は本物で、今もそう、どんなにそれが純粋に心因性と言われても。でも、今、すべてを整理した。古いことを整理しなければ、紙の軍で将軍になれなかった。だから、すべての点で、直角の答えにたどり着く：戦争は起こらなかった。起こり得なかった。そして、シリーズの三番目で最大の戦争も起こらない。起こらなかった決定的な証拠は、人々が起こったならそうするようには行動しないことだ。

（「では、『ハルマゲドン』の二部が起こったなら、人々はどう行動するだろう？」
「彼らはその道を改め、ニネベの人々が悔い改めたように悔い改める」
「いや、そんなことはしない。彼らはいつも通り、堕落したろくでなしとして行動する、今もそうしているとおり」
「もしそうなら、戦争とその余波は本当に起こったのかもしれない」）

我々は「紙の軍」で遠く先を計画する。十四年後の究極の戦争ゲームを計画する。ああ、その前に引退させてほしい！ 私は最後のものの九倍激しい戦争ゲームになど耐えられない。

（「何を言ってるんだ？ ゼロの九倍は相変わらずゼロだ。」）

3

これは予言者ジェレマイア・ブラッドフォードによる説教、おそらく一九八三年のもの。（一九八三年、それも第一巡目のやつのことだ）

そして、私はまるで火と混ざったガラスの海を見た。

その日、人々は死を求めても見つけられず、死にたがっても死が彼らから逃げる。

海の怒涛、自分の恥を泡立てる；さまよう星、永遠の闇の黒さが彼らのために確保されている。

この知恵は上から来ず、地上の、感覚的、悪魔的なものだ。

舌は誰も飼い慣らせない；それは手に負えない悪だ。

彼らは朝の飼い馬のよう；誰もが隣の妻を求めて嘶く。

身代わりの羊として彼を荒野に放つ。

朝にはおまえは、神よ、夕方であってほしいと言う！ そして夕方には、神よ、朝であってほしいと言う！

見よ、50 キュビットの高さの絞首台。

ギレアドに樹脂はないか？

そして、預言者ダニエルが語った荒廃の忌まわしきものを見るであろう。

そして、その時が延ばされなかったなら、誰も生き残れなかっただろう。

骨で満ちた谷（マゲド)。

これらは寓話だ。

しかし友よ、今や私はパラボラや寓話なしに明確に語る。最大の戦争、『ハルマゲドン III』または最終ハルマゲドンは、君たちが道を改めなければやって来る。世界は一度水で破壊された。これは戦争の火と火山による二度目の破壊だ。これらはすべてを終える轟音の火だ。詩人が語った液体の火の急な谷だ。これらは我々の罪、戦争の赤い花だ。これは地球より大きな腐った花だ。

「だが戦争を生むのは罪ではない」とある老将軍が言った。「それはリンゴがオレンジを生むような古い話で、カテゴリーが違う」そして、この将軍は「戦争の原因」についての数百の書物がある棚に向き直った。「戦争を生むのは、誤った外交の勢い；出来事と事故の連鎖；人類の一般的非合理性；「間違えられるものは間違える」という法則；運命自体のねじれだ。

そして今、我々は戦争のすべての原因を排除することで戦争を排除した。誤った勢いや外交を排除した。事故、フェティシズム、偽の数秘術を排除した。ねじれを排除した。そして何よりも人類の非合理性そのものを排除した。

しかし、人間を気楽にしてくれる偉大な友である罪は排除しなかったし、そのつもりもない。それは誤った連関だった。いまや我々は罪と慰めに向かい、再び戦争に向かう必要は二度となくなるのだ」

しかし、その老将軍は間違っていた、彼は偽りで、変態で、不合理だった。そして彼の顔には新しい豚（スワイニー）の表情があった。（時々スウィーニーの表情と呼ばれる。）彼は狂った動物ハイエナ、悪魔の動物ウルヴァリンの表情を持っていた。

それでも彼は非常に人好きがする。そして彼自身が不合理でも、合理的な態度を持つ。彼とその仲間は、大きな腐った赤い花の根元の甘く心地よい肥料だ。

歴史家、特に合理的な歴史家は、戦場での血が渦巻き、馬の飛節まで、馬の腰まで、馬のたてがみまで、大きな血の川が人と馬を押し流し、溺れさせるという古い戦場のアカウントを拒否する。そして、それらが非合理だから拒否し、戦闘に参加した可能性のあるすべての人の血を合わせてもそのような血の川、千分の一にもならないと指摘する。しかし、彼らは間違っている。

巨大な腐った花を養う血の川には、自然と不自然な血が一緒に渦巻いている。すべての血の泉が破られ、すべての血の空が降り注ぐ。

悔い改めという言葉以外で、悔い改めよとは言えない。もし我々が悔い改めなければ、来年、一九八四年に戦争が起こる。後世の預言者、ウェルズとオーウェルは共にその年を指している。これは聖書とデヴォニアン数学に書かれている。

悔い改め、そして再び悔い改めなさい。しかし、世界が最終的に破壊されるとき、それは破壊されたように**振る舞う**だろうか？ それとも、これまでで最も気楽で信じない灰になるだろうか？

第 11 部

エニスコーシー・スウィーニーの人生と反時代についての後書き

1

エニスコーシー・スウィーニーの墓石は、この終焉のずっと前に彼自身によって刻まれた。彼はすべての芸術の機械的実行に優れ、優れた石工だった。そして、彼が自分の石に刻んだのは：

> 「エニスコーシー・スウィーニー、1894-1984 年。*Si iniquitates observaveris, Domine: Domine, quis sustinebit*?」

これはラテン語を解読すれば：「主よ、もしあなたが罪を記録するなら、主よ、誰が耐えられるか？」

エニスコーシー・スウィーニーはこの石の日々が成就するとき、罪と年月に満ちるだろう。しかしポイントは、スウィーニーがこの石を何年も前に刻んだとき、一九八四年を死の年として刻むことに何の躊躇もなかったことだ。しかし一九八三年が中盤に近づくと、彼はそのことで多くのからかいを受けた。

「スウィーニー、いつ死ぬんだ？」と意地の悪い友人が尋ねた。「間に合うなら、そろそろかなり病気にならないと。こんなことを最後の瞬間まで残したくないだろ」

スウィーニーは言った。「おいらはゼノンのパラドクスが成就するときに死ぬ。アキレスが兎を捕まえるときに死ぬ。アキレスは『死』で、おいらは『兎』だ。そして、その出来事は一九八四年の最初のマルチ秒で起こる。それまではかなり危険な時があるだろうけど」

「それは兎じゃなくて亀だった」と誰かがエニスコーシーを正そうとした。

「おまえはその当人を見て、話しているんだぞ」とエニスコーシーは言った。「おいらは亀に見えるか、兎に見えるか？ おいらは兎なんだ」

ゼノンのパラドクスでは兎であって、亀ではないという点でスウィーニーは正しかった。これは長く遅れていた訂正だ。そして、ゼノンの「アキレスと兎」のパラドクスはこうだ：

アキレスは兎を捕まえようとし、兎の二倍の速さで走れるが、兎はアキレスに対して百コンデュロスのリードがある。アキレスは兎のスタート地点まで百コンデュロス走るが、その間に兎はさらに五十コンデュロス走る。アキレスがその五十コンデュロスを走ると、

兎はさらに二十五コンデュロス走る。アキレスがその二十五コンデュロスを走ると、兎はさらに 12.5 コンデュロス走る。だからアキレスは決して兎を捕まえられない。なぜなら、彼が兎の最後の位置に着くたびに、兎はその半分の距離先にいるからだ、どんなにその半分が小さくても。

もちろん、デヴォニアン数学では、アキレスは兎を捕まえ、生きているうちに食べる。しかし、デヴォニアン数学には兎の回避の項があり、時間が進行中はアキレスが獲物を捕まえないように見えるが、特定の時間が終わった後でどういうわけか捕まる。

このパラドクスには、見た目では同じパラドクスとは思えない別の表現がある。それは飛行中の矢で、運動、位置、時間、またはその三つすべてを否定する。飛行中の矢が一つの場所に一つの時間にあるなら、動いていることはできない、動くことは複数の場所にいることだから、それは不可能だ。しかし、矢が絶対に一つの場所にいるなら、動いていない、または時間が動いていない。スウィーニーは飛行中の矢であり、兎でもある。

そして、これらは両方とも死のパラドクスだ。矢は飛行中に、地上に落ちると二つに折られ火に投じられるとの知らせを受けた。だから、生存の唯一の希望としてパラドクス的飛行を続ける。そして、兎は捕まると、どんなに回避でパラドクスを複雑にしても、即座に食べられることを知っている。しかし、兎はスウィーニーではなく世界そのものを表すと信じる人もいる。

世界は兎だ、うん。そして、ほぼ捕まりそうになるほど、回避し、飛び跳ね、綿毛の尾の兎になる。古い茨の下に、古い穴に戻る。追跡者は兎を狩る前にすべての古い穴を塞がなければならない。

世界の綿毛の尾の兎が戻っていた未塞ぎの穴は一九八三年だった。後期の世界がその状況で追いつめられ、閉じ込められたとき、安全に逃げられる場所は二つだけ：兎の穴とゼノンのパラドクス。

二つの場所にしか行けない。しかし、三番目の場所に再び出てくることができる。中国のパズルや中国の箱に。

（スウィーニーまたは預言者の王子の最後の避難所、ホロウ・ツリーは兎の穴の地形に相当する。）

（デヴォニアン数学の吃りはゼノンのパラドクスの地形に相当する。）

（「選ばれなかった代替の全体」は中国の箱の地形に相当する。）

エニスコーシー・スウィーニーは言った。「おいらが身代わりの山羊なら、そしておいらが穴に潜り、掘り進み、破壊へと追い出されるのを拒むなら、世界もその避難所から破壊へと追い出されることはできない。でも、妻が恋しくはなるだろう」

臨界質量、臨界運動量、臨界熱のポイントはすべて過ぎ、それらが一緒になると不可逆だった。だから、世界の終焉の戦争は避けられなかった。

そして、遅らせられなかった。それに向かって突進するものの経路も遅らせられなかった。しかし、残された縮小された経路は分割され、分割され、繰り返し分割された。この分割は少しも遅らせられないが、別のことをするかもしれない。

ゼノンのパラドクスは半分にし、半分にし、繰り返し半分にすることだ：決して半分をやめなければ、終わりには決して到達しない。しかし、デボニア数学によると、すべての点での半分は選択を表す。すべての点での二つの半分の片方は使用されず、半分は常に自由選択と進行だ。

そして、すべての点からの未使用の半分はどこに行く？ 中国の箱や中国の箱パズルに

行く。中国の箱には常にこの未使用の分数の蓄積がある。未使用の合計は常に最小の分割を引いたものになる。

だから、年がその最小の分数を除いて使い果たされると、箱には別の未使用の年があり、その年は同じ最小の分割を引いた完全な年だ。終わったときには始まったときとほぼ同じ年が残る。

エニスコーシー・スウィーニーは一九八三年という心の年の少し前に、笑劇「おいらの名前はスウィーニーで、困ったことになった」を制作した。この笑劇では、スウィーニー（彼自身のために書かれた役だが、かなり激しい役だったので若く活動的な男が演じた）は、世界とその状況に容赦なく過剰に迫害された。スウィーニーのキャラクターはこの笑劇ではまったくろくでもないもので、彼が受けたのは当然の報いだった；しかし、スウィーニーと世界のどちらがもっと腐っているかという疑問があった。スウィーニーのキャラクターは全世界が共感できる完全な腐敗を示した。

スウィーニーと支配する運命やフェティッシュとの間の笑劇的なやりとりや行動の逸話があった。この対話の一部として、スウィーニーは雷鳴のような稲妻に打たれ、松明のようなジグザグの言葉で輝いた：「おいらの名前はスウィーニーで、おいらはエブリマンだ。稲妻でシャツの裾が燃え、おいら困ったことになった」

この笑劇はエニスコーシー・スウィーニーが本当は誰かを一発で完全に確立した。彼は「エブリマン」で、レミュエル・ガリヴァー、リチャード・ロー、ショーン・オショーネシーといった変形名を持っていた。彼は万人である非凡な男だった。

しかし、本当にシャツの裾が燃えていたのは世界だったかもしれないし、もっと腐っていたのも世界だったかもしれない。

その時、年の終焉のちょうどその時、世界とその民は非常に意地悪になっていた。どんな人がが見た中でも、最も意地悪で腐った人々だった。

2

一九八三年には謎があり、その謎は年で最も長い日、六月下旬に予定通り実を結んだ。そして、それが一九八三年に予定通り起こった最後のことだった。その年で最も長い日（そうあるべきだった）の後、昼は短くならなかった。これには全く前例がないほどの大規模な誤りがあった。

同じ年で最も長い日（北半球では）に、エニスコーシー・スウィーニーの巨大なオペラ『ハルマゲドン III』が秘密で私的な初演を迎えた。それでも、四千人以上（全員秘密で、一部は私的）が観覧した。

これはスウィーニーの不均衡な尺度だ。彼はこの巨大なオペラと笑劇「おいらの名前はスウィーニー」（巡業では「シャツの裾が燃えている」というタイトルを使った）を同時に出せた。オペラは昼が短くならず、狂ったことに関係があったか？ 笑劇は？

年で最も長い日の後、昼が短くならないことについて、最初は主観的現象、幻覚と言われ、もちろん昼は本当に短くなっているとされた。しかし、物事はぼやけ、頼るべき本当の基準がなかった。ポップ哲学者は最近、主観と客観の区別を消し、どちらかに訴える意味がなくなった。

だからしばらく、一週間ほど偽装された。その間に気づかれない限り、人々はほとんど気づかない。政府の気象局は、その日の日の出と日の入りの時間を本当のものではなく、

予定通りと発表した。あるいは、それも本当には起こらなかった。ポップ哲学は現実の境界を本当に消していた。

そして、彗星理論がしばらく優勢だった。彗星が太陽に近づいていた。何か言い訳が必要なら、いつも彗星が太陽に近づいている。彗星が地球の動きに影響し、北半球の昼を短くせず、夜を長くしないとされた。しかし、それはあまり大きな彗星ではなく、どんな彗星（大きなものでも）そんな効果を持ったと聞いたことがなかった。でも、まあ、何が原因だと思う？ 主観的だという理論に戻るしかない。

起こったこと（おそらく主観的な理論の一つ）は、最大長の連続した約千日だった。それはほぼ三年だ！ そんな話を誰が聞いたことがあるね？

まあ、かなり多くの人が聞いた。エニスコーシー・スウィーニーの架空物語「三年続く年」を読んだ人は確かにそこで聞いた。世界は近年、スウィーニーのフィクションにかなりよく従うという評判を得ていた。しかし、巻き込みを完成させるのは、この同じスウィーニーが彼の軽薄なフィクションでその評判を世界に固定したことだ。実際の偶然は、スウィーニーの提唱と独創的なフィクションの偶然ほど際立っていなかった。

それでも、何かが少し間違っていた。ある人は昼が本来のものから百万分の 1 秒ずれたと言い、他の人は数時間ずれたと言った。ずれていた、確かだ。

もちろん、機械的に洗練された人々には簡単な解決策があった——エピサイクリック補償付きのプトレマイオス時計。これらの時計や腕時計は、何百万も急速に製造され、急速に採用され、特定の日の時間をあるべきように示した。必要なのは内部の多くのエピサイクリックギアだけだった。だから、新しいプトレマイオス時計が客観的基準として受け入れられ、昼が最大長のままという一般の感覚は、時計に矛盾する新しい主観的印象になり、弱まり、さらに弱まり、半分正直な信念で「昼は今、短くなってるよね！」と言える人々になり、数ヶ月後には「最近、昼が長くなってるよね！」と。

3

『タイム・スタター』誌で「エブリマンのエブリマン」と呼ばれたエニスコーシー・スウィーニーは、戦争に他の誰よりも多く関与していなかっただろう。彼はそれを芸術形式で、起こる少し前にかなり細かく表現できた；しかし、誰もがこのような小さな才能を持っている。彼のオペラ、ファース、フィクションは主に「戦争」に関するものだったが、その隠れた関心は多くの隠れた反応や拒絶の一つに過ぎなかった。誰も戦争を本当に受け入れたことはなく、受け入れを避ける方法は人々の数だけあった。

しかし、スウィーニーがオペラや他の形で戦争を発明して引き起こしたとは考えにくい。まあ、正確に言うと、44% の人がスウィーニーが戦争を引き起こしているとは考えにくいと信じ、41% の人がスウィーニーが引き起こしていると確信していた。それでも、スウィーニーが引き起こしているか否かの戦争が事実の領域にあると信じた人は 2% だけだった。その反応には何か非合理なものがあった。

スウィーニーは、一九八三年の引き延ばされた後期（その三倍カウントの年は終わらないのか！）に、世界に残された唯一の合理的な男がしたことをした。

彼は中空の木の穴に登り、生きて出てこないと宣言したのだ。

そして、世界の数十億の人々（世界の全員がスウィーニーの動きを即座に知っていた）はみな「なぜそれを思いつかなかった！」と叫んだ。数百万人が中空の木に登ったが、割

合的には多くなかった。人間サイズの穴がある木はあまり見つからない。

その延長された日々に、世界は本当に窮地にあった。それは（当時のビジョンでは）「口の中心」と名付けられた巨大な洞窟の中心に立ち、猥雑で派手な炎の光で燃える大きな黒赤の喉を直視していた。世界は現在の提示の世界であり、口と喉は世界より大きく、世界を飲み込む決意の腐った花、『ハルマゲドン III』のものだった。

非カレンダーの最後な散漫な日々には「生真面目さ」の脅威さえあった。中規模都市で一日に千人も生真面目だからといって処刑されるなら、生真面目分子がいることは否定できなかった。

そして、すべてを詰まらせる絶え間ない富があった。通りや道路は、人々が買い、一度だけ運転し、その午後に後継モデルを買うために放置した光沢のある車でほとんど通行不能だった。富が好きで、毎週それが倍にならないと我慢できないと認める人もいた。すべての企業の「公開室」では、前の週に企業の「好調」を倍にしなかったために、毎週人が生皮を剥がれ、壁にその皮が釘付けされた。最近可決された「無制限法」、誰もが自分の選んだ企業から自分の選んだ給料を請求できる法律は、動揺をもたらした。人々は新しい企業役員に任命されるのに、説得されて無理強いされねばならなかった（泣き叫ぶ者もいた）。気にしないこと、ほとんどの人は一週間以内に解放され、ニスを塗られたその皮が展示されるんだから。

ある人は今が実は一九八五年だと言い、かなりの人が一九八四年だと言った。しかし、公式にも少なくとも一般的にも一九八三年で、今も永遠に。一九八三年の税金がすでに課せられた限り、その年の疑わしい日や月に追加で課税はできなかった。

（「木の穴に住まいを構えた方がいい」とエニスコーシー・スウィーニーは言っていた。「あいつらは木の穴から羊を追い出す方法、身代わりの羊を追い出す方法を知らない。そして、あいつらがおいらを追い出すまで、大きなことは解決できない。おいらは障害だ。ここには必要なものはすべてある。でも、妻は恋しくなる」）

非常に大きな戦争（名前以外すべて）がアメリカに来ていた。そして、数人はそれを「戦争」と呼んだが、ほとんどの人はまだ別の名前をつけた。それはかなり扇動的で血まみれだったが、利点もあった。今回、人々は**戦争に行く**必要がなかった。戦争のほうが彼らのところに来た。戦闘が近くにあり、旅行の負担を加える必要がないのは家庭的だ。

しかし、「巨大な赤い花」の影に生きる世界には適応力と少しの活気もあった。そして、圧倒的な自慢と堂々とした傲慢さがあった。私的な殺人は毎週倍になった。そして、通りでの血は馬の飛節ほど深くはまだなかったが、ネズミの飛節よりははるかに深かった。その渦巻く力でネズミを溺れさせ、最も強い泳ぐネズミ以外を。

「神は永遠に我慢するか？」と街角の預言者の一人が尋ねた。

「そうした方がいい！」と人々は叫んだ。「彼はもう限界で、我々も彼にうんざりだ。」

サン・シメオン人民共和国などからの侵攻軍はまだ大したことなかった。地元の私的軍「赤」、「青」、「緑」、「ボランティア産業爆撃グループ」の間の自発的な戦争が、血の小川のレベルを上げていた。私的グループの爆撃は合法になった。完全な自由の時代にはほぼすべてが合法だった。

「人々の爆撃の権利が常に尊重されるように」はその日の有名な決議で、COPE、CORE、GORE、カトリック司教、KICKS（キネティック社会創造のためのカレイドスコープ機関）など、活動家傾向のほぼすべてのグループがそれを支持した。

暗殺や集団絶滅は常にテレビに映った。メディアに事前に警告せずそのような行為を計

画すると「秘密の共謀」で捕まる可能性があった。

しかし、暗闇で物事をしたいと思う人はいなかった。人々は光を、もっと光を、さらに光を求めた。最も暗い夜の通りでも、光量は 2000 フットキャンドル、3000、4000 フットキャンドルに保たれた。そして騒音も。デシベル率は二百を超えて保たれた。それでも、暗すぎ、静かすぎに思えた。どこも暗い町、退屈な町だったが、活気づける新しい方法が常に求められた。

しかし、どこも堂々と歩き回る雰囲気だった。国全体、恐らく世界は、巨大なダークタウン・ストラッターズ・ボールだった。行動が必要だった！ 常に加速された行動だ。

しかし、人々がかなり好きだった預言者、常に新しいことに少し進んでいた、加速された行動を与えてきた者が、今、中空の木に住まいを構えた。これはばかばかしかった。彼に生真面目さが生まれたにほぼ等しい。こんなトリックでは、いつ何時、生真面目な者として処刑される可能性があった。もちろん、スウィーニーは許可を剥奪されさえすれば、いつでも処刑される可能性があった。

スウィーニーは五十歳を超えて生きる許可を持っていて、彼はそれよりずっと年上だった。五十歳を超えて生きる許可を持つのは特別で特権的な人々だけ：労働指導者、コメディアン、ポルノ、ロック、メディア全般のトップの人々、その他のコンセンサスリーダー。スウィーニーはトップの許可、「全カテゴリー」許可を持っていた。しかし、トップのものは簡単に停止される。

（一九八四年の始まり前に究極の戦争はありえないと言ったのは誰だ？ 人々と預言者はみなそう言った。）

今、すべての町角に死体処理のための炉があり、悪臭を抑えた。何人かの死体や死にかけの人々を炉に投げ入れた後、人々は輝くオーブンの前で笑い、互いにレスリングし、強い者が弱い者を死に投げ入れた。議論を解決する良い方法になった。「炉の口で決めよう」と人々は言い、そうやって決めた。誰が誰を炉に投げ込めるかを見るのは一種の男らしさの刺激だった。そして、通りを清潔に保つのにも役立った。

しかし、戦争または擬似戦争の血まみれさは指数関数的に増加し、一九八四年だと本当に信じる人の数も、太陽やカレンダーのトリックをもうする必要がないと信じる人も増えた。

エニスコーシーは木にかなり大きな部屋や洞窟を持ち、そこで快適にしていた。では、彼はオーディン自身、〇日間木に吊るされ、自分から自分への犠牲だった（スウィーニーが最初に聞いた超自然の声がスカンジナビア訛りだったことを思い出そう）。彼はそこでキリストとして磔にされた（スウィーニーは腕を伸ばしたヨガのような瞑想に時間を費やし、穴を覗く人々には彼が洞窟の壁に伸ばされ、釘付けされたように見えた）。そして、彼は柱行者聖エニスコーシーのようなものでもあった。木は柱の一形態で、エニスコーシーは高い柱の上で生涯を祈りに費やした古い砂漠の聖人のようだった。エニスコーシーは今、いつもそうしていたように、祈りに多くの時間を費やした。

エニスコーシー・スウィーニーはその時にすべての概念を発明したわけではない。彼は数年前、人気の寄せ集め「中空の木からの啓示」で、それらの多くを意図したのだった。

時々、スウィーニーは木の穴の口から人々に説教した。

「ちょっとスウィーニーったら、その木から出ていらっしゃいよ」とメアリー・マーガレットが懇願した。

「おいらはこの木でろうそくを灯し、それは消されない！」とスウィーニーは演説した。

「これはすべてヤシャルの書に書かれているだろう？」

「ちょっと降りてらっしゃいよ、スウィーニーったら」とメアリー・マーガレットがなだめた。

「人々のためにおいらはこれ以上何ができる？」とスウィーニーは叫んだ。「おいらは地球をその軌道に静止させ、恐ろしい年の到来を遅らせた。人々に楽しみと殺人の選択を与えたが、彼らは殺人を選んだ。血まみれのオペラと血まみれのハルマゲドンの選択肢を与え、彼らは血まみれのハルマゲドンを選んだ。ねえ、世界で明るい楽しみもできたのに、君たちは暗い楽しみを選んだ。だからおいらは生きている限りここに閉じこもった。壮大なジェスチャーだが、妻は本当に恋しい」

「ちょっと降りてらっしゃいな、スウィーニー」とメアリー・マーガレット。

「『離乳した子はコカトリスの巣に手を置く』とイザヤが言った」とスウィーニーは演説した。「おいらはその離乳した子で、その巣に手をかけるだけでなく、入って住む。これは心の肉の板に書かれている。」

「ちょっと、降りてらっしゃいったら」とメアリー・マーガレットはなおも甘く歌った。

4

火は台所マッチ、女性の小さなシガーライター、パイロットライト、トーチ、バーベキューライターで灯せる。そして、時にはその火が制御不能に爆発する。頂点に達し、冠をなし、爆発する！

最終ハルマゲドンが到来し、最後の腐った赤い花は世界より大きく爆発した。そして、その戦争は巨大な貪欲な火で全世界を飲み込み始めた。誰がその火を灯したかは問題ではなかった。世界にそれを消す方法はなかった。

血は馬の腰まで流れ、非常に強い流れだった。

彼らは一九八四年を公式に始めることを許可した。もうそれを阻止する理由はなかった。残された破壊すべきものはたった一つ。

人々はスウィーニーを焼き殺すために彼の木に火をつけた。そして、木（非常に古く乾燥していた）は恐ろしい炎で頂点に達し、冠をなした。

スウィーニーの七つの暗く煙のような霊が木から飛び出し、地面に落ちた。そして、地面を水のように沈み、そこで消えた。そして、スウィーニーの一つの黄金の霊が木から飛び出し、上へ、遠くへ、「禁酒法、ある笑劇」から「ずるい豚のシーケンス」を口笛で吹いた（これは絶対の真実）。この笑劇は、古くてほぼ忘れられた喜劇だった。

それが、ここでの記録にある限り、古くてほぼ忘れられた奇術師エニスコーシー・スウィーニーの地上での終わりだった。

そして最終ハルマゲドンは燃え、制御不能に荒れ狂い、世界は終わりつつあった。

おかしいな。人々は世界が終わっているようには**振る舞わなかった**。でも、続くようにもまるで振る舞わなかった。

彼らは終わろうが続こうが、大して気にしないように振る舞ったのだった。

訳者あとがき

これは R.A.Lafferty *Apocalipses* (1977) の全訳だ。ペーパーバック版も持っているが、翻訳にあたっては 2016 年に出た Kindle 版を主に使っている。

本書は、二つの中編……というほど短くもないが、一本立ちした長編というには少し尺が足りない作品を二つ「どこにいってたサンダリオティス？」と「エニスコーシー・スウィーニーの三つのハルマゲドン」くっつけたものだ。この二つをくっつけたことに、何か意味があるかどうかはよくわからない。訳者は、特にない説に傾きたいが、両方とも 11 章構成であることなどを深読みする手はあると思うので、それは読者のみなさんにお任せしよう。このどちらも、ラファティ作品としては非常にわかりやすいし、読み易いものだ。少なくとも小説として完結しており、『アーキペラゴ』のような「おれは一体何を読まされているんだ？」というような疑問は抱かずにすむ。

11.1 「どこにいってたサンダリオティス？」

一本目の「どこにいってたサンダリオティス？」は、この二本の中でもよみやすい代物で、ラファティの短編の持つアイデア小説的な持ち味を十分残しており、楽しい。

ストーリーは簡単。世界最高の探偵コンスタンティン・キッシュが、ある朝にモナコ公国を盗むという世紀の強盗事件の阻止に乗り出すと、そこに突然一夜にして、モナコから出てサルデーニャ島とコルシカ島を含みイタリア半島と並列になった、サンダリオティスという巨大な半島が出現する。だがそれは、今朝突然できたのに、なんだか千年前からあったような顔をして、何でもそろっている。

が、調べるうちにだんだんボロが出てくる。あれやこれやの変な人間 (または人間もどき) とのやりとりを繰り返すうちに、キッシュにもおぼろげに話が見えてくる。現実に見えるものは、実は現実ではない。実体があるように見えるのは、実はあぶくと妄想でできた、一日しかもたない架空の存在。それを一日で売り飛ばして儲けようという世界最高の詐欺師集団が仕掛けた、一世一代の大ばくち、また同時に天空に浮かぶ、ティボーの魚雷、ホーガンのボブスレー、天空の城ラピュタなどと呼ばれる、世界各地に存在する変な謎のフォーティアン巨大物質伝説の一つが、実は反物質爆弾なのだと詐称して、それをネタに世界を強請ろうという仕掛けも同時に進む。さらには悪魔のサンダルと呼ばれたサンダリオティスは、もちろん悪魔がこの世に登場する入り口でもある。コンスタンティン・キッシュは果たしてその陰謀を阻止できるでしょうか！ 地球の運命やいかに！

サンダリオティスというのは、サルデーニャ島 (地図を見れば分かる通り、サンダル形をしている) の古い名前らしい。が、ラファティはそこに、どこで調べてきたのかわからない、なんだか変なうんちくをいろいろくっつけて、もっとでかい半島があったことにしてしまう。そしてそこに、フォーティアンの変な伝説をからめることで、なんだか得体の

知れないストーリーを生み出す。何が本物か、何が作り話で、何が実体か、そしてそこにからむ、異様な詐欺師と悪魔のような存在のからみあいが、それっぽい雰囲気を作り出す。

個人的には、最後に単にお話として利用されただけの世界各地のフォーティアン構築物が、「いやオレも実在するから。勝負しようぜー」と登場するところが大好きで、そこが一瞬で終わるのはちょっと惜しい感じではある。まあそれは仕方ないか。あまり深読みせず、楽しく読めばそれで問題ない。

そしてこれが「アポカリプスいろいろ」という本に収められたということは、ラファティ的にはこれがアポカリプス/黙示録の一つの形、ということを言いたい……のかなあ。なんかそこまですごい話ではないようにも思うが、それはまあ読者のみなさん次第。

11.2 「エニスコーシー・スウィーニーの三つのハルマゲドン」

だがこれと束にされている、「エニスコーシー・スウィーニーの三つのハルマゲドン」は、きちんと読むとちょっと深い話になっていて、個人的にはラファティの作品の中でもかなり重要なんじゃないか、という気がする。そこにラファティの、世界観がかなりよく出ているという点もある。が、もう一つは現実の世界に対するラファティの見方、そして個人史の一片が見えているように思うからだ。

話は、エニスコーシー・スウィーニーという田舎の変な小僧の変な異能の話から始まる。ボクシングのチャンピオンをスパーリングで倒してしまったり、女の子を世界最高の美女に仕立てて結婚したり。ラファティ作品の十八番、ではある。そして何やら数学理論を根拠に彼を殺そうという数学者の陰謀団があらわれ……

だがだんだん様子が変になってくる。この小説の世界線では、フランツ・フェルディナント皇太子は暗殺されず、皇帝になる。自分が暗殺されるのを夢で見て怖じけづき、サラエボにいかなかったのだ。だから第一次世界大戦も起きない。かわりにエニスコーシー・スウィーニーが「ハルマゲドン I」というオペラを 1916 年に書く。フェルディナント皇帝はそれを見て、なぜ自分の夢を知っていたのかと問い詰める。禁酒法もない。スウィーニーが「禁酒法」というオペラを書くだけ。大恐慌も起きない。かわりにエニスコーシー・スウィーニーが「大恐慌」というオペラを 1929 年に発表。その世界線では、第二次世界大戦も起きない。かわりにエニスコーシー・スウィーニーがオペラ「ハルマゲドン II」を 1939 年に発表。

次第にわかってくるのは、エニスコーシー・スウィーニーは別の世界線にいるらしいということだ。そして彼は、その世界線とこちらの実際の世界線を自由に往き来できるらしい。その「可能世界」を利用することで、彼の世界線を変えられる、というべきか。エニスコーシー・スウィーニーのオペラは、その別の世界線を実現させるものでもあり、一方でそれを起きなかったこととして別の世界線にとどめるものでもある。その一方で、その向こうの (というのはこれを読むぼくたちの) 世界線は、スウィーニーたちの世界線に大きな影響を与えている。ぼくたちの世界線を現実のものとして感じ、それを懸念するハルマゲ団＝国際連盟の人々が世界中にいる。その人々は、チェコスロバキアとかいう変な国のあるヨーロッパの地図を間に受けていて……

その人々は、スウィーニーがその別の現実を「実現」させてしまうことを恐れて暗殺し

ようとする。一方で、まさにそれを実現させようとする別の (人間ではない) 一派もいて、そいつらはどうも悪魔らしい。

そして 1984 年に、エニスコーシー・スウィーニーは「ハルマゲドン III」を発表し……。

ラファティが、こうした現実の世界について直接的なコメントを含んだ作品を書くのはきわめてめずらしい。ここから見えてくるのは、ラファティにとって、このいまの現実の世界線は、実際には起きないはずのものだったということだ。二〇世紀に起きた様々な愚行、特に二度の世界大戦は、彼にとってはあってはならないものだった。悪魔がそれを実現させようとする。ラファティ的には、自分が住んでいた (そしてぼくたちが住んでいる) この世界は、本物ではないのだ。向こうに、悪魔が小細工をしていないダイヤモンドの時代があるはずなのだ。どこかでラファティは、(そして僕たちは) そのダイヤモンドの時代を奪われてしまっているのだ。

ラファティの作品 (特に長編) を読むと、ラファティはおそらくかなり本気でそれを信じていたと思う。現在のこの世界は、神と悪魔の技が入り交じった変な世界なのだ。この作品はそれが明快に出ている。そして各種のできごと (特に芸術作品) の中で、ラファティが何を本物と見ていたかも明確に出ている。

言うまでもないが (というのは、きみたち当然わかるだろ、という意味だぞ。ちゃんとわかるんだろうな！) このエニスコーシー・スウィーニーは、ラファティ自身でもある。彼は、悪魔たちが実現させようとする恐ろしい世界線を、三流オペラや物語に封じ込めて実現させずにおく存在ではある。その一方で、それについて書くことでまさにそれをみんなの意識にのぼらせ、それを実現に近づけてしまう存在でもある。たぶん彼はここに、作家の役割みたいなものを少し見ていたんだろう、とぼくは思いたいところではある。そしてそれが、アンビバレントな二面性を持つことも、かれは意識していた。

そして同時に、二〇世紀の戦争に対する非常にストレートで痛切な批判というのも、他では見られない。それがもたらす虐殺や死についての恐ろしい描かれ方、明確に避けるべきものとしての描かれ方は、少し珍しいとさえいえる。

というのもラファティ作品では、虐殺というのはふつうは楽しいできごとだからだ。登場人物たちは、笑いながらやる。愚かな地球人たちは当然のようにプーカ人その他に楽しく (プーカ人たちから見れば) 虐殺される。あるいはそのプーカ人やアストローブ人たちは、ゴミクズな地球人なんかよりも知性も生命力も優れているので、己の失敗としての残虐な死は自業自得であり、これまた「ざまあ wwww」でしかない。

が、このお話はちょっとちがう。人々は、別の世界線の戦争と虐殺の記憶、大恐慌の悲惨の記憶に苛まれる。それをどう避けようかとみんな右往左往する。ラファティは『アーキペラゴ』で従軍時代の話を少しするけれど、たいがいは同期の仲間との思い出ばかりだ。戦争そのものの話はほぼない。でも『アーキペラゴ』でも、戦争自体にかかわるあたりでは、語り手が自分がだれかも忘れて入院している。何があったんだろうね。彼はアジアの戦場でどんな体験をしたんだろうか。

他の部分でも、ちょっと本書はラファティのふつうの書きぶりとはちがっている。第五部で自分の創った蛇に喰われて、必死でそれを救おうとする町の人々の努力にもかかわらず、苦しみぬいて死ぬ少年の話は、ラファティの他の作品ではあまりお目にかかったことがない残酷さと悲痛さがある。もちろんそれはラファティ流の寓話なんだけれど、なんかありそうだ。彼の描く、アメリカ中西部っぽい、田舎暮らしのノスタルジーの背後に何か

あるな、というのがここから少し見えてくるようにも思う。その意味で、この作品は、ラファティの少し自伝的な作品だったりもするのだ。

ラファティはあるインタビューで、本書を自分のお気に入り作品の一つとして挙げていて、だれも読んでくれなかった、二本立ての後半だったのでみんなそこまで体力が続かなかったんだろうとかグチっていた。みんなが読まなかった理由は、まあいろいろあるだろう。が、彼が自分でこれを気に入っていたといのは、そういうところもあるのかな、とは思う。

11.3 蛇足

自伝といえば、ラファティ作品に『緑の木の中で』五部作というのがある。ラファティ作品が次々に Kindle 化されたが、これはおそらくそうはならない。オクラホマのクリス・ドラムが、1990 年代に当時やっと実用になりはじめた DTP で作っていた、平とじ製本のブックレットのシリーズとして刊行したものだ。Kindle 版には……ならんだろうなー。しかも全五部作 (うち書かれたのは 4 部) の中で発表されたのは最初の 1.2 部だけという中途半端さ。手に入れるのはいちばんむずかしいだろう。

でもそこに描かれた彼の子供時代の世界、女の子たちとの関わり、カソリック校での教育−−そういったものはたぶん、ラファティの作品形成にも−−その妙な女嫌いも含め−−ある程度の洞察を与えてくれるものだとは思うんだけど。残りが出たりすることは……ないかなあ。

2025 年 10 月末

山形浩生 hiyori13@alum.mit.edu